KURA 金沢大学学術情報リポジトリ
Kanazawa University Repository for Academic resources
金沢大学 KANAZAWA UNIVERSITY

Title	濁逸租借期青島所藏書籍目録: I
Author(s)	持井, 康孝; 古市, 大輔; Scherrmann, Sylke
Citation	金沢大学文学部論集. 史学・考古学・地理学篇, 27: 1-160
Issue Date	2007-03-25
Type	Departmental Bulletin Paper
Text version	
URL	http://hdl.handle.net/2297/3853
Right	

*KURAに登録されているコンテンツの著作権は，執筆者，出版社（学協会）などが有します。
*KURAに登録されているコンテンツの利用については，著作権法に規定されている私的使用や引用などの範囲内で行ってください。
*著作権法に規定されている私的使用や引用などの範囲を超える利用を行う場合には，著作権者の許諾を得てください。ただし，著作権者から著作権等管理事業者（学術著作権協会，日本著作出版権管理システムなど）に権利委託されているコンテンツの利用手続については，各著作権等管理事業者に確認してください。

http://dspace.lib.kanazawa-u.ac.jp/dspace/

獨逸租借期青島所藏書籍目錄:I

◙序 1-27頁　◙所用略號•引用論著目錄(當號收錄部分のみ)28-35頁
◙凡例 36頁　◙獨逸租借期青島所藏書籍目錄 37-158頁
(『鹵獲書籍及圖面目錄』)凡例 37頁　(仝)目次 37-42頁　(仝)正誤表 43頁
(仝)い•官有書籍(洋書)目錄 44-146頁　(仝)仝官有書籍(洋書)追加目錄 147-149頁
(仝)ろ•官有書籍(漢書)目錄 149-152頁　(仝)は•德華高等學堂藏書(洋書)目錄當號未收錄
(仝)に•德華高等學堂藏書(漢籍)目錄當號未收錄　(仝)ほ•ウヰルヘルム•コーン叢書(洋書)目錄當號未收錄
(仝)へ•支那其他東洋ニ關スル書籍(洋書)目錄劃愛　(仝)と•膠州圖書館藏書(洋書)追加目錄 152-158頁)
◙«補註»158-160頁

持井　康孝
古市　大輔
Sylke Scherrmann

◙序

本稿は,1920(大正9)年2月に當時の大日本帝國"青島守備軍陸軍參謀部"が編纂•印刷•配布した『鹵獲書籍及圖面目錄』(簡稱:"『鹵書•圖目』1920.")のうちの"鹵獲書籍"目錄部分に就ての翻刻である. 當號では,このうちの"官有書籍"(洋書•仝追加•漢籍)目錄,及び"膠州圖書館藏書"(洋書追加)目錄を取扱う. 『鹵書•圖目』1920.は,B5版全1012頁からなる油印本で,筆者等が現時點に於てその現存を實見•確認し得た冊數は,6冊に止まる.[1]

周知の如く,第1次世界大戰の開戰から約3箇月を經た1914年11月8日,日本の青島派遣軍は,中華民國山東省南部の黃海に臨む獨逸帝國租借地"膠州 Kiautſchou=Gebiet"の中核都市"青島 Tſingtau"を陷落させ,その後は青島守備軍として,舊獨逸租借地全域に對して軍政を施行すると共に,現地諸資產の接收•管理に當った.[2] 當『鹵書•圖目』1920.所錄書籍•圖面(設計圖•地圖)もその一部を做すものであって,青島陷落時に於る日•獨兩軍の間で交わされた所謂"開城規約"竝に"仝附錄"の締結(1914.XI.7.)に始り,[3] 日本側の中華民國に對する所謂"二十一箇條要求"に端を發する諸條約竝に交換公文への調印(1915.),[4] 第1次世界大戰の終結•處理に關する"同盟及聯合國ト獨逸國トノ平和條約竝議定書"(所謂"ヴェルサイユ條約"; 1919.VI.28. 調印, 1920.I.10."實施")[5]を經て,戰後に於る軍備擴張と極東問題とに多大の懸念を抱いたアメリカ合衆國が主宰したワシントン會議Washington Conference (1921.XI.- 1922.II.), 及び仝會議終了時に日本側と中華民國との間で調印(1922.II.24.Washington)した所謂"山東懸案解決ニ關スル條約"の批准書交換(1922.VI.2. 北京)[6]•實施に至る一聯の流れの中で,[7] 日本側に於て自己の資產の一部として處理されたものの如くで

---

[1] 京都大學附屬圖書館(1冊)•仝人間•環境學研究科/總合人間學部圖書館(1冊)•東北大學附屬圖書館本館(1冊)•金澤大學附屬中央圖書館(2冊)•防衛省防衛研究所史料閱覽室(1冊). 尙, "「青島鹵獲書籍」の復元と淸末民國初における獨英の對中國文化接觸に關する比較研究"(後揭27 頁)の中核事業として,目下遂行中の青島鹵獲書籍現藏調查の第I期分調查に於て,特にその槪容調查を擔當している志村 惠氏に據ると,この他にも,新潟大學附屬圖書館•北海道大學附屬圖書館•九州大學附屬中央圖書館(北大•九大に就ては電網頁"Webcat"にも旣載)が『鹵書•圖目』1920.を各1冊所藏しているとの由で,奧村2006.(123 頁)も山形大學附屬中央圖書館(冊數不詳)に於る所藏を報じている(孰れも筆者未見). 今後の調查の進捗に應じて,その現存冊數は漸增するものと想われる.

[2] "青島派遣軍司令官"神尾光臣(第十八師團長•陸軍中將)に對する"青島守備軍司令官"としての發令は, 1914[大正3]年11月26日附(*官報697. 1914[大正3].XI.27.[金]*, 583頁[軍令], 585頁[叙任及辭例]). 因に, "青島守備軍民政部條例"の公布に伴う青島守備軍司令部內への"民政部"設置は,1917[大正6]年9月29日附(*官報1550. 1917[大正6].X.1.[月]*, 1-3頁[勅令], 3-4頁[軍令], *仝1551. 1917[大正6].X.2.[火]*, 39頁[叙任及辭例])で,翌年の"*職員錄*"から"青島守備軍司令部青島"の記載が始る.

[3] 日獨戰史上1916., 1004-19頁.

[4] 半沢1930., 710-76頁, 中外舊約II. 1959., 1112-4 頁.

[5] *官報號外 1920[大正9].I.10.[土]*, 27頁.

[6] *官報號外 1922[大正11]VI.2.[金]*, 1-4頁[條約], 4頁[告示]). 尙, これに伴う"青島守備軍民政部條例等廢止"の公布•施行は,1922[大正11]年12月10日附(*官報號外 1922[大正11]XII. 10.[日]*, 1頁[勅令], 2頁[省令]).

ある.[8] 當該書籍•圖面の配布は, 基本的には, 當時の帝國大學, 高等學校, 外國語學校, 關聯行政諸官廳,

---

[7] 當時の日•中•米三國間の動きに就ては, 川島 2004.所收«序論 4.先行研究と本書の位置(2) – 民國前期外交史»(45-61頁), 及び«第三章 第一次大戰參戰と山東問題解決プログラム»(249-65頁)を參照した.

[8] 當該書籍の獨逸側から日本側への引渡しは,所謂"開城規約"竝に"仝附錄"(日獨戰史上1916.,1004-19頁)に基いて行なわれたとする說(安達1981.,68頁)がある. 當該書籍の"引渡し"自體はその一聯の動きの中で行なわれたのかもしれぬものの,その論據,卽ち"[開城規約¶ ……]¶ 第二條 靑島要塞及膠州灣內外ニ在ル全堡壘,砲臺,軍旗,兵器,彈藥,官有諸建築物,馬匹,交通通信用諸物件,築港,繫船所,水面利用ニ關スル諸建築物[,]其他一切ノ軍用器材,圖書,給養諸品,官有財產竝獨國艦船及之ニ屬スル諸物件ハ現狀ノ儘現在ノ位置ニ整置シ日本軍ニ引渡スモノトス"(日獨戰史上1916.,1004 頁;引用文中のカンマは原文では讀點,仝下線は引用者所添)の如き條文中所出の"圖書"の語を"書物"の謂と理解することに就ては,當時の戰時國際法に於る基本的見解及び當該規約中に於る用語例に據れば,獨語文未見の現時點に於ては首肯しかねる. 此處に所謂"圖書"は所謂"書物 Bücher"の類を指すのではなく,むしろ"圖面Pläne u.Karten及び證書•書類Urkunden u.Unterlagen"の類を指すと想われるが故である. この點は,"[開城規約¶ ……]¶ 第六條 陸海軍ニ屬セサル官吏人民ノ處置,普通行政事務,會計竝之ニ關スル書類ノ引繼キ其他本規約執行ニ關スル細則ハ 本規約附錄ニ於テ之ヲ規定ス¶ 右附錄ハ本規約ト同一ノ效力ヲ有ス"(仝1005 頁;仝),及び"靑島開城規約附錄¶ 第一條 本規約ヲ實行スル爲日獨兩軍ニ於テ左ノ委員ヲ設置ス¶ 一,軍事委員薺色ノ實ヲ佩フ¶ 堡壘,砲臺,軍旗,馬匹,交通,通信用物件,陸上ニ在ル兵器,彈藥,軍用器材,圖書ニ關スル授受ニ任ス¶ ……¶ 六,行政委員白色ノ實ヲ佩フ¶ 膠州灣全般ノ行政及會計竝之ニ關スル一切ノ圖書ノ授受ニ任ス¶ ……¶ 第二條 前條ノ諸委員ハ十一月十日午前十時ビスマルク兵營ニ集合シ 獨軍委員ハ左記諸名簿表及圖ヲ調製シ 之ヲ當該日本委員ニ交付シ 其擔任事項ノ遂行ニ著手スルモノトス¶ 一,獨軍軍事委員 靑島要塞配置及堡壘,砲臺圖竝第一條第一項ニ屬スル物件表¶ ……¶ 六,獨軍行政委員 在靑島文官官職等級氏名簿,男女國籍及職業ニ依リ分類スル普通人民ノ人口表,在監者人員表"(仝1006-8 頁;仝),"[靑島開城規約附錄¶ ……]¶ 第八條 本附錄第一條第六項ニ示ス獨國委員ハ行政竝會計ニ關スル旣往及現在ノ狀況ヲ日本委員ニ告知シ且ツ之ニ關スル一切ノ圖書ヲ同委員ニ引渡スヘシ¶ ……" (仝1009頁;仝),及び"開城實施手續規定¶ 一,本規約實施ニ要スル委員ノ編成左ノ如シ¶ 一,軍事委員¶ ……¶ 六,行政委員¶ 委員長 山梨參謀長¶ 委員 磯村參謀 林副官 惠藤少佐 福井大尉 末松大尉 飯田副官 軍醫部長 軍醫五藥劑官 憲兵長 憲兵將校一 理事二 主計一 海軍將校同相當官二 公法顧問¶ ……"(仝1012 頁;仝),"[開城實施手續規定¶ ……]¶ 六,行政委員ハ本件ニ關スル獨國委員ト協議シ靑島要塞內ニ居住スル獨國及諸外國人ノ身分及職業別,官有民有ノ動產不動產ニ關スル圖書類,行政及會計ニ關スル書類,官衙等ヲ受領シ其他物件ノ調查押收,風紀ノ維持,寺院ノ保護,婦女老幼ノ取扱等軍事以外一切ノ事項ヲ處理スヘシ"(仝1013-4 頁;仝)等々の諸用例を倂讀•比較してみれば,明らかであろう. 官制上の"圖書寮"の"圖書"の本義を想起されたい.

尙,全8 條から成る"開城規約"の內容は,"午後四時十分談判ヲ開始シ獨逸委員ハ悉ク我提案ニ同意シ午後七時五十分左ノ開城規約及同附錄ヲ決定ス"(仝1004 頁)の如き記述に據れば,日本側の提案に獨逸側が應じたとのことである. 但,仝"規約"第八條の後に"本規約ハ 正本二通ヲ作製シ 日獨兩軍 各其一通ヲ保有ス¶ 大正三年(一千九百十四年)十一月七日モルトケ•バラックニ於テ¶ 大日本帝國靑島攻城軍全權委員 陸軍少將山梨半造¶ 大日本帝國靑島封鎖艦隊全權委員 海軍少佐 高橋壽太郎¶ 全權委員 膠州灣總督參謀長海軍大佐 ザクッ[ク~ック]セル"(仝1006 頁)と記し,仝"規約附錄"第九條の後に於ても"正本二通ヲ作リ 各全權委員ニ於テ署名ス¶ 大正三年(一千九百十四年)十一月七日モルトケ•バラックニ於テ¶ 大日本帝國靑島攻城軍全權委員 陸軍少將山梨半造¶ 大日本帝國靑島封鎖艦隊全權委員 海軍少佐 高橋壽太郎¶ 全權委員 膠州灣總督參謀長海軍大佐 ザックセル"(仝1010 頁)と記すものの,その所用言語に就ては明記が無い. 戰場でのことでもあり,"正文"は,或は勝者側言語であったのかもしれぬものの,原件所用言語に就ては未確認(筆者所見のものは日獨戰史上1916.,1004-6 頁所載日語文). 尙,當該"規約"談判時の通譯は,湯目隆績,ドクトル•ボイグト,ドクトル•ユーベルシャール(*Johannes* Überſchaar[Dr.,Lektor f. Dt.Sprache a.d.Mediz.Akademie,Oſaka大阪府立醫學校,Prof.,Dolmetſcher;*1885.,∞?,†1965.;電網頁«Schmidt2002.a»,*Minerva*$_{XXII}$*f.1912-1913.*, S.1017.])[?]の3 名(日本側通譯:湯目隆績に就ては未精查;獨逸側通譯:ドクトル•ボイグトは"Karl Vogt,Dr.¶ *23.04.1878 Nienburg,†1960;Japanisch-und Jura-Studium in Berlin und Halle mit Promotion 1901,..."[電網頁«Schmidt2002.a»]かと疑うものの,未確認). 又,當開城規約談判時には,特に日本側から"國際法顧問"として兵頭三郎(獨逸側國際法擔當者名は不記)が立會っており(仝1003頁),獨逸側全權委員ザックセルは*Ludwig* Saxer(前揭電網頁«Schmidt2002.a»). 尙,戰時國際法に就ては, 例えば, 高橋1905.,104-8頁[第二章物ニ關スル陸戰法規第二節敵國財產ノ鹵獲第一款鹵獲品•第二款敵國國有財產•第三款私有財產], 137-40頁[第五章交戰中ノ非戰交通第六節降伏規約],及び千賀1917.,581-606 頁[第二章戰爭第三節陸戰第六款戰利品(敵ノ各種財產ニ對スル權利)第七款占領地(官廳•法令•交通•財政•徵發•課金)第八款陣中條約(軍使•俘虜交換•降伏•休戰)]を參照した.

因に,書籍•圖面類とは別に,"獨逸總督府及萬年兵營ニ存在セル公文書類竝ニ舊支那稅關倉庫ニ存在セル東亞派遣隊ノ書類"に就ては,その整理に早く着手したものと看る可く,1915[大正4]年8月には,その目錄が靑島守

及び陸•海兩軍(含關聯附屬諸機關)等々宛に做されたものと看る可く,[9] 當『鹵書•圖目』1920.は, その添附諸

備軍司令部により"鹵獲文書目錄"(簡稱:"『鹵文目』1915.")として編纂•印刷され,例えば東北帝國大學に於ては,翌1916[大正5]年7月20日附でその受領手續が做されている. 尙,當該文書類に就ては,その箇々の文件名に就ての對照•調査を未だ行なってはいないので,確言は避けるものの,第1次世界大戰後の1920-1[大正9-10]年の間に(少くとも兩次に亙り,そのうちの初次は1920[大正9]年3月31日との由;«大正八年以降鹵獲書籍»所綴"青島舊獨逸政廳所屬其他返還書類一覽表"),基本的には獨逸側に返還された模樣である(«歐受大日記1921[大正10].VI.-VIII.»所綴"青島舊獨逸總督府所屬ノ書類還付方申出ニ關スル件",«歐受大日記 1921[大正10].XI.26.- 30.»所綴"平和條約ニ基キ青島ニ關スル獨逸公文書引渡ニ關スル件";因に,前揭"青島舊獨逸政廳其他所屬返還書類一覽表"は,"平和條約ニ基キ青島ニ關スル獨逸公文書引渡ニ關スル件"の一部の分綴かと疑うものの,未精査故に指摘に止める).

[9] «大正八年以降鹵獲書籍»所綴"副官ヨリ青島守備軍陸軍參謀長ヘ通牒案"(陸軍主務局課大正九年三月十一日受領, 大正九年七月廿三日附大臣官房宛提出)には, 當該鹵獲書籍分配に關する當初案を具體的に示す«別表»が附されている. この«別表»は, "鹵獲書籍概要"と"寄贈先•冊數•書籍所屬•書籍內譯を記した一覽表"とから成り, このうちの"鹵獲書籍概要"には, 下記の如く記す. 卽ち,

"鹵獲書籍概要"¶ 鹵獲書籍ノ種類及員數 左ノ如シ

一, 官有洋書(略シテ官洋トス)ハ 獨逸各官廳ノ藏書ヲ集メタルモノニシテ 其ノ員數 二八〇七部 八六三四冊
二, 官有漢書ハ右ト仝性質ノ漢籍ニシテ 八一部 一四七七冊
三, 德華高等學堂洋書(略シテ學堂洋トス)ハ仝學堂ノ藏書ニシテ 六四四部 一二九四冊
四, 德華高等學堂漢書(略シテ學堂漢トス)ハ右ト仝性質ノ漢籍ニシテ 一六三部 五〇五八冊
五, ウヰルヘルムコーン叢書ハ コーント稱スル學者ガ獨逸總督府ニ寄贈シタル支那ニ關スル洋書ニシテ 二七二部 三二四冊
六, 膠州圖書館藏書(略シテ膠圖トス)ハ財團タリシ圖書館ノ藏書(洋書)ニシテ 七五六三部 九四七三冊
合計 一一, 五三〇部 二六, 二六〇冊

備考 一部ノ書籍ト雖 二回以上ニ亙リ目錄ニ記入セラレタルモノハ 之ヲ二部以上ニ計算セルヲ以テ 本文ノ部數ハ 嚴格ナル意味ノモノニアラズ

鹵獲書籍ノ分配ハ 左ノ要旨ニ依リ計劃セリ

一, 德華高等學堂藏書ハ青島ニ殘置シ 將來青島ニ專門學校以上ノ學校ノ設立サルヽニ際シ 擧ケテ之ヲ移管セントス. 但シ其ノ洋書中ノ一小部分及漢書ノ過半數ハ 東京帝國大學文科大學部教授宇野博士ノ懇望ニ依リ 特ニ之ヲ同大學ニ寄贈スルコトヽシ 之ト權衡ヲ保タシメンガ爲 殘餘漢籍ノ約三分ノ二ヲ京都帝國大學ニ寄贈スルコトヽセリ

二, 其他ノ書籍中 山東及青島ニ關スルモノハ 青島ニ殘置セントス

三, 官有漢籍ハ雜駁ニシテ 山東ニ關スルモノヽ外 價値アルモノ僅少ナレバ 之ヲ分配セズ, 全部青島ニ殘置セントス

四, ウヰルヘルムコーン叢書ハ支那文化研究ノ好資料ニシテ 之ヲ分割スレバ 大ニ其ノ價値ヲ減スヘク 且ツ冊數モ多カラサルヲ以テ 擧テ東京帝國大學ニ寄贈セントス. [附箋: 本叢書ハ陸軍□□學□軍□等ヘノ分配書目ニ計上セス]

五, 是ニ於テ 一般ニ分配スヘキ書籍ノ種類ハ 官有洋書ト膠州圖書館藏書ノ兩者ナリトス. 而シテ之カ處分ハ 各書籍ヲ最有效ニ利用スルニ最モ適切ナル部局ニ寄贈スルコトヽシ, 此ノ要旨ヲ以テ 概ネ學術研究ニ資スヘキモノヲ各大學ニ 直接實地ニ利用シ得ヘキモノヲ各官廳ニ 通俗的㊀ノモノヲ一般學校ニ寄贈スルノ案ヲ立テタリ.

右ノ主旨ニ基キ寄贈竝ニ殘置セントスル書籍 左表ノ如シ.

鹵 獲 書 籍 處 分 一 覽 表

書籍所屬	寄贈	殘置	小計
官有洋書	七, 八八四冊	七五〇冊	八, 六三四冊
同漢書	———	一, 四七七	一, 四七七
德華高等學堂洋書	二〇	一, 二七四	一, 二九四
同漢書	四, 二九八	七六〇	五, 〇五八
ウヰルヘルムコーン叢書	三二四	———	三二四
膠州圖書館藏書	九, 三一八	一五五	九, 四七三
合計	二一, 八四四	四, 四一六	二六, 二六〇

"(引用文中のカムマは原文では讀點)

因に, 當鹵獲書籍(圖面)の冊數(員數)に對する青島守備軍司令部側に於る最終把握數値と想われるものは, 後揭『鹵書目訂表』1922.¯(本稿5頁, *4.)中の表紙裏に, "注意 鹵獲書籍分配ノ爲ノ調査整理ノ結果 書籍冊數ニ異同ヲ生シタリ, 曩ニ印刷シタル『鹵獲書籍及圖面目錄』ノ凡例ニ揭ケタル冊數ハ 左ノ如ク訂正スルヲ要ス"(引用文

中のカムマは原文では讀點)としたうえで, 如下揭載されている. 卽ち,

"(一) 官有書籍　洋書 九五二三册
漢書 一四七九册
(二) 德華高等學堂藏書　洋書 一三四一册
漢書 五一〇三册
(三) ヴヰルヘルムコーン叢書 洋書 三二六册
(四) 膠州圖書館藏書　洋書 九六〇八册
合計 二七,三八〇册
(五) 鹵獲圖面員數　五一三三枚"(德華高等學堂藏書の項のみ改行を調整)

又, 前揭«別表»中の"寄贈先•册數•書籍所屬•書籍內譯"等々を記した一覽表には, その"寄贈先"として, 帝室圖書館, 拓殖局, 鐵道院, 內務省, 外務省, 大藏省, 海軍省軍務局, 海軍大學校, 陸軍省醫務局, 陸軍文庫, 陸軍大學校, 砲工學校, 士官學校, 中央幼年學校, 東京帝國大學, 京都帝國大學, 東北理科大學, 九州工科醫科大學, 北海道農科大學, 第一高等學校, 第二高等學校, 第三高等學校, 第四高等學校, 第五高等學校, 第六高等學校, 第七高等學校, 第八高等學校, 松山高等學校, 新潟高等學校, 松本高等學校, 山口高等學校, 東京外國語學校ゲルマニア圖書館, 青島官廳殘置書籍の如きその配布豫定機關32機關(+青島官廳殘置書籍)が列擧されている.

但, 當«別表»を附載した«大正八年以降鹵獲書籍»所綴"鹵獲書籍分配ニ關スル件"に於て, "受領八年歐第一六〇八三號 廳名青島守備軍 件名鹵獲書籍分配ニ關スル件 ……¶ 副官ヨリ青島守備軍陸軍參謀長ヘ通牒案(歐發)~~本~~大正九年二月青參第六七號ヲ以テ照會相成候首題ノ件 左記ノ通分配方取計相成度候也¶ 追テ分配濟ノ上ハ 分配表一部送付相成度申添候¶ 左記¶ 一, 水戶高等學校ニ對シ他ノ高等學校ト同一程度ノ分配スルコト¶ 二, 別表其一•其二ハ陸軍省經理局竝陸軍經理學校ニ分配スルコト¶ 三, 其ノ他ハ貴部照會別表ノ寄贈分配表~~ニ據リ~~ヲ基礎トシ適宜分配スルコト¶ 陸軍省送 達歐發第四六號 二月廿日[附箋: "一, 水戶•山形•佐賀高等學校ニ對シ 他ノ高等學校ト同一程度ニ分配スルコト¶ 二, 別紙其一乃至其十三ハ陸軍省•參謀本部•教育總監部•陸軍技術本部•東京砲兵工廠•陸軍被服本廠•陸軍糧秣本廠•千住製絨所•陸軍工兵學校•陸軍士官學校•東京陸軍幼年學校•陸軍經理學校•陸軍々醫學校ニ夫々分配スルコト"(引用文中のカムマ及び中黑は原文では讀點)の如く, その時點に於て, 旣にその寄贈先の追加が指示されている. 又, «仝»所綴"鹵獲書籍分配ニ關スル件 通牒"(1922 [大正 11].VII.31.附青島守備軍陸軍參謀長引田乾作發陸軍省副官松木直亮宛)所添«圖書分配表»には, 建築科[~~科~~課]•醫事課•參謀本部•教育總監部•技術本部•砲兵工廠(東京砲兵工廠)•被服本廠(陸軍被服本廠)•糧秣廠•千住製絨所•工兵學校•陸軍士官學校•東京陸軍幼年學校•經理學校•軍醫學校の如き陸軍關聯の諸機關宛配布を豫定した諸書名が具體的に目錄のかたちで附載されてもいる.

前揭"青島官廳殘置書籍"は, "青島守備軍殘置書籍"と略々同義と看做して間違いないものと考えるが, 當該書籍の一部に對しては, 處分の最終段階に於て, 上海東亞同文書院圖書館, 及び青島在設獨逸協會宛寄贈が檢討された. このうちの上海東亞同文書院圖書館宛の分に就ては, "官有書籍"•"德華學堂藏書"都合936册及び圖書目錄兩册の寄贈に對する禮狀(1922[大正 11].IX.13.附東亞同文會々長牧野伸顯發陸軍大臣山梨半造宛; «大正八年以降鹵獲書籍»所綴)に據り, その寄贈を確認し得る. 又, 青島獨逸協會宛の分に就ても, その書類中の文面は, "受領番號歐受第三五〇號 廳名經理局建築課 件名鹵獲書籍分配殘餘處分ニ關スル件 …… 主務局課…… 受領大正九年三月十一日¶ 提出大正十一年五月十九日¶ 大臣官房受領大正 年 月 日五月廿日¶ 結了大正 年 月 日¶ 副官ヨリ青島守備軍陸軍參謀長ヘ電報案(歐發) 鹵獲書籍ニシテ本年二月歐發四六號通牒ニ依リ處分ノ結果殘餘トナルモノハ廢止要領細則三三條ニ依リ處理シ陸軍省宛取纏メ還送ノコトニ承知アリタシ尙ホ右還送書籍ノ種類及員數ノ概要可成至急承知シタシ致度 歐發二三七 五月二十日 [附箋: 青島守備軍陸軍諸部隊廢止要領細則¶ 第三十三條, 青島守備軍陸軍諸部隊ノ保管ニ屬スル圖書•文書及帳簿ハ 處分ニ關シ特ニ規定アルモノヲ除クノ外 保存ヲ要スルモノ及將來參考ノ資タルヘシト認メラルヽモノヽミヲ 其ノ性質ニ依リ區分シ 陸軍省•參謀本部•教育總監部及憲兵司令部ニ納付シ 其ノ他ハ 現地ニ於テ處分スルモノトス]¶ 說明¶ 鹵獲書籍ハ 本年二月歐發第四六號通牒ニ依リ 目下青島守備軍ニ於テ夫々處理中ノ處 最近 青島獨乙協會ニ分配アリタキ旨 獨逸大使ヨリ外務大臣宛希望申出アリタル趣ニ付 分配殘餘ノ書籍中ニ適當品アラハ之ニ應スルコトニ詮議ヲ進ムル爲トス"(«仝»所綴; 引用文中の中黑は原文では讀點)の如きもの乍ら, 1922 年 5 月という時點での青島情勢を考慮するならば, 恐らく分配されたのではあるまいか.

かかる«大正八年以降鹵獲書籍»所綴諸文書中に名前の擧った諸機關のうちには, 例えば陸軍省醫務局(後揭 10.)と仝局醫事課(後揭 11.), 或は參謀本部(後揭 12.)と仝陸軍文庫(後揭 13.)の如く, 或は同一配布先かと懸念される組織(部署)を含みはするものの, 今その判斷を下すに足る資料も未見故, この4組織(部署)をも算入したうえで敢てこれを概括するならば, 當該鹵獲書籍の配布豫定機關は略々如下50機關•組織(+青島官廳殘置書籍)となる.

1.帝國圖書館 2.內閣拓殖局 3.內閣鐵道院[鐵道省] 4.內務省 5.外務省 6.大藏省 7.海軍省軍務局 8.海軍大學校

件のひとつとして配布された．受領機關によっては，他に如下目錄3種類(*1.- *3.)及びその訂正表(*4.)を，同時乃至は其後に受領したものの如くである．[10] これら目錄3種(*1.- *3.)に就ては，別途その具體的內容を紹介する豫定乍ら，[11] その訂正表(*4.)に就ては，未翻刻乍ら，當號に於ても，その指示に基く訂正を極力施しておいた(油印不鮮な數箇處に就ては，未訂正)．

*1.: "Bücher-Verzeichnis der Kiautschou-Bibliothek August 1911.", Tsingtau 1911., Deutsch Chinesische Druckerei und Verlagsanstalt, Walther Schmidt, Tsingtau.(A5版全197頁; 當『鹵書•圖目』1920.**[ii]**頁所謂"膠州圖書館藏書目錄"; 簡稱: "BVdKB 1911.")

*2.: 青島守備軍參謀部: "大正九年三月鹵獲書籍追加目錄"(B5版全64頁，油印本; 簡稱: "『鹵書追目』1920.")

*3.: 青島守備軍參謀部: "膠州圖書館藏書目錄補遺"(B5版全64頁，油印本; 簡稱: "『膠圖藏目補』1922.¯")

*4.: "鹵獲書籍目錄訂正表(謄寫目錄及歐文目錄)"(B5版全20頁，油印本; 簡稱: "『鹵書目訂表』1922.¯")

首ずは，獨逸租借地膠州及びその總督府在設地"青島"に就き，その概容を簡介しておこう．話は19世紀の末に遡る．1897年11月1日，清朝統治下の山東省曹州府鉅野縣張家莊に於て天主教スタイラー傳道會

9.陸軍省經理局建築課 10.仝省醫務局 11.仝局醫事課 12.參謀本部 13.仝陸軍文庫 14.教育總監部 15.陸軍技術本部 16.憲兵司令部 17.陸軍東京砲兵工廠 18.陸軍被服本廠 19.陸軍糧秣本廠 20.千住製絨所 21.陸軍大學校 22.仝砲工學校 23.仝工兵學校 24.仝士官學校 25.仝中央幼年學校 26.仝經理學校 27.仝軍醫學校 28.東京帝國大學 29.京都帝國大學 30.東北理科大學[東北帝國大學] 31.九州~~工科~~醫科大學[九州帝國大學] 32.北海道農科大學[北海道帝國大學] 33.第一高等學校 34.第二高等學校 35.第三高等學校 36.第四高等學校 37.第五高等學校 38.第六高等學校 39.第七高等學校 40.第八高等學校 41.松山高等學校 42.新潟高等學校 43.松本高等學校 44.山口高等學校 45.水戶高等學校 46.山形高等學校 47.佐賀高等學校 48.東京外國語學校ゲルマニア圖書館 49.上海東亞同文書院 50.青島獨逸協會 51.青島官廳(守備軍?)殘置書籍【司法省宛送附書籍(1915[大正4]年)に就ては，後揭158-60頁«補註»を請參照】

尙，前揭配布豫定機關中の東北帝國大學寄贈に就ては，當該記事を*官報*に於て如下確認した．卽ち，"■東北帝國大學寄贈圖書 去月中 東北帝國大學へ寄贈ノ圖書ハ 和漢書三百四十四册•洋書四百三十九册ニシテ 外ニ雜誌小册子九十八種ナリ 其內主要ナルモノハ 青島守備軍司令部ヨリ日獨戰役紀念トシテ寄贈ノ鹵獲圖書中理學ニ關スル洋書四百九册 及法文學部備付ノタメ早井亞幹ヨリ寄贈ノ和漢書三百二十九册ナリ(文部省)"(*官報3066.1922[大正11].X.19.[木]*, 463頁[彙報○學事]; 引用文中所用中黑は，原文では讀點)．

素り，"鹵獲書籍"の分配先が叙上に盡るものか否か，又，その全てに配布されたのか否か，現狀に於ては未確認である．特に，青島守備軍撤收の末期に於て陸軍省に納附されたものの中には，その後，他機關に再配されたものがあったのではとの懸念が遺る．但，そのような懸念は措て置き，その現藏概況に就ては，志村2007.として簡報が公表される豫定である．*併せ御覽頂きたい*．又，箇々の現藏機關の報告としては，志村2000., 129-51頁，仝2001., 115-21頁(金澤大學附屬中央圖書館)，井出•須田2001., 126-41頁(仝書"III: 青島守備軍司令部寄贈圖書•獨逸國寄贈圖書"中の«青島守備軍司令部寄贈圖書»; 信州大學附屬圖書館)，奧村2006., 115-52頁(山形大學附屬中央圖書館)があることを，附記しておく．

因に，所謂"ウィルヘルム•コーン叢書"(本稿22-26頁; ③)を其內に含む東京帝國大學(現東京大學)宛配本分に就ては，全體として數量が多い上に(前揭«別表»に據れば4,514册)，關東大震災(1923[大正12].IX.1.)及び第2次世界大戰に於る被災等々のことをも考慮した結果，その本格的調査は，第II期分調査の科學研究費補助金を申請したうえで爾餘の諸機關宛配本分の調査と共に行なう豫定乍ら，例えば，東京大學附屬總合圖書館現藏("書庫參考")の"*JdKGSzT 1903-12.*"("東京帝國大學圖書印"[方形有框朱文印], "B 18163"[長方形無框藍文印])が，所謂"膠州圖書館Kiautſchou-Bibliothek"(本稿13-9頁; ■3.)舊藏圖書であることに就き，筆者等は，その舊藏時の藏書印("Kiautschou-Bibliothek[楕圓形有框藍黑/藍文印內上弧部印字], * *[仝中弧部左右], Tsingtau[仝下弧部印字])と其處に塡記乃至附記された當時の分類番號("*V. C. 2978.*[前記印央空白部に藍黑色インキにて塡記]"[*JdKGSzT 1903-04.*]; "~~*VIIC7761*~~[表題頁小口際天部に藍黑色インキにて塡記するも，藍色鉛筆線にて抹消]"[*JdKGSzT 1904-05.*]; "~~*VIIC7762*~~[前記印央空白部に藍黑色インキにて塡記するも，藍色鉛筆線にて抹消]"[*JdKGSzT 1905-6.*]; "*VII C7763.*[仝前]"[*JdKGSzT 1906-07.*]; "~~*VII C 7768*~~[上下倒鈐した前記印央空白部に藍黑色インキにて塡記するも，藍色鉛筆線にて抹消]"[*JdKGSzT 1908-09.*]; "~~*VII C 7769*~~[前記印央空白部に藍黑色インキにて塡記するも，藍色鉛筆線にて抹消]"[*JdKGSzT 1909-10.*])を手懸としたBVdKB 1911.(S.17.; "III.C.2978")との對照作業に據り，確認濟みである．又，當該書籍に就き，金澤大學附屬圖書館相互利用係を通じて東京大學總合圖書館參考調査係宛その受入に就ての調査依賴を行なったところ(2006.XII.19.附)，仝館«圖書受入原簿»に於る受入年月日は"大正14[1925]年10月30日"である旨の回答を得た(仝)．

10 金澤大學附屬中央圖書館に於る現存事例に據る．

11 科學研究費補助金研究成果報告書: "獨逸租借期青島所藏書籍現藏調査簡報(I)"(假題; 2008.III.)に收錄豫定．

societas verbi divini 神父フランツ=ニース *Franz (François Xavier)* Nies (能方濟, 弗朗茨(弗朗索瓦•格扎維埃)尼斯; Paſtor; *1859.Weſtphalen, †1897.XI.1.張家莊)[12]及びリヒャルト=ヘーンレ *Richard* Henle (韓理; Paſtor; *1863.VII.21.Stetten b. Haigerloch, †1897.XI.1.張家莊)[13]が中國側在野組織"大刀會"によるかと疑われる襲撃により殺害されたことを機に,[14] 仝月7日から8日にかけての夜間, 獨逸帝國は, 折から上海吳淞での駐留任務Stationに當っていた獨逸巡洋艦隊總司令オットー=フォン•ディーデリッヒス *Otto* von Diederichs (Oberbefehlshaber über die Kreuzerdiviſion [1897.-], *1843.IX.7.Minden, ∞?, †1918.III.8.Baden=Baden)[15]麾下の一軍を膠州Kiautſchouに急航させ,[16] 仝月14日には"膠州灣Kiautſchoubai"に到着•上陸のうえ附近一帶を占領し,[17] 翌1898年3月6日[光緒廿四年戊戌二月十四日], 清帝國との間に"膠澳租界條約Deutſch=chineſiſcher Vertrag betreffend die Ueberlaſſung Kiautſchous an Deutſchland vom 6 März 1898."(北京; 所謂"獨清條約")[18]を締結して, この青島を含む膠州灣一帶の地を期間99年の租借地Pacht=Gebietとした. その後, 獨逸側は, 翌4月27日, この膠州租借地に對して"1888年3月15日附帝國法令: 獨逸保護領に於る法律の執行に就てReichsgeſetz vom 15.März 1888.: Betreffend die Rechtsverhältniſſe der deutſchen Schutzgebiete"の適用を公示すると共に,[19] "Gemiſchte deutſch=chineſiſche Kommiſſion"を組織して清側と進めていた仝租借地の境界劃定作業の完了に伴い, その境界を"膠墺潮平合同"•"膠澳邊界合同"(10月6日[八月廿一日]青島)として最終的に劃定し,[20] ここに總督Gouverneurをその首長とする獨逸膠州租借地の本格的經營を開始したのである.

この膠州租借地には, 膠州灣南東部に位置して外洋"黃海"にも面した青島の地に總督府が置かれ,[21] 膠

---

[12] Couling 1917., p. 398., 近代來華1981., 356頁.

[13] LfTuK$_{4.}$ 1932., S. 621.(DBA-NF 1989-1993., Nr. 559.: 443.所收), 近代來華1981., 202頁.

[14] 當件の概容把握に際しては, Pieper 1900., S. 376.-7., 膠澳專檔1991.所收«二十一•鉅野教案»(360-412頁), 及び佐藤 1999.所收«第二章 大刀會 – 山東西南部; 第四節 鉅野事件とドイツの膠州灣占領»(210-20頁)等々を勘案した. 尙, 當時の獨語文獻中に於ける張家莊のローマ字表記には, 例えば"Tschang-tja-tschuang"(Pieper 1900., S. 376.-7.), "Dschang-Djia-Dschuwang"(LfTuK$_{4.}$ 1932.)等々. 因に, スタイラー傳道會Societas verbi diviniは, 山東南部代牧區司教ヨハン•バプティスト=フォン•アンツェル *Johann Baptiſt* von Anzer(katholiſcher Miſſionsbiſchof d. Provinz Süd=Schantung, *1851.V.16.Weinried [bayr. Oberpfalz], †1903.XI.24.Rom; SdddAüdVdeMiO帝時德國極東外交$_{I.}$1940., S. 76., BKL$_{XVI.[S.]}$1904., S. 48.), 及び北京駐在公使マクシミリアン•アウグスト•スキピオ=フォン•ブラント *Maximilian Auguſt Scipio* von Brandt(巴蘭德; Diplomat u. Schriftſteller; Geſandter des Deutſchen Reiches, Peking[1875.II.14.(光緒元年乙亥二月七日)-1893.III.18.(光緒十九年癸巳二月一日)]; *1835.X.8.Berlin, ∞?, †1920.III.24.Weimar; BKL$_{XVI.[S.]}$1904., S. 190., BhdWiVB$_{I.}$1923., S. 343., 近代來華1981., 54頁, 清季中外1985., 40-1頁)の働きかけにより, 1890年以來, 獨逸帝國の保護下に活動していたカトリック教團である. その詳細に就ては, 佐藤 1999., 173-8頁を請參照.

[15] BKL$_{XVII.}$1904., S. 310.-1., ML$_{3.}$1925., S. 766. 尙, 彼の上海出航時に於る肩書に就ては未確認.

[16] «Nr. 3698 *Der Reichskanzler Fürst von Hohenlohe an den Botschafter in London Grafen von Hatzfeldt*, Konzept von der Hand des Vortragenden Rates Klehmet (Nr. 1429, Ganz geheim), Berlin, den 13. November 1897»(SdddAüdVdeMiO帝時德國極東外交$_{I.}$1940., S. 81.-3.). 尙, «Nr. 3686 *Kaiser Wilhelm II. an das Auswärtige Amt*, Telegramm. Entzifferung, Neues Palais, den 6. November 1897»(ibid., S. 67.), «Nr. 3687 *Der Chiffreur im Kaiserlichen Gefolge Franceson an das Auswärtige Amt*, Telegramm. Entzifferung, Neues Palais, den 6. November 1897»(ibid., S. 67.-8.)は, これを6日のこととする. 因に, 前揭草稿«Nr. 3698»に據ると, ディーデリッヒスの上海出航は10日.

[17] «Nr. 3696 *Der Reichskanzler Fürst von Hohenlohe an Kaiser Wilhelm II., z. Z. in Kuchelna in Schlesien*, Telegramm. Entzifferung, Berlin, den 11. November 1897»(SdddAüdVdeMiO帝時德國極東外交$_{I.}$ 1940., S. 78.-9.).

[18] 中外舊約$_{I.}$1957., 738-40頁, Mohr 1911., S. 1.-5.("Abgedruckt aus: „Treaties between China und Foreign States" published by Order of the Inspector General of Customs: Schanghai 1908.").

[19] Mohr 1911., S. 6.

[20] 中外舊約$_{I.}$1957., 827-9頁. 尙, その間のこととして, "膠澳租地合同"(1898.VIII.22.[光緒廿四年戊戌七月初六日]青島; 中外舊約$_{I.}$1957., 828-9頁)がある.

[21] 歷代總督は如下4名: ①カール•エッベ•ルートヴィッヒ=ローゼンダール *Karl Ebbe Ludwig* Roſendahl(在任1898.IV.16.-1899.II.; *1852.IX.2.Kopenhagen, ∞18xx., [-1902.I.-], †19xx.; *DAW 德膠官報$_{I.-13.}$ 1899.II.22.*, S. 1.-2., Huguenin 1912., S. 161., DKL$_{III.}$1920., S. 183., 電網頁«Koloniales Bildarchiv», Bild Nr. 001-0030-01. ②カール•オットー•フェルディナンド•パウル=イェシュケ *Carl Otto Ferdinand Paul* Jaeſchke(在任1899.II.19.-1901.I.27.; *1851.VIII.4.Breslau, ∞I: 18xx., ∞II: 1900.III.24.Hongkong, †1901.I.27.Tſingtau, Be.: 〃.30.〃; «**†Gouverneur Jaeschke.**»[*AfdDKG 青島官報$_{II.-5.}$ 1901.II.2.*, S. 35.-8.], "**Lokales.**¶ .....¶ **–Die Beerdigung** der sterblichen Ueberreste des Herrn Gouverneurs

州駐屯海軍砲兵部隊 Stammabteilung der Matroſen=Artillerie Kiautſchou[22]や海軍陸戦隊第3海兵大隊 III. See=Bataillon d. Marineinfanterie[23]等々の駐屯による治安維持下に，軍•民兩港を含む港灣の整備が進められ，[24] その總督府所在地"青島"には，獨逸風都市計劃の下，郵便•電氣•水道といった近代的都市基盤が1900年頃迄には順次整備され，總督府所屬の司法•行政諸機關，測候•天文觀測所，學校•病院•教會等々の諸施設，及び租借地外との交通手段も格段の充實を看た．陸上交通の面では，山東省の省都"濟南府"と結んで清國の首都"北京"へと通ずる山東鐵路Schantung=Eiſenbahnの建設がその最たるもので，1904年6月1日には，このうちの"青島=濟南府西驛線Tſingtau=Tſinanfu$_{Weſt}$(412 km)"が開通している．[25] 水上交通の面では，中國沿岸航路の充實は勿論のこと，例えば，"北獨逸ロイドNorddeutſcher Lloyd, Bremen"，"ハムブルク=アメリカ航路Hamburg=Amerika Linie"(含•兩社代行の"獨逸帝國郵船Kaiſerlich Deutſcher Reichspoſtdampfer=Dienſt"，及び"國際寢臺特急旅行會社Compagnie Internationale des Wagons=Lits"によるシベリア鐵道經由路線)，"日本郵船會社Nippon Yusen Kaisha"等々を始めとする國際旅客•貨物交通上の要地としての役割をも果し始めていた．

勿論，獨逸側はその國益の追求にのみ終始した譯ではない．例えば"德華高等學堂 Deutſch=Chineſiſche Hochſchule"(1909.X.25.-)[26]や"德華學院Deutſch=Chineſiſche Lehranſtalt"(Berliner Miſſionsgeſellſchaft所管;[27]

Jaeschke fand am Mittwoch,den 30.Januar nachmittags statt,…"(*ibid.*,S.38.-9.,Huguenin1912.,loc.cit.;尙,"1900.III. 24."が再婚年月日なのか,それとも例えば披露年月日なのかという點に就ては未確認). ③カール•*A.*アドルフ•オスカー=フォン•トゥルッペル *Karl*[#1.] *A. Adolf Oſcar*[#2.] von Truppel(在任1901.VI.8.-1911.IV.;Admiral z.D., Gouvern.a.D.d.Kiautſchougeb.Chef d.Milit.u.Zivil=Verw.,Oberbefehlsh.d.Streitkräfte a.Land.;*1854.V.17.Katzhütte,Thüringen,∞1891.V.14.Havana[*Marie*[#3.],geb.Müller],†1931.VIII.20.Berlin=Frohnau[#4.];*DAW德華彙報6.-47.1904.XI.19.*,S.12.-3.[[#1.]*Christian*],*Wi's?III.1908.*,S.1404.,Huguenin1912.,loc.cit.,*Wi's?VIII.1922.*,S.1584.[[#3.]*Annie*],GB XIX.1934.,S.121.[[#4.]],*Wi's?X.1935.*,S.1830.[Nekrolog;[#2.]*Oskar*;[#4.]Frohnau i.M.]). ④アルフレート•ヴィルヘルム•モーリッツ=マイヤー•ヴァルデック *Alfred Wilhelm Moritz* Meyer=Waldeck(在任1911.VIII.19.-1914.XI.;Kapt.z. See,ehem.Gouv.d.Kiautſchou=Geb.;*1864.XI.27.St.Petersburg,∞1898.X.11.,†1928.VIII.25.#Bad Kiſſingen,Be.:?. Bergfriedhof,Heidelberg;«**Gouverneur Meyer-Waldeck.**»[*KP山東彙報4.-47.1911.XI.26.*,S.378.],Huguenin1912.,loc.cit., *Wi's?VIII.1922.*,S.1045.,*Wi's?X.1935.*,S.1820.[Nekrolog;[#]24.], 近代來華 1981.,327 頁,BB-NF$_{II.}$1987.,S.204.-5. [Klaus J.Bade]). 彼の青島到着に就ては,«S.E.Gouverneur Meyer-Waldeck.»(*KP山東彙報4.-47.1911.XI.26.*,S.390.; "**Aus der Kolonie.**").

[22] 總司令部Kaiſerliches Kommando所在地は,エルベ河Elbeの北海Nordſee河口左岸に位置するクックスハーフェンCuxhaven(Flecken i.d.Hamburger Landherrenſchaft;RG-SL$_{VIII.}$1895.,B.I.,S.1063.,BKL$_{IV.}$1903.,S.587.).

[23] 總司令部所在地は,エルベ河口からヴェーザー河Weſerの河口を隔てて西に位置するヤーデ灣Jadebuſenの西岸に在るヴィルヘルムスハーフェンWilhelmshaven(Stadt u.Reichskriegshafen,Kreis Wittmund,Reg.=Bez.Aurich,preuß.Provinz Hannover;RG-SL$_{VIII.}$1895.,B.II.,S.1130.,BKL$_{XVI.}$1903.,S.737.-8.).

[24] 青島港の特に運營に就ては,«**Hafenbetrieb und Hafenverwaltung von Tsingtau.** Von Admiralitätsrat Dr.Schrameier.»(*DAW德華彙報6.-2.1904.I.9.*,S.9.-11.,*id.6.-3.1904.I.16.*,S.8.-9.,*id.6.-4.1904.I.23.*,S.9.-11.,*id.6.-5.1904.I.30.*,S.8.-10.,*id.6.-16.1904.IV.16.*,S.10.,*id.6.-19.1904.V.7.*,S.8.)を請參照. 尙,青島を自由港として開港したのは,1898年9月2日との由.(MGKL$_{10.}$1906.,S.879.).

[25] "**Locales.**¶ .....¶ *** **Schantung-Eisenbahn.** Anlässlich der Eröffnungsfeier der Schantung-Eisenbahn am 1.d. Mts.fand zwischen dem Gouvernement und der Direktion in Berlin folgender Telegrammwechsel statt:¶ Direktion der Schantung-Eisenbahn-Gesellschaft,Berlin.¶ Zum heutigen Tage sendet das Gouvernement herzliche Glückwünsche.¶ Gouverneur Truppel.¶ Freundlichen Glückwunsch erwiedern mit herzlichen Wünschen für Tsingtaus Erblühen.¶ Direktion der Schantung-Eisenbahn.¶ …"(*DAW德華彙報6.-23.1904.VI.4.*,S.15.),«**Die Eröffnung der Schantung-Eisenbahn bis Tsinan-West.**»(*id.6.-24.1904.VII.11.*,S.11.-4.),«**Die Schantung-Eisenbahn-Gesellschaft.**»(*id.6.-30.1904.VII.23.*,S.10.-2.,*6.-31.1904.VII.30.*,S.9.-11.,*6.-33.1904.VIII.13.*,S.11.-3.,*6.-34.1904.VIII.20.*,S.10.-2.). 因に,例えば,1904年11月1日附山東鐵路時刻表«SCHANTUNG-EISENBAHN.**Fahrplan** giltig ab 1.November 1904.»(*AfdDKG青島官報5.-44.1904.X.29.*,S.238.-9.)に據ると,青島-濟南西間の直行便は毎日上•下各1本で,所要時間は略々13時間. 卽ち,青島驛を朝7時00分に發車した便は,高密($^{10:04}/_{:19}$)•濰縣($^{12:45}/_{1:05}$)•張店($^{23:59}/_{4:19}$)等々を經由しつつ,濟南西驛到着は夜7時50分であった.

[26] *Minerva$_{XXIII.}$f.1913-1914.*,S.1435.-6.

[27] "Berliner Miſſionsgeſellſchaft"は,1824年創設の"Geſellſchaft zur Beförderung der evangeliſchen Miſſionen unter den Heiden"に由來する布教團體で,ベルリン在設新教布教諸團體に於る所謂"Berlin I"(BKL$_{II.}$1901.,S.797.). 因に,"Berlin II"は"Großnerſche Miſſion",又,"Berlin III"は"evangeliſche Miſſionsgeſellſchaft für Oſtafrika"

3年制;-1911.VI.1.-)[28],"德華高等女學校Höhere Deutſch-Chineſiſche Mädchenſchule"(Allgemeiner Evangeliſch-Proteſtantiſcher Miſſionsverein所管;6年制;-1911.VI.1.-)[29],"禮賢書院Deutſch-Chineſiſches Seminar"(Allgemeiner Evangeliſch-Proteſtantiſcher Miſſionsverein 所管;7 年制;-1911.VI.1.-)[30]等々に於る研究•教育活動,及び"青島國立觀象臺Kaiſerl.Obſervatorium Tſingtau"(1909.-;1898-1909.:aſtronomiſche u.meteorologiſche Station)[31]に於る氣象•天文觀測とその公表等々をはじめとする諸活動は,爾餘の人々をも大いに裨益するものであった. 又,"Die Chineſiſche Landwirtſchaft"(1926.;漢語譯中國農書1936.;日語譯中國農書1940/42.)の著者として著名なヴィルヘルム=ヴァグナー*Wilhelm* Wagner(Dr.phil.[1910.XI.23.Bonn];Dozent d.Land-u. Forſtwirtſchaften,Deutſch-Chineſiſche Hochſchule,Tſingtau[1911.I.-];*1886.IX.27.Oelsberg,∞?,[-1926.II.21. Wiesbaden-],†19xx.)[32]が,德華高等學堂農學部の創設とその後の學部運營とを主宰した人物であり,"論語"•"老子道德經"•"易經"等々の獨語譯者にして,[33]"禮賢書院"の主宰者であったリヒャルト=ヴィルヘルム*Richard* Wilhelm(尉禮賢;Dr.theol.;Pfarrer u.Miſſionar,Tſingtau;*1873.V.10.Stuttgart,∞1900.V.7.Schanghai,†1930.III.1.Tübingen,Be.:〃.3.Bad Boll)[34]が,青島在設統合福音派海外傳道協會Allgemeiner Evangeliſch-Proteſtantiſcher Miſſionsverein の傳道師であったことに就ては,改めて指摘する迄もあるまい.

それでは,第1次世界大戰前の青島に於る書籍の收藏狀況は如何かと云うと,當時の世界各地の高等學術機關及び主要圖書館等々を紹介した1913-1914年用«ミネルヴァ»は,[35] これに就き如下5館の名を擧げている. 其處に所謂"Bibliothek"が,例えば獨立した建造物であったのか否かといったその具體的態樣に就ては一部未確認乍ら,本稿では,便宜上,この5館全てを"圖書館"と呼んでおく.

> ▪1.: **德華高等學堂圖書館 Bibliothek der Deutſch-Chineſiſchen Hochſchule**; "ca. 15 000 europäische u. ca. 4600 chinesische Bände. *Leiter:* Prof. **H. Wirtz.** – *Assistent:* **Lessing.**"[36]
>
> ["**Deutsch-Chinesische Hochschule. Bibliothek und Sammlungen.** Leiter: Prof. Dr. H. **Wirtz.**"][37]
>
> ▪2.: **總督府圖書館Bibliothek der Landesverwaltung**;"Hervorgegangen aus der deutſch-chines. Bücherei des Rechtsanwalts und Schriftstellers Willi Bohn.(Berlin). Näheres: «*MinervaHdGW$_{II.}$ 1914.*$^{+}$»[38] Bestand (1913):1410 Bde.;120 Nrn. Veröffentlichungen des Seezollamts mit über 400 Bden., sowie etwa 60 Karten und 300 Bde. Zeitschriften. Für den Gebrauch des Gouvernements bestimmt; zu Studienzwecken auch Ausleihung an ausserhalb des Gouvernements stehende Perſonen. – Die Verwaltung und die Neuanschaffung von Büchern unterliegt der Landesverwaltung. Kontrolle und Verwaltung durch einen Dolmetscher; z[ur]. Z[eit]. Referendar **Thilo.**"[39]

である(id.$_{XI.}$1902.,S.927.-9.).

[28] Schlunk 1914., S. 340.- 1. 又, その1911年6月1日時點に於る入學資格: 基礎教育5- 9年既修者(ibid., S. 340.- 1.); 教師: 全4名[男; 含白人1名], 學生: 全42 名[男; 14- 28歲](ibid., S. 352.- 3.).

[29] Schlunk 1914., S. 341. 又, その1911年6月1日時點に於る入學資格: 附屬學校3年既修者(ibid., S. 341.); 教師: 全6名[男3名+女3名; 含白人2名]; 學生: 全43名[女; 6[?9?]- 20歲](ibid., S. 352.- 3.).

[30] Schlunk 1914., S. 341. 又, その1911年6月1日時點に於る入學資格: "四書"讀解•書字•計算能力を有する者(ibid., S. 341.); 教師: 全11名[男; 含白人2名]; 學生: 100名[男; 15- 25歲](ibid., S. 352.- 3.).

[31] *Minerva$_{XXIII.}$ f.1913-1914.*, S. 1436.- 7.

[32] *Minerva$_{XXIII.}$ f.1913-1914.*, S. 1436., 中國農書 1940., 序言1頁, GV$_{1700-1910:153.}$ 1986., S. 283.

[33] Wilhelm 1910., Wilhelm 1911., Wilhelm 1924.

[34] 新田1994., 7, 63, 313, 338- 40頁, *Wi's?$_{VIII.}$ 1922.*, S. 1697.

[35] *Minerva$_{XXIII.}$ f.1913-1914.*

[36] *Minerva$_{XXIII.}$ f.1913-1914.*, S. 1436. 因に, 德華高等學堂の«ミネルヴァ»への登載開始は, *Minerva$_{XIX.}$ f. 1909-1910.*, S. 1133.乍ら, 其處には圖書館に就ての記述を缺く.

[37] Pantheon 1914., S. 458..

[38] 當«*MinervaHdGW$_{II.}$ 1914.*$^{+}$»部分, 原文ではミネルヴァの頭部を象った徽號が使用されているが, 仝書"略號一覽 Abkürzungen"(*Minerva$_{XXIII.}$ f.1913-1914.*, S. VIII.- X.)冒頭の指示に從ったうえで, 本稿に於る略號を當てておいた. 但, 當該*MinervaHdgW$_{II.}$ 1914.*$^{+}$に就ては, 未見.

[39] *Minerva$_{XXIII.}$ f.1913-1914.*, S. 1436. 因に, «ミネルヴァ»への登載開始時の記述は, "**BIBLIOTHEKEN.**¶ **GOUVERNEMENTSBIBLIOTHEK.** Hauptsächlich rechtswissenschaftlichen und verwaltungstechnischen Inhalts."(*Minerva $_{XXI.}$f.1911-1912.*, S. 1288.)

["**Bibliothek der Landesverwaltung.** (Hervorgegangen aus der deutsch-chines. Bibliothek des Berliner Rechtsanwalts Willi Bohn.) Verwaltet durch Referendar **Thilo.**"][40]

"$_3$: 膠州圖書館**Kiautſchou-Bibliothek**. "Gegr. 1898. (Stiftung). Beſtand: 11 700 Bde. (Meist belletristischen Inhalts). – Bibliothekar (ſeit 1904): Prof. Dr. **Doenitz.**"[41]

["**Kiautschou-Bibliothek.** Gegr. 1898. *(Meist belletristischen Inhalts.)* Bibl.: Prof. Dr. **Doenitz.**"][42]

"$_4$: 帝國法院圖書館**Gerichtsbibliothek** "(im Gerichtsgebäude). Gegr. 1898. Bestand: ca. 2000 Bde., besonders praktische Rechtswissenschaften. – *Bibliothekar:* Sekretär des Kaiserl. Gerichts **Tabbert.**"[43]

["**Gerichtsbibliothek.** Gegr. 1898. *(Bes. praktische Rechtswissenschaften.)* Bibl.: Gerichtssekr. **Tabbert.**"][44]

"$_5$: 青島國立觀象臺圖書館**Kaiſerliches Obſervatorium Tſingtau, Bibliothek.** "(500 Bde.) *Bibliothekar*: Dr. **Meyermann.**"[45]

具體的に述べると, このうちの德華高等學堂圖書館**Bibliothek der Deutſch-Chineſiſchen Hochſchule** ("$_1$.)は, 館長*H.*ヴィルツWirtz (Dr., Dozent f. Einführung in die Philoſophie, Deutſch-Chineſiſche Hochſchule)[46]がその輔佐レッシングLeſſing (Aſſiſtent)[47]と共にその管理•運營に當っていた圖書館で,[48] 1913/14年當時, 歐文書籍約15,000 點, 漢文書籍約4,600點を所藏していたと云う.[49] この館長*H.*ヴィルツことハインリッヒ=ヴィルツ*Heinrich* Wirtz (Dr. phil. [1910.III.15.Bonn], Dozent f. Einführung in die Philoſophie, Deutſch-Chineſiſche Hochſchule, Tſingtau; *1885.II.5.Aachen., ∞?, [-1920.I.-], †19xx.)[50]に就ては, ショーペンハウエルの觀念論をプラトン及びカントのそれと對比した研究によりボン大學から1910年に學位を取得した人物であることを知るのみ乍ら, その輔佐レッシングことフェルディナンド•ディートリッヒ=レッシング*Ferdinand Diederich* Leſſing (Sinologiſt, Profeſſor, Dr. phil. [1926.VIII.6.Berlin]; *1882.II.26.Eſſen, ∞1934.II. [*Margarete*, geb. Jahn], †1961.XII.31.Berkeley)[51]に就ては, 當時既に, 全校正教員ハインリッヒ•フリードリッヒ•ヴィルヘルム=オートメル*Heinrich Friedrich Wilhelm* Othmer (Dr. phil. [1904.XII.10.Berlin], Dozent f. Geographie u. Geologie [zugleich Leiter der Unterſtufe], Tſingtau; Profeſſor an der Tongchi Univerſität同濟大學, Schanghai上海[1920.?- 1933.]; *1882.XII.16.Uthwerdum, ∞I: 1911.[*Eliſabeth*, geb. Buri], ∞II: 1922.[*Maria*, geb. 〃], †1934.I.1.Göttingen)[52]と共に, "Lehrgang der nordchinesischen Umgangssprache北方漢語口語課程"を公表して(Lessing-Othmer 1912.), 獨語圈に於る漢語ローマ字表記法の一方式(所謂"レッシング=オット

---

[40] Pantheon 1914., S. 458.

[41] *Minerva$_{XXIII.f.1913-1914.}$*, S. 1436. 因に,«ミネルヴァ»への登載開始時の記述は, "**BIBLIOTHEKEN.**¶ .....¶ **KIAUTSCHOU-BIBLIOTHEK.** Hauptsächlich rechtswissenschaftlichen und verwaltungstechnischen Inhalts."(*Minerva $_{XXI.f.1911-1912.}$*, S. 1288.)

[42] Pantheon 1914., S. 458..

[43] *Minerva$_{XXIII.f.1913-1914.}$*, S. 1436. 因に,«ミネルヴァ»への登載開始時の記述は, "**BIBLIOTHEKEN.**¶ .....¶ **GERICHTSBIBLIOTHEK.** Besonders praktische Rechtswissenschaften."(*Minerva$_{XXI.f.1911-1912.}$*, S. 1288.)

[44] Pantheon 1914., S. 458..

[45] *Minerva$_{XXIII.f.1913-1914.}$*, S. 1436.-7. 因に, 青島國立觀象臺の«ミネルヴァ»への登載開始は, *Minerva$_{XXI.f.1911-1912.}$*, S. 1289.乍ら, 其處には圖書館に就ての記述を缺く.

[46] *Minerva$_{XXIII.f.1913-1914.}$*, S. 1436.

[47] *Minerva$_{XXIII.f.1913-1914.}$*, S. 1436.

[48] *Minerva$_{XXIII.f.1913-1914.}$*, S. 1436.

[49] *Minerva$_{XXIII.f.1913-1914.}$*, S. 1436.

[50] *Minerva$_{XXIII.f.1913-1914.}$*, S. 1436., GV$_{1700-1910:157.}$ 1987., S. 310., 電網頁«Schmidt2002.b»

[51] *Minerva$_{XXIII.f.1913-1914.}$*, S. 1436., GV$_{1911-1965:79.}$ 1978., S. 480., "**LESSING, Ferdinand Diederich, Dr.** phil., Kustos u. Prof. – *26. II [18]82 Essen (Ruhr); ev. – V: Eduard L.; M: Elisabeth Brockhaus. – Verh: Berlin 26. II [18]34 m. Margarete Jahn, ev. – Gymn. Lingen; [19]02/05 Univ. Berlin; [19]05-07 Wiss. Hilfsarb. a. Mus. f. Völkerk.; [19]07-25 China: Dt. Chin. H. Tsingtau Doz., [19]19-21 Prof. Univ. Peking, [19]21-25 Doz. med. H. Mukden; [19]25-27 L. u. Prof. Sem. f. Orient. Spr. Berlin; [19]27 Kustos u. Prof. a. Mus. f. Völkerkde. Berlin; [19]30-33 Forsch.-Reis. n. Nordchina, Mongolei, Yünnan, Tongking; VII [19]35 a. Staatsuniv. Berkeley beurl. – W: Zusamm. m. Othmer, Lehrg. d. nordchines. Umgangsspr. [19]12, Neudr. [19]33; Mongolen [19]35. – Spez: Chin. Tantrismus, Lamaismus. – Ges. f. ostasiat. Kst.; Berl. Ges. f. Anthrop., Ethnol. u. Urgesch. – Berkeley, Kalif., Staatsuniv."(*Wi's?$_{X.1935.}$*, S. 961.), IBDoCEE$_{1933-1945:II-2.}$ 1983., p. 712. 又, Walravens2006.(原本未見)

[52] *Minerva$_{XXIII.f.1913-1914.}$*, S. 1436., GV$_{1700-1910:105.}$ 1984., S. 378., 電網頁«Schmidt2002.a».

マー式")[53]を提示したのみならず, その後も北京•奉天(瀋陽, Mukden [盛京])•ベルリン•バークレイ等々に於て研究•教育に携り, その間, 1930- 33 年には, スヴェン•アンデルス=フォン•ヘディン*Sven Anders* von Hedin (Swedish scientist and explorer; *1865.II.19.Stockholm, ∞?, †1952.XI.26. 〃)[54]率る所謂"西北科學考察團Sino=Swedish Expedition"の一員としても活躍した人物であったことに就ては, 贅言を要しまい.

又, 德華高等學堂(別稱"山東青島學堂")[55]•"青島特別高等專門學堂"[56]•"青島特別高等學堂"[57]•"青島特別高等專門學校"[58])自體は, 1910 年代初頭に於る世界各地の圖書館•檔案館•博物館等々を專錄した *Minerva: $HdGW_{I.}$ 1911.*の紹介に據ると, 1909年10月25日に創設された淸(中)•獨共同經營の高等教育機關で, その創設時の契約に據れば, 淸側は, 創設時の出資40,000マルクに加え, 當初10年間は毎年40,000マルクの出資を約し, 契約期限後にはこれを新規更改することが可能とされていたとのことである.[59] 1911年6月1日時點に於ては, 教師數全27 名,[60] 全7 クラスから成り, 學生は男子のみで178 名という規模であったものの,[61] 1913/14 年當時には, 1.法政學部Rechtswiſſenſchaftlich=ſtaatswiſſenſchaftliche Fakultät,[62] 2.理工學部 Naturwiſſenſchaftlich=techniſche Fakultät, 3.農學部Land= und forſtwiſſenſchaftliche Fakultät, 及び4.醫學部Mediziniſche Fakultät (1911年6月創設, 4年制)の4學部を擁していた.[63]

堂長Direktor der Geſamtanſtalten は, 工學士•礦山技師•地質學者にして礦山學擔當教員のゲオルク=カイペル*Georg* Keiper (Prof.;Dipl.=Ing.,Bergingenieur u. Geologe; Dozent f. Bergbauwiſſenſchaften; *1877.XII.20. Ingolſtadt, ∞?, [-1919.XII.-], †19xx.)[64], 翻譯處々長Leiter d. Überſetzungsanſtalt は, 哲學入門擔當教員の*H.*

---

[53] 辻本•橋本1958., 1087- 1104 頁.

[54] Barnhart$_{II.}$ 1954., p. 1956.

[55] "◙學部衙門……山東青島學堂 總稽察 學部員外郎蔣楷湖北拜門外人 拔貢"(職官錄1911.冬, 第3冊, 第9葉)

[56] "第一門第二號 中德法政集要叢編 青島特別高等專門學堂法政科譯署處會同出版"(Romberg 1912.漢語叢書名扉).

[57] "政治¶ 中央部官制¶ … …¶ 教育部¶ … …¶ 尙教育部直轄ノ各學校次ノ如シ¶ 北京大學校… … 青島特別高等學堂"(支那年鑑$_{II.}$ 1917., 201 頁).

[58] "教育部¶ … …¶ 隸屬機關編審處 … … 青島特別高等專門學校, 民國七年停辦. …"(光緒三十一年至民國十一年中央教育機構設置及編制的演變(1922 年); 民國史檔資匯$_{III.教}$ 1991., 201 頁再錄).

[59] *MinervaHdGW$_{I.}$1911.*, S.552. 又,«青島特別高等專門學堂章程»(中近學制史料 $_{II.上}$1987., 682-4 頁). 因に,«**Die Eröffnung der Deutsch-Chinesischen Hochschule.**»(*TNN 青島新報$_{6.-247.}$1909.X.26.[Dienstag]*, S.2., 7.). 又,"**Lokales.**¶ ……¶ **Deutsch-Chinesische Hochschule.** Die feierliche Eröffnung der Hochschule, verbunden mit der Grundsteinlegung für die neuen Gebäude findet am Montag statt. Jedermann ist zur Teilnahme an der Feier willkommen; besondere Einlasskarten sind nicht erforderlich."(*TNN 青島新報$_{6.-245.}$1909.X.23.[Sonnabend]*, S.7.),"**Deutsch-Chinesische Hochschule.**¶ Die feierliche Eröffnung der Hochschule, verbunden mit der Grundsteinlegung für die neuen Gebäude, findet am 25. Oktober 1909, vormittags 11. Uhr, statt.¶ Die Einwohnerschaft von Tsingtau wird gebeten, an der Feier teilzunehmen[:]Besondere Einlasskarten sind nicht erforderlich.¶ **Der Direktor.**"(ibid., S.3.).

[60] "weiße männl. 白人21名", "farbige männl. 非白人6名"(Schlunk 1914., S. 356.).

[61] "darunter angeblich 13 Christen, keine Heiden und 2 Mohammedaner 內譯: 基督教徒13名, 異教徒ゼロ, 回教徒2名"(Schlunk 1914., S. 356.- 7.)との記述に基き, 敢て分類すれば, "儒教徒163名"ということか.

[62] «**Die rechts- und staatswissenschaftlichen Studien an der Deutsch-Chinesischen Hochschule in Tsingtau.**»(*KP山東彙報$_{2.-42.}$ 1909.X.16.*, S. 713.- 4.).

[63] *Minerva$_{XXIII.}$f.1913-1914.*, S. 1435. 又, "**Aus der Kolonie.**¶ ……¶ **Deutsch-Chinesische Hochschule.** zum Direktor der Deutsch-Chinesischen Hochschule, die ihre Lehrtätigkeit am 1. Oktober d. Js. aufnehmen wird, ist der Bergingenieur Ka[æ]iper ernannt worden. Herr Ka[æ]iper hat während der letzten drei Jahre Vorlesungen an der Kaiserl. Chin. Universität zu Peking gehalten. Als Lehrer für die Hochschule sind des weitern gewonnen: Dr[ɛz]. Lessing, der bisher bei den chinesischen Unterrichtsanstalten in Tientsin tätig war, sowie die Herren Haenisch und Glatzer, die z. Zt. Sprach- und allgemein-wissenschaftlichen Unterricht an der Militärschule in Wutschang geben. Ausserdem wird dem Vernehmen nach voraussichtlich Lehrer Berger, der seit mehreren Jahren an der Tsingtauer Gouvernementsschule tätig ist, zur Deutsch-Chinesischen Hochschule übertreten. Das Uebersetzungs- und Lehrmittel-Bureau der Anstalt wird Dolmetscher Dr. Wirtz, z. Zt. beim Gouvernement Kiautschou, übernehmen."(*KP山東彙報$_{2.-20.}$ 1909.V.15.*, S. 367.)

[64] *Minerva$_{XXIII.}$f.1913-1914.*, S. 1435., 電網頁«Schmidt 2002.a». 尙, "**[PEKING**¶ 順天 *Shun-tien*¶ ……]¶ **DIRECTORY**¶ …… CHINESE IMPERIAL UNIVERSITY (Ta [Hsue] Tang)¶ ……¶ Professor of German and Mining – W. Keiper, Dipl. Ing."(Directory 1908., p. 652.)のW.Keiperは, *KP山東彙報$_{2.-20.}$ 1909.V.15.*, S. 367.(前揭脚註[63.])を併

ヴィルツWirtz(前揭), 又, 中國側監察官として, "**Touhsio** Kuan"(Chineſiſcher Inſpektor)がその任に當っていたと云う.[65] これに據れば, 當該圖書館は, その翻譯處との機能的一體性を併せ持つ施設として位置づけられていたものの如くである.

1913/14年當時, 正教員Dozentは, 1.退任地方判事にして法政學擔當のロームベルクRomberg (Landrichter a. D.; Rechts- und Staatswiſſenſchaften; *18xx., ∞?, [-1913.-], †19xx.)[66], 2.法政學擔當の博士*E.*ミヒェルゼンMichelſen (Dr.; Rechts- und Staatswiſſenſchaften; 後出)[67], 3.機械工學・基礎科目擔當の教授*K.*ベッツBaetz (Prof.; Maſchinen-Ingenieurweſen u. grundlegende Fächer [1912.-]; 後出)[68], 4.上級教師にして鐵道敷設を含む土木工學擔當のデ・グラールde Grahl (Oberlehrer; Bauingenieurweſen inkl. Eiſenbahnbau; *18xx., ∞?, [-1913.-], †19xx.)[69], 5.農學部農業擔當教員の哲學博士ウィルヘルム=ヴァグナー*Wilhelm* Wagner(Dr. phil., Landwirtſchaftslehrer; Land- u. Forſtwiſſenſchaften; 前揭)[70], 6.海軍々醫少佐にして醫學擔當のヴィクトル=プレフケ*Viktor* Präfcke (Marineoberſtabsarzt; Medizin; *18xx., ∞?, [-1913.-], †19xx.)[71], 7.數學擔當の博士ドレクスラーDrexler (Dr.; Mathematik; *18xx., ∞?, [-1913.-], †19xx.)[72], 及び 8.初等科々長にして地理・地質學擔當の博士ハインリッヒ・フリードリッヒ・ヴィルヘルム=オートメル*Heinrich Friedrich Wilhelm* Othmer(前揭)の8名乍ら, 他にも諸教員10餘名がその教育・研究活動に從事していた.[73] 因に, *E.*ミヒェルゼンことエーリッヒ=ミヒェルゼン*Erich* Michelſen (Dr. jur.[1901.XII.22.Roſtock]; "Geheimer Regierungsrat"[1920.-]; Vortragender Legationsrat im Auswärtigen Amt.; *1879.VI.13.Danzig, ∞19xx.[*Käte,* geb. Baſchwitz], [-1931.

考すれば, *Georg* Keiperと同一人物と想われるが, これに據ると, 彼カイペルの京師大學堂に於る教授科目は, 獨逸語及び礦山學であったとの由. 因に, "教習執事題名錄(1903-1906)¶ .....¶ 教習題名¶ 服部宇之吉 日本東京帝國大學文科大學教授文學博士 正教習¶ .....¶ 凱貝爾 ㄇ 德文教習¶ ..."(中近學制史料 II.上 1987., 910-4頁).

[65] *Minerva*$_{XXIII.f.1913-1914.}$,S.1435. 尙,中國側監察官"**Touhsio** Kuan"に就ては,未精査故に,その漢字名すら確認し得ずにいる(中國人の姓として"Touhsio"という複姓は知らぬので,その姓名を逆轉させた"關某々","管某々",更には"圖書官"等々の可能性をも考慮してはみたものの,未詳). 因に,彼の前任監察官は"**Tschiang** K'ai" (*Minerva*$_{XXI.f.1911-1912.}$,S.1288.,*Minerva*$_{XXII.f.1912-1913.}$,S.1381.)との由故,彼に就ては,總稽察"蔣楷"(職官錄1911.冬,第3册,第9葉;前揭脚註[55])を指すものと看て間違いあるまい. 尙,典據を明示せぬ記事乍ら,電網頁«半島網2005.VII.11.»の"從德華大學到同濟大學"に於て, "德華大學監督由德國貴族・礦物學家凱見[晃貝]爾博士擔任, 總稽查爲中國人蔣楷. 蔣楷,早年爲山東平原縣令,後任御史,是飽學之士. 當時青島的中國人主要是商人・工人,因而稱蔣楷爲"青島聖人". 1913年蔣楷病逝, 由汪寶森接任."なる記事を遇見した. カイペルが貴族とは異聞で,汪寶森に就ても未精査故に不詳乍ら,參考迄に記しておく.

[66] *Minerva*$_{XXIII.f.1913-1914.}$, S. 1435. 尙, 彼ロームベルクが1912年に德華高等學堂から出版した"Staatsrecht 國法擇要"(簡稱: "Romberg 1912."), 及び"Strafrecht刑法擇要"(簡稱: "Romberg 1912.a")の扉に於ては, その著者名竝に肩書に就き,これを"Dr. Romberg,Landrichter a.D.,Dozent."の如く記す. 彼は, 或はクルト=ロームベルク *Kurt* Romberg(Dr.jur.[1909.III.19.Berlin]#;Gerichtsaſſeſſor;*1881.X.1.Meiningen,∞?,[-1912.-],†19xx.;GV$_{1700-1910:119.}$1984.,S.77.;#"Die rechtliche Natur der Konzessionen und Schutzbriefe in den deutschen Schutzgebieten"[筆者未見])ではないかと疑うものの,未精査故に確言は避けたい.

[67] *Minerva*$_{XXIII.f.1913-1914.}$, S. 1435., 青島沿革誌1916., 序.

[68] *Minerva*$_{XXIII.f.1913-1914.}$, S. 1435.-6.

[69] *Minerva*$_{XXIII.f.1913-1914.}$, S. 1436. 尙, "**Aus der Kolonie.**¶ .....¶ **Deutsch-Chinesische Hochschule.** Ein weiterer Dozent ist in der Person des Herrn de Grahl hier eingetroffen.¶ ..."(*KP山東彙報*$_{4.-41.1911.X.15.}$,S.269.). 因に,*Johann Guſtav-A., C.M.L.*de Grahl (Diplom-Ingenieur,Königlicher Bau-Rat,Direktor;*1865.IX.25.Hamburg,∞1891.III.28.[*Elſbeth,* geb. Schoeps], [-1922.-], †19xx.; *Wi's?*$_{VIII.1922.}$, S. 513.)との關係に就ては, 未精査故に不詳.

[70] *Minerva*$_{XXIII.f.1913-1914.}$, S. 1436., 中國農書 1940., 序言1頁.

[71] *Minerva*$_{XXIII.f.1913-1914.}$, S. 1436.,電網頁«Schmidt 2002.a» 尙, "**Kreuzer-Geschwader.**¶ Laut telegraphischer Mitteilung des Marinekabinetts sind folgende Frühjahrsstellenbesetzungen Allerhöchst befohlen:¶ .....¶ 11.) **S. M. Flusskanonenboot Vaterland.**¶ Es werden kommandirt: Oberleutnant zur See Pfützner,Marine-Oberassistenzarzt Praefcke.¶ ..."(*DAW德華彙報*$_{6.-11.1904.III.12.}$,S.15.),"**Lokalnachrichten.**¶ ... .¶ Es sind überzählig **befördert:**¶ ... .¶ Zum Marine-Stabs-Arzt: Marine-Ober-Assistenzarzt: **Praef[c]kei[i].**¶ ..."(*TNN青島新報*$_{3.-88.1906.IV.19.[Donnerstag]}$, S. 2.).

[72] *Minerva*$_{XXIII.f.1913-1914.}$, S. 1436.

[73] *Minerva*$_{XXIII.f.1913-1914.}$, S. 1436.

Berlin W 30, Haberlandstraße 4.-], †19xx.)[74]は, 大戰開始の1914年に駐上海獨逸總領事館所屬となり, 1919年からの本省勤務'を經た1922年から1926年にかけて, 東京の駐日獨逸大使館に於て參事官として勤務した人物でもある.[75] 又, *K.*ベッツことコンラート=ベッツ*Konrad* Baetz (Prof.; Maſchinen=Ingenieurweſen u. grundlegende Fächer [1912.-]; *18xx., ∞1xxx [*Meta*], [-1922.Tſingtau-], †19xx.)[76]は, 青島赴任前にヴュルツブルク市在設バイエルン王立機械工學•電氣工學高等專門學校教授を勤めていた人物で, 戰後の1922年にも青島で暮していた模樣である.

この德華高等學堂の1913/14年時點に於る校舍所在地に就ては未確認乍ら, Wegener 1910.所收の青島近郊圖"UMGEBUNG VON TSINGTAU."(Bibliographisches Institut, Leipzig所製)には, 青島灣を東南東に望む青島市街區"歐人居住區"南西郊の地に"*Deutsch-chines. Hochschule*"との印字が有り, 當圖と略々同時期に撮影されたと想われる"AvT"所錄の展望寫眞'*Panorama von Tsingtau vom Hügel bei der Deutsch-Chines. Hochschule aus*'(id., PL. 5.)から推定し得る撮影地點も, これと基本的に符合する.[77] 又, 日獨戰圖1914.中の'青島及其附近明細圖'上の同一地點にも"青島特別高等學堂"と印字されているので,[78] 恐らく其處, 卽ち青島市街區"歐人居住區"西緣南部に位置する山東鐵道"青島驛舍"から略々南西に約500 m程離れた處と推定するものの, その所在地番に就て明記した獨逸側資料未見故に, 確言は避けたい.

總督府圖書館Bibliothek der Landesverwaltung (*2)の藏書は, 1913-1914年用«ミネルヴァ»に據れば, ベルリン市に於る辯護士にして文筆家でもあったヴィリー=ボーン *Willi* Bohn (Rechtsanwalt u. Schriftſteller, Berlin; *?, ∞?, †?)[79]の"德=華藏書"をその基礎として收集されたとの由で,[80] その1913年當時に於る藏書數は, 書籍1,410冊, 海關刊行物120點(400餘冊), 地圖類約60點, 雜誌類300冊を擁していた. 統治目的のための利用をその基本としつつも, 自己啓發を目的とする場合には, 統治に關らぬ人物に對しての貸出が認められる場合もあったと云う.[81] 藏書の管理及びその新規購入は總督府所管事項とされ,[82] その管理•運營は翻譯官1名が當ることになっており, 當時の擔當者は, 行政試補見習ティーロThilo (Referendar)[83]ことフリードリッヒ=ティーロ *Friedrich* Thilo (Referendar [Dolmetſcher=Eleve]; *18xx., ∞?, [-1919.XII.-],

---

[74] $GV_{1700-1910:96.}$ 1983., S. 86., $RddG_{II.}$1931.,S.1251. 又,"**Locales.**¶ .....¶ *** Der Dolmetschereleve Referendar Dr.Michelsen hat die Geschäfte des Landamts und der Chinesenkanzlei in Tsingtau übernommen. ..."(*DAW德華彙報6.-13.1904.III.26.*,S.12.), "**Locales.**¶ .....¶ *** **Personalnachrichten.** .....¶ Der Dolmetschereleve Dr.**Michelsen** führt die Geschäfte des Vorstandes der Chinesischen Kanzlei weiter.¶ ..."(*DAW德華彙報6.-27.1904.VII.2.*,S.15.).

[75] "**Michelsen, Erich,**¶ ..... – M. studierte von 1897–1901 Rechts- und Staatswissenschaften sowie Chinesisch am Orientalischen Seminar in Berlin, an dem er 1900 die Diplomprüfung in dieser Sprache ablegte. 1901 wurde er Referendar, erwarb die juristische Doktorwürde und trat dann in den Dienst des Schutzgebietes Kiautschou, 1911 wurde er Bezirksamtmann, 1913 Dozent für Rechtswissenschaften an der Deutsch-Chinesischen Hochschule in Tsingtau; 1914 wurde er dem Deutschen Generalkonsulat in Schanghai zugeteilt. 1919 erfolgte seine Berufung ins Auswärtige Amt. 1920 erhielt er die Amtsbezeichnung Geheimer Regierungsrat. Er wurde der Deutschen Botschaft in Tokio überwiesen, wo er 1922–26 Gesandtschaftsrat war. 1926 ins Auswärtige Amt nach Berlin versetzt, wurde er Referent für China. ..... – M. schreib u. a. Aufsätze über chinesisches Recht und chinesische Verwaltung und übersetzte chinesische Gesetze. – Er gehört der Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens in Tokio und der Gesellschaft für Ostasiatische Kunst in Berlin als Mitglied an. – ..... – Berlin W 30, Haberlandstraße 4."(RddG$_{II.}$ 1931., S. 1251.) 又, «大正•在本邦大使館員任免•獨國/II»所綴"(13.)三等書記官ドクトル•エー•ミヘルゼン トル•アーチブリンスキー自大正十年十二月".

[76] *Minerva$_{XXIII.f.1913-1914.}$*, S. 1435.-6., *Wi's?$_{VIII.}$ 1922.*, S. 48.

[77] 當該展望寫眞は, 青島灣北西部に寫眞機を構え, 青島市街區"歐人居住區"北東郊の觀象臺 Obſervatorium, 給水塔Waſſerturmからディーデリッヒス山Diederichs-Berg (別稱信號山Signal-B.)を經て"仝區"南東部(青島灣北東部)の所謂"Yamen 衙門"東の裏山附近に至る諸丘陵をその背景として"仝區"[畫面左手]及び青島灣[畫面右手]を撮影したものである.

[78] *大阪朝日$_{11711.}$1914[大正3].IX.10.*附錄.

[79] *Minerva$_{XXIII.f.1913-1914.}$*, S. 1436., Pantheon 1914., S. 458.

[80] *Minerva$_{XXIII.f.1913-1914.}$*, S. 1436.

[81] *Minerva$_{XXIII.f.1913-1914.}$*, S. 1436.

[82] *Minerva$_{XXIII.f.1913-1914.}$*, S. 1436.

[83] *Minerva$_{XXIII.f.1913-1914.}$*, S. 1436., Pantheon 1914., S. 458.

†19xx.)[84]であった.

因に, 當該總督府政廳(竣工: 1906 年)[85]は, 青島市街區"歐人居住區"東部に位置する總督府丘 Gouvernementshügel 南麓の稍々西寄りの地に基礎工事を可成り行なったうえで, 1904 年4月22 日から凹字狀平面を呈する地上部分の工事を開始し, 約2年後の1906年4月2日に業者からの引渡を受けたもので, 當該新廳舍での政廳業務は, 仝月 9, 10 日から再開されている.[86] それ以前の總督府所屬諸機關箇々の具體的所在地に就ては, 當該圖書館の所在地を含め未確認乍ら, 總督の執務室を含む幾つかの機關は, 市街區"歐人居住區"東部南端の舊"衙門"敷地內及びその附近に置かれていた. 當該圖書館の場合も, 他の諸部門の移轉と略々同時に新廳舍內に移設されたものの, その移設記事中に具體的割當箇處に就ての言及は無い. 又, その收集の基礎となった所謂"ヴィリー=ボーン"藏書の具體的內容とその寄贈年月日, "ヴィリー=ボーン"その人, 及び總督府圖書館(▪2.)の創設年月日に就ても, 未精査故に不詳である.[87]

膠州圖書館 **Kiautschou-Bibliothek** (▪3.)は, 1913-1914 年用«ミネルヴァ»に據れば, 當時の組織形態は"財團 Stiftung"とのことで, 藏書の大半は文學書乍ら, その數は 11,700 點を算え, 1904 年以來, デーニッツ Doenitz (Prof., Dr., Bibliothekar)こと パウル=デーニッツ *Paul* Doenitz (Dr. phil.[1891.X.31.Halle], Profeſſor; *1866.X.5.Trebnitz a. d. Saale, ∞1xxx., [-1904.IX.13., 1913.-], †19xx.)[88]が, 司書としてその管理に當っていたとのことである.[89] 彼デーニッツは, 1904年1月附で獨逸帝國海軍省から青島に派遣された人物であっ

---

[84] *Minerva$_{XXIII.}$ f.1913-1914.*, S. 1436., Pantheon 1914., S. 458., 電網頁«Schmidt2002.a».

[85] 徐•張•村松•堀內1992., 5, 48 頁(編號266032).

[86] "**Lokalnachrichten.**¶ …….¶ Am 2. April hat die Uebergabe und während der letzen Tage die Ingebrauchnahme des neu erbauten **Gouvernementsdienstgebäudes** stattgefunden. Mit dem Aufbau wurde am 22. April 1904 begonnen, nachdem vorher 22200 cbm. Erd- und Felsmassen abgetragen bezw. abgesprengt worden waren.¶ Der fünfgeschossige Neubau ist im Erdgeschoss 82,34 m. lang. 41,61 m$_{[-]}$ breit (ohne den 4 m. nach Süden vorspringenden Mittelbau) und vom Fussboden des Sockelgeschosses bis zur höchsten Dachspitze 23,26 m. hoch.¶ Der Haupteingang auf den Gipfel des Gouvernemantshügels gerichteten Wilhelmstrasse und wird durch breit vor die Hauptöffnung des Mittelbaues gelagerte Freitreppen angezeigel. Andre Eingänge liegen auf den Aussenseiten der Flügelbauten und in den inneren Ecken des Hofes.¶ Die Raumverteilung ist nur zum Teil nach dem Programm v. 15.10.[19]03., das dem ausgeführten Entwurfe zu Grunde lag, erfolgt; sie ist das Ergebnis des Strebens, möglichst zahlreiche Dienststellen in den Neubau zu verlegen, die bisher zum grössten Teil mehr oder weniger provisorisch untergebracht waren.¶ Im untersten, dem Sockelgeschoss, interessiert die Lage der Räume der **Gouvernementskasse** an der Südwestecke der Neubaues. Die Einrichtung ist nach dem ursprünglichen Entwurf so getroffen, dass durch besondere Eingänge getrennte Warteräume für Europäer und Chinesen durch Schalter mit dem eigentlichen Zahlraum so verbunden sind, dass der die Aufsicht führende Zahlmeister die Vorgänge an beiden Schaltern bequem überwachen kann. Neben dem Zahlraum ist ein Tresor eingebaut, dessen Wände und Decke mit Eiseneinlagen aus Streckmetall armiert sind; die feuersichere Tür desselben ist aus der Heimat von der Firma Emil May & Herrmann, Hamburg bezogen.¶ Auf der Südostecke des Sockelgeschosses liegt die Brifausgabe, eine Druckerei und die Fernsprechanlage des Yamens.¶ Das Erdgeschoss enthält auf der westlichen Hälfte die Räume für das Zivil- und Chinesen-Kommissariat, die Baudirektion und eine Wohnung für einen verheiraten Beamten; die Verlegung der Kiautschou-Bibliothek in den Nord-Westflügel des Erdgeschoss[es] mit direktem Zugang von aussen ist eine Forderung neueren Datums.[01.] Durch den Haupteingang gelangt man über die Haupttreppe in das I. Obergeschoss zunächst zum Sitzungssaal. Dieser hat eine Grundfläche von 100 qm. und reicht mit seiner Decke in das II. Obergeschoss hinein. Die Saal-Wände haben eine teilweise Vertäfelung aus Teakholz erhalten.¶ ……"(*TNN 青島新報$_{3.-81.}$ 1906.IV.11.[Mittwoch]*, S.2.-3.). 尙, "**Lokalnachrichten.** ……. Das neue **Gouvernementsdienstgebäude** dürfte in den ersten Tagen des nächsten Monats – voraussichtlich am 8. April – bezogen werden." (*TNN 青島新報$_{3.-55.}$ 1906.III.11.[Sonntag]*, S. 2.)に據れば, その新廳舍への移轉は4月8日に豫定されていた.

[87] 圖書館•檔案館•博物館等々を專錄豫定との *MinervaHdgW$_{II.}$ 1914.*$^{+}$ を看得るならば, 更に詳しいことが判るかとは想うものの, 當該册に就ては未見であるうえ, 同書の內容を豫告する *Minerva$_{XXIII.}$ f.1913-1914.* の序文執筆者 *J.* ボイゲル Beugel, *G.* リュトゥケ Lüdtke の擱筆年月日 (Vorwort: 1913.XII.6.), カール•*J.* トリュブナー *Karl J.* Trübner (Strassburg)による版權取得年(©: 1914.), 及び第1次世界大戰の勃發等々を併考するならば, その刊行自體が危惧されるというのが現狀である.

[88] *JdKGSzT$_{VIII.}$ ü.1910-1911.*, S. 14., 電網頁«AAKdSuUbH». 因に, その博士論文は, Doenitz 1891. 又, "**Standesamtliche Nachrichten.**¶ Geburten:¶ …….¶ 13.Sept.04 eine Tochter dem Oberlehrer Dr.Doenitz.¶ …"(*DAW 德華彙報$_{6..-38.}$ 1904.IX.17.*, S. 15.).

[89] *Minerva$_{XXIII.}$ f.1913-1914.*, S. 1436.

て,[90] 仝年4月1日附で"豫算定員"となり,1910年々末には"教授"號を授與されている.[91] 遺憾乍ら,筆者等は,その"財團"創設時の證書Stiftungsurkunde及びその勅許狀kaiferliche Kabinettsordreは素り,當該兩件を各々紹介したとされる*DAW德膠官報*,及び*OL德文新報*の當該號に就ても未見故に,[92] 次善の策として,その開館10周年を記念して執筆された記事(*KP山東彙報2.-28.1909.VII.10.*),及びその創設15周年を記念した記事(*OL德文新報XXVII.-36.1913.IX.5.*)のうちの主として*KP山東彙報*の記事に據りつつ(*OL德文新報*の記事をも併照),その概容を紹介しておこう.[93]

---

[90] "**Lokales.**¶ .....¶ *** .....¶ Oberlehrer Dr.Dönitz hat seinen Dienst bei der Gouvernementsschule angetreten.¶ ***"(*DAW德華彙報6.-2.1904.I.9.*,S.11.)という記事は,恐らく,このことを指しているのであろう.

[91] *JdKGSzT VIII.ü.1909-1910.*,S.13.,"vom Reichs-Marine-Amt nach Tſingtau berufen[1904.I.],etatsmäſſig angeſtellt [*II*.IV.1.-],Prädikat„Profeſſor"[1909.XII.27.-];den Rang der Räte 4.Klaſſe[1911.+]"(*JdKGSzT VIII.ü.1910-1911.*,S.14.).

[92] 後揭*KP山東彙報2.-28.1909.VII.10.*,S.495.([*5.]).

[93] "**Aus der Kolonie.**¶ .....¶ **Die Kiautschoubibliothek.** In aller Stille hat kürzlich ein gemeinnütziges Institut unsrer Kolonie sein zehnjähriges Jubiläum gefeiert:die Kiautschoubibliothek. Sie kann dabei auf eine sehr günstige Entwicklung an bedeutsamer Stelle im geistigen Leben der Bevölkerung zurückblicken,nicht nur innerhalb der Angehörigen der Marine,für die sie bei der Gründung in erster Linie bestimmt war,sondern auch im Kreise der übrigen Kolonisten.¶ Im März 1898 trat in Berlin eine Anzahl patriotischer Männer,besonders namhafte deutsche Buchhändler und Seeoffiziere,aber auch andre Persönlichkeiten und Vereine,zu einem Komitee zusammen[*1.],um den in Kiautschou weilenden Angehörigen der deutschen Marine den Aufenthalt auf einer zunächst recht unwirtlichen Station angenehm zu gestalten und einen geistigen Zusammenhang mit der Heimat zu sichern,ihnen nach dem Dienst,nach des Tages Last und mühevoller Arbeit Erholung und Zerstreuung durch gute Bücher und Zeitschriften zu verschaffen. Ein Aufruf dieses Komitees zur Schaffung einer Volksbibliothek in Kiautschou für die deutschen Marineangehörigen hatte den grossen Erfolg,dass aus weiten Kreisen des Publikums,von Behörden und Vereinen neuntausend Mark baares Geld und über fünftausend Bücher gestiftet wurden. Nachdem der damalige Gouverneur des Kiautschougebiets Kapitän z.S.Rosendahl am 15.März 1898 die Bereitwilligkeit des Gouvernements ausgesprochen hatte,die Einrichtung und Verwaltung der Bibliothek zu übernehmen[*2.],wurden die Bücher und ein Teil des gesammelten Geldes von dem Komitee dem Gouvernement durch die Stiftungsurkunde,die vom 28. September 1898 datiert und von A.Meu[~~un~~?]sing(Kpt.z.S.),Ernst Vohsen(Buchhändler),H.Jacobi(Bankier)unterzeichnet ist,übereignet[*3.],und die Stiftung ward in einer vom 3.November 1898 datierten kaiserlichen Kabinettsordre vom Kaiser genehmigt[*4.]. Beide Urkunden wurden in der„Deutsch-Asiatischen Warte"und im„Ostasiatischen Lloyd" veröffentlicht[*5.],und Ende Dezember 1898 trafen dann 27Kolli und 24Kisten mit Büchern,Zeitschriften und einigen notwendigen Geräten[begleitet?]von dem Vorsitzenden des Kiautschou-Bibliothek-Komitees Konsul a.D.Ernst Vohsen wohlbehalten in Tsingtau ein[*6.]. In der Stiftungsurkunde wird die Bibliothek in erster Linie für die Angehörigen der deutschen See-und Landstreitkräfte aller Rangstufen bestimmt;im weitern soll sie aber auch allen in dienstlichem Auftrage in Kiautschou weilenden und andern Deutschen(Geistlichen,Lehrern, Aerzten,Kaufleuten,Technikern,usw.)zugänglich gemacht werden[*7.]. Bedingung der Stiftung ist,dass die Kiautschoubibliothek als eine selbständige,dem Gouvernement direkt unterstellte Einrichtung,als ein Ganzes,ungeteilt ohne jede Vermischung mit andern Einrichtungen erhalten bleibt[*8.]. Nach Massgabe der Stiftungsbestimmungen entwarf dann Admiralitätsrat Dr.Schrameier die erste Bibliotheksordnung[*9.]. Der erste Vorstand,Hauptmann Frhr.v.Liliencron,Richter Dr.Gelpcke,Leutnant z.S.Kuhlenthal,Dolmetscher Dr.Bessert-Nettelbeck,Missionar C. Voskamp und Kaufmann Witt,also zwei Offiziere,zwei Beamte und zwei Vertreter der nichtbeamteten Zivilbevölkerung,wurden vom Gouverneur Kapitän z.S.Jaeschke ernannt[*10.]. Für die erste Einrichtung der Bibliothek sorgte Dr.Gelpcke[*11.]. Sie befand sich zuerst im Artillerielager,dann im Sitzungszimmer des Gerichtsgebäudes und im Alten Yamenlager,von März 1903 bis Mitte 1906 im untern Stockwerk des Hauses Irenestrasse 201[*12.]. Die Bibliothek,die als ein Denkmal der Fürsorge unsrer Landsleute in der Heimat wiederholt den lebhaftesten Dank aller Beteiligten,besonders der Soldaten,Matrosen und kleinen Beamten,gefunden hat,ist von Anfang an sehr viel benutzt worden. Zwar konnte das vom Komitee längst geplante Lesezimmer aus Mangel an geeignetem Raum erst im Jahre 1903 eröffnet werden[*13.],aber die Geldmittel des Komitees ermöglichten bis Ende 1902 die regelmässige Sendung guter Zeitungen und Zeitschriften der verschiedensten Art und die Bibliothek wurde durch weitere Büchersendungen vermehrt;aber trotzdem gestaltete sich die erste Entwicklung des Instituts alsbald schwierig. Ungenügende Räumlichkeiten,Mangel an Personal bei Verwaltung und Kontrolle des Ausleiheverkehrs,daraus entspringende,nur allmählich zu beseitigende Unordnung und seit 1901 auch Mangel an Geldmitteln hinderten den Ausbau. Von denjenigen Beamten und Offizieren,die die Bibliothek benutzten,zahlte eine Anzahl sei Juli 1899 freiwillige Beiträge,insgesamt etwa sechzig Dollar im Monat. Die Teilnahme der Zibilbevölkerung blieb anfangs ziemlich gering;wahrscheinlich weil die Leihgebühr im Verhältnis zu dem,was die noch wenig ent-

これに據ると，當該圖書館の運營は，19 世紀末に於るその創設以來，常に周圍の人々の溫い支援を得はしたものの，經濟的には決して平坦ではなかったものの如くである．卽ち，その創設は，獨逸本國に於る書籍業者•海軍將校•人格者•協會等々のうちでその名を知られた愛國者達が，1898 年 3 月にその設立委員會を組織したことに始る(前揭脚註[93]:[*1.])．仝月15日には，その設置場所の提供とその後の管理を總督府が

---

wickelte Bücherei bieten konnte,auf die Dauer zu hoch war,so dass die segensreiche,der Belehrung und Unterhaltung gleichmässig dienende Einrichtung meist nur von Mannschaften,Offizieren und Beamten benutzt wurde. Aus diesem Grunde wurde der Vorstand denn auch bald enger gefasst;er bestand später nur aus zwei Vorstandsmitgliedern. Von diesen haben sich besonders zwei hervorragende Verdienste um die Kiautschoubibliothek erworben. Im Jahre 1900 trat auf Wunsch des Gouverneurs Jaeschke Pfarrer Schüler ein,der in langwieriger,unendlich mühseliger Arbeit die Neuordnung und Katalogisierung durchgeführt hat,so dass im Frühjahr 1904 der gedruckte Katalog erscheinen konnte[*14.]. Schon früs[sh]er war die Lage der Bibliothek schwierig geworden;viele Bücher waren,ohne dass Ersatz geleistet wurde,verloren gegangen,die Unkosten für Entschädigung der Hilfskräfte,der Buchbinderei usw.konnten bei den geringen und unsichern Einnahmen bei weitem nicht gedeckt werden, und von den hochherzigen Spendern,deren Mittel Ende 1902 erschöpft waren,neue Opfer zu fordern ging nicht an. Und doch war eine Vermehrung und Bereicherung der Bibliothek für ihr Fortbestehen unbedingt nötig. In diesen Zustand der Not griff der damalige Chef des Stabes des Gouvernements,Kapitän z.S.Funke,geschickt und klug ein;er wusste vom Gouvernement für die Bibliothek Interesse und Unterstützung zu erlangen,ohne dem Charakter der Stiftung irgendwie Abbruch zu tun. Seine vermittelnden und tatkräftigen Bemühungen wiesen darauf hin,dass auch das Gouvernement ein wohlbegründetes Interesse haben müsse,dem Verfall einer so wertvollen und gemeinnützigen Einrichtung entgegenzuwirken. Gouverneur Truppel,dem von der Notlage der Bücherei in März 1903 Kenntnis gegeben worden war,fasste den Gedanken ihrer Förderung lebhaft auf. Es wurden der Bibliothek ein einmaliger grösserer Betrag und bis jetzt regelmässige kleinere Unterstützungen zugewendet,so dass ein weiterer Ausbau gelang,der die Werbekraft beim Publikum bedeutend erhöhte und die Zahl der Beiträge entrichtenden M[i]tglieder in den letzten Jahren verdoppelte. Den Bemühungen des Herrn Kpt.Funke gelang es ferner,der Bibliothek im Jahre 1906 ein Unterkommen in mehreren praktischen Räumen im Westflügel des Gouvernementsdienstgebäudes zu erwirken,wodurch nicht unbeträchtliche,bisher für Miete und kleinere Ausgaben beanspruchte Geldmittel für die eigentlichen Zwecke der Bücherei frei wurden. Seitdem befindet sich die Bibliothek in fortschreitender,günstiger Entwicklung. Der Bücherbestand,die Auslagen im Lesezimmer und der Ausleiheverkehr haben beständig zugenommen,so dass das Kiautschou-Bibliotheks-Komitee,das sich im Jahre 1903 aufgelöst hat, auf die Begründung seines Werkes stolz sein darf.¶ Die alljährlich abgehaltene Revision ergab 1903 einen Bestand von 6100 Bänden¶ 1904 〃 〃 〃 6300 〃¶ 1905 〃 〃 〃 7650 〃¶ 1906 〃 〃 〃 8022 〃¶ 1907 〃 〃 〃 9142 〃¶ 1908 〃 〃 〃 10527 〃¶ Den Ankauf der Bücher besorgt in Anbetracht des gemeinnützigen Zwecks zu Vorzugspreisen die Buchhandlung von Dietrich Reimer in Berlin,deren Inhaber,Konsul a.D.Ernst Vohsen Mitglied des Gründungskomitees war;die Heraussendung übernimmt das Reichsmarineamt. Bisher sind bereits zwei Nachträge zum Katalog gedruckt,ein neuer Katalog wird voraussichtlich Ende des Jahres 1910 erscheinen[*15.]. Die Benutzung der Bibliothek ist sehr rege;es werden z.Zt.durchschnittlich etwa dreitausendvierhundert Bände im Monat verliehen,darunter über fünfhundert an Soldaten. Im Lesezimmer liegen achtzig Zeitungen und Zeitschriften aus. Die Geschäfte des Bibliothekars liegen seit dem Jahre 1904 in den Händen des Oberlehrers Dr.Doenitz, der sich um den Ausbau der Kiautschoubibliothek in dankenswertester Weise verdient macht."(*KP山東彙報2.-28.1909.VII.10.*,S.495.-6.),"**Kleine Zeitung.¶ Die Kiautschou-Bibliothek in Tsingtau.¶** ..... Bedingung der Stiftung,die Kaiser Wilhelm in einer aus Jerusalem,den 3ten November 1898 datierten Urkunde gern genehmigte,ist,dass die Bibliothek als eine selbständige,also nicht fiskalische,aber dem Gouvernement unterstellte Einrichtung[**1.] als ganzes ungeteilt und ohne jede Vermischung mit anderen gemeinnützigen Einrichtungen erhalten bleibt. ..... Untergebracht wurde diese zuerst im„Alila"(Artillerielager)dann im Yamen,im Gerichtsgebäude,dann 1903-1906 in gemieteten Räumen[**2.]. ..... Zuerst Pfarrer W.Schüler,der 1900 auf Wunsch des Gouverneurs Jäschke das Amt des Bibliothekars übernahm,und ... ...,sodass 1904 der erste gedruckte Katalog der damals sechstausend Bände zählenden Bücherei erscheinen konnte[**3.]. ..... Den Vorstand bilden seit 1905 regelmässig der jeweilige Chef des Stabes,jetzt Kapitän zur See Saxer,und der Nachfolger Pfarrer Schülers seit 1904 Professor Dr.Doenitz, der die infolge der bedeutenden Zunahme und des gesteigerten Ausleiheverkehrs bedingte Neu-und Umordnung im Sommer 1911 durchführte,sowie einen neuen Katalog bearbeitete und drucken liess[**4.]. .....¶ ..... Die Erweiterung der Bücherei,meist durch Neuankäufe aber auch durch Schenkungen,geschieht nach folgenden Grundsätzen:¶ 1)gute Unterhaltungsliteratur,das heisst die besten und bekanntesten Werke der deutschen schönen Literatur und eine Auswahl der besten ausländischen;dann gute volkstümliche Schriften für die Soldaten;¶ 2)gute,allgemein verständliche Darstellungen und die bekanntesten und wichtigsten Hauptwerke oder Handbücher aus allen Wissensgebieten;¶ 3)möglichst vollständige,neuere Literatur über Ostasien,besonders über China und Kiautschou[**5.]·¶ ..."(*OL德文新報XXVII.-36.1913.IX.5.*,S.211.). 又,*Minerva XXIII.f.1913-1914.*,S.1436.,Pantheon1914.,S.458.

行うことに就き，當時の膠州租借地總督ローゼンダールがこれを受容れたとのこと故(仝: [*2.])．退役海軍大佐アドルフ=メンズィング*Adolf* Menſing (Kapitän zur See a. D.; *18xx., ∞?, [-1902.-], †19xx.)[94]，退任領事エルンスト=フォーゼン*Ernſt* Vohſen (Konſul a. D., Verlagsbuchhändler [Inhaber d. Firma "D. Reimer" ("Höfer & Voſen"), Berlin] u. Kolonialpolitiker; Schriftführer d. Landeskundlichen Kommiſſion des Deutſchen Kolonialrates, Herausgeber der Kolonialen Rundſchau; *1853.IV.19.Mainz, ∞18xx.[*Marie*, geb. Herzfeld], †1919.VI.20.Nauheim)[95]，及び"伯林新報Berliner Neueſte Nachrichten"編集長フーゴ=ヤコービ*Hugo* Jacobi (Chef=Redakteur der Berliner Neueſten Nachrichten; *1842.IX.12.Berlin, ∞?, †1906.XI.4.Zehlendorf b. Berlin.)[96]が，"膠州圖書館委員會Kiau=tſchou=Bibliothek=Komitee"(Berlin Süd=Weſt, Wilhelmſtr. 29.)を代表して"膠州駐屯中の吾が海軍水兵竝に仝陸戰隊員の爲に für unſere Matroſen und Seeſoldaten in Kiau=tſchou"と題する招募文を作製•配布し，書籍及び資金の募集を行なったのは，その後のことであろう．[97]

この時の募金の一部と寄贈書籍とは，メンズィング，フォーゼン，ヤコービの3人がその代表として署名(1898.IX.28.附)した"財團"證書を以て總督府宛寄託され(前揭脚註[93.]: [*3.])，"財團"自體も，1898年11月3日附で皇帝ヴィルヘルムII世の勅許を得たとのことである(仝: [*4.])．書籍及び圖書館用品から成る荷物が青島へ到着したのは，1898年12月末のことで，當該引用記事中の動詞が鮮りせぬので斷言は避けるものの，それが如し推測の如く"begleitet"であった場合には，フォーゼンが帶同して來たこととなる(仝: [*6.])．"財團"證書に據ると，膠州圖書館の目的は，首ず獨逸海•陸軍の全將兵の爲という點に置かれてはいたものの，膠州在勤中の全官吏，其他の獨逸人(聖職者•教師•醫者•商人•技術者等々)に對する開放も明示されていたとの由で(仝: [*7.])，その規定に據れば，仝圖書館は，總督府直轄下の施設として，分割されること無く，

---

[94] "**Menſing,** Adolf, Contre=Admiral, Dezern[ent]. i. d. Admiral[ität]., «Rother Adler=Orden 4. Klaſſe.» «Rother Adler=Orden 3. Klaſſe.» «Dienſtauszeichnungs=Kreuz.», Kurfürſtenſtr. 99.$_{II.}$, W[eſt]."(GvB 1889/90., S. 272.; 引用文中の«»印部分は，原文中では徽號)，"**Menſing** Kapitän zur See a. D. W, Kurfürſten=Str. 99."(B/M, RM2/1836, Bl. 65/66.)，"**– [Menſing]** Adolf, Capitain z. S. a. D., W[eſt] Kurfürſtenſtr. 99 II."(*AbB: f.1903.*, Theil. I., S. 1144.).

[95] "**Ernſt Vohſen** Konſul a. D. i. F.: Dietrich Reimer SW, Wilhelm=Str. 29."(B/M, RM2/1836, Bl. 65/66.)，"**Vohſen,** Ernſt, Kaufm[ann]., SW Königgrätzerſtr. 108 p[ar]t[erre]. (Tel. VIa. 11923.) f. Dietrich Reimer (Ernſt Vohſen)."(*AbB: f.1903.*, Theil. I., S. 1869.)，"–[Reimer] **Dietrich Reimer (Ernst Vohsen),** Geogr. Verlagshdlg. u. Globenfbrk., Lith. Anſt., SW 48 Wilhelmſtr. 29 I. (Tel. VI. 1387. 8-10, 2-4½. Inh. Ernſt Vohſen.)"(ibid., S. 1410.)，"**Vohsen, Ernst.** Konsul a. D., Verlagsbuchhändler (Inh. der Firma D. Reimer, Berlin) u. Kolonialpolitiker; Schriftführer d. Landeskundlichen Kommission des Deutschen Kolonialrates. Herausgeber der Kolonialen Rundschau; *Mainz 1853; †Nauheim 20.VI. – Sch: LZ 509; SozMH 848; DKZ 36, 73; LE 21, 1339; PM 65, 66; Mittlg. aus den deutschen Schutzgebieten 33 (1925), 2. S. V-VII (Staudinger). (P): BZ 45 [Koloniale Rundschau 67- 128 (Jöhlinger u.a.)]; BZ 46 [Hessische Heimat I. 106-109 (Jöhlinger)]; BBI 1919 Nr. 131, S. 524."(DBJÜ$_{II.}$ 1917-1920., Totenliste 1919., S. 335. (DBA-NF., Nr. 1345.: 400.所收)，"**Vohsen, Ernst**¶ *19.04.1853 †20.06.1919¶ Verlagsbuchhändler, Forschungsreisender¶ Persönliche Beziehungen: Ehefrau: Vohsen, Marie (-1919-)¶ Wirkungsorte: 01.1891-Berlin. Teilhaber. Dietrich Reimer (Hoefer & Vohsen) <Berlin>¶ -06.1919 Berlin. Inhaber. Dietrich Reimer (Ernst Vohsen) <Berlin>"(電網頁«BhGrs»)，"**Vohsen, Marie**¶ Persönliche Beziehungen: Ehemannn: Vohsen, Ernst (1853-1919)¶ Wirkungsorte: Berlin¶ Verweisungsform: Herzfeld, Marie <Geburtsname>¶ Wirkungszeitraum -1919-"(電網頁«BhGrs»)．因に，彼フォーゼンの名は清季中外1985.所錄駐華各國領事中に現れぬので，彼が駐華領事でなかったことは確か乍ら，彼が何處に駐在した何國の何種領事であったのかということに就ては，未精査故に不詳．

尙，出版社"ディートリッヒ=ライマー"は，ゲオルク•アンドレアス=ライマー*Georg Andreas* Reimer (Buchhändler: "G. Reimer", Berlin; *1776.VIII.27.Greifswald, ∞1800.XII.28.Magdeburg, †1842.IV.26.Berlin; ADB$_{XXVII.}$ 1888., S. 709.-12.)の3男ディートリッヒ•アルノルド*Dietrich Arnold* Reimer (Verlagsbuchhändler: "Dietrich Reimer (Reimer & Höfer)", Berlin; *1818.V.13.Berlin, ∞18xx., †1899.X.15.Berlin; ADB$_{LIII.}$ 1907., S. 282.-5.)が興した出版社で，特に地理學書の出版を得意とし，例えばリヒトホーヘンの"支那"として著名な Richthofen 1877./1882., Richthofen 1883.等々もその出版物である．彼ディートリッヒの後を繼いだのがフォーゼンである．

[96] "**Jacobi** H., Redakteur, E[igenthümer]. Regentenſtr. 2 W[eſt]. «Sprechſtunde» 9-10. Geb. 12/9. [18]42."(GvB 1889/90., S. 189.; 引用文中の«»印部分は，原文中では徽號)，"**Hugo Jacobi** Chef=Redakteur der Berliner Neueſten Nachrichten SW, Königgräzer=Str. 42."(B/M, RM2/1836, Bl. 65/66.)，"**– [Jacobi]** Hugo, Chef=Redact[eur]., Zehlend[or]f., Hohenzollernſtr. 18. E. (Tel. Zehl. 57.) 8-9, 4-5."(*AbB: f.1903.*, Theil. I., S. 736.), KDL$_{Nekrolog}$ 1936., S. 496. (DBA-NF., Nr. 642.: 38.所收).

[97] B/M, RM2/1836, Bl. 65/66. 尙，所見複印自體には，その作製時期を缺き，この招募が第1代總督ローゼンダールの在任期間中(1898.IV.16.-1899.II.)のことで，當該圖書館創設に際してのことである旨を明示するのみ．

又,他の施設と如何なるかたちでも混在されることなく,それ自體獨立した一箇の施設として保持されるものとされていたとの由で(仝:[*8.]),これを指して,"非國有財產nicht fiskalische"と明記した記事もある(仝:[**1.]). 尙,この膠州圖書館への書籍の寄贈は,その後も斷續的に行なわれている.[98]

圖書館自體の運營に際しては,海軍本部參事官シュラーマイヤー博士 Schrameier (Admiralitätsrat, Dr.)ことルートヴィッヒ•ヴィルヘルム=シュラーマイヤー*Ludwig Wilhelm* Schrameier (Wirklicher Admiralitäts=Rat; Dr. phil.[1881.Leipzig]; *1859.X.2.Eſſen, ∞1896.V.20.[*Klara*, geb. Kirchner], †1926.廣州)[99]が,"財團"規定に則り,圖書館規定を起草したとのことで(仝:[*9.]),第2代總督イェシュケJaeſchke(在任1899.II.19.-1901.I.27.; 前揭脚註[21].)も,將校2名,官吏2名,民間人2名から成るその初代理事會々員を指名している. 卽ち,大尉リリエンクロン男爵Lilienᴄron (Frhr. von; Hauptmann; 1899.-),判事ゲルプケ博士Gelpcke (Richter, Dr.)ことパウル•フリードリッヒ•ルートヴィッヒ=ゲルプケ*Paul Friedrich Ludwig* Gelpcke (Dr.; Geh. Reg.= R., vortr. R. i. Reichswirtſchaftsmin. a. D.; *1868.V.16.Berlin, ∞1907.V.14.[*Cornélie*, geb. Nolet], [-1935.Eiſenach, Mariental 54.-], †19xx.)[100], 海軍少尉クーレンタールKuhlenthal (Leutnant z. S.), 翻譯官ベッセルト•ネッテルベック博士Beſſert=Nettelbeck (Dolmetſcher, Dr.), 宣教師C.フォスカムプVoskamp (Miſſionar)ことカール•ヨハネス=フォスカムプ*Carl Johannes* Voskamp (Miſſionsſuperintendent; *1857., ∞1xxx., †1937.青島)[101], 及び商人ヴィットWitt (Kaufmann)の各位がそれで(前揭脚註[93.]:[*10.]), 就中, ゲルプケ博士は,圖書館の開館に向けた具體的體裁を整える爲に大いに盡力したとのことである(仝:[*11.]).

當膠州圖書館は,首ず"砲兵野營兵舍Artillerielager"內に初設され,繼で"裁判所內の法廷Sitzungszimmer des Gerichtsgebäudes"及び"衙門野營兵舍Altes Yamenlager"に移轉し,[102] 1903年3月から1906年の中頃迄はイレーネ街201號在設建物の1階乃至地階に遷設されていたとのことである(仝:[*12.]). このイレーネ街201號という地番は,青島市街區南緣の青島灣から2區劃北上した地點を東西に走るイレーネ街の中間地點よりも西に寄った北沿の地,具體的には,イレーネ街が,青島灣中央の青島棧橋北端から北へ延びるフリードリッヒ街Friedrichſtr.と交叉する地點の北西角から西に往った處に位置する.[103] その後,1906年4月2日に總督府の新廳舍が總督府丘南部西寄りの地に完成すると,5月末には仝廳舍內の1階西翼北部へ移轉

---

[98] その一例を擧げると,"**Locales.**¶ .....¶ Die Hofbuchhandlung **A.Duncker** Berlin machte der Kiautschou-Bibliothek durch Vermittelung des Reichs-MarineAmts eine grössere Schenkung an Büchern. Eine Liste der Bücher liegt im Lesezimmer der Bibliothek aus.¶ ..."(*DAW 德華彙報6.-15.1904.IV.9.*, S.14.).

[99] *Wi's?VIII.1922.*, S.1399.-400., 近代來華1981., 428.-9頁.

[100] *Wi's?X.1935.*, S.480.-1.

[101] 近代來華1981., 496頁. 又, 後揭脚註[106.]を請併照.

[102] "衙門野營兵舍內の裁判所"という消息もある(*OL 德文新報XXVII.-36.1913.IX.5.*, S.211.; 前揭脚註[93.:[**2.]).

[103] **"15. Von Tsingtaubrücke nach der Markthalle.** Man folgt der direkt nach Norden laufenden Friedrichſtraße und passiert zunächst zur Rechten nacheinander die Hohenzollernstraße,Prinz Heinrichstraße,Irenestraße,in deren zweitem Hause von Westen sich die Kiautschou-Bibliothek befindet(Geöffnet für Jedermann gegen monatlichen Beitrag von 1Doll.von 9-9Uhr)."(FdTuU$_{II.}$1904.,S.46.). これを字義通りに理解すれば,イレーネ街の西[端]から2軒目の建物ということになる. 他方,"**17.From Tsingtau Bridge to the Market.** Straight to the north through the Friedrich Street,crossing consecutively the Hohenzollern Street,Prinz Henry Street,Irene Street,in the 2nd house to the west of which is the Kiauchou Library,open to the public from 9a.m.to 9p.m. ..."(Guide to Tsingtau$_{IV.}$1910.,p.42.),"**18. The Tsingtau Bridge-Gouvernment House-Catholic Mission.** ..... The Gouvernment Administration building comprises: ..... On the ground floor,west the Kiauchou library,..."(ibid.,p.46.)の如く紹介するものもある. このGuide to Tsingtau$_{IV.}$1910.に於る重出は,移轉に伴う情報の錯綜に起因するのであろう. 但,このうちのイレーネ街の當該建物の所在地は,"イレーネ街とフリードリッヒ街との交叉點北西角から西へ2軒目"となっていて,FdTuU$_{II.}$1904.の記述とはその意を聊か異にする. かかる案內書を手にして青島市街區を歩こうとする者にとっては,Guide to Tsingtau$_{IV.}$1910.の如き表現でなければ實際の役には立たぬうえ,仝案內書所載市街圖"**Führer durch Tsingtau und Umgebung** Von Dr.Fr.Behme und Dr.M.Krieger. IV.Auflage./**Plan von Tsingtau und Tapautau**"所製時點に於てもイレーネ街西段の開發は進んでおらず,當該地圖に於る赤色表示が建造物を指すと理解するならば,その西端から算えて2軒目の建物はフリードリッヒ街との交叉點西北角に當るので,FdTuU$_{II.}$1904.が當該建物を何故に强いてイレーネ街の西から2軒目と表現するのか全く解せぬ. 但,FdTuU$_{II.}$1904.の表現が,例えば"Irenestraße, in deren zweitem Hause von der Kreuzung,nach Westen sich die Kiautschou-Bibliothek befindet"(引用文中の下線は引用者所添)の如くなってもいないので,別證を得る迄,その最終的判斷は保留しておく.

して，6月5日から再開し，[104] 第1次世界大戦を迎えたものの如くである．因に，閲覧室の利用は1903年からとのこと故(全: [*13.])，これはイレーネ街への移轉後のことと理解しておいて大過なかろう．又，翌1904年の6月には，第2閲覧室も開室されている．[105] 又，總督イェシュケの依頼により，1900年から*W.*シュラー Schüler (Gouvernements-Pfarrer; Licentiat)が藏書整理と目錄作製の準備を始め，1904年にはその最初の目錄を刊行している(全:[*14.],[**3.])．[106] この*W.*シュラーは，恐らく，"Abriss der neueren Geschichte Chinas,unter

---

[104] "**Lokalnachrichten.**¶ .....¶ *** Die **Kiautschou-Bibliothek** bleibt laut einer im Anzeigenteil dieser Ausgabe erscheinenden Bekanntmachung wegen Umzuges vom 25. d. Mts. bis 5. Juni geschlossen.¶ ***"(*id.*$_{3.-116.}$*1906.V.24.[Donnerstag]*,S.2.),"**Neue Anzeigen.**¶ Wegen Umzugs der **Kiautschou-Bibliothek** in das neue Gouvernements-Dienstgebäude bleiben Lesezimmer und Bücherei von **Montag**, den 28.ab bis zum **Pfingstdienstag**, den 5.Juni **geschlossen**. Es empfiehlt sich daher in Falle des Bedarfs die Ausleihe Zeiten dieser Woch(Donnerstag von 11-12,Freitag von 3-5 Uhr;für Unteroffiziere und Mannschaften Sonntag von 1-4Uhr)noch zu benutzen."(*ibid.*,1.Beilage;廣告頁), "**Lokalnachrichten.**¶ .....¶ Die **Kiautschou-Bibliothek** wird nach beendeter Revision der Bücher am Dienstag dem 31. Juli wieder geöffnet.¶ Die Bücherausleihestunden bleiben die selben wie bisher. Ein Nachtrag zum Katalog befindet sich im Druck.¶ ..."(*TNN青島新報*$_{3.-171.}$*1906.VII.29.[Sonntag]*,S.2.),"**Lokalnachrichten.**¶ .....¶ Die Revision der **Kiautschou-Bibliothek**,die kürzlich beendet wurde ergab trotz aller Abgänge einen Bestand von 8000 Bänden,und gegen das Vorjahr somit ein Plus von 350,welche meist durch Ankäufe erworben wurden. Die Mitgliederzahl ist beträchtlich gewachsen und das Lesezimmer,in welchem über 70 Zeitungen und Zeitschriften ausliegen,wird noch stärker benutzt als früher,Bekanntlich befindet sich die Bücherei jetzt im Nordwestflügel des neuen Gouvernements-Dienstgebäudes. Ihre hohen,hellen und luftigen Räume,die elektrische Beleuchtung und Zentralheizung sowie eine bequeme Einrichtung haben,sind von dem übrigen Gebäude völlig getrennt und verfügen über einen besonderen Eingang,so dass die Besucher Bibliothek und Lesezimmer völlig ungestört benutzen können. Die Ersparnis der Miete,einen kleinen Zuschuss und mancherlei Unterstützung verdankt dieses gemeinnützige, allen Klassen der Bevölkerung dienende Institut,das sich vorläufig noch nicht selbst erhalten kann,dem wohlwollenden Interesse und der tatkräftigen Förderung des stellvertretenden. Kaiserlichen Gouverneurs,welchem dafür der Dank aller Mitglieder gebührt. Im Interesse besserer Finanzen und damit schnellerer Entwickelung der Bibliothek wäre nur zu wünschen,dass ausser Beamten und Offizieren sich auch die übrigen Kreise der Kolonie reger beteiligen möchten,denn unter 260 Mitgliedern zählt die Kiautschou-Bibliothek nur 30,die nicht Beamte oder Militärs sind.¶ ..."(*TNN青島新報*$_{3.-180.}$*1906.VIII.9.[Donnerstag]*,S.2.). 又,*TNN青島新報*$_{3.-81.}$*1906.IV.11.[Mittwoch]*,S.2.-3.(前揭脚註[86.][01.])

[105] "**Locales.**¶ **Kiautschou-Bibliothek.** In letzter Woche ist das zweite Lesezimmer eröffnet worden. Während der Saison ist den Badegästen die Benutzung der Lesezimer und der Bibliothek (bis zur Revision im August) gegen eine Gebühr von fünf Dollars gestattet.¶ ***"(*DAW德華彙報*$_{6.-26.}$*1904.IV.25.*, S. 14.).

[106] "**Neu erschienene Schriften.**¶ **Bücherverzeichnis der Kiautschou-Bibliothek.** Tsingtau 1904. Deutsch-Chinesische Druckerei und Verlagsanstalt. Preis 50 cts.¶ Der längst zum Bedürfnis gewordene Neudruck des Katalogs der Kiautschou-Bibliothek ist kürzlich vollendet worden. Er ist ein verdienstvolles Werk des in voriger Woche auf Urlaub in die Heimat gereisten Gouvernements-Pfarrers Lic. W. Schüler, das er der Kolonie damit als Vermächtnis hinterlassen hat. Wer seither erfahren hat, wie schwierig eine systematische Benützung der Bibliothek war, da es eigentlich darauf ankam, welches Buch einem der Zufall in die Hände spielte, der wird diesen Neudruck dankbar begrüssen. Wir wollen übrigens die Gelegenheit nicht versäumen, wieder einmal nachdrücklich auf die Kiautschou-Bibliothek hinzuweisen. Denn sie steht wirklich dank der Opferwilligkeit der Regierung und Privater auf einer recht ausehnlichen Höhe. Vielleicht lässt sich mancher dadurch abschrecken, dass er an eine Volks- und Soldatenbibliothek in geringwertigem Sinne denkt. Ein Blick in den neuen Katalog wird ihn eines bessern belehren; denn sowohl in wissenschaftlicher als in schöner Literatur ist wenigstens schon ein recht tüchtiger Grund gelegt. Die Bibliothek zählt jetzt shon etwa 4-5000 Werke, während die Katalognummern in Voraussicht späterer Erweiterungen bereits die stattliche Zahl von 89521 erreicht haben. In Anbetracht der billigen Benutzungsgebühr ($ 6 pro Halbjahr) ist jedem, der unter Tsingtauer Oede seufzt, die Bibliothek warm zu empfehlen. Die Soldaten haben auch schon den Wert der Sache erkannt, denn es werden jede Woche ca 600 Bücher an Soldaten ausgegeben.¶ Mit der Bibliothek ist ausserdem ein Lesezimmer verbunden,wo die stattliche Anzahl von 84 verschidenen Zeitungen und Zeitschriften aufliegt. Wenn auch bei der Auswahl der Tageszeitungen das Princip, das zu ihrer Anschaffung führte, etwas dunkel ist, da verschiedene sehr wichtige Zeitungen fehlen und andre sehr unwichtige sich breit machen, so sind doch die trefflich ausgewählten Zeitschriften allein schon des Besuches wert. Freilich wird man bald mit Erstaunen bemerken, dass es Elemente in Tsingtau gibt, welche es nicht verschmähen, die ausliegenden Zeitschriften ganz oder teilweise mitgehen zu heissen. Hoffentlich wird sich durch häufigere Benützung des Lesezimmers von seiten des Tsingtauer Publikums auch dieser Misstand abstellen lassen, da solche Diebstähle selbstverständlich nur in unbewachten Momenten ausgeführt zu werden pflegen.¶ ..."(*DAW德華彙報*

besonderer Berücksichtigung der Provinz Schantung[:]Gekrönte Preisschrift herausgegeben von der Abteilung Tsingtau der Deutschen Kolonial Gesellschaft"(Schüler1912.)を公表したヴィルヘルム=シュラー*Wilhelm* Schüler (Licentiat; Gouvernements-Pfarrer, Tsingtau; *18xx., ∞1xxx., [-1903.III.10., 1913.-], †19xx.)[107]であろう. この目錄は, その後2度改訂版が刊行されたものの,[108] 1905年以降はその新版刊行の準備がパウル=デーニッツ*Paul* Dönitz(既出)によって進められ, それは1910年暮に完成し, 翌1911年の夏に刊行されている(前掲脚註[93.]: [*15.], [**4.]).[109] 卽ち, 膠州圖書館分に就ての鹵獲書籍臺帳としても利用された"BVdKB 1911."が, それである.

又, 帝國法院圖書館**Gerichtsbibliothek**(•4.)は, 1898年創設との由で, 1913/14年當時は裁判所內に設置され, 法律實務用圖書をその特徵とする藏書數は, 當時約2,000點を算え, 帝國法院事務長オットー=タッベルト*Otto* Tabbert(Sekretär des Kaiſerl. Gerichts; *1879.VIII.18., ∞19xx.[*Margarethe*], [-1919.XII.-], †19xx.)[110]が, 司書としてその管理に當っていたとのことである.[111] 周知の如く, 膠州租借地に於る"歐人用"裁判所は, 當初, 始審裁判所Kaiſerliche Gericht von Kiautſchouのみであったが, 1908年1月1日附で再審裁判所Kaiſerliche Obergericht von Kiautſchouが新設され,[112] 1914年4月には總督府政廳南の"政廳廣場"西側に於る帝國法院新廳舍の完成に伴い, 始審裁判所, 再審裁判所, 及び軍事裁判所の全てが此處に移轉し, 帝國法院圖書館も, その西翼2階に移設されて,[113] 第1次世界大戰の勃發を迎えている. これに據れば, 當該圖書館(1898.-)は, 1898年に於る始審裁判所創設以來, 其處に附設されたものと看做す可きであろう. 創設時の始審裁判所の在設地に就ては未精査故に不詳乍ら, 晩くとも1904年以來は所謂"歐人居住區"東部南端

6.-17.1904.IV.23., S. 16.). 又, *ibid.*, S. 14.

[107] "**Lokals.**¶ .....¶ *** Herr Pfarrer Lic. Schüler, der heute für 7 Monate auf Urlaub in die Heimal[ɬt] geht, wird während dieser Zeit in folgender Weise vertreten werden: bei den sonntäglichen Gottesdiensten in Tsingtau durch Herrn Pfarrer Wilhelm, in sonstigen kirchlichen Obliegenheiten, insbesondere bei Taufen, Trauungen und Beerdigungen, durch Herrn Missionssuperintendenten Voskamp, bei den Detachements in Kaumi und Kiautschou durch Herrn Pfarrer Blumhardt in Kaumi. Der Religionsunterricht in der Gouvernementsschule wird durch Lehrer der Schule erteilt werden, den für die Mädchen hat Herr Missionssuperintendent Voskamp übernommen. In der Kiautschou-Bibliothek übernimmt Herr Oberlehrer Dr. Doenitz die Vertretung.¶ ***"(*DAW德華彙報6.-16.1904.IV.16.*, S. 13.-4.), 新田1994., 62, 118頁. 又, *WdO2.-15.1909.*にSchüler1909.を發表している.

[108] "**Aus der Kolonie.**¶ .....¶ **Kiautschou-Bibliothek.** Der II. Nachtrag zum Bücherverzeichnis ist erschienen. Er umfasst die Zeit vom Juli 1906 bis April 1909."(*KP山東彙報2.-25.1909.VI.19.*, S. 450.).

[109] 前掲脚註[107.]

[110] *Minerva$_{XXIII.}$f.1913-1914.*, S. 1436., 電網頁«Schmidt2002.a».

[111] *Minerva$_{XXIII.}$f.1913-1914.*, S. 1436.

[112] "(Nr. 3381.)Verordnung, betreffend das Gericht zweiter Inſtanz für das Schutzgebiet Kiautſchou. Vom 28. September 1907.¶ .....¶ Dieſe Verordnung tritt am 1. Januar 1908 in Kraft. ..."(R=G. 1907., Nr. 44., S. 735.), "**Lokales und Allgemeines.**¶ .....¶ **Kaiserliches Obergericht von Kiautschou.**¶ Die erste öffentliche Sitzung des kaiserlichen Obergerichts von Kiautschou fand gestern vormittag statt. Den Vorsitz führte Oberrichter Dr. Crusen, als Besitzer wirkten die Herren Goecke, Günter, Schmidt und Schomburg, als Gerichtsschreiber Referendar Jobst mit. Vor Eintritt in die Tagesordnung wies der Vorsitzende auf die Bedeutung der Neuorganisation für die Rechtspflege im Schutzgebiete hin; er betonte, dass die Gerichtseingesessenen von ihr eine Erleichterung und Verbilligung der Rechtsprechung erwarten könnten und richtete an alle Beteiligten die Bitte, an der Erfüllung dieser Hoffnung mitzuwirken.¶ ....."(*TNN青島新報5.-7.1908.I.9.[Donnerstag]*, S. 7.), "二三: 高等法院ノ設立¶ 一九〇八年青島ニ懸案タリシ高等法院ヲ開設スルニ至レリ 卽チ訴訟ハ之ヨリ第一審及第二審制度ヲ採用シ 換言スレハ現時ノ裁判制度ヲ我殖民地ニモ適用スルコトヽナリタルモノニシテ 從テ從來青島ノ控訴院タリシ上海ノ領事裁判所ハ廢止セラレタリ"(青島沿革誌1916., 18頁; 引用文中のコロンは, 原文では讀點.).

[113] "**Aus der Kolonie.**¶ .....¶ **Der Gerichtsneubau** ist heute, Mittwoch, seiner Bestimmung übergeben worden. Wie wir schon neulich mitteilten, hat der Umzug in diesen Tagen stattgefunden. Von jetzt ab wird die gesamte Geschäftstätigkeit amtlicher Gerichtsbehörden in den Neubau verlegt. ..... **Im Obergeschoss** liegt an der Treppenhaushalle der 14,00 x 9,00 m messende grosse Hauptsitzungssaal für die Verhandlungen des Gerichts, Militär- und Ober-Gerichts mit anschliessendem Beratungszimmer und der daneben liegenden Kanzlei. Im südlichen Flügel sind wieder Warteräume für Europäer und Chinesen sowie Diensträume für Referendare und Richter Wegener untergebracht, im westlichen Flügel Zimmer des Obersekretärs Bergemann und des Oberrichters Dr. Crusen sowie die sehr geräumige Gerichtsbibliothek. ..."(*TNN青島新報11.-75.1914.IV.2.[Donnerstag]*, S. 7.). 因に, 徐•張•村松•堀內1992., 5, 49頁(編號266034)には, "竣工年月日: 1912年"とあるが, これは何かの間違いであろう.

に位置する舊"衙門"の略々西隣に在ったことが,當時の地圖に於る"Gericht"の表記から判る.[114]

又,青島國立觀象臺圖書館Kaiferliches Obfervatorium Tfingtau,Bibliothek(-5.)は,1913-1914年用«ミネルヴァ»に據れば,藏書數500冊,司書は觀象臺長ブルーノ=マイヤーマンBruno Meyermann(Prof.,Dr. phil.[1903. III.14.Göttingen]; Vorftand der Station,Direktor u. Bibliothekar des Obfervatoriums,Tfingtau; *1876.XII.7. Straßburg, ∞1907.IV.Freiburg i. Br.[*Mathilde*, geb. Stritt], †1963.)[115]が兼任している. 當該觀象臺(1909.-)は,天文•氣象觀測站Astronomische und meteorologische Station(1898.-1909.)をその前身とし,[116] 1910年6月11日には,總督府丘の北に聯る丘陵の海拔66 m地點(總督府政廳の北方約600 m)に,獨逸在外海軍協會Deutsche Flottenvereine des Auslandesの基金による新臺舍の建設が開始された.[117] この新臺舍は約1年半餘をかけて完成したものと看る可く,1912年1月8乃至9日にはその新臺舍の竣工式を行なった模樣で

---

[114] 徐•張•村松•堀內1992.,22頁所引"1904年青島地區圖(中心部分)"[卽ちFdTuU$_{III.}$ 1906.所錄"Plan von Tsingtau und Tapautau"], Wegener 1910.所收"UMGEBUNG VON TSINGTAU."(Bibliographisches Institut, Leipzig所製).

[115] *Minerva$_{XXIII.f.1913-1914.}$*, S. 1436.-7., GV$_{1700-1910:95.}$ 1983., S. 476., 電網頁«Schmidt 2002.a». 尙,"**Aus der Kolonie.**¶ .....¶ **Observatorium.** Der Leiter des in der Einrichtung begriffenen Observatoriums,Dr.Meyermann, ist am 30.März in Tsingtau eingetroffen.¶ ..."(*KP山東彙報$_{2.-18.}$1909.V.1.*,S.334.).

[116] "**Locales.**¶ .....¶ *** Der Oberleutnant zur See Heyne(Adolf),welcher nach Eintreffen in Tsingtau die Leitung der meteorologischen Station und später des Observatoriums übernehmen wird,tritt am 3.Februar von Genua aus die Ausreise an.¶ Zwecks Information im Observatorium Zikawei wird der Genannte in Schanghai Aufenthalt nehmen.¶ ***"(*DAW德華彙報$_{6.-5.}$1904.I.30.*, S.13.),"**Locales.**¶ .....¶ *** Oberleutnant zur See Heyne ist am 16. März in Tsingtau eingetroffen und hat die Vorstandsgeschäfte der meteorologischen Station übernommen.¶ ***"(*id.$_{6.-12.}$1904.III.19.*,S.15.)なる記事に據れば,1904年3月以降はアドルフ=ハイネ*Adolf* Heyneが在勤.

[117] «**Zur Anwesenheit des Herzogs Johann Albrecht.**»(*TNN青島新報$_{7.-131.}$1910.VI.14.[Dienstag]*,S.7.,«**Lokales.**»),«**Aufgaben und Ziele des Tsingtauer Observatoriums**»(*id.$_{7.-132.}$1910.VI.15.[Mittwoch]*,S.2.,7.,*id.$_{7.-133.}$1910.VI.16.[Donnerstag]*,S.2.,7.;講演者:Meyermann),徐•張•村松•堀內1992.,34,59頁(編號266065). 因に,當該基金は建艦資金に充當することを通例としており,青島觀象臺建設用資金としての交付に際しては,"領事フォーゼン氏Herrn Consul Vohsen"をその筆頭とする仝協會幹部達の推輓に與ったとの由. 此處に所謂フォーゼンとは,エルンスト=フォーゼンErnft Vohfen(前揭脚註[95])のことを指すと看て間違いなかろう. 又,"**Deutscher Flottenverein im Auslande.**¶ **Ortsgruppe Tsingtau.**¶ Die **Grundsteinlegung** zu dem vom Flottenverein gestiften Observatorium findet in Gegenwart Ihrer Hoheiten,des Herzogs und der Herzogin Johann Albrecht von Mecklenburg **Sonnabend,den 11.Juni,12Uhr 30Min. Mittags** statt.¶ Für die 100 Mitglieder sind Plätze reserviert. Zugang von der Bismarckstrasse. Für den Anzug werden keine Bestimmungen getroffen.¶ **Anmeldungen zum Beitritt** werden heute an den Schriftführer,Herrn Hammer,oder an den I. Vorsitzenden,Herrn A. Siemssen,erbeten. Der Jahresbeitrag beträgt $3.-,wofür das Monatsblatt,,die Flotte"in's Haus geliefert wird¶ **Der Vorstand** des Deutschen Flottenverein im Auslande. Ortsgruppe Tsingtau.¶ 3756 1x. 11.6.10.(*id.$_{7.-129.}$1910.VI.11.[Sonnabend]*,S.3.;廣告頁). 尙,交付決定會議前の囘狀に就ては,"**Schutzgebiet Kiautschou.** Ein Observatorium für Tsingtau.¶ Auf der nächsten Tagung des Hauptverbands Deutscher Flottenvereine im Ausland,die am 5ten Mai in Berlin stattfinden soll,wird der Präsident Otto Fürst zu Salm beantragen,die Mittel des Vereins,die sich auf etwas über zweihunderttausend Mark belaufen,für den Bau eines Observatoriums in Tsingtau zu verwerten. In einem Rundschreiben,in dem der Präsident die Zustimmung der Vereine im Ausland zu diesem Vorschlag erbittet,heisst es:¶ ..."(*OL德文新報$_{XXII.-5.}$1908.I.31.*,S.221.)なる紹介記事の後に全文を揭載.

因に,1904年1月25日に於る獨逸在外海軍協會Deutsche Flottenvereine des Auslandesの役員名錄を見かけたので,如下再錄しておく:"**Aufruf.**¶ Berlin W.,den 25.Januar1904.¶ An die **Abteilungen und Mitglieder der Deutschen Kolonialgesellschaft.**¶ .....¶ **Präsidium und Ausschuss der Deutschen Kolonialgesellschaft:**¶ Johann Albrecht,Herzog zu Mecklenburg.¶ von Holleben,Kaiserl.Botschafter a.D. Wirkl.Geh.Rat. Staatsminister von Hofmann. Graf von Arnim-Muskau,Mitglied des Reichstags. Prinz von Arenberg,Mitglied des Reichs-und Preuss.Landtags. Kontre-Admiral z.D.Strauch. Regierungspräsident a.D.von Arnim. Direktor der Neu-Guinea Compagnie C.von Beck. Christian von Bornhaupt. Regierungsrat Fuchs. Baurat Gaedertz,Direktor der Schantung-Eisenbahngesellschaft. Direktor im Reichs-Postamt Gieseke. Direktor Dr.Hindorf. Regierungsrat Dr.Jacobi. Direktor C.J.Lange. Generalmajor z.D.von Poser und Gross-Nädlitz. Rittergutsbesitzer Dr.Schroeder-Poggelow. Hermann Graf von Schweinitz. Geh.Regierungsrat a.D.Simon. Major z.D.Simons. Paul Staudinger. Fabrikbesitzer Karl Supf. Pastor G. Thiessen. Konsul a.D.~~G~~E.Vohsen.¶ Tsingtau,im Mai 1904.¶ Vorstehender Aufruf wird hiermit zur allgemeinen Kenntnis gebracht mit der Bitte,Beiträge entweder direkt nach Berlin oder an den Unterzeichneten zu senden. Auch die,,Deutsch-Asiatische Warte"ist bereit solche entgegenzunehmen. Ueber die hier eingehenden Beiträge wird in der,,Deutsch-Asiatische Warte"öffentlich quittirt werden.¶ Der Vorstand der Abteilung Tsingtau der Deutschen Kolonial-Gesellschaft,¶ **Der Vorsitzende**¶ FUNKE¶ Korvettenkapitän.¶ 169 20-04"(*DAW德華彙報$_{6.-20.}$1904.V.14.*, S. 16.).

ある.[118] 常任臺員Ständiges Perſonalは,當初からその新臺舍建設の指揮を執った臺長マイヤーマンMeyermann (Direktor des Obſervatoriums, Tſingtau [1909.- 1914.])1名のみで, この他に派遣臺員Kommandiertes Perſonal として, 上級1等航海士Oberſteuermann 1名と2等航海士Steuermannsmaat 2名, 及び用員4名とが配屬されていた.[119] 圖書館も當該觀象臺內に併設されていたものと, 當面は推定しておく.

これら5館藏書の他にも, 海軍陸戰隊第3海兵大隊**III. See-Bataillon d. Marineinfanterie** 所屬諸中隊(▪6.),[120] 青島國立總督府學校**Kaiſerliche Gouvernementsſchule Tſingtau** (▪7.; 1902.IV.1.-)[121], 及び商業會議所**Handelskammer** (▪8.)[122]等々が書籍及び地圖等々を所藏しており, このうちの青島國立總督府學校藏書(▪7.)の場合は, 教師用Lehrerbibliothekと生徒用Schülerbibliothekとに區分されていたことが判っている.[123] 因に, 青島國

---

[118] "**Aus der Kolonie.**¶ .....¶ **Observatorium.** Die Einweihung des neuen Gebäudes,bekanntlich eine Stiftung des „Hauptverbandes Deutscher Flotten-Vereine im Ausland",wird voraussichtlich in der ersten Dezemberwoche stattfinden. Bei der Feier der förmlichen Uebergabe an das Kaiserliche Gouvernement wird der Hauptverband Deutscher Flotten-Vereine im Auslande als der gebende Teil durch seinen ältesten und grössten Verein in Ostasien,den Deutschen Flotten-Verein in Schanghai vertreten sein. Man hofft,dass sich ausserdem auch Herren des Vereins in Hankou nach Tsingtau begeben werden,um der Feier beizuwohnen. Der Schwesterverein,der„Deutsche Flotten-Verein",wird sich durch seine Ortsgruppe„Tsingtau"vertreten lassen.¶ ..."(*KP山東彙報 4.-47.1911.XI.26.*,S.393.), "**Aus der Kolonie.**¶ .....¶ **Observatorium.** Das neue Gebäude auf dem Wasserberg wird Ende d.Js.bezogen werden. Die Einweihung wird voraussichtlich am Montag,8.Januar,stattfinden.¶ ..."(*id.4.-49.1911.XII.10.*,S.428.). 尙, 徐▪張▪村松▪堀內1992.,59頁は,"竣工年月日:1912年1月9日"と記す.

[119] *Minerva$_{XXIII.}$f.1913-1914.*, S. 1436.- 7.

[120] «**Ranglisten., 1912.**»(Huguenin 1912., S. 168.).

[121] «**Die Kaiserliche Gouvernementsschule in Tsingtau.**»(*DAW德華彙報$_{6.-33.}$1904.VIII.13.*,S.14-5.),«Die Feier der Einweihung»(*JdKGSzT$_{IV.}$ü.1906-1907.*,S.3.-4.). 當校の前身は,1899年聖靈降臨節後の火曜日Pfingſtdienſtagに開校した私立學校"獨逸學校Deutſche Schule"で,その初代運營主任Techniſcher Leiterは,牧師ヴィルヘルムPfarrer Wilhelmことリヒャルト=ヴィルヘルム*Richard* Wilhelm(前揭8頁;第2代運營主任は牧師シュラーことヴィルヘルム=シュラー*Wilhelm* Schüler[前揭18頁])であり,1902年4月に總督府學校となってから半年間の校長に就ては不詳乍ら,仝年10月以降はパウル=トゥツェック*Paul* Tuczeck(*1858.VI.13.Plauen i.Vogtland, ∞?,[-1920.I-], †19xx.;*JdKGSzT$_{VIII.}$ü.1910-1911.*,S.14.,電網頁«Schmidt2002.b»)が校長を務めていた. 尙,獨逸學校時代の1900年から教師として勤務していたベルガーBerger(Lehrer;*18xx.,∞?,†19xx.;前揭«Die Feier der Einweihung»)は,1909年10月1日附で德華高等學堂の教師となり(*JdKGSzT$_{VII.}$ü.1909-1910.*,S.13.),翌1910年6月16日には教師勤續10周年紀念祝典Zehnjähriges Amtsjubiläumの榮に浴している(*TNN青島新報$_{7.-133.}$1910.VI.16.[Donnerstag]*,S.7.).

[122] "**Lokales.**¶ .....¶ *** **Handelskammer.** Comitésitzung 6.Juni 1904. Anwesend die Herren Pfeiffer,Walther, Plambeck, Homann, Ritthausen, Ipland, Höft, Oster, Miss, Walckhoff. Rechtsanwalt Dr.Koch(Syndikus.)¶ .....¶ Herr Walckhoff wird zum Bibliothekar gewählt.¶ .....¶ Das Komité beschliesst ein Bibliothek-und Sitzungszimmer zu miethen.¶ Die Firma Snethlage & Co.wird als Mitglied aufgenommen.¶ Der Vorsitzende bringt folgende Schrifteneingänge zur Kenntnis:Bericht der Berliner Handelskammer,Baugeschichte der Schantung-Eisenbahn, Hafenbetrieb und Hafenverwaltung zu Tsingtau von Dr.Schrameier¶ ***"(*DAW德華彙報$_{6.-24.}$1904.VI.11.*,S.14.),"**Locales.**¶ .....¶ *** **Handelskammer.** Comitésitzung 24.Juni 1904. Anwesend:Pfeiffer,Behn,Walter,Oster,Ritthausen,A.Siemssen,Kirchhoff.¶ Der Vorsitzende gibt bekannt,unter welchen Bedingungen das neue Sitzungszimmer gemietet wurde.¶ Die Bibliothek und sämtliche Akten der Kammer werden im Sitzungszimmer untergebracht. Der Vorsitzende wird beauftragt,der Verwaltung der Kiautschou-Bibliothek für Ueberlassung des bisherigen Raums den Dank der Kammer auszusprechen.¶ .....¶ ***"(*id.6.-27.1904.VII.2.*,S.15.),"**Locales.**¶ ... .¶ .....Der Katalog der Bibliothek der Kammer ist im Druck erschienen und wird den Mitgliedern zugestellt werden.¶ ..."(*id.6.-47.1904.XI.19.*, S. 14.).

[123] «V.Sammlungen und Lehrmittel»(*JdKGSzT$_{I.}$ü.1903-1904.*,S.8.),«〃.〃〃〃»(*id.$_{II.}$ü.1904-1905.*,S.11.-2.),«〃.〃〃〃»(*id.$_{III.}$ü.1905-1906.*,S.14.-5.),«IV.〃〃〃»(*id.$_{IV.}$ü.1906-1907.*,S.19.-20.),«〃.〃〃〃»(*id.$_{VI.}$ü.1908-1909.*, S.17.-8.),«〃.〃〃〃»(*id.$_{VII.}$ü.1909-1910.*,S.19.-20.),«V.〃»(*id.$_{VIII.}$ü.1910-1911.*,S.19.-20.),«IV.〃»(*id.$_{IX.}$ü.1911-1912.*,S.19.-20.). 尙, その具體的來歷に就ては今後の第Ⅱ期分調査に於て本格的に檢討する豫定乍ら, 例えば, 一橋大學アジア經濟研究所現藏DK$_{I./II.}$1909./1910.(916/Me1;13451166;藏書印:"アジア經濟/[昭和]38[1963].11[月].12[日]./研究所藏書";方形有框朱文印)が,當青島國立總督府學校圖書館(▪7.)教師用圖書("*M51*")として, 1911/12學年度に, 恐らくはハムブルク市の"コンラードベーレ書店Conrad Behre, Hamburg"經由で購入されたと看られることに就き, 筆者等は,その在獨取扱書店小票("CONRAD BEHRE¶ Ueberseeische Buchhandlung¶ HAMBURG¶";第1▪第2冊共に,その遊紙ウラ天部小口寄りに所貼),藏書印(校章の周圍に"✠KAISERLICHE GOUVERNEMENTSSCHULE TSINGTAU"なる文字を配した圓形有框藍黑文印)及び*JdKGSzT$_{IX.}$ü.1911-12.*,S.19.との對照によ

立總督府學校は，中等學校乍らも，1906 學年度(IX.9.-)以降は卒業者への一年志願兵特典が附與されると共に，[124] 哲學部に限って乍らも大學への進學資格が同時に附與される旨約束されていたとのことで，[125] 1907年7月12月には，海岸通Kaiſer Wilhelm=Uferから1本北を東西に走るプリンツ•ハインリッヒ街Prinz Heinrichſtr.とビスマルク街Bismarckſtr.との交叉點から約100m程東へ往った地點(所謂"衙門"の北西に當る)に新築成った新校舍の完成と卒業式とを同時に祝っており，[126] 當該圖書館は，この新校舍の2階に設けられていた.[127] 又，第3海兵大隊藏書の場合は，箇々の書冊上に鈐された藏書印によって，仝大隊所屬5中隊Kompagnie中の第1•第2•第3•第4中隊舊藏書籍が，青島守備軍により"官有書籍"(後揭①)として分類•配布されたことが判っている.[128]

扨，話を本題の『鹵書•圖目』1920."に戻して，當序を了えよう．同書の編纂に當った青島守備軍は，その青島在設獨逸諸機關舊藏書籍群に就き，これを如下4群に分類している.

①"官有書籍"　②"德華高等學堂藏書"　③"ウヰルヘルム•コーン叢書"　④"膠州圖書館藏書"

このうちの①"官有書籍"は，總督府圖書館Bibliothek der Landesverwaltung.(▪2.)藏書の大部分，及び帝國法院圖書館 Gerichtsbibliothek.(▪4.)藏書をその基本としていると看て，首ず間違いなかろう．或はこれに國立青島觀象臺圖書館(▪5.)藏書を含むかと疑うものの，その含有は現時點に於て未確認である．又，②"德華高等學堂藏書"が德華高等學堂圖書館Bibliothek der Deutſch=Chineſiſchen Hochſchule.(▪1.)藏書に對應し，③"ウヰルヘルム•コーン叢書"が總督府圖書館(▪2.)藏書の一部に相當し，④"膠州圖書館藏書"が膠州圖書館 Kiautſchou=Bibliothek.(▪3.)藏書を指すと看做すことに就ても，異論はなかろう．但，青島に於る獨逸側所藏區分と日本側青島守備軍による分類との對應如何という問題とは別に，このうちの③"ウヰルヘルム•コーン叢書"に就ては，特にその總督府圖書館への寄贈時期の確定，及びヴヰルヘルム=コーンその人に就ての人物同定が必要となろう．現狀に於て具體的なことに就ては不詳とせざるを得ぬものの，今迄に知り得たことを此處に記し，今後の調査の資としたい.

この問題に就き首ず參照す可き資料は，如下の記事であろう．この1904年7月23日附の記事に據れば，

▪"**Locales.**¶ .....¶ *** Der in Schöneberg verstorbene Schriftsteller Wilhelm Cohn hat testamentarisch bestimmt, dass die von ihm gesammelte deutsch-chinesische Bücherei in Kiautschou be[e]zw. Tsingtau zur Aufstellung und weitgehendsten unentgeltlichen Benutzung gelangen solle.¶ Die Bücherei wird mit einer der nächsten Ueberführungsgelegenheiten hier eintreffen und im Gouvernementsgebäude aufgestellt werden. Wie die übrigen Bücher der Landesverwaltung werden auch Exemplare aus dieser Bibliothek unentgeltlich an Interessenten verliehen werden.¶ ***"(*DAW 德華彙報6.-30. 1904.VII.23.*, S. 14.)

當該"叢書"は，シェーネベルクに於て逝去した文筆家ヴィルヘルム=コーンが，遺言に據り，その蒐儲し

り確認濟みである．尙，當兩冊を簡査した限りではその青島守備軍配布書籍であることを示す痕蹟が無く，第1冊には，別に在日取扱書店小票("KITAZAWA BOOKSTORE¶ 北澤書店¶ 東京•神保町 2-3 TEL (33) 1271";表紙ウラ天部小口寄り)も貼ってある故，或は所謂"鹵獲書籍"とは異るのではないかと推測するものの，未精査故に確言は避けたい.

124 *JdKGSzT$_{VI}$.ü.1908-09.*, S.13.

125 *JdKGSzT$_{II}$.ü.1904-05.*, S.13.

126 Wegener 1910.所收"TSINGTAU."(Bibliographisches Institut, Leipzig所製).

127 *JdKGSzT$_{IV}$.ü.1906-07.*, S.1.

128 各中隊舊藏本に就き，京都帝國大學宛寄贈本(京都大學總合圖書館現藏)から1例のみ如下擧例しておく．▪第1中隊:"Die Revolution und ihre Verkörperung im „modernen Staate." Ein Büchlein für Jedermann von Abbé de Segur, Verfaſſer der „Antworten auf die meiſtverbereiteten Einwürfe gegen die katholiſche Religion," der Schriften: „Was iſt der Papſt?" „Was iſt die Kirche?" u.ſ.w. Aus dem Franzöſiſchen. Zweite Auflage. Mainz, Verlag von Franz Kirchheim. 1865."("三四 ロ ド•セギユール著革命 一八六五 ロ"[「鹵書•圖目」1920., い-6-;本稿45頁]). ▪第2中隊:"Frau Sorge[:]Roman von Hermann Sudermann$_{[\cdot]}$ 126.-135. Auflage$_{[\cdot]}$ Mit einem Jugendbildnis des Verfaſſers$_{[\cdot]}$ Stuttgart und Berlin 1911$_{[\cdot]}$ J.G.Cotta'ſche Buchhandlung Nachfolger"("二三五一 ヅーダアマン 暗愁 一九一一 ロ"[仝, い-303-;本稿134頁]). ▪第3中隊:"Deutſche Bürgerkunde[:]Kleines Handbuch des politiſch Wiſſenswerten für jedermann von Georg Hoffmann und Ernſt Groth$_{[\cdot]}$ Sechste, vermehrte Auflage$_{[\cdot]}$ Berlin$_{[\cdot]}$ Verlag von Georg Reimer 1911"("二六^{abc} ホフマン 獨逸公民學 一九一一 ロ"[仝, い-5-;本稿45頁]). ▪第4中隊:"Unſere Zukunft[:]Ein Mahnwort an das deutſche Volk von Friedrich von Bernhardi General der Kavallerie z. D. 1.-5. Tauſend$_{[\cdot]}$ Stuttgart und Berlin 1912 J.G.Cotta'ſche Buchhandlung Nachfolger"("三九 ベルンハルヂ將軍 吾等が將來 一九一二 ロ"[仝, い-6-;本稿45頁]).

た"德-華"文庫を膠州, 卽ち靑島に於て配架のうえ, 可能な限り無料で利用に供されるよう[總督府宛て?]寄贈したもので, 當該文庫は, 近々到着豫定の然る可き便により當地[靑島]に到着豫定, とある. これに據れば, その寄贈時期は, 當面, 1904年7月23日よりも前であることは確實乍ら, その具體的時期に就ては, 現時點に於ては不明である.

前揭«大正八年以降鹵獲書籍»所綴"在靑島舊獨逸圖書館書籍讓渡方ニ關スル件"には, 日本側が舊獨逸租借地膠州灣を中華民國に返還することを定めた所謂"山東懸案解決ニ關スル條約"(前揭1頁)の批准•實施直前の1922年5月30日から約半月間に交わされた«1.»1922[大正11]年5月30日附東京駐在獨逸國臨時代理大使レンナー發外務大臣內田康哉宛書翰(日語譯), «2.»仝年6月3日附外務次官埴原正直發陸軍次官兒島惣次郎宛照會狀, 及び«3.»[仝月14日?]附陸軍次官發外務次官宛回答案が收錄されている. このうちの«1.»書翰(«2.»照會狀の附錄として收錄)は, 當時の駐日獨逸大使館參事官マルティン=レンナー*Martin* Renner (Botschaftsrat, Tokio [1921.XI..- 1922.XII.]; *1870.IX.9.Langenſalza [Thürigen], ∞1xxx.[*Sophie*, geb. Kleinwort], [-1931. Helsingfors, Finland-], †19xx.)[129]が, 臨時代理大使として, 當該"叢書"の獨亞協會(在東京)[130]宛寄贈依賴を外務大臣伯爵內田康哉(*1865.IX.20.[慶應元年八月一日]八代, ∞18xx., †1936[昭和 11].III.12.東京)[131]に對して行なったもので, 其處には, "譯文¶ 第八七號¶ 千九百二十二年五月卅日¶ 在東京獨逸國臨時代理大使レンナー¶ 內田外務大臣閣下¶ 今[20]世紀ノ初メ物故セル「ウヰルヘルム(ウヰリー)コーン」ハ 其遺言狀ニ依リ 同人ノ東亞(卽チ日本及支那)ニ關スル多數藏書ヲ獨逸膠州租借地ニ寄贈致シ候…….¶ 各寄贈書籍表裝ノ內面ニ 書籍番號ノ外「ウヰルヘルム•コーン寄贈」ナル文字ヲ記入セル圖書票 貼付シアリ候¶ 尙 圖書目錄[或は"總督府圖書館目錄"の類?]ニモ 右寄贈圖書ニ付テハ 符號(W.C)ヲ附シアリ候¶ …"とある.[132] 又, 前揭«別表»及び『鹵書•圖目』1920.の"目次"は, 彼を指して"學者"と稱しており,[133] かかる諸記載に併據するならば, 當該"叢書"の寄贈者は, *Wilhelm (Willi* od. *Willy)* Cohn という名の文筆家("學者")であって, 彼は20世紀初頭(1904年7月より前)にシェーネベルクに於て逝去した人物ということになる.

當"叢書"を含む所謂"靑島鹵獲書籍"の引取を意圖してその豫備調査隊を派遣した東京帝國大學の服部宇之吉(文學部敎授; *1867.VI.2.[慶應三年四月三十日]二本松, ∞18xx., †1939[昭和 14].VII.11.東京)[134]は, "靑島で占領した書物といふのは德華學堂の藏書と膠州灣圖書館の藏書とウイルヘルム•コーン寄附の圖書の三種で……. 目錄が無い爲めに何んな書物が藏せられてゐるかは全然不明であるが コーンの寄附

---

[129] «**Deutsche Botschaft., J. Nr. 3919.**¶ Die deutsch. Botschaft beehrt sich, dem Kaiserlich japanischen Ministerium der Auswärtigen Angelegenheiten ergebenst mitzuteilen, dass der Wirkliche Legationsrat M. Renner zum Botschaftsrat an dieser Botschaft ernannt worden ist, und seinen Dienst heute angetreten hat.¶ ……¶ Tokio, den 14. November 1921.¶ [an] das Kaiserlich Japanische Ministerium der Auswärtigen Angelegenheiten», «**Deutsche Botschaft., Nr. 197.**¶ Tokio, den 4. Dezember 1922.¶ Herr Minister!¶ Euere Excellenz beehre ich mich zu benachrichtigen, daß der der Deutschen Botschaft zugeteilte Botschaftsrat Herr Renner zwecks anderweitiger Verwendung in das Auswärtige Amt Berlin berufen worden ist und am 8. d. M. die Heimreise nach Deutschland antreten wird.¶ ……¶ *Solf*¶ Seiner Excellenz Kaiserlich Japanischen Minister der Auswärtigen Angelegenheiten Herrn Grafen Uchida»(«大正•在本邦大使館員任免•獨國/II»所綴"(14)參事官エル:レンネル:ブットマン"), *官報2790. 1921[大正10]. XI.18.[金]*, 414頁(彙報○官廳事項), *仝3111. 1922[大正11].XII.13.[水]*, 368頁(仝). 又, RddG$_{II.}$1931., S. 1512.

[130] この獨亞協會に就ては未確認乍ら, 或は, 例えば"**DEUTSCHE GESELLSCHAFT FÜR NATUR UND VOELKERKUNDE OSTASIENS**, 8, Imakawa-koji, 1 chome, Kanda-ku¶ Hon. president – H. E. Imp. German Ambassador Freiherr Dr. Mumm v. Schwarzenstein¶ President – R. Lehmann¶ Vice President – Dr. K. Florenz¶ Secretaries – H. Haas, Prof. A. Hofmann¶ Librarians – P. Vautier, Dr. E. Ohrt¶ Treasurer – C. Illies, Jr."(Directory 1908., p. 520.; 東京市神田區今川小路一丁目八番地), "Deutsche Gesellschaft für Natur-und Völkerkunde Ostasiens, 18 Hirakawa-cho, 5-chome, Kojimachiku, TOKYO"(*MdDGfNuVO$_{XVII.}$ 1922.*表紙; 東京市麴町區平河町五丁目十八番地)等々としてその名を頻見する"Deutsche Gesellschaft für Natur-und Völkerkunde Ostasiens"のことを指すのではあるまいか.

[131] 國史大辭典$_{2.}$1980., 116-7頁, *東京朝日$_{17927.}$1936[昭和11].III.13.[金]*, 第11面. 尙, 陰曆と陽曆(グレゴリオ曆)との對照には, 加唐1993.を使用.

[132] «大正八年以降鹵獲書籍»所綴"在靑島舊獨逸圖書館書籍讓渡方ニ關スル件". 因に, 當該書翰の獨文原件が如し遺っていれば, 或は外務省外交資料館現藏かと考え, 簡査を試みはしたものの, 未搜到.

[133] 『鹵書•圖目』1920., [i]頁.

[134] 先學を語る$_{服部}$1973., 163-186頁(又, 東方學回想 $_{I•(1)}$2000., 109-34頁), 國史大辭典$_{11.}$1990., 626頁, *東京朝日(夕)$_{19134.}$1939[昭和14].VII.12.[水]*, 第11面. 尙, 陰曆と陽曆(グレゴリオ曆)との對照には, 加唐1993.を使用.

書三百册の中に面白いものがあるだらうと思ふ"(引用に際し,原文中の句點は讀點に改む)と語っているので,[135] 彼コーンの名は,當時著名であったと想われる. 恥し乍ら,今の筆者には想い浮ばぬので,獨逸人名錄集成"DBA"及び"DBA-NF."の兩索引に於て"コーンCohn (含"Kohn")"姓の諸氏を簡査してみたところ,[136] 前揭諸條件を具備した"ヴィルヘルム=コーン *Wilhelm* Cohn (Kohn)"は見當らなかったものの,その可能性を帶びた者として,*W.*コーン•アンテノリド Cohn=Antenorid"(Sinologe u. Kulturhistoriker; *1867. VI.3., ∞?, †1903.VII[? VIII?].Berlin-Schöneberg)[137]なる人物の存在が浮び上って來た.

このコーン•アンテノリドは,支那學•文化史學者で,ベルリン市內南々西部のシェーネベルク地區に於て1903年(恐らく7月乃至8月)に逝去した人物と記されている.[138] 當時の獨語出版物の書誌情報を集成した"$GV_{1700-1910}$ 1980."に未收錄という點を重視するならば,その博士號の取得及び單行本の刊行は無かったものの如く乍ら,當時の論文目錄"*BddzL*"には,例えば'E[in]. Vorgänger v[on]. Gutenberg in China'(*BddzL* $_{VII.}$*1900.* $_{VII.-XII.}$,S.74.)[139],'Chines[ische].Artisten'(*BddzL* $_{VII.}$*1900.* $_{VII.-XII.}$,S.80.)[140],'Chines[ische].Musikästhetik'(*BddzL* $_{XII.}$*1903.* $_{I.-VI.}$,S.229.)[141],'Ainosweiber'(*BddzL* $_{XIII.}$*1903.* $_{VII.-XII.}$,S.58.)[142],'Quell[en].d[es].Faust[ischen]-[･･] Papiergeld[es].'(*BddzL* $_{XIII.}$*1903.* $_{VII.-XII.}$,S.146.)[143]の如き5篇が登載されている. 最後の'Quellen des Faustischen Papiergeldes'以外の4篇に就ては原篇未見乍ら,このうちの'Chines[ische]. Musikästhetik'は,"支那の音樂美"として當③"ウィルヘルム•コーン叢書"中に2册含まれている.[144]

それでは,この*W.*コーン•アンテノリドが"ヴィルヘルム=コーン"その人であると確言し得るかと云うと,現時點に於ては聊か躊躇せざるを得ぬ. その理由は,彼の姓コーン•アンテノリドと"叢書"寄贈者の姓コーンとの關係に就き,例えばその一方が通稱乃至は筆名の類であるといったことが未確認であることに加え,コーン•アンテノリドの名前の頭文字"*W.*"が"ヴィルヘルム*Wilhelm*"なのか,それとも,例えば"ヴァルター*Walther*"や"ヴェルナー*Werner*",或は"ヴォルフガング *Wolfgang*"の類なのか未詳であるからである. いまひとつ,『圖書•圖目』1920.所收當該"叢書"中にその刊行年を1908年と記す兩書が含まれている點も調査開始時には氣になったものの,これに就ては,追加寄贈か配架乃至は分類の誤りの類と理解して首ず間違いないものと判斷した.

卽ち,當"叢書"(272部,324册)[145]收錄書籍中その發行年代を明示したものの殆どは,19世紀所刊物乍ら,

- *a.:"番號四六 著譯者名ヒルト 書名口語及文語に於ける支那語 發行年代一九〇二 [註]□ "(全,ほ-5頁)
- *b.:"番號一八一 著譯者名ウヰルダ 書名香港よりモスコウへ 發行年代一九〇二 [註]□ "(全,ほ-17頁)
- *c.:"番號二七一[ab] 著譯者名コーンアンテノリド 書名支那の音樂美 發行年代一九〇三 [註]二册"(全,ほ-23頁)

---

135 *東京日日*$_{15528.}$*1920[大正9].I.4.[日]*, 第7面.

136 猶太人名錄集成 JBA1995.,JBA$_{S.}$1998.?に就ては未調査.

137 DBA: NF.232-158.

138 **"Cohn-Antenorid, W.,** Sinologe u. Kulturhistoriker in Berlin-Schöneberg; *3.VI.1867. – KL 25,215. 26,39*. Biogr.Jahrb.u.Deutscher Nekrolog.Bd.8.1903.Totenliste."(DBA:NF.232-158.)とあるので,その典據兩册を調べてみれば鮮りするのではないかと想うものの,當該兩册未見のため,この點は未確認である. 念の爲,1903 年用の伯林市住民錄(人名篇)を簡査したところ,"Cohn=Antenorid"姓の登載は無く,"Cohn"姓にして"*Wilhelm*"乃至"*Willi* (od. *Willy*)"という名前の"Schöneberg"在住者として登載されていた人物は,"– [**Cohn,**] Willy, Kaufm[ann]., Schöneb[er]g.,Maxstr[aße].25 I."(*AbB: f.1903.*,Theil.I.,S.249.)のみで,その職業は"商人"と記されていた. 當時の獨逸に於て,商人にして文筆活動に從事したり,後に研究者への途を歩んだ者の多數いたことに就ては,贅言する迄もなかろう. このウイリー=コーンの場合も,その事例に相當するのかもしれぬが,既知の消息からは,シェーネベルクに住民登錄していて其處で死亡したのか,それとも其處で客死したのか定かではないので,現時點に於ては,その可能性の指摘に止めておく.

139 試みにその題名を'Chines[ische]. Musikästhetik'の例に倣って日語譯すれば,'支那に於るグーテンベルクの一先驅者'となろう. *Globus: Zeitschrift für Länder- und Völkerkunde*, Bd. 78, 2, 14. Juli 1900, S. 33.- 5.所載.

140 仝上,'支那の技藝者'. *Globus: Zeitschrift für Länder- und Völkerkunde*, Bd. 78, 1900, S. 169.- 73.所載.

141 *Monatshefte für Musikgeschichte*, 1903.所載.

142 仝上,'アイヌの女性'. *Jahrbuch für sexuelle Zwischenstufen*, 1903- II, S. 941.所載.

143 仝上,'ファウスト紙幣の淵源'. *Goethe-Jahrbuch*, Bd. 24., 1903, S. 221.- 4.所載.

144 『圖書•圖目』1920., ほ-23頁; 後揭*c.

145 『圖書•圖目』1920., 凡例[i]頁, ほ-24頁.

▪d.:"番號一五七　著譯者名ピーパア　書名雜草と芽と花(中華の國より)　發行年代一九〇八 [註] □ "(仝, ほ-15頁)
▪e.:"番號二三八　著譯者名ミチイ　書名添皿 (英文)　發行年代一九〇八 [註] □ "(仝, ほ-22頁)

20世紀に入ってからの出版物として如上5點が含まれている(▪a.-▪e.;『鹵書▪圖目』1920.). このうちの"支那の音樂美"が彼コーン▪アンテノリドの作品(恐らくは論文抜刷の類)で, これが兩册含まれているという點は, 當"叢書"が彼の遺產であることを支持するかの如く乍ら, 彼の歿後5年を經た1908年所刊兩書(▪d.-▪e.)が此處に混在している點に就ては說明が必要と考えたが故である.

このうちのピーパア: "雜草と芽と花(中華の國より)", 一九〇八 (▪d.; 番號一五七)は, 1909年7月に淸國山東省兗州府陽穀縣坡李莊近傍に於て48歲で亡くなった天主教スタイラー傳道會山東南部代牧區神父ルドルフ=ピーパー*Rudolph* Pieper (Miſſionar u. Miſſionsſchriftſteller; *1861.IV.3.Wippringſen, †1909.VII.27. Tsitschi b. Puoli)[146]の大著"Unkraut, Knospen und Blüten aus dem„Blumigen Reiche der Mitte"."(Pieper 1900.)の續編"Neue Bündel Unkraut, Knospen und Blüten aus dem blumigen Reiche der Mitte"(Pieper 1908.)を指すと看て大過なかろう. 彼ピーパーの所論は, 例えば*KP 山東彙報.I.-II. 1908.-1909.*附錄*WdO*に幾篇か登載されており(Pieper 1908.a., 〃b., 〃c., 〃d., Pieper 1909., 〃a., 〃b.), このうちのPieper 1908.b.は指南車をその題材とし, Pieper 1908.c.は煉瓦製造を扱う等々, 兩篇は技藝▪技術史に關る.

いまひとつのミチイ: "添皿 (英文)", 一九〇八 (▪e.; 番號二三八)に就ては, 1853年に來華して上海で商社を營み, 1864年には牛莊開埠と共に其處に遷居し, 1883年以降は天津に於てロンドンタイムス社の駐華通信員として活躍する傍ら, 同地に於て英字紙"The Chinese Times 時報"の編輯を行ない, 李鴻章の顧問をも務める等々, 多方面の活動を行なったアレクサンダー=ミチイ *Alexander* Michie (密吉; *1833.III.1. Earlsferry, Fife, ∞1866.XII.16.Leytonstone, Essex [*Ann*, née Robinson], †1902.VIII.7.Hotel Cecil, London)[147]緣の作品なのではと疑い, 首ずは大英圖書館の藏書目錄を翻查してみた. しかし, それらしき英文原本を見つけることが出來ず, 搜し厭ねていたところ, 如下の記事を見かけた(♦3.は♦2.の加工記事). "添皿"とは"Hors d'oeuvre"の日語譯ではあるまいか.

♦1.: "**Michii, Alexander**¶ .....¶ 著有…….,«插曲»(Hors d'Oeuvre)(1908),…"(近代來華1981.,328-9頁)

♦2.: "00010 fre H¶ .....¶ 245 10 Hors d'oeuvre/|cA. Michie.¶ 260 0 Shanghai :|b Kelly and Walsh,|c1908.¶ 300 114 p.;|c20 cm.¶ ..." (電網頁«UHKL»)

♦3.: "Hors d'oeuvre.¶ by Alexander Michie¶ Type: French : «*»Book¶ Publisher: Shanghai, Hongkong [etc.] Kelly and Walsh, 1908."(仝«OWCS"; 引用文中の«*»印は, 電網頁では別徽號)

素り, 同書の電網頁での分類は佛文書故,『鹵書▪圖目』1920.の"添皿 (英文)", 一九〇八 (▪e.)とは異るのではないかと危惧していたところ, 當該書の本文は英文で, その內容は隨筆及び詩の類である旨の消息を, 人傳乍ら香港大學圖書館から得た.[148] この點は杞憂に過ぎなかったようである. 但, かかる想定が如し當っていたとしても, 彼ミチイの歿後に出版(1908.)された書物がヴヰルヘルムコーン"叢書"(寄贈1904.VII.23.より前)中に收錄されていることに就ては, ミチイとヴヰルヘルムコーンとの生前の交流の次第, 及びその名を同じくするミチイの息子(*Alexander*; 生歿年未精查)[149]に對する檢討等々, 今後精查す可きこと云う迄もない. かく, 具體的な點に就ては未解決であるものの, その"叢書"自體の靑島到着が引用記事の如く1904年と看て間違いないとするならば, このミチイの事例(▪e)に就ても, 當面, 前揭ピーパ

---

[146] BJuDN14.1909., Totenliste (DBA-NF., Nr.1007.:81.所收). 又,«**R. Pieper†.**»(*KP山東彙報.-31.1909.*, S. 541.-2.: "**Nachrichten aus Schantung.**"). "【坡李莊】在山東陽穀縣東北四十里. 道通聊城縣."(古今地名1931.,440頁). 尙,"Tsitschi"に就ては不詳乍ら,如し"Tschitsi"ならば, 或は"【七級鎭】在山東陽穀縣東北運河之東. 路出聊城縣. 有古渡. 相傳唐田眞兄弟哭活紫荊於此. ◉…"(仝,5頁)か.

[147] ODoNBXXXVIII.2004.,p.26.,近代來華1981.,329頁. 又,"**Foreign Residents in China, Japan and The Philippins,&c.**¶ .....¶ **Michie, A.**, merchant(Chapman, King &Co. Shaanghai¶ ..."(CD1874.,p.63.),"SHANGHAI 上海.¶ .....¶ **Merchants,&c.**¶ .....¶ **復昇Fu-shing**¶ Chapman, King &Co., merchants, 5, Peking Road¶ Chapman, Fredk.(absent) King, Chas.J.(absent) Michie A.¶ Williams, R.B., Pollock, A.J.¶ ..."(ibid., p.J17.).

[148] 藤村泰司氏の筆者(持井)宛聯絡(2007.I.25.附受信). 同氏の香港大學圖書館宛問合せに對し, 仝館參考係司書から"The book is in English. It is a collection of essays, poetry etc."なる回答を得たとの由.

[149] "**Michie, Alexander (1833-1902),** .....¶ .....; they had one daughter and one son, Alexander, who became an official in the Chinese customs service.¶ ....."(ODoNBXXXVIII.2004., p.26.)

一の事例(▪d.)と略々同類と看做す可く,孰れの場合も,追加寄贈か誤配架乃至は誤分類に起因するものと看做しておくことが,この際最も自然なのではあるまいか.

尙,當該"叢書"は,前掲«3»[仝月14日?]附陸軍次官發外務次官宛回答案,即ち"受領歐第八六〇三號 廳名外務省 件名在青島舊獨逸圖書館書籍譲渡方ニ關スル件¶ ……¶ 主務局課番號歐經建甲第一二號受領大正十一年六月五日提出大正十一年六月十三日 大臣官房受領大正 年 月 日六月十三日¶ 次官ヨリ外務次官ヘ回答案 (歐發)¶ 首題ノ件ニ付 本月三日亞一普通第一八六號ヲ以テ照會ノ趣 右ウヰルヘルムコーン叢書ハ 全部取纏メ東京帝國大學ヘ寄贈スルコトヽシ 既ニ青島守備軍司令部ヨリ同大學宛送附濟ニ付 承知相成度 此段及回答候也¶ 陸軍省受領歐發第二六八號六月十四日 [說明¶ 本件ウヰルヘルムコーン叢書ハ 支那文化研究ノ好資料ニシテ 之ヲ分別スレハ大ニ其ノ價値ヲ減スヘク 且ツ其冊數モ多カラサルヲ以テ 擧テ東京帝國大學ヘ寄贈スルコトヽナリタルモノニシテ 五月一日青島出帆ノ福岡丸ニテ青島守備軍司令部ヨリ同大學宛送附濟ナリ¶ 歐發第]"(引用文中の"亞一普通第一八六號"とは前掲«2»を指す)と報じられている.[150] これが無事に到着し,震災乃至戰災に被って失われていなければ,現在も東京大學の何處かに所藏されている筈乍ら,現時點に於て筆者等が得ている消息に據れば,遺憾乍ら,この點は否定的である.[151]

以上が,所謂"青島鹵獲書籍"の青島に於る所藏時の樣子に就て,筆者等が知り得たことの概略である.素り,その內容が,獨逸租借地時代の青島及び其處に於る書籍所藏狀況に對する調査として極めて不完全であること,筆者自身が最も好く自覺▪自悔している.周知の如く,當時の青島に於ては住民錄が刊行されており,[152] 當該住民錄を看得るならば,箇々の圖書館の各時期に於る所在地を確認出來ること自明なるも,當該住民錄に就ては未見であり,又,例えば*DAW 德膠官報/德華彙報*, *DOL 德文新報*, *KP 山東彙報*, 及び*TNN 青島新報*等々をはじめとする當時の青島所刊諸新聞に就ての全面的翻頁作業も未着手である.本稿所引記事は,遇見に屬すものと御諒承願いたい.又,第1次世界大戰後に日本側から獨逸側に基本的に返還されたと推定した公文書類をはじめとする在獨諸資料群に對する調査も未着手であり,[153]現藏調査以外の

---

[150] «大正八年以降鹵獲書籍»所綴"在青島舊獨逸圖書館書籍譲渡方ニ關スル件".

[151] 金澤大學附屬圖書館相互利用係を通じて東京大學總合圖書館(參考調査擔當係)宛その現藏の有無に就ての調査を依賴したところ(2007.I.18.附), «全學總合カード目錄»の調査結果では該當書籍なしとの御回答を得た(仝.24.附).

[152] 例えば,"二七三〇(I-XI[abc]) オツトローゼ 膠州殖民地及山東省人名錄 一九〇一 I"(「鹵書▪圖目」1920., い-338/9-[本稿145頁];他に1903/04.,1905.,1907.,1908.,1909/10.,1910/11.,1912/13.,1914.,1914/15.の各年度用のものが有った;). 又,"**Aus der Kolonie.**¶ ……¶ **Adressbuch 1909-10.** Die Firma Otto Rose versendet Fragebogen für die neue Auflage des von ihr herausgegebenen Adressbuchs für das Deutsche Kiautschou-Gebiet. Interessenten,denen versehentlich kein Fragebogen zugegangen ist,wollen solche von der genannten Firma einfordern.¶ …" (*KP 山東彙報 2.-19.1909.V.8.*, S.352.),"**Aus der Kolonie.**¶ ……¶ **Das neue Adressbuch.** Die Zusammenstellung des neuen Adressbuches,das spätestens im August erscheinen soll,wird durch die Verzögerungen in der Rücksendung der Fragebogen in empfindlichster Weise beeinträchtigt. Die noch ausstehenden Fragebogen möge man daher möglichst umgehend dem Verlag Otto Rose wieder zustellen."(*id. 2.-24.1909.VI.12.*, S.434.),及び"**Aus der Kolonie.**¶ ……¶ **Das neue Adressbuch** ist soeben im altbekannten Verlag von **Otto Rose** (Druck von Adolf Haupt) erschienen und sowohl beim Verlag wie in den einschlägigen Geschäften hier zum Preise von $1.50 zu haben. Ein Auslieferungslager für Deutschland ist bei der Buchhandlung M.Nössler in Bremen eingerichtet. Der stattliche Band zeigt gegen das vorige Jahr vielfach Erweiterungen und eine erheblich handlichere Aufmachung. Die Seitenzahl ist mit 154 um 18 vermehrt,desgl.die Damenliste mit 11 um 2 Seiten. An eingetragenen Firmen zählt das Adressbuch 168,gegen 161 im Jahre 1910;von letztern sind ausserdem im Laufe des Jahres 1910 7 erloschen(C.Vering, Babiel,Secker und einige andre,die keine eigentliche Handelstätigkeit hier trieben). Neu aufgenommen sind in Schantung tätige(engl.u.amerik.)9Missionen,von denen sich numehr 17 aufgezeichnet finden,sowie ferner drei unter deutscher Leitung in Tsinanfu stehende Schulen,das Sanatorium von Dr.Kautzsch in Tsinanfu sowie das britische Konsulat in Tsinanfu. Die stattliche Zahl der Vereine und Klubs ist von 25 auf 27 angewachsen;die beiden neu gegründeten Vereine sind die Gewerbekammer und der Verein zur Förderung des Fremdenverkehrs. –Das Adressbuch bildet für jeden Tsingtauer und alle,die mit dem Schutzgebiet oder der Provinz Schantung in Verbindung stehen,ein unentbehrliches Nachschlagewerk.¶ …"(*id. 4.-29.1911.VII.23.*, S.74.)等々.

[153] 例えば,獨逸宛返還公文書に就ては,『鹵文目』1915.中に所謂«乙軍務 第十三人事»所收"文書名目講師レッシング(假番號七五五文書作製年月一九〇九年五月;『鹵文目』1915.,83頁;Lefling)","文書名目教師ドクトル[▪]デーニッツ(假番號八四文書

諸調査は基本的に金澤に於て行なった結果,例えばGV兩種,DBA,DBA-NFをはじめとする基本的工具書類を手許で活用することが出來ず,從って關聯諸人物に就ての調査も不全である. 辯解になるが,當序は,"鹵獲書籍"に對する臺帳作製竝にその現藏調査作業に從事している中で瞥見し得た諸事を纏めた簡報の類と御理解願いたい. 又,"鹵獲書籍"目錄の翻刻部分に就ても,『鹵書•圖目』1920.の誤記とは氣づき乍らもその儘にしておいた箇處が幾例かある. 確認せずにいる怠慢に就ては辯解の餘地も無いが,何時れ現藏調査時に原本が見つかれば容易に解決し得る筈のこと故,この點に就ては"科研"(課題番號:17320091)研究成果報告書作製時に極力修訂することとし,今回は御瞭解を乞う次第である.

最後に,京都大學に於る現藏調査に際しては,[154]今井淑子•磯谷峰夫(仝附屬圖書館)•小堀淳子(仝人間•環境學研究科/總合人間學部圖書館)の諸氏を始めとする各位の御協助を得た他,岩井茂樹氏(仝人文科學研究所)からは,當該兩館に對する手配を含めた各種各樣の御支援を賜った. 又,東北大學に於る現藏調査に際しては,[155]松井好次氏•菅原 透氏(仝附屬圖書館)を始めとする各位の御協助を得た他,曾根原 理氏(仝學術資源研究公開センター)•佐竹保子氏(仝大學院文學研究科/文學部),竝に古畑 徹氏(金澤大學文學部)の御支援を賜った. 又,GvB1889/90.の利用に際しては伊丹延二氏•杉本圭司氏•浦野雅子氏(ユタ系圖協會The Genealogical Society of Utah東京支部圖書館)の御協助を得た. 又,*AbB:f.1903.*及び青島資料1916.所載關聯頁の複印,徐•張•村松•堀內1992.原本の入手,及び青島交旅圖2004.の披見に際しては,三木 聰氏(北海道大學大學院文學研究科/文學部),岩井茂樹氏(前揭),村松 伸氏(東京大學生產技術研究所),及び辨納才一氏(金澤大學經濟學部)の御協助を,又,新田1994.,安達1981.,井出•須田2001.,奥村2006.,*TNN 青島新報3.-171. 1906.VII.29., id.3.-180.1906.VIII.9.*,B/M,FdTuU1904.,及び東方學回想I•(1)2000.に關する御教示竝に資料提供に就ては,志村 惠氏•上田 望氏(仝文學部)の御厚志を得た. 又,Michie 1908.及び*JdKGSzT1903-12.*關聯の諸消息に就ては,藤村泰司氏(國際大學日本語プログラム),及び香港大學圖書館參考係司書•東京大學總合圖書館參考調查擔當係の御協助を得た. 尙,使用フォント"古典明朝體"の入手に際しては,久保惠卿氏([日本]電腦辭林會)の御教示竝に御厚志を,又,數字式マイクロフィルム•スキャナー機器竝に電腦•電網利用環境の設定•管理及び漢籍に對する部分的調查に就ては,安部聰一郎氏(金澤大學文學部)の御協助を得た. 又,漢語山東方言に就ては岩田 禮氏(仝)の,第四高等學校宛添附書類の部分的判讀には笠井純一氏(仝)の,そして,ロシア帝國陸軍將軍クロパトキンに就ては高濱 秀氏(仝)の御教示を得た. 又,獨語新聞資料の部分的複印作業に就ては,神谷健太氏(仝大學大學院人間社會環境研究科博士前期課程),大川飛鳥氏(仝大學院文學研究科修士課程),及び佐々木 聰氏(仝)の御支援を得た. 又,橋 美穗氏•池上佳芳里氏•村田勝俊氏•野村洋子氏•押見智美氏を始めとする金澤大學附屬中央圖書館在勤各位の御協助,及び旣に退官した梶井重明氏の御教示を得たことを特記しておきたい. 就中,梶井氏は,1989年の冬に,筆者のうちのひとり(持井)に對して館藏«青島文庫»の存在を御教示のうえ,その調查の必要なことに就き,注意を喚起して下さった方である. 此處に併記すると共に,上記各位の御厚意に對し,衷心より感謝の意を表したい.

(2006.XII.5.初稿,2007.II.12.改稿)

(本稿は"青島鹵獲書籍の復元と清末民國初における獨英の對中國文化接觸に關する比較研究"(課題番號:17320091;平成17-19[2005-7]年度科學研究費補助金«基盤研究(B)»;研究代表者:持井康孝),及び"近世中國の裁判關係文書の研究"(課題番號:17520472;平成17-19[2005-7]年度科學研究費補助金«基盤研究(C)»;研究代表者:岩井茂樹)の成果の一部である.)

作製年月一九〇三年一〇月;仝,仝;Doenitz)","文書名目教師ドグラール(假番號一九二文書作製年月一九一一年九月;仝,仝;de Grahl)","文書名目カイプェル博士ニ關スル件(假番號三八八文書作製年月一九〇九年五月;仝,84頁;Keiper)","文書名目講師ウュルツ(假番號三四六文書作製年月一九〇〇年一〇月;仝,仝;Wirtz)",文書名目通譯モール氏ニ關スル件(假番號五九〇文書作製年月□;仝,仝;Mohr)","文書名目通譯見習ドクダ[〆タ]ー[•]ネテルベック氏ニ關スル件(假番號一五二二文書作製年月一九〇三年八月;仝,85頁;Beffert= Nettelbeck)","文書名目通譯チーロー氏ニ關スル件(假番號六一七文書作製年月一九〇八年七月;仝,仝;Thilo)","文書名目ドクトル•ミヘルゼンノ人事(假番號五七九文書作製年月一九〇一年六月;仝,88頁;Michelfen)","文書名目ドクター•オートメヤー(假番號一四七六文書作製年月一九〇九年八月;仝,仝;Othmer)",«仝 第十七庶務_庶務»所收"文書名目青島全書發行ニ關スル往復文書(假番號四九三文書作製年月一九一二年;仝,116 頁),«仝 六官報»(仝,124 頁)•«仝 七圖書»(仝,124-7頁)•«丙民政 第六學校»(仝,162-8頁)•«仝 第八港務»(仝,176-9頁)•«第九測候所及無線電信局»(仝,179-80頁),及び«己土木»(仝,244-66頁)所收關聯ファイル等々.

154 調查擔當者:古市大輔,持井康孝,Sylke Scherrmann,志村惠(各姓發音のアルファベット順).

155 調查擔當者:古市大輔,持井康孝,Sylke Scherrmann(仝).

◙所用略號•引用論著目錄(當號收錄部分のみ)

*: 出生[Geburt]　∞: 結婚[Heirat]　†: 死亡[Tod]　Be.: 埋葬[Beerdigung]　¶: 文末乃至段落末尾

以下の配列は，引用時使用略號のアルファベット順を基本とし，次に刊年の序に從った．その際，日語•漢語論著の場合は，基本として，引用略號發音の所謂ヘボン式(日語)•漢語拼音方案(漢語)に據るローマ字表記を念頭におき，その然るべき箇處に配列した．

•*AbB:f.1903.*;"Berliner Adreßbuch 1903. Unter Benutzung amtlicher Quellen. Mit der Beigabe:Großer Verkehrs=Plan von Berlin und Vororten. Ein beſonderer Straßenplan von Berlin befindet ſich am Anfange des Adreßbuchs.", 2. Bände, Druck und Verlag der Berliner Adreßbuch=Geſellſchaft m. b. H. August Scherl.

•安達1981.; 安達將孝: '<資料>第一•第二次世界大戰中における日本軍接收圖書', *圖書館界*, Vol., 33., No. 2., July 1981., 68-75頁.

•*AdHK*; Abhandlungen des Hamburgischen Kolonialinstituts.

•*AfdDKG 青島官報*$_{I.-X^{+?}}$; Adolf Haupt (verantwortlich [-1901.-])/Kaiserliches Gouvernement Kiautschou (hrsg. von [-1904., 05., 07.-09.-]): "Amtsblatt für das Deutſche Kiautſchou=Gebiet.青島官報", 1900.-1909.$^{+?}$, Deutsche Druckerei und Verlagsanstalt [Druck; 1901.]/Missionsdruckerei [Druck; 1904., 05., 07.-09.], Tsingtau.

•"AvT"; "Album von Tsingtau", Verlag von Adolf Haupt, o.J., Tsingtau.

•Barnhart$_{I.-III.}$ 1954.; Clarence L. Barnhardt (ed.): "The New Century Cyclopedia of Names", vols. I.-III., 1954., Appleton-Century-Crofts (Division of Meredith Publishing Company), New York.

•BB-NF$_{II.}$1987.; Bernd Ottnad (hrsg. von, im Auftrag der Kommission für Geschichtliche Landeskunde in Baden-Württemberg): "Badische Biographien", Neue Folge, Bd. II., 1987., W. Kohlhammer Verlag, Stuttgart.

•*BddzL*$_{VII./XII./XIII.}$1900./1903.;Felix Dietrich(hrsg. von):"Bibliographie der deutschen Zeitschriften-Litteratur mit Einschluss von Sammelwerken und Zeitungen.",Band VII.[:]Alphabetisches nach Schlagworten sachlich geordnetes Verzeichnis von Aufsätzen,die während der Monate Juli bis Dezember 1900 in über 1300 zumeist wissenschaftlichen Zeitschriften,Sammelwerken und Zeitungen deutscher Zunge erschienen sind, mit Autoren-Register., Band XII.[:] ... , die während der Monate Januar bis Juni 1903 in über 2000 zumeist wissenschaftlichen Zeitschriften, Sammelwerken und Zeitungen deutscher Zunge erschienen sind, mit Autoren-Register., Band XIII.[:] ... , die während der Monate Juli bis Dezember 1903 ...., Verlag Felix Dietrich, Osnabrück.(又, Kraus Reprint Corporation, 1961., New York; 本稿では，複印本を使用).

•BhdWiVB$_{I.-IV.}$ 1923.; "Brockhaus Handbuch des Wissens in vier Bänden – Sechſte gänzlich umgearbeitete und weſentlich vermehrte Auflage von Brockhaus' Kleinen Konverſations=Lexikon –", F. A. Brockhaus, 1923., Leipzig.

•BJuDN$_{14.}$1909.; "Biographisches Jahrbuch und Deutscher Nekrolog", Bd. 14., 1909., Deutsche Verlagsanstalt, Stuttgart.(原本未見; DBA-NF., Nr.1007.:81.所收)

•BKL$_{I.-XVII.}$ 1901.-1904.; "Brockhaus' Konversations=Lexikon", vierzehnte vollständig neu=bearbeitete Auflage, neue Revidierte Jubiläums-Ausgabe,I.-XVII.(Supplement), F. A. Brockhaus, 1901.[I.-III.,V.], 1902. [VI.-XI.], 1903.[IV.,XII.-XVI.], 1904.[XVII.$_{Supplement}$], Leipzig, Berlin und Wien.

•B/M; Bundesarchiv/Militärarchiv.

•Bohner 1922.; H. Bohner: 'Kurzer Bericht über die Tätigkeit im Lager Bando, soweit sie auf Ostasien Bezug hat.', *MdDGfNuVO*$_{XVII.}$*1922.*, Anhang, S. 262.-75.

•BVdKB 1911.;"Bücher-Verzeichnis der Kiautschou-Bibliothek August 1911.",Deutsch Chinesische Druckerei und Verlagsanstalt Walther Schmidt, 1911., Tsingtau

•CD 1874.; "The China Directory for 1874.", Fourth Annual Publication. New Series., The "China Mail" Office, 1874., Hongkong.(又, 1971[民國60]年, Ch'eng Wen Publishing Company, Taipei成文出版社有限公司[臺北]複印, 本稿では複印本を使用)

•青島沿革誌 1916.; 青島軍政署(中村照治譯): '大正四年九月譯青島沿革誌', 青島資料 1916., 26 頁.(獨語原本: Michelſen 1910.)

•青島資料1916.; 青島軍政署(中村照治譯): "大正五年七月青島研究資料", 大正5[1916]年9月, 青島軍政署.

•"中國語學事典Zhungguoyhye Shidian"; 中國語學研究會(編): "中國語學事典Zhungguoyhye Shidian", 1958年1月, 江南書院[東京].

•中國農書1940/42.; ウィルヘルム•ワグナー(著), 天野元之助(閲), 高山洋吉(譯): "中國農書", *東亞研究叢書*第8卷, 1940[昭和15]年9月(上), 1942[昭和17]年6月(下), 生活社[東京].

•Couling 1917.; Samuel Couling: "The Encyclopaedia Sinica", Kelly and Walsh, Limited, 1917, Shanghai.

•*DAW 德膠官報*; Gust. Picker (verantwortl. Redact.[-1899.II.22.-]): "Deutsch-Asiatische Warte[:]Amtlicher Anzeiger

des Kiautschou-Gebietes德屬膠州官報.", Druck und Verlag von Picker und Pickardt, Tsingtau.[156]
- *DAW德華彙報*; Corbach (Hrsg.[1900.- 1903.])/Victor Roehr (Hrsg. u. verantwortl. Redact.[-1904.-]): "Deutsch-Asiatische Warte[:] Wochenblatt des Deutschen Kiautschou-Gebiets德華彙報", Deutsch-Chinesische Druckerei und Verlagsanstalt, Tsingtau.[157]
- DBA.; Willi Gorzny (bearb. unter der Leitung von), Bernhard Fabian (hrsg. von): "Deutsches biographisches Archiv: eine Kumulation aus 254 der wichtigsten biographischen Nachschlagewerke für den deutschen Bereich bis zum Ausgang des neunzehnten Jahrhunderts", 1447 Mikrofiches, XVI S.[Booklet], 1982.- 85., K. G. Saur, München, New York.
- DBA-NF.; Willi Gorzny (hrsg. von): "Deutsches biographisches Archiv: neue Folge", 1457 Mikrofiches, XIII S. [Booklet], 1989.- 1993., K.G.Saur, ?.
- $DBJÜ_{II.}$ 1917-1920.; Verbande der deutschen Akademien (hersg. vom): "Deutsches Biographisches Jahrbuch. Überleitungs-Bd.II [:]1917-1920.", 1926.?, Deutsche Verlags-Anstalt, Stuttgart.(原本未見;DBA,DBA-NF所收).
- 電網頁«AAKdSuUbH»; "Alter Alphabetischer Katalog der Staats- und Universitätsbibliothek Hamburg" [http://aak.sub.uni-hamburg.de/index.php (2007.I.30.閱覽)].
- 電網頁«BadDKg»; "Der Bildbestand der Deutschen Kolonialgesellschaft in der Universitätsbibliothek Frankfurt am Main"[http://www.stub.bildarchiv-dkg.uni-frankfurt.de/ (2007. I.1.閱覽)].
- 電網頁«半島網 2005.VII.11.»; "從德華大學到同濟大學"[http://www.bandao.cn/news/showprint.asp?id=116173 (2007.I.30.閱覽)].
- 電網頁«BhGrs»; "Buchhändlerische Geschäftsrundschreiben"[http://bermudix.ddb.de/dbsm/cgi-bin/gr.pl (2006.XII.22.閱覽)].
- 電網頁«Koloniales Bildarchiv»; "Koloniales Bildarchiv"[http://www.edocs.ub.uni-frankfurt.de/volltexte/2001/8000458/ (2006.XII.20.閱覽)].
- 電網頁«"Mk"Kiautschou»; "Die Entstehung der "Musterkolonie" Kiautschou"[http://www.bundesarchiv.de/aktuelles/aus_dem_archiv/galerie/00112/index.html (2006.XII.20.閱覽)].
- 電網頁«OWCS»; "Open WorldCat Search"[http://worldcat.org/search (2006.XI.04.閱覽)].
- 電網頁«Schmidt 2002.a»; Hans-Joachim Schmidt: "Tsingtau und Japan 1914 bis 1920 Historisch-biographisches Projekt: Kurzbiographien"[http://www.tsingtau.info/listen/gesamt.htm (2006.XI.08.閱覽)].
- 電網頁«Schmidt 2002.b»; Hans-Joachim Schmidt: "Tsingtau und Japan 1914 bis 1920 Historisch-biographisches Projekt: Deutsche in Tsingtau 1914 bis 1920"[http://www.tsingtau.info/geschichte/tsingtau1420.htm (2006.XI.08.閱覽)].
- 電網頁«UHKL»; "University of Hong Kong Libraries"[http://library.hku.hk/search (2006.XI.04.閱覽)].
- 電網頁«Webcat»; "NACSIS Webcat"[http://webcat.nii.ac.jp/ (2006.XI.1.- 2007.II.12.閱覽)].
- 電網頁«ZDB»; "Zeitschriftendatenbank (ZDB)"[http://dispatch.opac.ddb.de/(2007.II.12.閱覽)].
- Directory 1908.; "The Directory & Chronicle for China, Japan, Corea, Indo-China, Straits Settlements, Malay States, Siam, Netherlands India, Borneo, The Philippines, &c. with which are incorporated "The China Directory" and "The Hongkong Directory and Hong List for the Far East" for the Year 1908", Forty-Sixth Year of Publication, The Hongkong Daily Press Office, 1908., Hongkong and London.
- $DK_{I./II.}$ 1909./1910.; Hans Meyer (hrsg. von), Siegfried Paſſarge, Leonhard Schultze, Wilhelm Sievers u. Georg Wegener (unter Mitarb. von): "Das Deutſche Kolonialreich[:] Eine Länderkunde der deutſchen Schutzgebiete.", Erſter Band: Oſtafrika und Kamerun., Zweiter Band: Togo, Südweſtafrika, Schutzgebiete in der Südſee und Kiautſchougebiet., Bibliographiſches Inſtitut, 1909.[I.], 1910.[II.], Leipzig u. Wien.
- $DKL_{I.-III.}$ 1920.; Heinrich Schnee (hrsg. von): "Deutsches Koloniallexikon", Bd. 1- 3., 1920., Quelle & Meyer, Leipzig.(又,電網頁«BadDKg»所收電網版[www.stub.bildarchivdkg.uni-frankfurt.de/Bildprojekt/Lexikon/]; 本稿では電網版を使用)
- Doenitz 1891.; Paul Doenitz: "Über Ursprung und Bedeutung des Anspruches der Päpste auf Approbation

---

[156] 筆者所見紙面は,*DAW德膠官報1.-13. 1899.II.22.*の巻頭頁(電網頁«"Mk"Kiautschou»所揭)のみ.

[157] "mit Beilage „Die Welt des Ostens"". 又,"Schluss der Redaktion und Inseratenannahme: Freitag morgens 10 Uhr."(*DAW德華彙報6.-53.1904.XII.31.*,S.8.),"**Aus der Kolonie.**¶ .....¶ **Ein Jubiläum.** Heute vor zehn Jahren,am 21. November 1898, ist zum ersten mal eine deutsche Zeitung in Tsingtau herausgegeben worden. Es war die erste Nummer der„Deutsch-Asiatischen Warte"die als Wochenblatt bis zum 31. Dezember 1904 bestand. Am 1. November 1904 traten die„Tsingtauer Neuesten Nachrichten"hervor, und seit dem 10. Oktober 1908 erscheint hier die„Kiautschou-Post""(*KP山東彙報1.-7. 1908.XI. 21.*, S. 139.)の如く, 日刊紙*TNN青島新報*の發刊により停刊.

der deutschen Königswahlen", Halle, Phil. Diss. v. 31. Okt. 1891.(原本未見; 電網頁«AAKdSuUbH»に據る).
•獨逸時代ノ青島1916.; 青島軍政署(中村照治譯): '大正五年三月譯獨逸時代ノ青島', 青島資料1916., 36頁.(獨語原本: RadEdSKusBzH 1914.).
•*EgdRuSfC 中德法政集要叢編*, Abteilung für Rechts- und Staatswissenschaften mit Unterstützung durch die Uebersetzungsanstalt der Deutsch-Chinesischen Hochschule (hrsg. von): "Enzyklopädischer Grundriss der Rechts- und Staatswissenschaften für Chinesen.[:] In Einzelheften zum Gebrauche an chinesischen Hoch- und Rechtsschulen, sowie zum Selbststudium", Verlag der Deutsch-Chinesischen Hochschule, 1912., Tsingtau . / "中德法政集要叢編[:] 專爲中國大學暨法政學校研究法學或自習之用", 青島特別高等專門學堂法政科譯書處會同出版.
•FdTuU$_{II.}$ 1904.; Fr. Behme, M. Krieger[158]: "Führer durch Tsingtau und Umgebung.", Hecknersche Druckerei (H. Wessel), 1904., Wolfenbüttel.
•FdTuU$_{III.}$ 1906.; Behme u. Krieger: "Führer durch Tsingtau und Umgebung.", 3. Aufl., Hecknersche Druckerei (H. Wessel), 1906., Wolfenbüttel.(原本未見).
•GB$_{I.-XXI.}$ 1928.- 1935.; "Der Große Brockhaus[:] Handbuch des Wiſſens in zwanzig Bänden", fünfzehnte, völlig neuebearbeitete Auflage von Brockhaus' Konverſations=Lexikon, F. A. Brockhaus, 1932.[I.], 1929.[II.- IV.], 1930.[V.- VII.], 1931.[VIII.- X.], 1932.[XI.- XIII.], 1933.[XIV.- XVI.], 1934.[XVII.- XIX.], 1935.[XX.- XXI.$_{Ergänzungsband}$], Leipzig.
•Guide to Tsingtau$_{IV.}$ 1910.; Dr. F. Behme and Dr. M. Krieger: "Guide to Tsingtau and its Surroundings", IV. Edition, H. Wessel at Heckner's Press., 1910., Wolfenbüttel.
•古今地名1931.; 謝 壽昌•陳 鎬基•臧 勵龢•傅 運森•殷 惟龢•方 賓觀•譚 廉•張 堃等(編): "中國古今地名大辭典", 1931[民國20]年5月, 商務印書館[上海].(又, 1982年商務印書館香港分館重印; 本稿では重印版を使用)
•GV$_{1700-1910}$ 1979.- 1987.; Peter Geils u. Willi Gorzny (bearb. unter d. Ltg. von): "Gesamtverzeichnis des deutschsprachigen Schrifttums (GV) 1700-1910", Bd. 1- 160, 1979- 1987, München, New York, London, Paris, K. G. Saur.
•GV$_{1911-1965}$ 1976.- 1981.; Reinhard Oberschelp (hrsg. von): "Gesamtverzeichnis des deutschsprachigen Schrifttums (GV) 1911-1965", Bd. 1- 150., 1976- 1981., Verlag Dokumentation, München [1976.-]/K. G. Saur, München, New York[1979.-].
•GvB 1889/90.; "Geſellſchaft von Berlin.[:] Hand=und Adreßbuch für die Geſellſchaft von Berlin, Charlottenburg und Potsdam. 1889/90.", I. Jahrgang., Adolph Hein, 1889., Berlin.
•半沢1930.; 半沢玉城(編): "支那關係條約集", 1931[昭和5]年9月, 外交時報社[東京].
•IBDoCEE$_{1933-1945.}$ 1983.; Hannah Caplan, Belinda Rosenblatt (eds.): "International Biographical Dictionary of Central European Emigrés 1933-1945", Volume II.[:] The Arts, Sciences, and Literature, K. G. Saur, 1983, München, New York, London, Paris.
•井出•須田2001.; 井出萬秀•須田明日香(編): "舊制松本高等學校ドイツ語圖書目錄", 2001[平成13]年10月, 舊制高等學校記念館[松本]/Manshu Ide, Asuka Suda (hrsg. von): "Verzeichnis der deutschsprachigen Bücher aus der Oberschule Matsumoto (1919- 1950) im früheren Schulsystem in Japan", 2001 Matsumoto, Museum für die Oberschule im früheren japanischen Schulsystem, Matsumoto.
•JBA1995.; Hilmar Schmuck (bearb. von): "Jüdisches Biographisches Archiv", 661 Mikrofiches, XXXI S. [Booklet], 1995., K. G. Saur, München.(原本未見).
•JBA$_{S.}$ 1998.?; Hilmar Schmuck (bearb. von): "Jüdisches Biographisches Archiv. Supplement", 120 Mikrofiches, VII S. [Booklet], 1998.?, K. G. Saur, München.(原本未見).
•JdKGSzT$_{I.-IX.}$ ü. 1903-12.; Jahresbericht der Kaiserlichen Gouvernements-Schule zu Tsingtau über das Schuljahr 1903-~~04.~~*i2. Jahrg. 07-08 fehlt*"(膠州圖書館舊藏合册本[東京大學總合圖書館現藏])
•*JdKGSzT$_{VIII.}$ ü. 1910-1911.*; "VIII. Jahresbericht der Kaiserlichen Gouvernements-Schule zu Tsingtau über das Schuljahr 1910-1911.", Tsingtau, Deutsch-Chinesische Druckerei u. Verlagsanstalt Walther Schmidt [Druck].
•膠澳專檔1991.; 黃 福慶(主編)•莊 樹華•陳 素主(編輯): "膠澳專檔[:] 光緒二十三年 – 民國元年", 1991[民國 80]年6月, 中央研究院近代史研究所[臺北].
•*近中史叢*; 沈 雲龍(主編): "近代中國史料叢刊", 文海出版社[臺北].
•加唐 1992./1993.; 加唐興三郎(編): "日本陰陽曆日對照表", 上•下卷, 1992 年 12 月[上: 445(允恭天皇 34)年- 1100(康和2)年], 1993年9月[下: 1101(康和3)年- 1872(明治5)年], 株式會社ニットー[東京].
•*官報*; "官報", 第1號(1912[大正1].VII.31.[水])- 第4303號(1926[大正15].XII.25.[土]), 印刷局[東京].

158 "Dr. Fr. Behme und Dr. M. Krieger in Tsingtau."

▪川島2004.; 川島 眞:"中國近代外交の形成",2004年2月, 名古屋大學出版會.
▪KDL$_{\text{Nekrolog 1901-1935.}}$ 1936.; Gerhard Ludtke (hrsg. von): "Nekrolog zu Kürschners Literatur-Kalender. 1901-1935.", 1936., Walter de Gruyter, Berlin.(又,"Kürschners Deutscher Literatur-Kalender: Nekrolog 1901-1935", 1973., de Gruyter, Berlin, New York; 原本未見; DBA, DBA-NF所收)
▪*金大文論集(語文)*;"金澤大學文學部論集: 語學•文學篇", 第17- 第27號, 1997-2007年, 金澤大學文學部.
▪『膠圖藏目補』1922.; 青島守備軍參謀部:"膠州圖書館藏書目錄 補遺",1922[大正11]年以前,全64頁,油印本.
▪國史大辭典$_{\text{1.-15.上•中•下}}$ 1979.- 1997.; 國史大辭典編集委員會(編): "國史大辭典", 第1- 第15(上•中•下)卷, 1979(昭和54)年3月[1.], 1980(昭和55)年7月[2.], 1983(昭和58)年2月[3.], 1984(昭和59)年2月[4.], 1985(昭和60)年2月[5., 6.], 1986(昭和61)年11月[7.], 1980(昭和55)年7月[8.], 1988(昭和63)年9月[9.], 1989(平成元)年9月[10.], 1990(平成2)年9月[11.], 1991(平成3)年6月[12.], 1992(平成4)年4月[13.], 1993(平成5)年4月[14.], 1996(平成8)年6月[15.上], 全11月[全中], 1997(平成9)年4月[全下], 株式會社吉川弘文館[東京].
▪*KP山東彙報 1.-5. 1908.- 1912.*; H. v. Kropff (Hrsg. u. verantwortl. Red.; [1908.- 1911.-]): "Kiautschou-Post[:] Unparteiisches Wochenblatt für die Deutschen in Tsingtau und der Provinz Schantung山東彙報.", 1908.- 1912., Druck und Verlag von Adolf Haupt/Verlag der Tsingtauer Zeitungsgesellschaft m. b. H., Tsingtau.
▪Lessing-Othmer 1912.; Ferd. Lessing u. Wilh. Othmer: "Lehrgang der nordchinesischen Umgangssprache Teil I.", Bd. 1.[:] Chinesisches Handbuch, Bd. 2.[:] Umschrift und Übersetzung, 1912., Deutsch-Chinesische Druckerei und Verlaganstalt, Tsingtau.(原本未見)
▪LfTuK$_{\text{1.-10.}}$ 1930.- 1938.; Michael Buchberger (hrsg. von): "Lexikon für Theologie und Kirche", 2. neubearb. Aufl., 10. Bde., Herder, Freiburg im Breisgau, 1930.[1.], 1931.[2., 3.], 1932.[4.], 1933.[5.], 1934.[6.], 1935.[7.], 1936.[8.], 1937.[9.], 1938.[10.], Herder, Freiburg im Breisgau.(原本未見; DBA, DBA-NF 所收)
▪*MdDGfNuVO$_{\text{XVII.}}$ 1922.*; "Mitteilungen der Deutschen Gesellschaft für Natur-und Völkerkunde Ostasiens", Bd. XVII.[:] Beiträge zur Ostasienkunde Sammlung literaturisch-wissenschaftlicher Arbeiten deutscher Kriegsgefangener in Japan, 1922., Tokyo.
▪MGKL$_{\text{1.- 24.}}$ 1904.- 1913.; "Meyers Großes Konverſations=Lexikon, Ein Nachſchlagewerk des allgemeinen Wiſſens.[:] Sechſte gänzlich neubearbeitete und vermehrte Auflage. Mit mehr als 11,000 Abbildungen im Text und auf über 1,400 Bildertafeln, Karten und Plänen ſowie 130 Textbeilagen.", 1904.[2.-4.], 1905.[1., 6.- 8., 12.], 1906.[9., 10., 13.- 15.], 1907.[11., 16.- 18.], 1908.[19., 20.], 1909.[21.$_{\text{Ergänzungen und Nachträge}}$], 1910.[22.$_{\text{Jahres-Supplement 1909/1910}}$], 1912.[23.$_{\text{Jahres-Supplement 1910/1911}}$], 1913.[24.$_{\text{Jahres-Supplement 1911/1912}}$], Bibliographiſches Inſtitut, Leipzig und Wien.
▪Michelsen 1910.; Erich Michelsen: "Ein Rückblick auf Tsingtaus Entwicklung ", Druck und Verlag Adolf Haupt, 1910., Tsingtau.[159](日語譯: 青島沿革誌1916.).
▪Michie 1908.; A. Michie: "Hors d'oeuvre ", Kelly and Walsh, 1908., Shanghai.(原本未見)
▪*Minerva$_{\text{XXI.}}$ f.1911-1912.*; R. Kukula u. K. Trübner (begr. von): "Minerva[:] Jahrbuch der Gelehrten Welt", Einundzwanzigster Jahrgang 1911- 1912, Verlag von Karl J. Trübner, 1912., Strassburg.
▪*Minerva$_{\text{XXII.}}$ f.1912-1913.*; R. Kukula u. K. Trübner (begr. von): "Minerva[:] Jahrbuch der Gelehrten Welt",

---

[159] 原本名未確認乍ら,"本書ハ 一九一〇年青島「アドルフ•ハウプト」印刷局ヨリ出版セラレタル獨逸書ニシテ 膠州灣總督府通譯官「エリッヒ•ミヘルセン」學士カ 一九一〇年六月十一日ノ日曜日ニ「ブラウンシュワイグ」公國攝政兼「メクレムブルグ」公國國主ニシテ獨逸植民會社總裁タル「ヨハンアルグ[ゲブ]レヒト」公爵歡迎夜會ノ席ニ於テ講話シタルモノノ記述ニ係リ…"(青島沿革誌1916.,序),"八一^{ab}ミヒエルゼン 青島發展回顧其他 一九一〇 □"(『鹵書•圖目』1920.,い-10-[本稿47頁]), 及び"**Lokales.**¶ .....¶ **"Rückblick auf Tsingtaus Entwicklung."** Der s.Zt.mit grossem Beifall aufgenommene Vortrag des Herrn Dolmetscher Dr.Michelsen über Tsingtaus Entwicklung ist nun im Druck erschienen(Druck und Verlag A.Haupt)und zum Preise von 20 Zent erhältlich."(*TNN青島新報,-143.1910.VI.28.[Dienstag]*,S.7.)なる記事に據り,暫時假表示. 因に,當日の夜會に就ては,"**Lokales.**¶ ..... ¶ **Deutsche Kolonialgesellschaft.** Als besonders denkwürdiger Tag wird der 11.Juni in der Vereinsgeschichte der Abteilung Tsingtau der Deutschen Kolonialgesellschaft dastehen. War es doch der Tag,wo die Abteilung den Präsidenten der Deutschen Kolonialgesellschaft,Seine Hoheit Johann Albrecht zu Mecklenburg,in ihrer Mitte begrüssen kannte. Seine Anwesenheit wurde durch einen Festabend im Hotel Ptrinz Heinrich,an dem auch die Vereine Tsingtaus teilnamen,geehrt. Gegen 9Uhr fanden sich die Hoheiten ein und gleich darauf erteilte der I.Vorsitzende,Kapitän z.S.Meyer-Waldeck,dem Redner des Abends,Herrn Dolmetscher Dr.Michelsen,das Wort zu einem Vortrage:„Rückblick auf die Entwicklung Tsingtau." Redner verstand,in meisterlicher Bewältigung des Stoffes,in knapper,aber doch erschöpfender und mitunter humorvoller Darstellung,ein Bild von der Entwicklung Tsingtau zu entwerfen,die durch eine Reihe vorzüglicher Lichtbilder wirkungswoll ergänzt wurde. Reicher Beifall lohnte den Redner am Schlusse seine Ausführungen.¶ …"(*id.7.-13.1910.VI.14.[Dienstag]*,S.7.).

Zweiundzwanzigster Jahrgang 1912- 1913, Verlag von Karl J. Trübner, 1913., Strassburg.

- *Minerva$_{XXIII.}$ f.1913-1914.*; R. Kukula u. K. Trübner (begr. von): "Minerva[:] Jahrbuch der Gelehrten Welt", Dreiundzwanzigster Jahrgang 1913-1914, Verlag von Karl Trübner, 1914., Strassburg.
- *MinervaHdGW$_{I.}$ 1911.*; G. Lüdtke, L. Beugel (bearb. von): "Minerva[:] Handbuch der Gelehrten Welt", Erster Band: Die Universitäten und Hochschulen usw., ihre Geschichte und Organisation, Verlag von Karl J. Trübner, 1911., Strassburg.
- *MinervaHdGW$_{II.}$1914.*$^{+}$;"Minerva[:]Handbuch der Gelehrten Welt",Zweiter Band:Die Bibliotheken,Archive und Museen usw.,ihre Geschichte und Organisation,Verlag von Karl J.Trübner,1914.$^{+}$,Strassburg.[160]
- 民國史檔資匯 III.政/軍/外/財/金/工/農/文/魂/民 1991.; 中國第二歷史檔案館(編): "中華民國史檔案資料匯編", 第三輯: 政治(一)•(二), 軍事(一)- (三), 外交, 財政(一)•(二), 金融(一)•(二), 工礦業, 農商(一)•(二), 文化, 教育, 民衆運動, 1991年6月(外交•金融•工礦業•文化•教育•民衆運動), 仝7月(軍事•財政•農商), 仝8月(政治), 江蘇古籍出版社[南京].
- ML$_{1.-15./☆}$ 1924.- 1933.; "Meyers Lexikon[:] siebente Auflage in vollſtändig neuer Bearbeitung mit 5000 Textabbildungen und über 10000 Tafeln, Karten und Textbeilagen", Leipzig 1924.[1.], 1925.[2., 3.], 1926. [4., 5.], 1927.[6., 7.], 1928.[8., 9.], 1929.[10., 11.], 1930.[12.], 1931.[13.$_{Erganzung}$], 1933.[14.$_{Erganzung}$, 15.$_{Erganzung}$, ☆ $_{Atlas-Ergänzungsband}$], Bibliographiſches Inſtitut, Leipzig und Wien.
- Mohr1911.; F.W.Mohr(hrsg. von):"Handbuch für das Schutzgebiet Kiautſchou",Deutsch-Chinesische Druckerei und Verlagsanstalt Walter Schmidt, 1911., Tsingtau.[161]
- 昔ノ青島 1916.; 青島軍政署(中村照治譯): '大正四年八月譯昔ノ青島', 青島資料 1916., 13 頁.([獨語]?原本:"Tsingtau" 1913.)
- 日獨戰史1916.; 參謀本部(編): "大正日獨戰史", 上卷•下卷•附圖•寫眞帖, 1916[大正5]年12月, 東京偕行社.
- 日獨戰圖1914.; 大阪朝日新聞社調査部(編): "日獨戰局地圖", *大阪朝日1914[大正3].IX.10.(第11711號)*附錄.
- 新田1994., 新田義之: "リヒアルト•ヴィルヘルム傳", 1994年12月, 株式會社筑摩書房[東京].
- ODoNB 2004.; H. C. G. Mathew, Brian Harrison (ed. by): "Oxford Dictionary of National Biography in association with The British Academy from the earliest time to the year 2000",.Oxford University Press, 2004.
- 奥村2006.; 奥村 淳: "山形大學圖書館に存する青島鹵獲書籍について – その比較文化的考察 –", 山形大學紀要(人文科學)第16卷第1號, 2006年, 115-52頁.
- *OL 德文新報*; C. Fink (Hrsg. u. verantwortl. Redakt.[1898.- 1917.]): "Der Ostasiatische Lloyd: Organ für die deutschen Interessen im fernen Osten 德文新報.", 1886.-.[162]
- «歐受大日記 1919[大正8].VI.»; 陸軍省(所綴): "大正八年六月 歐受大日記", 防衛省防衛研究所史料閲覽室所藏, 陸軍省/歐受大日記/T8-6/35.
- «歐受大日記 1921[大正10].VI.- VIII.»; 陸軍省(所綴): "大正十年㊅六月歐受大日記", 防衛省防衛研究所史料閲覽室所藏, 陸軍省/歐受大日記/T10-3/33.
- «歐受大日記 1921[大正10].XI.26.- 30.»; 陸軍省(所綴): "大正十年十一月㊅二十六日歐受大日記", 防衛省防衛研究所史料閲覽室所藏, 陸軍省/歐受大日記/T10-7/37.

---

[160] 原本不詳乍ら,"**Abkürzungen.** Das Zeichen«*Minerva:HdgW$_{II.}$1914.*$^{+}$»verweist auf die Ergänzung zum Jahrbuch Minerva,das»**Handbuch der Gelehrten Welt**«,von dem der I.Band,der die Universitäten und Hochschulen(ihre Geschichte,Organisation,Verfassung,usw.)behandelt,im Jahre 1911 erschienen ist. Der II.Band,umfassend die Bibliotheken,Archive und Museen,ist in Vorbereitung und wird sobald als möglich folgen. ..."(*Minerva$_{XXIII.}$f.1913-1914.*,S.VIII.)との記述に據り,暫時假表示.

[161] *Friedrich Wilhelm* Mohr(Dr. jur.[1913.XI.28.Marburg];*1881.V.25.Engers a.Rhein,∞19xx.[*Signe*,geb.Hanson],†1936.I.31.an Bord i.d.Nähe v.Singapore.). 又,RddG$_{II.}$1931.,S.398.(DBA-NF.,Nr.905.:241.-2.),*Wi's?$_{X.}$1935.*,S.1088.,DBA-NF.,Nr.905.:243.,GV$_{1911-1965.:90.}$1979.,S.228.,近代來華1981.,334-5頁. 因に,彼モーアは,例えば,"**Personalnachrichten.**¶ .....¶ **Dr.Mohr.** –Der zum Direktor der Salzverwaltung in Tsi-nan-fu ernannte ehemalige Dolmetscher des Gouvernements Kiautschou Dr.Mohr ist dieser Tage in Peking eingetroffen. Er ist während seines nur dreiwöchigen Aufenthalts in Deutschland bei der Universität Marburg auf Grund einer Arbeit über die fremden Pachtgebiete in China zum Doktor der Rechtswissenschaften promoviert worden.¶ ..."(*OL德文新報$_{XXVII.-32.}$1913.VIII.8.*,S.121.),"**Ostasiatischer Verein.**¶ Dem 14.Jahresbericht des Vereins entnehmen wir folgendes:¶ ... .¶ .....,und dem früheren Dolmetscher beim Gouvernement Kiautschou,jetzigen Direktor in der chinesichen Salzverwaltung,Dr.F.W.Mohr,..."(*TNN青島新報$_{1.-80.}$1914.IV.8.[Mittwoch]*,S.5.-7.)の如く,總督府翻譯官•中華民國鹽務署鹽務稽核總所山東鹽務稽核分所協理を繼任した人物である(肩書"協理"に就ては,"鹽務署稽核總所章程"[民國史檔資匯$_{III.財1.}$1991.,1375-7頁],及び"鹽務署稽核分所章程"[仝,1377-8頁]に據る).

[162] "erscheint in Schanghai Sonnabends Morgens".

•*大阪朝日*; "大阪朝日新聞 ".
•Pantheon 1914.; "Pantheon[:] Adressbuch der Kunst- und Antiquitäten-Sammler und -Händler, Bibliotheken, Archive, Museen, Kunst-, Altertums- und Geschichtsvereine, Bücherliebhaber, Numismatiker [:] Ein Handbuch für das Sammelwesen der ganzen Welt", Paul Neff Verlag (Max Schreiber), 1914, Eszlingen a. N..
•Pieper 1900.; R. Pieper (gepflückt u. zuſammengeb. von): "Unkraut, Knospen und Blüten aus dem blumigen Reiche der Mitte", Druck und Verlag der katholischen Mission, 1908., Jentschofu..
•Pieper 1908.; Rudolph Pieper (gepflückt u. zuſammengeb. von): "Neue Bündel Unkraut, Knospen und Blüten aus dem „Blumigen Reiche der Mitte".", Verlag der Missionsdruckerei Steyl, 1900., Steyl.
•Pieper 1908.a.; R. Pieper: 'Papa Tschou.[:] Eine chinesische Geschichte', *$WdO_{1.-2.}$ 1908.*, S. 6.- 8., id. *$_{1.-3.}$ 1908.*, S. 10.- 2.
•Pieper 1908.b.; R. Pieper: 'Der chinesische Kompass.', *$WdO_{1.-5.}$ 1908.*, S. 18.
•Pieper 1908.c..; R. Pieper: 'Die Ziegelbrennerei in China.', *$WdO_{1.-10.}$ 1908.*, S. 38.
•Pieper 1908.d..; R. Pieper: 'Chinesische Gastrosophie.', *$WdO_{1.-12.}$ 1908.*, S. 45.- 6.
•Pieper 1909.; R. Pieper: 'Schuldner und Gläubiger in China.', *$WdO_{2.-2.}$ 1909.*, S. 6.- 7.
•Pieper 1909.a.; R. Pieper: 'Gottes- und Menschengericht. Nach einer wahren Begebenheit', *$WdO_{2.-14.}$ 1909.*, S. 54.- 5.
•Pieper 1909.b.; R. Pieper: 'Die Weizenernte in China.', *$WdO_{2.-24.}$ 1909.*, S. 93.- 4.
•青島交旅圖2004.; 黎 麗(編): "青島交通旅游圖", 2004年7月, 山東省地圖出版社[濟南].
•青島全書1912.; 謀樂(輯): "青島全書", 1912年6月(自序), 青島印書局.(原本未見; 獨語原本: Mohr 1911.)
•清季中外1985.; 故宮博物院明清檔案部•福建師範大學歷史系: "清季中外使領年表", 1985年10月, 中華書局[北京].
•RadEdSKusBzH 1914.; 'Rückblick auf die Entwicklung des Schutzgebiets Kiautschou und seiner Beziehungen zum Hinterland', 1914.[163](日語譯: 獨逸時代ノ青島1916.).
•RddG$_{I./II.}$ 1930./1931.; "Reichshandbuch der deutschen Gesellschaft", Bd. I.- II., 1930.[I.], 1931.[II.], Deutscher Wirtschaftsverlag, Berlin.
•*R=G.*; "Reichs=Geſetzblatt".
•RG-SL$_{VIII.}$ 1895.; Johs. Penzler: "Ritters geographisch-statistisches Lexikon über die Erdteile, Länder, Meere, Buchten, Häfen, Seeen, Flüsse, Inseln, Gebirge, Staaten, Städte, Flecken, Dörfer, Weiler, Bäder, Bergwerke, Kanäle etc.: ein Nachschlagewerk über jeden geographischen Namen der Erde von irgendwelcher Bedeutung für den Weltverkehr.", Achte, vollständig, umgearbeitete, vermehrte und verbesserte Auflage, B. I.: A- K., B. II.: L- Z., verlag von Otto Wigand, 1895., Leipzig.
•Richthofen 1877./1882.; Ferdinand Freiherr von Richthofen: "China [:] Ergebnisse eigener Reisen und darauf gegründeter Studien", Erster Band[:] Einleitender Theil, , Zweiter Band[:] Das nördliche China., Verlag von Dietrich Reimer, 1877.[I], 1882.[II], Berlin.
•Richthofen 1883.; Ferdinand Freiherr von Richthofen (hrsg. von): "Beiträge zur Paläontologie von China Abhandlungen von Dr. Wilhelm Dames, Dr. Emanuel Kayser, Dr. G. Lindstrom, Dr. A. Schenk und Dr. Conrad Schwager", besondere Ausgabe von F. v. Richthofen's China. Band IV., Verlag von Dietrich Reimer, 1883., Berlin.
•Richthofen 1912.; Ferdinand Freiherr von Richthofen[164]: "China [:] Ergebnisse eigener Reisen und darauf gegründeter Studien", Dritter Band[:] Das südliche China, Verlag von Dietrich Reimer (Ernst Vohsen), 1912., Berlin.
•『鹵文目』1915.; 青島守備軍司令部: "大正四年八月鹵獲文書目錄", 1915[大正四]年8月[緒言], 青島守備軍司令部.
•Romberg 1912.; Romberg [Landrichter a. D., Dozent.]: "Staatsrecht[:] Ein Abriss", *EgdRuSfC 中德法政集要叢編* Serie A., No. 1., Verlag der Deutsch-Chinesischen Hochschule, 1912., Tsingtau. / 地方審判廳推事 法政科講師進士勞睦貝(編輯): "國法擇要", *中德法政集要叢編*第一門第一號, 青島特別高等專門學堂法政科講義處會同出版.
•Romberg 1912a.; Romberg [Landrichter a. D., Dozent.]: "Strafrecht[:] Allgemeiner Teil.", *EgdRuSfC 中德法政集要叢編* Serie A., No. 2., Verlag der Deutsch-Chinesischen Hochschule, 1912., Tsingtau. / 地方審判廳推事 法政科講師進士

[163] 原本名未確認乍ら, "本書ハ 一九一四年出版ノ支那書「支那人用獨逸讀本」中ノ一節「膠州」ノ獨逸語原本「リユックブリック•アウフ•ディー•エントウイッケルング•デス[•]シユッツゲビーツ•キマ[=ア]オチュウ•ウンド•ザイ子ル•ベチーフンゲン•ツーム•ヒンテルランド」(直譯 膠州租借地及支那內地關係ノ發達ニ於ケル回顧)ニシテ……"(獨逸時代ノ青島1916., 序文)との記述に據り, 暫時假稱.

[164] "Nach der hinterlassenen Manuscripten im letztwilligen Auftrag des Verfassers herausgegeben von Ernst Tiesen"

勞睦員(編輯): "刑法擇要 總則", *中德法政集要叢編*第一門第二號, 青島特別高等專門學堂法政科聯合會同出版.
- 『鹵書目訂表』1922.; "鹵獲書籍目錄訂正表(謄寫目錄及歐文目錄)", 1922[大正 11]年7月以前,[165] 全20頁, 油印本.
- 『鹵書追目』1920.; 青島守備軍參謀部: "大正九年三月鹵獲書籍追加目錄", 1920[大正9]年3月, 全64頁, 油印本.
- 『鹵書•圖目』1920.; 青島守備軍陸軍參謀部(編): "鹵獲書籍及圖面目錄", 1920[大正9]年2月, 全1012頁, 油印本.
- 佐藤1999.; 佐藤公彥: "義和團の起源とその運動 – 中國民衆ナショナリズムの誕生 –", 1999年9月, 研文出版(山本書店出版部)[東京].
- Schüler1909.; W.Schüler: 'Das Buch des Höchsten von den Taten und Vergeltungen', *WdO$_{2.15}$ 1909.*, S.57.-60.
- Schüler 1912.; Wilhelm Schüler: "Abriss der neueren Geschichte Chinas, unter bes[onderer]. Berücks[ichtigung]. der Provinz Schantung[:] Gekrönte Preisschrift herausgegeben von der Abteilung Tsin[g]tau der Deutschen Kolonial Gesellschaft", 1912., Curtius, Berlin.(原本未見).
- SdddAüdVdeMiO帝時德國極東外交I. 1940.; "Die Sammlung der deutschen diplomatischen Akten über die Vorgehen der europäischen Mächte in Ostasien gewählt aus „Die grosse Politik der europäischen Kabinette 1871-1914", erster Band, Reprint: 1940., Peking. / "帝政時代德國極東外交文獻彙纂", 第1册, 1940[民國29]年, 北京影印.
- 千賀1917.; 千賀鶴太郎: "國際公法要義", 訂補五版, 1917[大正6]年9月(初版: 1909[明治42]年9月), 巖松堂書店[東京].
- 先學を語る服部1973.; 服部 武•竹田 復•阿部吉雄•加藤常賢•宇野精一: '先學を語る – 服部宇之吉博士 –' *東方學$_{46.}$* 1973., 163-186頁.(又, 東方學回想 I•(1) 2000., 109-34頁).
- 一九一三年ノ膠州灣1916.; 青島軍政署(某將校[中村照治?]譯): '大正四年八月譯一九一三年ノ膠州灣', 青島資料1916., 20頁. (獨語原本: Walther Schmidt 1914.)
- 志村2000.; 志村 惠: '金澤大學中央圖書館所藏「青島文庫」藏書目錄(1)', *金大文論集$_{20.(靜文)}$ 2000.*, 129-51頁.
- 志村2001.; 志村 惠: '金澤大學中央圖書館所藏「青島文庫」藏書目錄(2)', *金大文論集 $_{21.(靜文)}$ 2001.*, 115-21頁.
- 志村2007.; 志村 惠: '青島鹵獲書籍について – 現在の所藏を中心に –', *金大文論集 $_{27.(靜文)}$ 2007.*, 23-36頁.
- Schlunk 1914.; Martin Schlunk: "Die Schulen für Eingeborene in den deutschen Schutzgebieten am 1. Juni 1911[:] Auf Grund einer statistischen Erhebung der Zentralstelle des Hamburgischen Kolonialinstituts", Reihe A[:] Rechts- und Staatswissenschaften, Band 4.(*AdHK*, Band XVIII.), L. Friederichsen & Co, 1914, Hamburg.
- *職員錄 1918.*; "職員錄", 大正7[1918]年度, 大正7[1918]年8月[V.1.現在調], 印刷局.
- Schrameier 1915.; W. Schrameier: "Kiautſchou[:] ſeine Entwicklung und Bedeutung.[:] Ein Rückblick.", Verlag von Karl Curtius, 1915., Berlin.
- «大正八年以降鹵獲書籍»; 陸軍省(所綴): "大正八年以降 青島鹵獲書籍ニ關スル件", 防衛省防衛研究所史料閱覽室所藏, 陸軍省/日獨戰役/T8-1/66.
- «大正•在本邦大使館員任免•獨國/II»; 外務省(所綴): "大正[illegible]年九月 旨在本邦各國大使館員任免雜件 獨國之部 第二卷", 外務省外交資料館所藏, 6•1•8•25-2.
- 高橋1905.; 高橋作衛: "戰時國際法要論", 1905[明治38]年5月, 高橋作衛[東京].
- *TNN* 青島新報; C. Fink (Hrsg.) u. H. v. Kropff (verantwortl. Redakteur) [-1906-]/J. Walther (verantwortl. Redakteur) [-1909.X.-]/Gerh. Menz (Hrsg. u. verantwortl. Redakteur) [-1914-]: "Tsingtauer Neueste Nachrichten 青島新報", 1904.-1914., Tsingtauer Neueste Nachrichten Fink & Walther [-1909.X.-]/Tsingtauer Zeitungsgesellschaft m. b. H. [-1914-].[166]
- *圖書館界*; "圖書館界Toshokan-kai (The Library World)", 1947年-, 日本圖書館研究會[天理].
- *東亞研究叢書*; 東亞研究叢書刊行會: "東亞研究叢書", 生活社[東京].
- *東方學 $_{46.}$* 1973.: "東方學", 第46輯, 1973[昭和48]年7月, 財團法人東方學會[東京].

---

[165] 第四高等學校宛添附書類(金澤大學附屬中央圖書館現藏)の如下表記に據る.
"青參第二五三號
鹵獲書籍目錄訂正表送付ノ件通牒 青島守備軍司令部印
大正十一年八月一日 青島守備軍司令部
第四高等學校御中
兼テ通牒致置候鹵獲書籍目錄訂正表一部 別冊ノ通及送付候也"("陸軍"用11行罫紙[16.5 x 24.5 cm]; 武藤[天部框槨外第2行, 楕圓形有框朱文]•高波[喉部框槨外下部, 圓形有框朱文]の認印有り)

[166] 原紙での頁號に誤植頻出なるも, 引用に際しては, その頁號に重複の無い限り, 原紙に於る頁號を表記.

▪東方學回想 I•(1) 2000.; 財團法人東方學會(編): "東方學回想 I 先學を語る(1)", 2000[平成12]年1月, 株式會社刀水書房[東京], .
▪*東京朝日*; "東京朝日新聞".
▪*東京日日*; "東京日日新聞".
▪"Tsingtau"1913.; "Tsingtau", 1913., Tsingtau.[167](日語譯: 昔ノ青島1913.).
▪辻本•橋本 1958.; 辻本春彦•橋本萬太郎: '[5]各種音標文字及び中國語音聲轉寫法の對照表', "中國語學事典Zhungguoyhye Shidian", IX付錄, 1087-1104頁, 1958年1月.
▪Wagner 1926.; Wilhelm Wagner: "Die chinesische Landwirtschaft", Paul Parey, 1926., Berlin.(原本未見)[168]
▪Walravens2006.; Hartmut Walravens(hrsg. von): "Ferdinand Lessing[:]Leben•Werk.•Briefe", 2. Auflage, Hamburg, 2006., Melle.(原本未見)
▪Walther Schmidt 1914.; "Kiautschou: im Jahre 1913.", [Deutsch-Chinesische Druckerei und Verlagsanstalt]?, Walther Schmidt, 1914., Tsingtau.[169](日語譯: 一九一三年ノ膠州灣1916.).
▪Wegener 1910.; Georg Wegener: 'Das Kiautſchougebiet', $DK_{II.}$ 1910., S. 497.-541.
▪*$WdO_{I.}$ 1908.*, "Die Welt des Ostens.[:] Beiträge zur Länder- und Völkerkunde Ostasiens.", Beilage zur „Kiautschou-Post", Herausgeber: H. v. Kropff, Tsingtau., Oktober-Dezember 1908., Druck und Verlag von Adolf Haupt, Tsingtau.
▪Wilhelm 1910.; Richard Wilhelm (aus dem Chinesischen verdeutscht u. erläutert von): "Kung-Futse, Gespräche 〔Lun Yü〕", Eugen Diederichs, 1910., Jena.
▪Wilhelm 1911.; Richard Wilhelm (aus dem Chinesischen verdeutscht u. erläutert von): "Laotse Tao Te King[:] Das Buch des Alten vom Sinn und Leben", Eugen Diederichs, 1911., Jena.(原本未見)
▪Wilhelm 1924.; Richard Wilhelm (aus dem Chinesischen verdeutscht und erläutert von): "I Ging.[:] Das Buch der Wandlungen.", 1924., Eugen Diederichs Verlag, Jena.(原本未見)
▪*Wi's?$_{VIII.}$ 1922.*; Herrmann A. L. Degener (redig. von): "Wer ist's? [:] Biographien von rund 20 000 lebenden Zeitgenossen. Angaben über Herkunft, Familie, Lebenslauf, Veröffentlichungen und Werke, Lieblingsbeschäftigungen, Parteiangehörigkeit, Mitgliedschaft bei Gesellschaften, Adresse. Andere Mitteilungen von allgemeinem Interesse.", VIII. Ausgabe, Verlag von H. A. Ludwig Degener, 1922., Leipzig.
▪*Wi's?$_{X}$ 1935.*; Herrmann A.L.Degener(hrsg.von): "Degeners Wer ist's?[:]Eine Sammlung von rund 18000Bibliographien mit Angaben über Herkunft, Familie, Lebenslauf, Veröffentlichungen und Werke, Lieblingsbeschäftigungen, Mitgliedschaft bei Gesellschaften, Anschrift und anderen Mitteilungen von allgemeinem Interesse[:]Auflösung von ca.5000Pseudonymen", X. Ausgabe, Verlag Herrmann Degener, 1935., Berlin.
▪徐•張•村松•堀內 1992.; 徐 飛鵬•張 復合•村松 伸•堀內正昭: "中國近代建築總覽•青島篇 The Architectural Heritage of Modern China[:] Qing Dao", *中國近代建築總覽*, 中國建築工業出版社, 1992.
▪職官錄1911.冬; "職官錄宣統三年冬季", 1911[宣統3]年, 內閣印鑄局[北京].(又; 內閣印鑄局(編): "宣統三年冬季職官錄", *近中史叢*第29輯, 1968[民國57]年12月, 文海出版社[臺北]; 本稿では複印版を使用).
▪*中國近代建築總覽*, 汪坦•中國近代建築史研究會•藤森照信•日本亞細亞近代建築史研究會: "中國近代建築總覽The Architectural Heritage of Modern China".
▪中國農書1936.; (德)瓦格勒(著)•王建新(譯): "中國農書", 上•下, 1936[民國25]年, 商務印書館[上海].(原本未見)
▪中近學制史料$_{II.上/下}$ 1987./1989.; 朱 有瓛(主編)•華東師大«教育科學叢書»編委會(編輯): "中國近代學制史料", 高等學校文科教學參考書教育科學叢書, 第二輯上册•全下册, 1987年6月[上], 1989年4月[下], 華東師範大學出版社[上海].
▪中外舊約$_{I./II./III.}$ 1857./1959./1962.; 王鐵崖(編): "中外舊約章匯編", 第1-第3册, 1957年9月(第1册), 1959年4月(第2册), 1962年3月(第3册), 生活•讀書•新知三聯書店[北京]. (又, 1982年生活•讀書•新知三聯書店再印)

---

[167] 原本不詳乍ら, "本書ハ 昨年ノ夏 青島外人招徠會ニ於テ編纂シタルモノニシテ……原書ハ單ニ青島ト題セシモ……"(昔ノ青島 1913.,序文)との記述に據り,暫時假稱. 未確認乍ら,或は,"Tsingtau:Ein Führer durch das deutsche Schutzgebiet in Ostasien./Herausgegeben vom Tsingtauer Verkehrs-Ausschuss Tsingtau:Ad.Haupt,[1913] 46 Seiten.: Mit 2 [farb.] Kt. u. vielen [eingedr.] Ill."(Die Deutsche Bibliothek, Leipzig所藏;書號: 1930A3408)

[168] 中國農書 1940., 序, 及び$GV_{1911-1965:111.}$ 1980., S. 244.の表記に據り假表示.

[169] 原本不詳乍ら,"本篇ハ 一九一四年青島「ワルテル•シュミット」印刷局ヨリ出版セラレタル獨逸書……"[日語譯序文],及び"Titel:Kiautschou:im Jahre …-Tsingtau:Schmidt Nachgewiesen 1910-1913;damit Ersch.eingest." (HAM<206>Kiel ZBW WGL, 書號: Y9825; 電網頁«ZDB»)との兩記事に據り, 暫時假表示.

◙ 凡例(『鹵書•圖目』1920.翻刻部分)

1.: 原本はB5版, 基本的に1頁12行であるが, 本稿では, 紙幅の都合上, 已むを得ず原本約3頁分を1頁に壓縮した. 勿論, 原本頁の體裁は基本的に保存したうえで, 原本各頁間に餘白をとり, 原本各頁開始部右端には, 例えば"**[表紙]**", "**i**", "**$I_{[\cdot]}$**", "**(一)**", "**いー 1ー**"の如き原本頁號を付し, 原本での頁割が判るようにしておいた.
尙, "**い-132-**"の次頁を"**い-135-**"としているのは, 原本の儘であり, "**い-261-**"頁に於て, 第一九八九號と第一九九二號との間を第一九九一^{ab}號, 第一九九〇號の順にしてあるのも, 原本の儘である.

2.: 原本では, 各項目の枠及び一行の長さが短いために, 一語乃至一句を2段割り, 書込形式, 或は2行に分綴•分割している場合が頻出するが, 本稿では, これを1行に纏め得る場合には纏めておいた(當該箇處に於て特に斷ってはいない).
例$_1$.: 三九　　"ベルンハルジ[上段]將軍[下段]"
例$_2$.:"2911$^{a\text{-}g}$　817$^{a\text{-}g}$ Schlömilch: Fünfstellige logarithmische und trigo=[上段]nometrische Tafeln.[下段]"

3.: 原本では, 各行所用字數に可成りの違いがあり, 書込みも多く, 又, 特に"發行年代"欄と"註"欄との間には混用例が多出する. 基本的には原樣再現に努めたものの, 兩欄所載事項は一見して明らか故に, 例えば箇々の欄に分書されている事項を兩欄共用として一行に纏め得る場合には, 本稿に於て兩欄通用(當該箇處に於て特に斷ってはいない)とした. 又, 他の欄に就ても, 原本が複數行取りであっても當該內容を1行で納め得る場合には, 本稿ではこれを1行に纏めて紙幅の儉約に努めた(この場合, 各項目の枠は左右に伸縮のうえ調整). 尙, "發行年代"欄に於て1行が3段以上に割られている場合には, 本稿では當該年代を2段割りに改めた(當該箇處に於て特に斷ってはいない).

4.: 原本では基本的に正字を使用しているので, 當翻刻に於ても, これに基本的に從う. 但, 本稿所用字體(漢字•假名: 古典明朝體[シフトJIS第2水準以內]•MingLiU[仝前外]; 歐字•數字等々: Times New Roman)の都合で, 例えば"普"字の如く, 原本のママにしておいた文字も若干ある.

5.: 原本では, 油印本故か, 劃數の多い字に對してその簡略體乃至は同一發音の別字を使用したり, 同一語句に對して同一發音の異種字を使用している例が頻出するが, これは正字に改めたり統一を圖ったりした.
例: ヴ[← ワ゛], ウヰ[← ウ井], 戲[← 戱], 缺[← 欠], 辭[← 辞], 體[← 躰], 竝[← 並], 滿洲•歐洲•濠洲[← 滿州•歐州•濠州], 發[← 発], 畫[← 畵], 劃[← 劃], 場[← 塲], 窗[← 窓], 煙[← 烟], 箇[← ケ], 寧波[← 寧波], 總[← 総•綜], 稅務署[← 稅務處•稅務所]等々

6.: 原本では, 同一の外國名, 及び仝地名に對して異る漢字表記を用いた例を見かけるものの, 本稿ではこれをその多用される用字法に統一した.
例: 亞弗利加[← 阿弗利加], 獨逸[← 獨乙], 普魯西[← 普露西],

7.: 原本中所用片假名の大小(主に拗音•撥音, 及び獨逸語發音の日本語表記に起因)に就ては, その判別不能の箇處が頻出し且つ歐文原綴に就ても容易に推測し難い場合が多出するが故に, 例えば"ウヰルヘルム"(← ウヰルヘルム)の如く, 當翻刻に於ては, 一律に同大とした.

8.: 原文中の讀點("、")は, 本稿では, 原則として, その用例に應じてカムマ(","), 中黑("•"), 等號("="), 乃至はコロン(":")に打改めた. 又, 原文中の句點("。")は, 本稿ではピリオド(".")に替えた.

9.: 原文中に於て, 固有名詞等々の右側所引の傍線は, 本稿では下線に替えた.

10.: 原本では, 重複册を示す際に, "***ab***"(二册), "***a-c***"(三册)の如きアルファベットの小文字筆記體を使用しているが, 本稿では, これを"^{ab}"(二册), "$^{a\text{-}c}$"(三册)の如く改めた("***b***"と"***f***", 及び"***e***"と"***l***"に就ての判斷は, 暫定的なものである). 又, 例えば"一〇六六ー五六"の如き漢數字表示のものに就ては, これを"一〇六六$^{1\text{-}56}$"の如きアラビア數字表示に改めた.

11.: 原本所添のルビに就ては, これを割愛した("一八九二　ヘンレ[~~ト~~$^{?}$]ツ　土工事指針圖表(ドコウジシシンヅヒョウ)　……"[**い-249**]).

12.: 原本の表記狀態(含•正誤表の指示)に就き, 翻刻擔當者としてその判斷に迷った場合には, 下記の如く, "$^{?}$"印を付しておいた.
例:"一八二 オツタアマン　家屋建築線規則[$^{?}$定$^{?}$]"(**い-21-**頁)
例:"一八七　□　獨領東亞弗利加總督府[主金庫,]$^{?}$特別及補助金庫勤務規定"(仝上).

13.: 正誤表(本稿43頁)及び『鹵書目訂表』1922.7(本稿5頁;*4.)指摘の箇處は, 本稿では旣に原文を改訂濟みで, 當該箇處に於て特に斷ってはいない.

14.: 筆者の技術的事情に由り, 原本"ろ-**6**-"頁の"一六 大淸搢紳全書"摘要欄の割註に於て, 本來"[搢]紳"とす可き箇處は"搢紳"の如く表記してある.

◙ 獨逸租借期青島所藏書籍目錄

[表紙]

大正九年二月

鹵獲書籍及圖面目錄

青島守備軍陸軍參謀部

[i]

凡例

一. 鹵獲書籍ノ種類及員數左ノ如シ[·]

(一.) 官有書籍(獨逸官廳ノ藏書ヲ集メタルモノ)

洋書	二, 八〇七部	八, 六三四册
漢籍	八一部	一, 四七七册

(二.) 德華高等學堂藏書

洋書	六四四部	一, 二九四册
漢籍	一六三部	五, 〇五八册

(三.) ウヰルヘルム•コーン叢書(コーント稱スル學者ガ獨逸總督ニ寄贈シタル支那)[ヲ]ニ關スル書籍[)]

洋書	二七二部	三二四册

(四.) 膠州圖書館藏書

[ii]

洋書	七, 五六三部	九, 四七三册
合計	一一, 五三〇部	二六, 二六〇册

二. 又 鹵獲圖面ノ員數 左ノ如シ[·]

圖面	五, 一三三葉	

三. 膠州圖書館藏書目錄ハ獨文印刷ノモノ存在セルヲ以テ 本目錄ニハ其ノ追加目錄(二一九部 二四三册)ヲ記載スルニ止メタリ.

四. 本目錄ニ登載セル「[H]支那其他東洋ニ關スル書籍(洋書)「目錄」ハ前揭ノ官有洋書中ヨリ支那及東洋ニ關スルモノノミヲ拔萃シテ閱覽ノ便ヲ圖リタルニ過キズ[·]

五. 官有書籍(洋書)目錄中四七頁ヨリ五六頁迄及一三三頁一三四頁ヲ闕クハ 頁數ノ記入ヲ誤リタルモノニシテ內容ニ闕漏アルニアラズ[·]

I[·]

目次

い[·] 官有書籍(洋書)目錄 目次	頁數	
A[·] 一般	い	一
(一) 百科辭典	い	一
(二) 普通學	い	一
(三) 普通雜誌	い	一
B[·] 政治•經濟•法律	い	五
(一) 政治	い	五
(イ) 政治學, 評論及雜誌	い	五
(1) 政治學•評論	い	五
(2) 雜誌	い	一一
(ロ) 條約•條例•制度規定•豫算•報告	い	一二

II[·]

(1) 條約	い	一二
(2) 條例	い	一三
(3) 制度類	い	一七

(4) 規定 い 二一
(5) 豫算 い 二三
(6) 報告 い 二八
(ハ) 社會運動 い 三一
(二) 法律 い 三三
(イ) 法律學•法典 い 三三
(1) 法律學 い 三三
(2) 法典 い 三五
(ロ) 評論•雜誌 い 四五
(三) 經濟 い 五八

III[·]

(イ) 經濟學•評論 い 五八
(1) 經濟學 い 五八
(2) 評論 い 六〇
(ロ) 報告 い 六一
C. 軍事 い 七七
(一) 一般 い 七七
(二) 陸軍 い 八一
(イ) 兵學 い 八一
(ロ) 成規 い 八七
(ハ) 雜書 い 一〇五
(三) 海軍 い 一一一
(イ) 兵學 い 一一一
(ロ) 成規 い 一一四

IV[·]

(ハ) 雜書 い 一四一
D. 數學•哲學•宗教•教育 い 一五六
(一) 數學 い 一五六
(二) 哲學 い 一五九
(三) 宗教 い 一六一
(四) 教育 い 一七〇
E. 歷史•地理 い 一七三
(一) 歷史 い 一七三
(イ) 世界歷史•各國史 い 一七三
(ロ) 傳記 い 一七九
(ハ) 雜書 い 一八八
(二) 地理 い 一八九
(イ) 世界地理•各國地理 い 一八九

V[·]

(ロ) 風俗 い 一九五
(ハ) 紀行 い 一八九
F. 言語學•辭典 い 二〇〇
(一) 言語學 い 二〇〇
(二) 辭典 い 二〇八
G. 自然科學 い 二一〇
(一) 一般 い 二一〇
(二) 物理學•化學 い 二一一
(三) 天文•地文 い 二一三
(四) 動物•植物•礦物 い 二一五

(五) 人類學•考古學 い 二一八
H. 醫學 い 二一九
[I. 原 本 缺 錄]
J. 工藝 い 二二三

VI[·]

(一) 一般 い 二二三
(二) 電氣 い 二二七
(三) 機械•造船 い 二二八
(四) 採礦•冶金 い 二三〇
(五) 土木 い 二三一
(六) 雜 い 二六一
K. 交通 い 二六一
L. 商業 い 二六三
M. 農業•林業•牧畜•漁業 い 二七一
N. 文學•美術•音樂 い 二七七
(一) 文學 い 二七七
(イ) 全集•評論 い 二七七
(1) 全集 い 二七七

VII[·]

(2) 評論 い 二八五
(ロ) 詩文 い 二八六
(ハ) 戲曲•小說•稗史•物語 い 二八九
(1) 戲曲 い 二九〇
(2) 小說 い 二九二
(3) 稗史 い 三二三
(4) 物語 い 三二五
(ニ) 傳說•偶[偶寓]話•お伽噺 い 三二八
(ホ) 雜 い 三三〇
(二) 美術 い 三三一
(三) 音樂 い 三三二
O. 雜書 い 三三三

VIII[·]

[仝] 官有書籍(洋書)追加目錄 目次 頁數

A. 一般 い 三四三
1. 百科辭典 い 三四三
B[·] 政治•法律•經濟 い 三四三
1. 政治 い 三四三
2. 法律 い 三四五
3. 經濟 い 三四八
C. 陸軍 い 三四八
D. 歷史 い 三四九
E. 地理 い 三四九
F. 美術 い 三四九

~~VIII~~IX[·]

[ろ.] 官有書籍(漢書[書籍])目錄 目次 頁數

第一 經書•子類(哲學•教育學) ろ 一
第二 史傳 ろ 二
第三 文學(美術•音樂) ろ 三

第四　辭典(言語學)　ろ　四
第五　政刑(經濟)　ろ　五
第六　武事　ろ　六
第七　天文[・]地文　ろ　六
第八　博物　ろ　八
第九　數學　ろ　八
第十　醫卜　ろ　八
第十一　農工商　ろ　九

~~VIIIX~~[・]

第十二　雜書　ろ　九

は. 德華高等學堂藏書(洋書)目錄　目次　頁數

A. 政治・法律・經濟　は　一
(一) 政治　は　一
(二) 法律　は　二
(三) 經濟　は　五
B. 軍事　は　六
C. 宗教・哲學・教育　は　六
(一) 宗教　は　六
(二) 哲學　は　七

XI.

(三) 教育　は　一三
(四) 倫理　は　一五
(五) 心理學　は　一五
D. 歷史・地理　は　一五
(一) 歷史　は　一五
(二) 地理　は　一七
E. 文學・美術・音樂　は　一七
F. 言語學　は　一九
G. 辭典　は　二二
H. 自然科學　は　二三
(一) 一般　は　二三
(二) 天文・地文　は　二四

XII.

(三) 動物・植物・礦物　は　二六
(四) 物理・化學　は　三二
(五) 考古學・人類學・進化論　は　三四
[　I.　原　本　缺　錄　]
J. 數學・測量　は　三五
(一) 數學　は　三五
(二) 測量術　は　三九
K. 醫學　は　四〇
L. 農業　は　四〇
M. 工藝　は　五五
(一) 一般　は　五五
(二) 機械　は　五六
(三) 建築　は　五八

XIII.

(四) 礦山　は　六一
(五) 土木　は　六三
(六) 雜　は　六四
N. 交通•商業　は　六五
O. 雜件　は　六七

に. 德華高等學堂藏書(漢籍)目錄 目次　頁數
第一　經書•子類(哲學•教育學)　に　一
第二　史傳　に　一七
第三　文學(美術•音樂)　に　二三
第四　辭典(言語學)　に　三六

XIV.

第五　政刑(經濟)　に　三七
第六　武事　に　四三
第七　天文[•]地理　に　四四
第八　博物　に　四五
第九　數學　に　四六
第十　醫卜　に　四六
第十一 農工商　に　四七
第十二 雜書　に　四七

XV.

ほ[ノ] ウヰルヘルム•コーン叢書(洋書)目錄 目次　頁數
A. 宗教　ほ　一
B. 哲學•倫理•教育　ほ　二
(一) 哲學　ほ　二
(二) 倫理•教育　ほ　三
C. 言語學•辭典　ほ　五
D. 法律•軍事•政治•經濟　ほ　六
E. 歷史•地理　ほ　八
(一) 歷史　ほ　八
(二) 地理　ほ　一三
F. 自然科學•醫學•農工業　ほ　一九
G. 文學•美術•音樂　ほ　二〇

XVI.

H. 雜件•雜誌　ほ　二三

へ[ノ] 支那其他東洋ニ關スル書籍(洋書)目錄 目次　頁數
(鹵獲官有書籍拔萃)
A. 政治•法律•經濟　へ　一
(一) 政治　へ　一
(二) 法律　へ　九
(三) 經濟　へ　一一
B. 軍事　へ　一七
C. 哲學•倫理•宗教•教育　へ　一七
D. 歷史•地理　へ　二三

XVII.

(一) 歷史　へ　二三
(二) 地理　へ　二六
E. 言語學•辭典　へ　二三[二三三二]

(一) 言語學 へ 三二
(二) 辭典 へ 三三
F. 自然科學 へ 三五
G. 醫學 へ 三六
H. 工藝 へ 三七
[I. 原本缺錄]
J. 交通 へ 三七
K. 商業 へ 三八
L. 農業 へ 三九
M. 文學•美術•音樂 へ 三九

XVIII.

N. 雜書 へ 四一

と[ㄇ] 膠州圖書館藏書(洋書)追加目錄

自 と 一 至 と 二〇

[XIX.]

[ち.] 圖 面 名 目

頁數
A. 地圖 ち 一
a 保護領及山東省[•]直隸省 ち 一
b 支那各地(山東[省•]直隸省) ち 八〇
c 其ノ他 ち 八一
B. 機械類 ち 八三
C. 軍艦 ち 一一一
D. 總督府建築 ち 一六四
E. 總督邸 ち 一九二
F. 病院 ち 二二〇
G. 兵營 ち 二六一

[XX.]

H. 警察署[•]屠獸場 ち 三〇三
I. 裁判所 ち 三三二
J. 學校及教會 ち 三三九
K. 林務所[•]測候所 ち 三四八
L. 嶗山療養所及將校俱樂部 ち 三五六
M. ヤーメン倉庫[•]官舍[•]洗濯所 ち 三七五
N. 埠頭[•]港灣[•]燈臺 ち 三八八
O. 土本[本木]及建築[•]雜 ち 四〇八
P. 追加 ち 四二五

(一)

正誤表

頁數	行數	誤	正(又ハ要領)
い 一	最終行	□	「一九一二年度」ノ次ニ「及一九一三年度」ヲ插入スル事
い 二	三	仝上第一卷	仝上第一八卷
い 三	四	獨逸目錄	獨逸月錄
い 五	八	ダヌシユケ	ダマシユケ
い 六	九	吾等皇帝	吾等が皇帝
い 六頁終–い 七頁初メノ間ニ左ノ二冊ヲ插入スルコト			
四二^{ab}		ロールバツハ	世界に於ける獨逸思想
四三			皇朝經世文新編第十七 (支那文)
い一〇	三		「七七^{ab}」ノ下ニ「フエリング譯. 江木翼著膠州灣に就て. 一九〇七」插入
い一〇	四		「七八^{ab}」ノ下ニ著者名「シユラアマイヤア」ヲ插入スル事

(二)

い一四	一一	圖面分　手續法	圖面分筆手續法
い一七	一一	萬國電信局名	萬國電信局名錄
い一九	七	一九〇二年度・一九一一年度　一九一三年度	一九〇二年度・一九一〇年度　一九一一年度・一九一三年度
い二〇	二	公吏	公使
い二〇	五	同第追加	同第一追加
い二一	一〇	總督府特別及	總督府主金庫, 特別及
い二二	四	一九二(I^{a-m}-XII^{a-f})	一九二(I^{a-m}-$XIII^{a-f}$)
い二二	自一〇 至一二		發行年度□「一九〇六」☑「一九〇七」　「一九〇七」ヲ脫シ□レリ
い二三	四		「一九三$^{1-32}$」ヲ抹殺シ「仝」ヲ插入シ「$XIII^{a-e}$」ハ「$XIII^{a-f}$」トスベキナリ
い二五	六	南亞弗利加	東亞弗利加
い二九	一	一九一〇－〇五年	一九〇一－〇五年
い三一	三	一九一二年度迄名	一九一二年度迄各

(三)

い三八	二	普魯西法律 第一卷	普魯西法律 第二卷
い三八	一一	裁判所構成所と	裁判所構成法と
い四二	一二	□	註ノ欄ニ「XXIX」ヲ插入スル事
い四五	二	三六四	三六四 I-II
い五八	一一	敗政	財政
い六一	五	第二項 第三十九卷	第三項 第三十九卷
い六一	一一	一九〇九年度	一九〇七年度
い六五	一〇	第一四九號(〃 第一期)	第一四九號(一九〇六年 第一期)

(四)

[　　原　本　缺　錄　　]

[　　彩　色　遊　紙　　]

官有書籍(洋書)目錄

A. 一般

(一) 百科辭典

番　號	著譯者名	書　　名	發行年代	註
一 (I-XX)	ワーゲナア	國家社會百科辭典 自第一卷至第廿三卷	(一八五九 一八六七	第二、十八、十九卷缺

(二) 普通學

[番　號]	[著譯者名]	[書　　名]	[發行年代]	[註]
二	ノイマイヤア	科學研究旅行指針 第二卷	一八九一	□
三 (I-IIII)	ミュルラアバーデン ヒルツ	普通學自修講義錄 第一卷•第三卷•第四卷	II[ab] 二冊アリ	□
四 (I[ab]-II[ab])		雜誌「文官適任下士」一九〇九年及一九一〇年度	□	□
(III[a-f])		仝　　上　一九一一年度	□	□
(IV[ac|e-c? b?]-V[ab])		仝　　上　一九一二年度及一九一三年度	□	□

五(I-II)		陸海軍下士ニ對スル雜誌「文官任用」第九卷•第一〇卷	(二九〇四 二九〇五)	□
(III-IV)		仝上 第一六•一七卷及第一七卷	(二九一二 二九一三-一三)	□
(V[ab]-VI)		仝上 第一八卷及第一九卷第一－六號	(二九一三 二九一四- 一九一四)	□
六(I[a-d]-III[ab])	ミユルラアバアデン	文官適任下士用自然文庫 第一•卷[•]第二卷[•]第三卷	II[abc] 三冊アリ	□

(三) 普通雜誌

七 I	□	常識文庫	第一卷[:]	探偵小說•事後ノ權利•夏ノ夜ノ夢•小姑•波斯國王ノ宮殿ヨリ•人體內ノ不用物體•望遠鏡ノ一瞥•婦人ノ浸略(ママ)•伯林市巡瞥ノ一日	一八九三 □
II	□	仝上	第一號		一九〇一 □
III[abc]	□	仝上	第四卷[:]	寶ノ行衛[衛方?]•結婚者•生活ノ泥濫•鐵道信號[•]前世紀ノ冒險小說•氷辶り•雜件	一八八八 一九一一 一八九二 □
(IV-VII)	□	仝上	第五卷(一八一八)[•]第八卷(一九〇九)[•]第九卷(一九一一)[•]第一一卷(一九〇六)		□ □
VIII	□	仝上	(寶ノ行衛[衛方?]•前科•流浪ノビスマーク•美容術論•近世氣質繪解)		一八九二 □
八 I			獨逸ルンドシヤウ 第一卷(一〇月－一二月)		一八九八 □
II-III	□	仝上	第二卷•第三卷		一八九九 □

八(IV-VI)	獨逸ルンドシヤウ	第四卷(一八九九年七月－九月)	□	□
		第廿七卷(一八八一年四月－六月)	□	□
		第廿八卷(一八八一年七月－九月)	□	□
九(I-II)	ローマイヤア	獨逸月錄 (第三年第五年)及(第九年)－一九〇五－一九〇六	□	□
一〇		雜誌「園亭」一八八八年度曆	□	□
一一		一九一〇年度「交友」第七〇年	□	□
一二		雜誌「未來」一九〇三年一〇月,及一九〇四年二月	□	□
一三		東亞ロイド附錄 膠州報集 一八九九－一九〇〇	□	□

一四		故郷と世界 第三年第一號		一九一三	□
一五	デルブリユツク主幹	普魯西年誌 七月號(一三三號)		一九〇八	□
一六		一九一〇年度 キユルシユナア年鑑		□	□
一七(I-II)		チヤムバア雜誌 六月號及三月號	(英文)	一九一二	□
一八(I-II)		ハーパア月刊雜誌 一月號及五月號	(英文)	一九〇四 一九一一	□

い- 4-

一九		コーンヒル雜誌 第六一一號	(英文)	一九一〇	□
二〇(I-II)		十九世紀以後 第三七六號(六月號)	(英文)	一九〇八	□
		仝 第四〇六號(一二月號)	(仝)	一九一〇	□
二一		ハーウエイ銷夏雜誌 一九一三年	(英文)	□	□
二二		倫敦雜誌 第三〇卷第三一號	(英文)	一九一三	□

い- 5-

B. 政治•法律•經濟

(一) 政治

(イ) 政治學, 評論及雜誌

(1) 政治學, 評論

番號	著譯者名	書名	發行年代	註
二三	ブリンケン	獨逸帝國及普魯西憲法竝に行政	□	□
二四	ローレンツ	獨逸帝國官職官位	□	□
二五	ダマシユケ	市町村施政 第一卷 土地の課税	一九一三	□
二六abc	ホフマン グロート	獨逸公民學	一九一一	□
二七	リンデナウ譯	ニセフオロ著英刑事警察と輔助學	□	□
二八ab 170	ウエーバア	殖民地敗[戝財]政管理	一九〇九	□
二九	ザイツ	獨逸保護領豫算: 立案と管理の原則	□	□

い- 6-

三十	シユツツ	祖國	一九一二	□
三一	シユツツ	權力	一九一二	□
三二	テイルメーレ	世界列强の反'跳'	□	□
三三	エルツバツヒヤア	無政府主義	一九〇〇	□
三四	□	ド•セギユール著革命	一八六五	□
三五	マイヤア	英の海軍(其他政治論)	一九〇二	□
三六	ゲルスドルフ	バルカン戰爭	一九一二	□
三七	ゾムマアフエルド	一九一〇?年•佛國の末路未來記	□	□
三八ab	一獨逸人	吾等が皇帝(彼が世界觀)	一九〇八	□
三九	ベルンハルヂ將軍	吾等が將來	一九一二	□
四〇	ヴァンデアボルグト	帝國敗[戝財]政の發達	一九〇八	□
四一	ベタアゼン	獨逸主義の奮闘「エルザスロートリンゲン」に於ける獨逸主義	一九〇二	□

[170] 京附圖現藏本では"ab "が掠れており, 赤鉛筆を以て"a"と朱書.

四二[ab]	ロールバツハ	世界に於ける獨逸思想	[□]	[□]

い- 7-

四三		皇朝經世文新編 第十七(支那文)	[□]	[□]
四四	コエブナア	殖民政策	一九〇八	□
四五		歐洲諸國の殖民行政	□	□
四六(I-IV)	チムマアマン	歐洲諸國の殖民 第一巻 葡萄牙と西班牙の殖民政策	一八九六	□
		仝 第二巻 英國の殖民政策 第一編	一八九八	□
		仝 第三巻 仝 第二編	一八九九	□
		仝 第四巻 佛國の殖民政策	一九〇一	□
四七(I-II)	シユツク	ブランデンブルグ-プロシヤの殖民政策 第一巻(一六四七 - 一七二一)	一八八九	□
		仝 第二巻(一六四七 - 一七二一)	一八八九	□
四八	フロラック	殖民地の制度と行政	一九〇五	□
四九	イバア	殖民地官吏に對する殖民地の義務	一九一一	□
五〇	ズイデクム譯	レロイ•ボーリウ著支那問題	一九〇〇	□

い- 8-

五一	ロールバツハ	支那研究	一九〇九	□
五二	マルマン	極東の住民と政治 (英文)	一八九九	□
五三	コルクハウン	支那の開國 (英文)	□	□
五四	ミユンスタアベルグ	支那の改革	一八九五	□
五五	ザルツマン	革命の支那	一九一三	□
五六	フオスベルグレコウ	支那の革命, 其原因と影響	一九一二	□
五七	ピエール[•]ホワン譯註	支那行政上の混合	一九〇一	(佛文)
五八	スミス	支那義和團事件 第一卷	一九〇一	(英文)
五九	ブランド バツタアハウス共著	西太后治下の支那	一九一〇	(英文)
六〇	ウヰール	北清事變通信「北京より」	□	(英文)
六一	ヒルト	新關文件錄	一九〇九	(英文)
六二[ab]	ロボルスキ譯	クーヘロン アーモート著下關媾和後の東洋	□	□

い- 9-

六三	フオン•リヒトホーフエン	東亞戰爭中及前: 菊と龍	一九〇二	□
六四	ブランド	支那に於ける工業及鐵道企業	一八九九	□
六五	ピエール•ホワン	支那の鹽公賣事業[?情?]	一八九八	(佛文)
六六	ビユロー	外國に對する支那の商業政策的地位	一九〇四	□
六七	エドキンス	支那帝國の歳入と租稅	一九〇三	(英文)
六八	□	支那に於ける既成鐵道の沿革と青島港	一九一四 (タイプライタ寫本)	
六九(I-III)	ブラント	東亞に於ける卅三年 第一卷[•]第二卷[•]第三卷	一九〇一	□
七〇	ブラント	日清戰爭史: 東亞政策の三年	□	□
七一	ダイムリング	膠州殖民地	一九〇〇	□
七二	シユマツヒヤア	膠州と東亞問題	□	□
七三	シユラアマイヤア	膠州殖民地の土地政策	一九一一	□
七四	仝	膠州殖民地の租稅政策	一九一二	□

七五	シユラアマイヤア	膠州豫算を否決せしは何故ぞや(廻[囘囘]答文)	一九一二	□
七六	ヒルト	山東と膠州	一八九八	□
七七ab	フエリング譯•江木翼著	膠州灣に就て	一九〇七	□
七九八ab	シユラアマイヤア	膠州地方令は如何にして成立せしや	□	□
七九	クルーゼン	フライシユマン編獨逸法政辭典中の「膠州」[十]の部」特新版	一九一三	□
八〇	濟南獨逸領事ホルシハウア	津浦線が山東及青島獨逸商業に及す影響(報告)	一九一三	□
八一ab	ミヒエルゼン	青島發展回顧其他	一九一〇	□
八二	キユルツ	獨領南亞弗利加の自治	一九〇九	□
八三	仝	獨領南亞弗利加の管理 第二五年	一九〇九	□
八四	シユルンク	漢堡殖民學校論說 第一八卷 獨逸保護領に於ける土人學校	一九一四	□
八五	ウヰーデアン	バグダツトとテヘラン	一九一一	□
八六	デヰギユエ大佐	安南及佛領印度支那	一九〇八	(佛文)

八七	「ボウ」總督報告	一九〇二－一九〇七年間印度支那の形勢 第一卷「ボウ」總督報告	一九〇八	(佛文)
八八	仝	仝上 第二卷「ボウ」總督報告附錄	一九〇八	(佛文)
八九	アンドレ•ルウ	政治上及經濟上より見たる英領香港	一九〇三	(佛文)

(2) 雜誌

九〇(I-IV)	シユモルラア	獨逸帝國立法行政經濟年紀 第三四年 自第一卷至第四卷	一九一〇	□
九一	□	外國に於ける獨逸主義 一九一一年度第九號	□	□
九二(I-II)	□	前兵 第二年第一號及第三號	一九一三	□
九三(I-XI)	獨逸殖民協會	殖民政策殖民法及殖民經濟雜誌 第六年第八號 第七年 第八年第五號	(一九〇四 一九〇五	□
		仝 第九年•第一〇年•第一〇年第五號•第一〇年第六號	(一九〇八 一九一二	□
		仝 第一一年ヨリ[第]一四年迄	(一九〇八 一九一二	□
九四	仝	一九〇七年度獨逸殖民協會年報	一九〇八	□

九五	□	獨逸世界及殖民政策雜誌「大獨逸主義」 第一年第一號	一九一四	□
九六(I-IX)	フオスベルグレコウ	獨亞協會機關雜誌「亞細亞」 第一年－第═號九年迄	(一九〇一 一九〇九	□
九七(I-II)	張繼主幹	民報 第伍號•第六號	明治三九年	(支那文)
九八	□	郵便雜誌 第二〇－二一年	(一九一三 一九一四	□

(ロ) 條約•條件[件例]•制度•規定•豫算•報告

(1) 條約

九九(I-II)	スタウデインガア	獨逸帝國國際條約集 第一•第二卷	一八九五	□
一〇〇	ポシンガア	獨逸貿易及文通條約	一八九二	□
一〇一	□	獨支通商条約理由	一九〇三	□
一〇二	マイヤアス	支那帝國と列國間條約集	一八九七	(英文)
一〇三(I-II)	支那稅務署	支那外國間條約協商集 第一•第二卷	一九〇八	(英文)

(2) 條列[列例]

一〇四	□	海員條列[列例]其他	一八七四	□
一〇五	□	各國殖民地法規集一九〇一二年一〇月發行(第二卷第一號)	一九一二	(佛文)
一〇六	萬國殖民學院	一九一二年「ブラツセル」會議の日々命令錄	一九一二	(佛文)
一〇七	海軍省	保護領法	一九〇一	□
一〇八	□	濟南商埠租建章程	□	(支那文)
一〇九	ブローゼル, キルナア, ワルレット 共著	帝國保險條列[列例]	一九一三	□
一一〇	ブローゼル ワルレット共著	保險條列[列例] 第一卷 a 疾病保險の實施規則と範例	一九一四	□
		仝 第二卷 a	一九一三	□
		仝 第二卷 第三 傷害保險	一九一二	□
		仝 第三卷 a 廢兵保險の實施規則と範列[列例]	一九一三	□
		仝 第三卷 廢兵及遺族保險	一九一四	□
一一一	伯林市參事會	伯林市法第一〇卷: 瓦斯及電燈事項	一九一三	□

い- 14-

一一二(I-III)	□	警察命令集附伯林市警察告示集 自第一卷至第三卷	一九一〇	□
一一三	バルツ	普魯西建築警察法	一九〇〇	□
一一四	ボルン	普魯西土木警察法	一九〇二	□
一一五(I^{ab}-II^{ab})	□	普魯西地上建築管理部地方建築官吏勤務指令	一八九八	□
		仝 附錄	仝	□
一一六	ボルシユト	ミユンヘン建築條令	一八九六	□
一一七	スタインハウザア	ミユンヘン市等級建築條列[列例]	一九〇四	□
一一八	□	公私病院設備建築に關する警察令	一八九八	□
一一九	□	伯林郊外適用建築警察令	一八九二	□
一二〇	□	伯林市建築警察令	一九〇〇	□
一二一	□	地租臺帳及圖面分筆手續法	一八九六	□
一二二	□	地租登記圖面及臺帳改新手續に關する一八八一年十月二十五日の示定	一八九七	□

い- 15-

一二三(I-II)	□	帝國印刷局勤務令 第一•一般事務 第二•會計制度	一九〇五	□
一二四(I-XIII)	內務省	獨逸帝國中央公報 自第二九年至第四一年	(一九〇一 一九一三	□
一二五(I-XI^{ab})	リーボウ, チムマアマン, コエデナア, ゲルストマイヤア	獨逸殖民地立法集 第一•第二編	□	□
		仝 第三編 一八九七－一八九八年	一八九九	□
		仝 第六編 一九〇一－一九〇二年	一九〇三	IV^{ab}二冊アリ
		仝 第七編 一九〇三年	一九〇四	V^{ab}二冊アリ
		仝 第八編 一九〇四年	一九〇五	VI^{ab}二冊アリ
		仝 第九編 一九〇五年	一九〇六	□
		仝 自第一〇編 一九〇六年 至第一三編 一九〇九年	(一九〇七 一九一〇	各^{ab}二冊アリ
一二六(I-X)	海軍省	一八九九－一九〇五年膠州保護領制令報	□	□
		一九〇三－一九一〇年 仝 上	□	□
		一九〇三年 仝 上	□	□

い- 16-

		一九〇四年膠州保護領制令報	□	^{ab}二冊
		一九〇五年 仝 上	□	□
		一九〇六年 仝 上	□	^{ab}二冊

		自一九〇七年　全上　至一九一一年　全上	□	一九〇九年缺四冊
一二七[ab]	□	膠州總督府一般命令	一九〇一	□
一二八(I[a-c]-II[a-c])	□	一九〇〇年度青島官報, 一九〇二年度青島官報	一九〇〇-一九〇三	各三冊
(III[ab])		一九〇三年度青島官報	□	□
(IV[a-c]-V[a-c])		一九〇四年度 全　上 一九〇五年度 全　上	□	各三冊
(VI[ab]-IX[ab])		自一九〇六年度青島官報至一九〇九年度青島官報	□	各二冊
(X-XII)		自一九一〇年度 全 上　至一九一三年度 全 上	□	一九一二年度缺
一二九	山東撫署	山東官報 第三五期第六七册	宣統二年	(支那文)
一三〇[ab]	□	支那礦山條例	一九〇八	□

(3) 制度類

一三一	□	國會要覽	一九〇七	□
一三二	國會事務所	一八九八－一九〇三年國會摘要	一八九八	□
一三三(I-II)	ヘルフルト	普魯西豫算金櫃計算制度 第四卷 旅費日當轉任手當	一九〇五	□
		全 第五卷 恩給災害扶助料	〃	□
一三四(I-II)	ピストル	普魯西衛生制度 第一•第二編	一八九六-一八九八	□
一三五	□	臺灣舊慣制度調查一班	一九〇二	(日本文)
一三六	エンゲル	塊匈國の保稅區域	一九〇六	□
一三七	□	一九一三年度(三月迄の分)露西亞帝國年鑑	一九一三	(露文)
一三八	殖民省秘書官房編纂	一九〇七年度香港民政部一覽	□	(英文)
一三九	支那稅務署	一九〇六年度大清郵政局名	一九〇七	(英支文)
一四〇	遞信省外事局	國際通信に宛てられたる萬國電信局名錄	一九〇四	□
一四一[a-f]	モール	青島全書	一九一四	(支那文)

一四二[a-d]	□	官吏旅費算定に關する停車停船場表	□	□
一四三	アルブレヒト編	官吏旅費日當及階級關係(帝國[,]普魯西及エルザスロートリンゲン地方官吏)	一九一二	□
一四四[a-f]	大藏省	帝國官吏	一九一二	
一四五		缺番		
一四六(I-IV)	イルリング カウツ	普魯西行政官吏提要 第一•二•三•四卷	(二九〇五-一九一三II[ab]二册アリ	
一四七	□	普魯西土地官吏勤務指針	一九〇九	□
一四八	シユルツ	普魯西王國土木管理勤務	一八八八	□
一四九	□	獨逸東亞弗利加總督府 特別及救濟基金事務要覽	□	□
一五〇	□	土地係事務手數料(一九〇九年一二月十六日發布)	一九〇九	□
一五一	シユラーマイヤア	青島港務及港灣管理	一九〇四	□
一五二	ワルタア	官吏の俸給と任用關係	一九一〇	□
一五三	ワルタア	普魯西地方官衙就任及俸給事情	一九一〇	□
一五四	フエヒナア	給料ポケツト辭書	□	□

一五五	□	官吏の給料	一九〇三	□
一五六	□	獨逸及普魯西官吏俸給表	一九〇九	□

一五七[ab]	□	獨逸帝國諸官吏俸給	一九〇三	□
一五八(I-II)	□	獨逸帝國及普魯西官吏俸給表 第一編 普魯西直接官吏俸給令	一九〇九	□
		仝 上 第二編 帝國官吏	一九〇九	□
一五九		缺番		
一六〇(I-IV)	內務省	一九〇二年度・一九一〇年度 一九一一年度・一九一三年度 獨逸帝國職員錄	(一九〇二 一九一三	□
一六一 □		一九一四年度獨逸停年名簿	□	□
一六二 □		一九一一年度普魯西王室竝に帝國職員錄	一九一〇	□
一六三 □		一九〇六年度香港職員錄	□	(英文)
一六四(I-III[abc])	コエニヒ	獨逸領事制度提要 第一, 第二 及全	(一八七八 一九〇九	□
一六五	外務省	獨逸帝國領事錄	一九一一	□

い- 20-

一六六(I-III)	外務省	獨逸帝國領事表 (一九〇九年度) (一九一〇年度) (一九一三年五月)	□	□
一六七	□	海の彼方へ 第一編(公使•領事派遣名簿)	一九一三	□
一六八(I-VI)	□	獨逸帝國陸海軍及殖民省經理官階級名簿 一九〇九•一九一〇•一九一一•不明•一九一二•一九一三年度	一九一二年度ハ V[abc] 三冊アリ	□
一六九(I-III)	支那稅務署	支那稅關職員錄 第二七•二九•三八號	(一九〇一 一九一三 一九〇三 (英支文)	
一七〇(I-IV)	遞信省	帝國郵便區內郵便小切手口座所有者名簿 一九一一•一九一二•一九一三年及同第一追加	□	□
一七一	□	獨逸殖民協會定款	一九〇二	□
一七二	□	獨逸殖民協會部長名簿	一九〇四	□
一七三	□	獨逸サモア(一般紹介及人名錄)	一九一一	□
一七四	ローレンツ	庶務•記錄•官房勤務案內	一八九九	□
一七五	カムマアマイスタア	地方行政勤務實用案內	一九一四	□
一七六[abc]	ツムマツハ	自修文庫 公文書の栞	一九〇五 一九一三	□
一七七[abc]	□	普魯西官廳用公文書正字表	一九〇三	□

い- 21-

(4) 規定

一七八	□	帝國官吏官舍規定	一九〇三	□
一七九	□	帝國中央金庫事務規定	一九〇三	□
一八〇	□	帝國印刷局會計規則	一九〇六	□
一八一	□	王國山林保安勤務に於ける準備及任用規定	□	□
一八二	オツタアマン	家屋建築線規則[? 定?]	一八九七	□
一八三	□	伯林市內足場及軌道設置規定	一八八八	□
一八四	□	カールスルーエ建築警察規定	一九一二	□
一八五	□	獨逸商品關稅表	一八九五	□
一八六[ab]	□	獨逸領東亞弗利加總督府主金庫, 特別及補助金庫一般規定	□	□
一八七	□	獨領東亞弗利加總督府[主金庫,]?特別及補助金庫勤務規定	□	□
一八八[ab]	海軍省	膠州保護領及東亞~~弗利加~~派遣隊豫算中の給料規則	一九一〇	□

い- 22-

一八九	□	青島港灣規則	一九〇八 (獨支文)	

一九〇	▭	青島埠頭局諸規定	一九〇八	▭
一九一[a-t]	▭	膠州灣總督府諸規定•膠州殖民地管理諸規定•膠州守備諸規定•膠州官報•ABC目錄	一九〇四	▭
一九二(I[a-m]-XIII[a-f])海軍省		膠州保護領行政規定集	一九〇三	I[a-m]
		仝 上 竝に追加(一九〇三－一九〇九)	▭	II[a-i]
(I[a-m]-XIII[a-f])海軍省		仝 一九〇三年度附錄第二編	一九〇四	III[a-g]
		仝 一九〇四年度追加第一編	一九〇五	IV[a-g]
		仝 第二編	〃	V[a-c]
		仝 一九〇五年度追加第一部	一九〇六	VI[a-g]
		仝 第二部	▭	VII[a-j]
		仝 一九〇六年度追加第一部	▭	VIII[a-g]
		仝 第二部	▭	IX[a-f]

一九二(I[a-m]-XIII[a-f])海軍省		膠州保護領行政規定集 一九〇七年度追加第一部	一九〇八	X[a-e]
		仝 第二部	〃	XI[a-c]
		仝 一九〇八及一九〇八年度追加第一部	一九一〇	XII[a-c]
仝		仝 第二部	〃	XIII[a-f]
一九三[1-32]	▭	膠州總督府主要規定集	一九〇四	▭
一九四[a-i]	▭	膠州總督府一般規定集	一九〇九	▭
一九五	香港英國政廳	公共衛生及建築規定	一九〇三	(英文)

(5) 豫算

一九六(I-XXI)	▭	一九〇〇年度獨逸帝國豫算 第一, 及第二卷	一八九九	I, II
		一九〇一年度 仝 上	一九〇一	III
		一九〇四年度 仝 上	一九〇四	IV

		一九〇六年度 仝 上 第一, 及第二卷	一九〇五	V, VI
		一九〇七年度 仝 上 第一, 及第二卷	一九〇六	VII, VIII
		一九〇八年度 仝 上 第一, 及第二卷	一九〇七	IX[ab], X[ab]
		一九〇九年度 仝 上 追補	▭	XI
		一九一〇年度 仝 上 第一, 及第二卷	一九〇九	XII[ab], XIII[ab]
		一九一一年度 仝 上 第一, 及第二卷	一九一〇	XIV[ab], XV
		一九一二年度獨逸保護領豫算案	一九一二	XVI
		一九一二年度獨逸帝國豫算案 第一, 及第二卷	一九一二	XVII, XVIII
		一九一三年度 仝 上 第一卷	一九一二	XIX
		一九一四年度 仝 上 第一, 及第二卷	一九一三	XX, XXI
一九七(I-III)	▭	一九〇六年度國家歲計豫算及同附錄 第一卷及第二卷	▭	▭
一九八	▭	一九〇七年度帝國內務省豫算	▭	▭

一九九	▭	一九〇七年度帝國郵傳信行政豫算	▭	▭
二〇〇	▭	一九〇七年度一般恩給基金豫算	▭	▭
二〇一	▭	一九〇七年度帝國廢兵基金豫算	▭	▭
二〇二	ヘルフルト	普魯西豫算制	一九〇五	▭
二〇三	▭	一八九三－九四年度「カメルン, ト[一]ゴ」西南亞弗利加豫算	▭	▭

	一八九七－九九年度保護領豫算 一九〇〇年度膠州豫算		
二〇四(I-XVIII) ▭	一九〇〇－〇一年度獨逸保護領豫算(東亞弗利加 缺)	▭	I
	一九〇二－〇三年度獨逸保護領豫算	▭	II
	一九〇三年度 仝 上	一九〇二	III
	一九〇四－〇五年度 仝 上	▭	IV
	一九〇五年度 仝 上	一九〇四	V
	一九〇六年度 仝 上	一九〇五	VI[ab]
	一九〇~~七年~~六－〇七年度 仝上	▭	VII
			い-26-
	一九〇七年度獨逸保護領豫算	一九〇六	VIII
	一九〇八年度 仝 上	一九〇七	IX[a-e]
	一九〇八－〇九年度 仝 上	▭	X
	一九〇九年度 仝 上 一九一〇年度 仝 上	一九〇八 一九〇九	XI[ab],XII[abc]
	一九一〇－一一年度 仝 上 一九一一年度 仝 上	一九一〇	XIII,XIV
	一九一二年度 仝 上 一九一二－一三年度 仝 上	一九一二	XV,XVI
	一九一三年度 仝 上 一九一四年度 仝 上	一九一二 一九一三	XVII[ab],XVIII
二〇五(I-II) ▭	一九一〇－一九一一年度獨逸保護領豫算計算書	▭	▭
	一九一一年度 仝 上	▭	▭
二〇六(I[ab]-II[abc]) ▭	一九〇〇年度帝國豫算に依る帝國官吏給料明細表	一九〇〇	▭
	一九〇四年度豫算に於ける帝國及殖民地官吏給料表	一九〇四	▭
二〇七 ▭	一九〇二年度香港殖民地豫算	▭	(英文)
			い-27-
二〇八(I-XIII) 上海市會	一八九六年度報告 一八九七年度豫算	一八九七	(英文)
	一八九八年度 仝 一八九九年度 仝 (英文)	一八九九	II
	一八九九年度 仝 一九〇〇年度 仝 〃	一九〇〇	III
	一九〇〇年度 仝 一九〇一年度 仝 〃	一九〇一	IV
	一九〇一年度 仝 一九〇二年度 仝 〃	一九〇二	V
	一九〇三年度 仝 一九〇四年度 仝 〃	一九〇四	VI
	一九〇四年度 仝 一九〇五年度 仝 〃	一九〇五	VII[ab]
	一九〇五年度 仝 一九〇六年度 仝 〃	一九〇六	VIII[ab]
	一九〇六年度 仝 一九〇七年度 仝 〃	一九〇七	IX
	一九〇七年度 仝 一九〇八年度 仝 〃	一九〇八	X
	一九一一年度 仝 一九一二年度 仝 〃	一九一二	XI
	一九一二年度 仝 一九一三年度 仝 〃	一九一三	XII
			い-28-
	一九一三年度報告 一九一四年度豫算 (英文)	一九一四	XIII

(6) 報告

二〇九 ▭	第二回ハーグ平和會議結果	一九〇八	▭
二一〇(I-XXXVII) ▭	獨逸帝國議會議事錄 自第二五八卷 至第二九〇卷 (三三卷)	自一九一〇 至一九一三	I-[X]XXIII
	仝 第一 －第三五一	一九一二	XXXIV
	仝 第三五二－第五三三	〃	XXXV
	仝 第五三四－第六五二	(一九一三 一九一三	XXXVI
	仝 第六五三－第九六五	〃	XXXVII
二一一[abc]	帝國議會議事速記錄, 一九〇三 - 〇四年度會期	一九〇四	▭
二一二(I-III) 帝國統計局	一九一〇年度 獨逸帝國統計年報 第三一年	一九一〇	I

		一九一一年度 仝	第三二年	一九一一	II
		一九一二年度 仝	第三三年	一九一二	III

い-29-

二一三	□	一九〇一－〇五年間 帝國郵便電信事項管理報告		一九〇六	□
二一四(I-V)	□	獨逸保護領報第二〇•二一•二四•二六•二七卷 {一九〇七, 一九〇八－一一, 一九一三－一四			□
二一五(I^{a-f}-XII)	□	一九〇一－〇二年度 亞弗利加及南洋獨逸保護領年報		一九〇三	I^{a-f}
		一九〇一年度 仝	上 附圖[?圖錄?]	□	II
		一九〇二－〇三年度 仝	上	一九〇四	III
		仝	上 附錄	□	IV^{a-f}
		一九〇三－〇四年度 仝	上	一九〇五	V^{abc}
		一九〇四－〇五年度 仝	上	一九〇六	VI^{abc}
		仝	上 附錄	〃	VII
		一九〇五－〇六年度 仝	上	□	$VIII^{abc}$
		仝	上 附錄	一九〇七	IX^{abc}
		一九〇六－〇七年度 仝	上	一九〇八	X

い-30-

		一九〇七－〇八年度 亞弗利加及南洋獨逸保護領年報		一九〇九	XI
		一九〇八－〇九年度 仝	上	□	XII
二一六	□	獨逸殖民地協會獨逸保護領寫眞帖說明		一九〇五	□
二一七	□	一九一一－一二年亞弗利加及南洋に於ける獨逸保護領(帝國殖民省年報)		一九一三	□
二一八(I-II)	□	一九〇七－〇八年度膠州年報, 一九〇八－〇九年度 仝		(二九〇九 二九一〇	□
二一九^{ab}	□	獨逸膠州領測量圖及統計表		一八九九	□
二二〇	□	一九〇七年度帝國印刷局營業報告		一九〇八	□
二二一	□	一九一〇年獨逸拓殖會議々事錄		一九一〇	□
二二二	岡松法學博士	臺灣法律及習俗研究臨時報告		一九〇〇	(英文)
二二三(I^{ab}-V)	□	殖民地年報 第三八八號 威海衛(一九〇二年度) (英文)		一九〇三	I^{ab}
		仝 第四五〇號 仝 (一九〇四年度) 〃		一九[〇五]?	II
		仝 第六三七號 仝 (一九〇九年度) 〃		一九一〇	III

い-31-

		殖民地年報 第□□八號 威海衛(一九一〇年度) (英文)		一九一一	IV
		仝 第七五七號 仝 (一九一二年度) 〃		一九一三	V
二二四(I, IV)	□	一九〇九年度ヨリ一九一二年度迄各香港政廳報告		(一[(═□]?	(英文)
二二五(I-XI)	□	自一九〇三年度香港市議會報告書 至一九一三年度仝		自一九〇四 至一九一四	(英文)
二二六	□	一九〇七年度朝鮮發達年報		一九〇八	(英文)
二二~~六~~七(^{ab}	□	獨逸殖民協會西南亞弗利加事業概覽(一八八五－一九〇六)		一九〇六	□
二二八(I-II)	□	一九〇七年五月廿二日獨逸殖民協會部長會議報告		一九〇七	□
		一九〇七年十二月六日 仝		□	□
二二九(I^{a-n}-II^{a-m})	□	獨逸殖民協會青島部第八年報, 仝 第九年報		一九一〇 一九一一	□

(ハ) 社會運動

二三〇	□	「國民母屋」沿革	一八九〇	□
二三一	ダマシユケ	土地改良	□	□

二三二	□	火葬に對する現代の贊成者	□	□
二三三	□	一九一二年度獨逸語[國民]?協會國民?第二年報	□	同種ノ
二三四	□	獨逸語國民火葬協會第三年報	一九一三	モノナリ
二三五	フツクス	社會政策協會記事 第一二八編 共同事業 第一卷	一九〇八	□
二三六	ワイス	警察學校	一九一〇	□
二三七	ヘン	青島義勇消防隊演習書	一九〇二	□
二三八	□	キール消防隊司令部第四年報	一九〇一	□
二三九[ab]	勞働者保護會	徒弟勞働者指針	一八八四	□
二四〇[abc]	仝	既婚勞働者指針	一八八四	□
二四一	□	青年獨逸—覽同盟一覽	□	□
二四二	□	青年獨逸同盟通知第一號	一九一四	□
二四三[ab]	青年獨逸協會「大伯林」	一九一三年度青年獨逸報	一九一二	□

(二) 法律

(イ) 法律學, 法典

(1) 法律學

番號	著譯者名	書名	發行年代	註
二四四	□	フエヒナア法律文庫: 法律辭典	一九〇六	□
二四五	カール•ベルグボーム	法理學と法律哲學 第一卷	一八九二	□
二四六	イエリネク	近代の國法: 第一卷 一般國法	一九〇五	□
二四七[ab]	オツタアマン フエヒナア	フエヒナア法律文庫[:] 立法及國家組織	一九〇四 一九〇九	□
二四八		缺番		
二四九[ab]	フライシユマン	國家法源	一九〇五	□
二五〇	フアギユソン	國際法提要 第二卷	一八八四	□
二五一(I-II)	シユミツツワ ウキツヒマン	國際的結婚 第一•第二卷	□	□

二五二(I-IV[])	レスケ ロエウエンフエルト	國際交通に於ける權利追[追遂?]行 自第一卷 至第四卷	(一八九五 一九〇五	□
二五三	サベルスキイ	殖民地の內國及外國觀念	一九〇七	□
二五四	エンゲルハルト	公民の權利義務	一九一二	□
二五五[ab]	ペレルス	現代世界海上法	一九〇三	□
二五六	アイヒハイム	實體的刑法	一九〇四	□
二五七[abc]	ダルケ	刑法と刑事訴訟	一九〇二 一九〇八	□
二五八	シタイン	司法と行政との境界及關係	一九一二	□
二五九	□	徵稅に對する訴願	□	□
二六〇	ゼスト	破產判事提要	一九〇〇	□
二六一	アルバヌス	私成遺言及軍人遺言	一九〇一	□

(2) 法典

二六二(I-III[ab])	グローテフエンド	普魯西普[普竝]に獨逸帝國の法文適用及解釋に關する布告 第一卷•第二卷•第三卷		(一八九五 一九〇二 一八九六	第三卷ハ 二册
二六三[abc]	リエドルフ	グツテンターク法律集 第二: 獨逸帝國刑法々典		一九〇三	□
二六四[ab]	ヘルウエヒ	仝	刑事訴訟法	一九一二	□
二六五	ヘルツ エルンスト	仝	獨逸帝國陸軍刑法	一九〇三	□
二六六	クニチユキイ ルドルフ	仝	第一九: 海上法	一九一三	□
二六七	ツオルン	仝	獨逸帝國領事法	一九〇一	□
二六八	シメオン	仝	普魯西裁判所費用法	一九〇八	□
二六九[a-d]	アヒレス ヤツツオウ	仝	第三八•第三九: 民法法典	(一八九八 一九〇三	□
二七〇[a-d]	シイドウ プツシユ	グツテンターク法律集 民事訴訟法附裁判所構成法		(一九〇一 一九一三	□
二七一	シイドウ プツシユ	仝	第一三[:] 破產法	一九〇〇	□

い-36-

二七二	クレツヒ フキツシヤア	仝	第四三: 不動產强制執行に關する法律	一九〇〇	□
二七三[ab]	ピーパア	仝	帝國官吏法	一九〇一	□
二七四	デリユス	仝	官吏責任義務法	一九〇九	□
二七五	ストランク ロエク	仝	第五: 手形法と手形印紙稅法	一九〇九	□
二七六	シイドウ プツシユ	仝	第一七[:] 辯護士手數料規則	一九一〇	□
二七七[ab]	ブルクハルト	仝	第五六一: 一般危險の疾病豫防に關する法律	一九〇〇	□
二七八	フエヒナア	フエヒナア法律文庫 獨逸法律集		一九〇〇 - 〇五	□
二七九	□	仝	帝國司法々規	□	□
二八〇	□	仝	帝國裁判所法及普魯西施行法	□	□
二八一	□	仝	普魯西行政法規 第五卷第二部	一九〇五	□
二八二[ab]	□	仝	民法及商法々典	一九〇六 一九〇四 - 〇五	□
二八三	□	仝	官吏法	一九一一	□

い-37-

二八四	□	フエヒナア法律文庫 官吏法續編		一九一二	□
二八五	□	仝	普魯西官史[~~史~~吏]給料法施行法	□	□
二八六	□	仝	社會政策法	□	□
二八七	□	仝	陸海軍新恩給法	一九〇六	□
二八八[abc]	□	仝	租稅法施行規則(第六卷: 第二附錄第一號)	一九〇七 一九〇九	□
二八九	□	仝	印紙稅法	□	□
二九〇	□	仝	租稅法印紙稅法施行規則	一九一〇	□
二九一	□	仝	雜法律續	□	□
二九二	□	仝	補遺續々: 保儉[儉險]契約法	□	□
二九三[ab]	□	仝	補遺	□	□
二九四	□	仝	補遺續編	一九一二	一九一二
二九五[abc]	□	仝	第一一版第一[:] 補充篇	一九〇七	一九〇七

い-38-

二九六[abc]	□	フエヒナア法律文庫 第二[:] 追補篇		一九〇七	□

二九七	□	仝	普魯西法律第一卷第二補遺	一九一一	□
二九八[a-e]	ボエム ゾンタッハ	仝	普魯西印紙稅法	一九一〇	□
二九九[abc]	仝	仝	追加	一九一〇	□
三〇〇(I-III)	ラバンド	獨逸帝國々法 第一卷•第二卷•第三卷		一九〇一	□
三〇一	アンシユツツ ド•ホウ	普魯西內政機關構成法		一九〇八	□
三〇二	スタンデインガア シユミツト	刑法々典		一九一一	□
三〇三(I-II)	オルスハウゼン	獨逸帝國刑法々典註解釋[?釋解?] 第一卷•第二卷		一八九七	□
三〇四	シテングライン其他	刑法の附屬法註釋		一九〇三	□
三〇五	ゾルム	刑法及刑事訴訟法		□	□
三〇六	オルスハウゼン	帝國刑事立法 第二卷[:] 裁判所構成所[所法]と刑事訴訟法		一九〇五	□
三〇七	ロエウエ	獨逸帝國刑事訴訟法		一九〇七	□

三〇八	□	民法々典		一九一〇	□
三〇九	ゲブハルド ルツツ	獨逸帝國民法々典		□	□
三一〇(I-III)	ノイマン	獨逸民法 第一卷•第二卷•第三卷		一九〇三	□
三一一	□	民法補充規法		一九一一	□
三一二	□	獨逸帝國民事訴訟法		□	□
三一三	ベルンイ[~~チ~~ハ]ルデイ	債務者法律行爲の取消請求に關する法律		一九〇三	□
三一四	□	身分及結婚登記規則		一九〇三	□
三一五	ローメン	國籍法		一九一三	□
三一六	デリユス	國籍法		一九一三	□
三一七	ケルラア トラウトマン	千九百十三年七月二十二日發布帝國竝に聯邦國籍法註釋		一九一四	□
三一八	アルフエルド	造形藝術及寫眞作物著作權に關する法律		一九〇七	□
三一九	ハーン	獨逸傷害保險法 第一卷		一九〇一	□

三二〇	□	社會政策的法律 第二卷[:] 傷害保險法		□	□
三二一	デユツトマン	在官者に對する保險法註解		一九一三	□
三二二	フロムヘルツ	責任法		一九一三	□
三二三	□	裁判醫檢死手續規定		一九〇五	□
三二四	フオルスタア	普魯西免許醫師及齒科醫師手數料規定		一九〇一	□
三二五	□	裁判醫勤務規定		一九〇五	□
三二六(I-II)	シタウブ	商法註解 第一卷•第二卷		(一九〇六 一九〇七	□
三二七	チイバルト	山林法		一八八九	□
三二八[ab]	シヤツプス	獨逸海上法		一九〇六	□
三二九[ab]	ブロードアン	獨逸帝國海上法		一九一三	□
三三〇	クユチユキイ	獨逸帝國海上法		一九一三	□
三三一[a-i]	海軍省	獨逸保護領法		一九〇一	□

三三二	ホフマン	獨逸殖民地法		一九一一	□
三三三	ゲルストマイヤア	保護領法		一九一〇	□

三三四	ホエツプフナア	保護領法註解	一九〇七	□
三三五	□	獨逸殖民地立法集 第九卷(一九〇五年度)	一九〇六	□
三三六	ザツセン	獨逸殖民地軍事法	一九一一	□
三三七	ラインエツケ	獨逸保護領の財政法	一九一二	□
三三八[abc]	□	一九〇七年五月發布帝國官吏法草案	□	□
三三九	シユルツエ	帝國官吏法	一九〇八	□
三四〇[a-d]	ブランド	獨逸帝國法律第一: 帝國官吏法	(一九〇二 一九〇七	□
三四一[abc]	ロムベルグ	殖民地官吏法	□	□
三四二	ヘルフルト	普魯西官吏法	一九〇五	□
三四三[abc]	ローレンツ	官吏便覽「官吏法•憲法其他」	(一九〇二 一九〇三	□

三四四	□	一九一三年度獨逸帝國豫算決定に關する法律案補遺	□	□
三四五	ダルホト	普魯西法律註解附錄[:] 第一〇[•]第一一年內容目錄	□	□
三四六[ab]	アラバスタア	支那刑法註解[illegible]釋	一八九九	(英文)
三四七[abc]	德華學堂	中德法律彙覽 第九門第三號[:] 中華民國々會組織法[•]衆議院議員選舉法	一九一三	(獨支文)
三四八[abc]	仝	仝 第四門第二號[:] 中華民國刑法草案	□	(獨支文)
三四九	□	帝國(聯邦)法令集目錄(一八六七－一九〇六年)	□	□
三五〇	□	一八七〇年度北獨逸同盟法令集	□	□
三五一(I-XLVI[])	□	自一八七一年度至一八八六年度 帝國法令集	□	I-XVI
		自一八八八年度至一八九六年度 仝 上	□	XVII-XXV
		一八九六年度 帝國法令集(第廿一號法令)	□	XXVI
		自一八九七年度至一八九[illegible]八年度 仝 上	□	XXVII-XXVIII
		一八九八年度 帝國法令集(第廿五號法令)	□	XXIX

		自一八九九年度至一九〇〇年度 帝國法令集	□	XXX-XXXI
		自一九〇一年度至一九〇三年度 仝 上	各二册	XXXII[ab]-XX[X]IX[illegible][ab]
		一九〇四年度 仝 上	□	XXXV
		自一九〇五年度至一九〇六年度 仝 上	各二册	XXXVI-XXXVII
		一九〇七年度 仝 上	□	XXXVIII
		自一九〇八年度至一九〇九年度 仝 上	各二册	XXXIX[ab]-XL[ab]
		自一九一〇年度至一九一一年度 仝 上	□	XLI-XLII
		自一九一二年度至一九一三年度 仝 上	各二册	XLIII[ab]-XLIV[ab]
		一九一四年度 仝 上	□	XLV
		帝國法令集 第五號特別附錄	□	XLVI
三五二	グローテフエンド	一八〇六－一八九九年普魯西及獨逸法令集 內容目錄	一九〇〇	□
三五三(I-IV)	仝	一八〇六－一八九九年普魯西及獨逸法令集 第一卷•第二卷•第三卷•第四卷	一九〇〇	□

三五四	グローテフエンド	一八〇六－一八九九年普魯西及獨逸法令集 補遺卷	一九〇〇	□
三五五	仝	一八〇六－一八九五年普魯西及獨逸法文集 索引及條約目錄	一八九六	□
三五六(I-IV)	仝	一八〇六－一八九五年普魯西及獨逸法文集 第一•第二•第三•第四編	一八九六	□
三五七	仝	仝 補遺編	一八九九	□
三五八(I-LV)	□	自一八六〇年至一九〇〇年度 普魯西法令集	□	I-XLI, 二册

		自一九〇一年至一九一三年度	仝	上	□ XLII[ab]-LIV[ab]
		一九一四	仝	上	□ LV
三五九(I-III)	キヤリントン	香港の法令 第一卷•第二卷•第三卷 年代及索引			(一九〇二 一九〇四 (英文)
三六〇	ボウレイ	香港法令集 年代順目錄(一九〇二－一九〇八)			一九〇九 (英文)
三六一(I-XVII)	□	自一八九一年度至一九〇七年度 香港法令集(一九〇〇年度 X[ab] 二册アリ) □			(英文)
三六二(I-II)	アラバスタア	香港の法律 第一卷[:]一八四四－一九〇〇年の法令			一九一三 (英文)
		仝	第二卷[:]一九〇一－一九一二年の法令		〃 〃

い- 45-

三六三	アラバスタア	香港の法律 年代表及索引			一九一三 (英文)
三六四[I-II]	リーチ	香港立法議會法令集 第一卷•第二卷			(一八九一 一八九三 (英文)

(ロ) 評論, 雜誌

三六五	□	倫敦海戰法會議結果報(一九〇八年)			□ (佛獨文)
三六六	カーン	國籍の得喪に關する帝國法律			一九〇八 □
三六七	□	獨逸保護領に於ける法的關係に關する帝國議會議事錄(一八八五 一九〇〇 □			□
三六八	ミユンスタアマン	獨逸殖民地に於ける皇帝の法律上の地位			一九一一 □
三六九	シテンゲル	獨逸殖民地の法的關係			一九〇一 □
三七〇	フライシユマン	獨逸殖民地法に從ふ引渡と追跡			一九〇六 □
三七一	シユリム	獨逸殖民地に於ける土地所有權			一九〇五 □
三七二	リユーダアス	獨逸殖民地狩獵權			一九一三 □

い- 46-

三七三	ハールハウス	獨逸殖民地官吏の權利			一九一二 □
三七四	ゲルラア	獨逸殖民地官吏法論			一九一一 □
三七五	マルマン	獨逸殖民地に於ける權利と義務			一九一三 □
三七六		缺番			
三七七[a-k]	テツシユ	獨逸殖民地官吏の權利義務			(一九〇三 一九一三 □
三七八	クロエナア	帝國及聯邦に於ける官吏の責任義務			一九一一 □
三七九	ハウスホーフアア	獨逸國民公生活須知			□ □
三八〇	ピルツ	傭主と被傭人			一八九八 □
三八一	シメオン	獨逸帝國法律及訴訟手續 第二卷[:]任意及訴訟裁判權			一九一三 □
三八二	ダンデ	軍人の民法關係			一八八七 □
三八三	□	日本關稅法と稅率			一九一〇 □
三八四	プロコウデツク譯	アンソンバート著英國契約法の特徵			一九〇八 □

い- 57-

三八五	ベツツ	伯林比較法學及國民經濟學國際協會年誌「支那の法律」			□ □
三八六[ab]	フランケ	支那に於ける土地所有權事情			一九〇三 □
三八七	クルーゼン	膠州殖民地に於ける支那人の法律上の地位			一九一三 □
三八八	ピエール[•]ホワン譯註	支那に於ける不動產に關する專門的解釋			一八九七 □
三八九	ウヰリヤムス	商業鐵道•礦山事業に關する支那新法制			一九〇四 □
三九〇	ランドマン	支那に於ける歐洲商業殖民地			一九一一 □

三九一	ピエール•ホワン(支那人宣教師)譯註	法律上より見たる支那の結婚	一八九八	(佛文)
三九二	ブルーメ	民法研究雜誌 第一一二號	一九一四	〃
三九三	〃	大審院民事判決例 第二卷	一八八〇	〃

い- 58-

(三) 經濟

(イ) 經濟學, 評論

(1) 經濟學

三九四	フツクス	國民經濟學	一九〇一	〃
三九五(I-II)	シユモルラア	國民經濟通論 第一編•第二編	(一九〇四 一九〇八	〃
三九六		缺番		
三九七	ビユーヒヤア	國民經濟の成立	一九一〇	〃
三九八(I-V)	ロツシヤア	國民經濟論 第一卷[:] 國民經濟の基礎	一九〇六	I
		仝 第二卷[:] 農業經濟	一九〇三	II
		仝 第三卷[:] 商工業經濟	一八九九	III
		仝 第四卷[:] 財政經濟論	一九〇一	IV[ab]
		仝 第五卷[:] 救民及貧民政策論	一九〇六	V

い- 59-

三九九(I-II)	シユモルラア	第十九世紀に於ける獨逸國民經濟の發達 第一編•第二編	一九〇八	〃
四〇〇	デイツエル	理論社會經濟學 第一卷	一八九五	〃
四〇一(I-III)	ボエムバワーク	資本と資本利子 第一部[:] 資本利子說の沿革と評論	一九〇〇	〃
		仝 第二部[:] 積極資本論 前卷•後卷	一九一二	II, III
四〇二	ワグナア	政治經濟學基礎 第二編	一八九四	〃
四〇三(I-II)	ブーヘンベルガア	實用國民經濟論 第二編[:] 農業制度と農業政策 第一卷•第二卷	(一八九三 一八九三	〃
四〇四	シヨエンハイダア	農業收益其他	〃	〃
四〇五	ヘルフエリヒ	貨幣	一九〇三	〃
四〇六(I-IV)	ワグナア	財政學 第二編, 第三編[:] 第一卷•第二卷, 第四編[:] 第二卷	(一八九〇 一九一三	〃
四〇七	ヴアンデアボルグド	商業と商業政策	一九〇七	〃
四〇八	ヘルフルト	金櫃及會計制度	一九〇五	〃
四〇九	ゲールケ	國家の財政難と其發展策其他	〃	〃

い- 60-

四一〇	クリユーガア	獨逸組合制度	一九〇七	〃
四一一[abc]	ト?ームホルン	小切手(獨逸郵便小切手)	一九一〇	〃

(2) 評論

四一二	デーン	來る可き經濟政策	一八九八	〃
四一三	シヤハナア	佛國貯金制度其他	一九一〇	〃
四一四	ヘルビヒ	ザールブリユツケン附近官營炭坑の賃金其他	〃	〃
四一五	殖民經濟委員會	工業及勞働社會に對する吾が殖民經濟	一九〇九	〃
四一六	仝	吾が殖民經濟	一九一四	〃
四一七	ドーヴエ	獨逸殖民地 第一: ト[一]ゴとカメルン	一九〇九	〃
四一八	バルト	我保護領の經濟	一九一〇	〃

四一九	パウル•デーン	經濟政策の眼より見たる獨逸國と東洋 第一編[:] 東洋へ	一八八四	□

い- 61-

四二〇	支那人 ニヨク•チン•ワル	寧波に於ける營業形態	一九〇九	□
四二一	エテイヌネ	支那に於ける獨逸の經濟關係	一九〇四	□
四二二	シユラアマイヤア	膠州灣に於ける~~獨逸の~~經濟的發達の基礎	□	□
四二三[a-e]	ベツツ	青島開市以來山東省の經濟的發展(一八九八－一九一〇)	一九一一	□
四二四	ヒルデブランド	國民經濟及統計年報 第三項 第三九卷	一九一〇	□

(ロ) 報告

四二五	□	一九〇八年六月於巴里開催第五回萬國綿糸紡績會社代表者會議	□	(英文)
四二六(I[ab]-III[ab])	□	一九〇七年二月上海萬國鴉片委員會報告 第一編[•]第二編	□	(英文),I•II, 各二册
		鴉片に關する萬國會議(一九一一年一二月一日－一九一二年一月二十三日)		(佛文),III[ab]
四二七(I-III)	日本大藏省	日本財政經濟年報 第一一年•第一二年•第一三年	(一九一二-一九一三)	□
四二八	フオン•デア•ハイト	一九一九年度殖民地事業年鑑	□	□

い- 62-

四二九[abc]	□	殖民經濟委員會幹部會報 一九一三年一二月, 第一號	一九一三	□
四三〇(I[ab]-III[ab])	□	殖民經濟委員會油脂材料部會報	一九一三	□
		仝 綿花部會報	一九一〇	II[ab]
		仝 仝 上	一九一三	□
四三一[ab]	英國總領事ホシイ	四川省報告	一九〇四	(英文)
四三二	□	一八九八年東西派遣經濟委員商品見本集錄	□	□
四三三	山東鐵道會社	一九〇六年度營業報告 第八年	□	□
四三四	支那稅務署	鴉片: 支那の罌子粟沿革	一八八九	(英支文)
四三五	仝	未製及精製鴉片	一八八八	(英文)
四三六	仝	漢口及揚子江諸港ヨリ輸出したる藥材表	一九〇九	(英文)
四三七	仝	黃河註記	一九〇六	(英文)
四三八	仝	鐵道と內地賦稅	□	(英文)

い- 63-

四三九	支那稅務署	廣東諸港輸出手續假規則	一八九七	(英文)
四四〇	仝	支那の不完[完換][?]通貨	一八九七	(英支文)
四四一	仝	東南滿洲に於ける天然養蠶法	一九〇八	(英文)
四四二	仝	滿洲の大豆	□	(英文)
四四三(I[ab]-LXI[ab])	仝	稅關公報 統計篇第一二〇號(一八九八年第四期) (英文)	一八九九	□
		第一二一號(一八九九年第一期) 〃	〃	II[ab]
		第一二二號(〃 年第二期) 〃	〃	III[ab]
		第一二三號(〃 年第三期) 〃	〃	IV[ab]
		第一二四號(〃 年第四期) 〃	一九〇〇	V[ab]
		第一二五號(一九〇〇年第一期) 〃	〃	VI[ab]
		第一二六號(〃 年第二期) 〃	〃	VII[ab]
		第一二七號(〃 年第三期) 〃	〃	VIII[ab]

い- 64-

四四三(I^{ab}-LXI^{ab}) 支那稅務署 稅關公報 統計篇第一二八號(一九〇〇年第四期) (英文) 一九〇一 IX^{ab}
第一二九號(一九〇一年第一期) 〃 〃 X^{ab}
第一三〇號(〃 年第二期) 〃 〃 XI^{ab}
第一三一號(〃 年第三期) 〃 〃 XII^{ab}
第一三二號(〃 年第四期) 〃 一九〇二 $XIII^{ab}$
第一三三號(一九〇二年第一期) 〃 〃 XIV^{ab}
第一三四號(〃 年第二期) 〃 〃 XV^{ab}
第一三五號(〃 年第三期) 〃 一九〇三 XVI^{ab}
第一三六號(〃 年第四期) 〃 〃 $XVII^{ab}$
第一三七號(一九〇三年第一期) 〃 〃 $XVIII^{ab}$
第一三八號(〃 年第二期) 〃 〃 XIX^{ab}
第一三九號(〃 年第三期) 〃 〃 XX^{ab}

い- 65-

四四三(I^{ab}-LXI^{ab}) 支那稅務署 稅關公報 統計篇第一四〇號(一九〇三年第四期) (英文) 一九〇四 XXI^{ab}
第一四一號(一九〇四年第一期) 〃 〃 $XXII^{ab}$
第一四二號(〃 年第二期) 〃 〃 $XXIII^{ab}$
第一四三號(〃 年第三期) 〃 〃 $XXIV^{ab}$
第一四四號(〃 年第四期) 〃 一九〇五 XXV^{ab}
第一四五號(一九〇五年第一期) 〃 〃 $XXVI^{ab}$
第一四六號(〃 年第二期) 〃 〃 $XXVII^{ab}$
第一四七號(〃 年第三期) 〃 〃 $XXVIII^{ab}$
第一四八號(〃 年第四期) 〃 一九〇六 $XXIX^{ab}$
第一四九號(一九〇六年第一期) 〃 〃 XXX^{ab}
第一五〇號(〃 年第二期) 〃 〃 $XXXI^{ab}$
第一五一號(〃 年第三期) 〃 〃 $XXXII^{ab}$

い- 66-

四四三(I^{ab}-LXI^{ab}) 支那稅務署 稅關公報 統計篇第一五二號(一九〇六年第四期) 〃 一九〇七 $XXXIII^{ab}$
第一五三號(一九〇七年第一期) 〃 〃 $XXXIV^{ab}$
第一五四號(〃 年第二期) 〃 〃 $XXXV^{ab}$
第一五五號(〃 年第三期) 〃 〃 $XXXVI^{ab}$
第一五六號(〃 年第四期) 〃 一九〇八 $XXXVII^{ab}$
第一五七號(一九〇八年第一期) 〃 〃 $XXXVIII^{ab}$
第一五八號(〃 年第二期) 〃 〃 $XXXIX^{ab}$
第一五九號(〃 年第三期) 〃 〃 XL^{ab}
第一六〇號(〃 年第四期) 〃 一九〇九 XLI^{ab}
第一六一號(一九〇九年第一期) 〃 〃 $XLII^{ab}$
第一六二號(〃 年第二期) 〃 〃 $XLIII^{ab}$
第一六三號(〃 年第三期) 〃 一九一〇 $XLIV^{ab}$

い- 67-

四四三(I^{ab}-LXI^{ab}) 支那稅務署 稅關公報 統計篇第一六四號(一九〇九年第四期) (英文) 一九一〇 XLV^{ab}
第一六五號(一九一〇年第一期) 〃 〃 $XLVI^{ab}$
第一六六號(〃 年第二期) 〃 〃 $XLVII^{ab}$
第一六七號(〃 年第三期) 〃 〃 $XLVIII^{ab}$
第一六八號(〃 年第四期) 〃 〃 $XLIX^{ab}$
第一六九號(一九一一年第一期) 〃 一九一一 L^{ab}
第一七〇號(〃 年第二期) 〃 〃 LI^{ab}
第一七一號(〃 年第三期) 〃 〃 LII^{ab}

第一七二號(〃 年第四期) 〃 一九一二 LIII[ab]
第一七三號(一九一二年第一期) 〃 〃 LIV[ab]
第一七四號(一九一二年第二期) 〃 〃 LV[ab]
第一七五號(〃 年第一期) 〃 〃 LVI[ab]

い-68-

四四三(I[ab]-LXI[ab])支那稅務署 稅關公報 統計篇第一七六號(一九一二年第四期) (英文) 一九一三 LVII[ab]
第一七七號(一九一三年第一期) (英文) 〃 LVIII[ab]
第一七八號(〃 年第二期) 〃 〃 LIX[ab]
第一七九號(〃 年第三期) 〃 〃 LX[ab]
第一八〇號(〃 年第四期) 〃 一九一四 LXI[ab]

四四四(I[ab]-II[ab])仝 一八九八年度關稅收入及貿易年報 第一部[:] 支那貿易報告及統計拔萃 一八九九 (英文)
仝 仝 第二部[:] 各港の報告及統計 〃 (〃)

四四五(I[ab]•II•III[ab])仝 一八九九年度 仝 第一部[:] 支那貿易報告及統計拔萃 一九〇〇 (〃)
仝 仝 第一•第二部 〃 (〃)
仝 仝 第二部[:] 各港の報告及統計 〃 (〃)

四四六(I[ab]-II[ab])仝 一八九九年度 仝 第一部[:] 支那貿易報告及統計拔萃 一九〇一 (〃)

四四六(I[ab]-II[ab])仝 仝 仝 第二部[:] 各港の報告及統計 〃(〃)II[ab]

い-69-

四四七(I[ab]-II[ab]) 支那稅務署 一九〇一年度關稅收入及貿易年報 第一部[:] 支那貿易報告及統計拔萃 一九〇二 (英文)
仝 仝 第二部[:] 各港の報告及統計 〃 (〃)

四四八(I[ab]-II[ab]) 仝 一九〇三年度 仝 第一部•第二部 一九〇四(〃) I[ab]•II[ab]

四四九(I[ab]-IV[ab])仝 一九〇四年度 仝 第一部[:] 支那貿易報告及統計拔萃 一九〇五(〃)II 一冊
仝 仝 第一部[:] 便[郵便]?便作業報告 〃 (〃)
仝 仝 第二部[:] 各港の報告及統計 第一卷[:] 北方諸港 〃 (〃) 二冊
第二卷[:] 南方諸港 〃 (〃) 二冊

四五〇(I-VIII[ab])仝 一九〇五年度 仝 第一部[:] 統計拔萃 一九〇六 (〃)
第二部[:] 貿易統計及報告 第一卷[:] 北方諸港 〃 (〃) II[ab]
第二卷[:] 揚子江諸港 〃 (〃) III[ab]

い-70-

四五〇(I-VIII[ab]) 支那稅務署 一九〇五年度關稅收入及貿易年報 第二部[:] 貿易統計及報告
第三卷[:] 中央諸港 一九〇六(英文)IV[ab]
第四卷[:] 南方諸港 〃 (〃) V[ab]
第五卷[:] 邊境諸港 〃 (〃) VI[ab]
第三部[:] 外國貿易分類 □ (〃) VII[ab]
第一卷[:] 輸入 〃 (〃) 〃
第二卷[:] 輸出 〃 (〃) VIII[ab]

四五一(I[ab]-VIII[ab])仝 一九〇六年度 仝 第一部[:] 統計拔萃 一九〇七(〃) I[ab]
第二部[:] 貿易統計及報告 第一卷[:] 北方諸港 〃 (〃) II[ab]
第二卷[:] 揚子江諸港 〃 (〃) III[abc]
第三卷[:] 中央諸港 〃 (〃)IIII[IV][abc]
第四卷[:] 南方諸港 〃 (〃) V[ab]

い-71-

四五一(I[ab]-VIII[ab])支那稅務署一九〇六年度關稅收入及貿易年報
第二部[:] 貿易統計及報告 第五卷[:] 邊境諸港 一九〇七(英文)VI[ab]

		第三部[:] 外國貿易分類	第一卷[:] 輸入	〃 (〃) VII^{ab}
			第二卷[:] 輸出	〃 (〃) VIII^{abc}
四五二(I^{ab}-IX^{ab})	全	一九〇七年度全 第一部(A)統計拔萃		一九〇八 (〃) I^{ab}
		第一部(B)郵便作業報告		〃 (〃) II^{ab}
		第二部 第一卷(III^{ab}) 第二卷(IV^{ab})		〃 [(]〃[)]
		第三卷(V^{ab}) 第四卷(VI^{ab}) 第五卷(VII^{ab})		〃 (〃)
		第三部 外國貿易分類 第一卷[:] 輸入		〃 (〃) VIII^{ab}
			第二卷[:] 輸出	〃 (〃) IX^{ab}
四五三(I^{ab}-IX^{ab})	全	一九〇八年度全 第一部(A)•第一部(B)		一九〇九 (〃) I^{ab}-II^{ab}
		第二部 第一卷(III^{ab}) 第二卷(IV^{ab}) 第三卷(V^{ab}) 第四卷(VI^{ab}) 第五卷(VII^{ab})		〃 (〃)
		第三部 第一卷•第二卷(VIII^{ab}, IX^{ab})		〃 (〃)

い- 72-

四五四(I^{ab}-IX^{ab})	支那税務署	一九〇九年度關税收入及貿易年報 第一部(A)•第一部(B)		一九一〇 (英文) I^{ab}-II^{ab}
		第二部 第一卷(III^{ab}) 第二卷(IV^{ab}) 第三卷(V^{ab}) 第四卷(VI^{ab}) 第五卷(VII^{ab})		〃 (〃)
		第三部 第一卷•第二卷		〃 (〃) VIII^{ab}-IX^{ab}
四五五(I^{ab}-VIII^{ab})	全	一九一〇年度 全 第一部(A)		一九一一 (〃) I^{ab}
		第二部 第一卷(II) 第二卷(III^{ab}) 第三卷(IV^{ab}) 第四卷(V^{ab}) 第五卷(VI^{abc})		〃 (〃)
		第三部 第一卷(VII^{ab}) 第二卷(VIII^{ab})		〃 (〃)
四五六(I-VIII)	全	一九一一年度 全 第一部: 統計拔萃(I)		一九一二 (〃)
		第二部 第一卷(II^{ab}) 第二卷(III^{ab}) 第三卷(IV^{ab}) 第四卷(V^{ab}) 第五卷(VI^{abc})		〃 (〃)
		第三部 第一卷(VII) 第二卷(VIII)		〃 (〃)
四五七(I-VIII)	全	一九一二年度 全 第一部(I)		一九一三 (〃)
		第二部 第一卷(II^{ab}) 第二卷(III^{ab}) 第三卷(IV^{ab}) 第四卷(V^{ab}) 第五卷(VI^{abc})		〃 (〃)
		第三部 第一卷(VII) 第二卷(VIII)		〃 (〃)

い- 73-

四五八^{abc}	支那税務署	一九一三年度關税收入及貿易年報 第一部[:] 統計拔萃		一九一四 (英文)
四五九(I^{ab}-X^{ab})	全	光緒廿五年通商各關警船鐙[鐙燈]浮杠[桿標]總册		一八九九 (支那文)
		全 廿六年 全		一九〇〇 (〃) II
		全 廿七年 全		一九〇一 (〃) III
		全 廿八年 全		一九〇二 (〃) IV
		全 廿九年 全		一九〇三 (〃) V^{ab}
		全 卅一年 全		一九〇五 (〃) VI^{ab}
		全 卅二年 全		一九〇六 (〃) VII^{ab}
		全 卅四年 全		一九〇八 (〃) VIII^{ab}
		宣統 二年 全		一九一〇 (〃) IX^{ab}
		民國 元年 全		一九一二 (〃) X^{ab}
四六〇	全	中華民國三年第一期通商海關貿易季册		一九一四 (英支文)

い- 74-

四六一^{ab}	支那税務署	通商出入款項確實情形考		光緒卅一年 一九〇五 (支那文)
四六二(I^{ab}-XIV^{ab})	全	一八九九年度支那燈臺[•]燈臺船[•]浮標[•]水路標表		一八九九 (英文) I^{ab}
		一九〇〇年度 全		一九〇〇 (〃) II
		一九〇一年度 全		一九〇一 (〃) III
		一九〇三年度 全		一九〇三 (〃) IV^{ab}
		一九〇四年度 全		一九〇四 (〃) V
		一九〇五年度 全		一九〇五 (〃) VI^{ab}
		一九〇七年度 全		一九〇七 (〃) VII^{ab}

		一九〇八年度 仝	一九〇八 (〃) Ⅷ
		一九〇九年度 仝	一九〇九 (〃) Ⅸ[ab]
		一九一〇年度 仝	一九一〇 (〃) Ⅹ[ab]
		一九一一年度 仝	一九一一 (〃) Ⅺ[ab]

四六二(I[ab]-XIV[ab])	支那稅務署	一九一二年度支那燈臺[•]燈臺船[•]浮標[•]水路標表	一九一二(英文) Ⅻ[ab]
		一九一三年度 仝	一九一三 (〃) XIII[ab]
		一九一四年度 仝	一九一四 (〃) XIV[ab]
四六三(I[ab]-III[ab])	仝	內國貿易關稅年報 第一[:] 福州 光緒廿九年	一九〇四 (〃) I[ab]
		第二[:] 天津 一九〇二年度	一九〇四 (〃) II[ab]
		第三[:] 五箇年間の報告及關稅(一九〇二－〇六)	一九〇七 (〃) III[ab]
四六四[ab]	仝	一九〇五年リエーヂ萬國博覽會支那出品目錄	一九〇五 (佛文)
四六五	仝	支那貿易一八五八年一般關稅(輸出)	一九〇九 (英文)
四六六	仝	一九〇四年度膠海關貿易報告	一九〇五 ▭
四六七	仝	改訂輸入稅率	一九〇五 ▭
四六八	仝	土產貨物關稅	一八六九 ▭
四六九	仝	商品關稅表(獨逸)一九〇六年三月一日以降	一九〇六 ▭

四七〇(I-II)	ロツクハート	極東の通貨(古代より一八九五年に至る)第一卷[:] グローヴアー集の類別	一九〇七(英文)
		仝(極東貨幣銘案內)第三卷	一八九八 (〃)
四七一	グローヴアー	極度[度東]の通貨 第二卷	一九〇九 (英文)

C. 軍事

(一) 一般

番 號	著譯者名	書 名	發行年代	註
四七二	テー少佐其他	世界各國の陸海軍其他	一九〇二	▭
四七三	グロース	軍事及科學界に於ける氣球	▭	▭
四七四	ヘルネス	現代の航空術	一九〇三	▭
四七五[abc]	シユツツ	軍人(ウヰルヘルム二世治世紀念)	一九一三	▭
四七六	▭	兵士•官吏•市民(獨逸文官適任下士同盟沿革)	一九一四	▭
四七七[ab]	▭	軍人協會「カイザアウヰルヘルム•ダンク」會報	一九一四	▭
四七八	▭	支那陸海軍	一九〇〇	▭
四七九	支那宣教師 除[除徐]	支那の武術試驗	一八九六	(佛文)
四八〇	▭	「兵役へ」(八月－一二月)	一八九九	▭

四八一	金港堂	日露戰爭畫報 第九號	一九〇五	(英文)
四八二(I-VI)	フリーダーグ	一九〇四年度陸海軍案內 第一年	▭	▭
		一九〇七年度 仝 第四年	▭	▭
		一九〇八年度 仝 第五年	▭	▭
		一九〇九年度 仝 第六年	▭	▭
四八三	ダウデ	軍人の民法的關係	一八八七	▭

四八四(I-V[ab])	デイツ編	軍事法錄 第一卷自第一號至第六號(第五號缺)	一九〇九 第六號ハ 一九一〇 二册	
四八五[ab]	グロノウ ゾーニル	獨逸帝國陸海軍刑法	一九〇六	□
四八六[ab]	□	軍事法庭[庭廷]勤務令	一九〇〇	□
四八七[ab]	□	軍事裁判法附施行法及法官懲戒法	一八九八	□
四八八[abc]	□	軍事裁判法	一八九八	□
四八九(I-II)	スツルム ワルデ	軍事裁判法 第二	一八九九	□

四九〇[abc]	普露西陸軍省編	軍事法綱要	一九〇〇	□
四九一[a-d]	□	獨逸徵兵令 A•B•C•索引	一九〇四	□
四九二[a-f]	□	獨逸徵兵[令]?及陸軍條例ABC目錄	一九〇四	□
四九三[a-j]	□	獨逸徵兵令	一八八八 一九〇四	□
四九四[ab]	グーゲル	獨逸徵兵令	一九〇八	□
四九五	□	陸海軍生命保險局一九〇三年條例	□	□
四九六	ジークマン	一九〇八年度軍吏要覽 第一編	□	□
四九七	デユーリング少佐	將校恩給下賜法	一九〇八	□
四九八[ab]	ジバア	陸海軍下級軍人恩給法	(一九〇六 一九一〇	□
四九九	海軍省	勤務上及勤務以外の陸海軍相互交涉に關する指令	一九〇五	□
五〇〇	□	陸海軍官廳の爆破材料水陸輸送に關する規定	一八九四	□
五〇一	□	一九一三年度陸海軍生命保險局年報	一九一四	□

五〇二[ab]	□	陸海軍官廳經理官遺族扶助金定額 一九〇四年	□	□
五〇三	□	獨逸陸海軍衛戍經理部病院被服局官吏節用 一九一三－一四年度	□	□
五〇四	ウヰトウスキ	普魯西王國地方官衙就任手引(文官適任下士)	□	□
五〇五	□	文官適任下士の地方官廳に於ける任用法	一八九二	□
五〇六	文官任用雜誌社	文官適任下士の地方官廳就任關係	□	□
五〇七	ウエーゼンベルグ	文官適任下士の就任するに適する諸官廳會社錄	一九一三	□
五〇八[ab]	□	文官適任下士竝に就任證所有者のバイエルン軍事官廳に於ける就任位置詳細目錄	一九一三	□
五〇九	□	一九一二年度獨逸階級錄	一九一二	□
五一〇	□	一九〇九年獨逸陸海軍階級錄	□	□
五一一	□	獨逸陸海軍經理官階級錄	一九〇七	□
五一二	□	下士雜誌 第廿九年	□	□

(二) 陸軍

(イ) 兵學

五一三[a-u]	□	歩兵操典	(一八八九 一九〇九	□
五一四[a-g]	□	仝　上 第四部	一九一一	□
五一五[a-k]	□	仝　上 附錄	一九〇六	□
五一六[ab]	□	騎兵操典	一九〇九	□
五一七[abc]	□	仝　上 附錄	一九〇九	□

五一八	□	野砲兵操典	一八九九	□
五一九	□	歩[~~歩~~野]?砲兵操典補遺「器具取扱法」	一九一〇	□
五二〇	□	機關銃隊操典草~~典~~案	一九〇四	□
五二一[a-d]	□	機關銃隊操典	一九〇四	□
五二二	□	機關銃隊一九〇八年及一一年式機關銃器操典	一九一二	□

五二三	□	歩兵射撃教~~案~~範草案	一九〇五	□
五二四[a-t]	海軍省	歩兵射撃教範	(一九〇五 二九一〇	□
五二五	□	射撃教範附圖	一九一二	□
五二六[a-kh]	□	機關銃射撃教範草案	(一九〇四 二九一一	□
五二七[ab]	□	野砲兵射撃教範草案	一九一四	□
五二八[a-h]	□	歩兵銃劍術教範	一九〇八	□
五二九	□	劍術教範	一九一二	□
五三〇	□	劍術斬撃及撃突教範	一九一二	□
五三一	リツツオウ	歩兵體操及銃劍術教範	(一九〇八 二九〇九	□
五三二[abc]	□	乘馬教範	一九一二	□
五三三	□	歩兵用野戰工兵教範	一九一二	□
五三四[a-e]	□	各兵科用野戰工兵勤務	一九一一	□

五三五	□	補助架橋教範	一八四四	□
五三六[ab]	□	野戰築城教範草案	一九〇六	□
五三七[ab]	□	野戰築城教範	一八九三	□
五三八	□	築營及道路工事教範草案	一八九四	□
五三九	□	歩兵電話隊教範草案	一九一〇	□
五四〇[a-m]	□	陣中要務令	一八九四	□
五四一	□	手旗信號教範	一九一一	□
五四二[1-43]	クラース	獨逸歩兵須知	(一九〇八 二九一四	□
五四三	メンツエル	獨逸歩兵教科書	一八八九	□
五四四	ミルス	獨逸騎兵須知	一九一〇	□
五四五	フオン•ウンガア	騎兵須知 鞍上三年	一九一二	□
五四六[abc]	デイルテイ	歩兵一年志願兵教範	(一八九八 一九〇一 二九一〇	□

五四七	メンツエル少佐	歩兵一年志願兵と豫後備將校(參考書)	一九一一	□
五四八[1-28]	メルカツツ	機關銃隊教範	一九一四	□
五四九[ab]	ワルダアゼエ	歩兵下士の勤務	一八九五	□
五五〇	スポーン	下士文庫 第二卷[:] 教師及教育者としての下士	□	□
五五一	□	將校下士教育五十一題	一九〇二	□
五五二	□	有爲の歩兵小隊長	一九一二	□
五五三	クライスト少佐	將校斥候	一八九一	□

五五四	□	戰鬪及野外勤務に於ける中隊教育問題集	一九一二	□
五五五	□	戰鬪教練問題集	一九〇八	□
五五六	ダムボエル	歩兵戰鬪及野外勤務の演習と問題	□	□
五五七	ビユロウ	歩兵大部隊戰鬪演習と大演習	一九一四	□
五五八	ブルン	歩兵新兵教育要領	一九〇五	□

五五九	ブルン	射撃教師	一八九〇	□
五六〇	ゾーテン少佐	一九世紀の軍政	一九〇四	□
五六一	イマヌエル少佐	南亞弗利加及東亞戰爭が軍統帥の戰略的精神的本體に如何なる教訓を齎したりや	一九〇七	□
五六二	レーウヰツシユ	ロイテン(フリードリヒ大王と一七五七年回顧錄)	一九〇七	□
五六三	□	「一八六四年シユミツト少將の陣中日誌」「ザールよりモーゼルに到る第三騎兵師團」	□	□
五六四	シヤイベル中尉	第一五四號下シレジヤ第五聯隊史(一八九七－一九〇七)	□	□
五六五	□	一八六六年普魯西征戰	一八六六	□
五六六	ウヰレ	三〇年前	一八九五	□
五六七	フアブリチユス	ケーニヒグレツツ會戰に於けるホラ森林の戰鬪	一九〇四	□
五六八	ホツペンシテツト	大決戰に於ける獨逸陸軍	□	□
五六九	マチアス	創國戰爭回顧錄	□	□
五七〇[ab]	ボツシェン	一八七〇－七一年戰爭に於けるオルデンブルグの軍隊(佛國戰史參照)	一九〇八	□

五七一	□	ベゼーラア「一八一四年」 ウヰツティング「一八七〇年八月一五日晩の狀況」	一九一四	□
五七二	ミユルラア中尉	一八九九－一九〇〇年南阿戰爭	一九〇〇	□
五七三	ランゲル騎兵大尉	東亞戰爭の騎兵	一九〇七	□
五七四	ウルリツヒ譯	クロパトキン著シルクメニエンワルクメニエンに於けるスコベレウ遠征史	一九〇四	□
五七五	ウルリツヒ中尉譯	シユワルツロマンウスキ共著旅順の防禦 第二卷[:] 要塞戰	一九一〇	□
五七六	ブライトコツプフ大佐 ギール少尉	日露戰爭 (イ[ヰ1²])[:] 平原の攻爭	一九〇八	□
		(2)[:] 一九〇四年六月三〇日ユシユリン•ペリンの戰鬪		
五七七	參謀本部戰史編纂部	戰史的記錄集 第四一•四二卷: 最近歐洲以外の戰爭 第二: 日露戰爭より	一九〇八	□
五七八[ab]	□	沙河の對戰	一九〇六	□
五七九	フローベル	陸軍週刊新聞附錄沙河の戰	一九〇六	□
五八〇	アジヤテイクス	日露戰爭に於ける捜索	一九〇七	□
五八一(I-III)	テツタウ中尉譯	日露戰爭(露國參謀本部記錄) 第一卷•第三編	一九一一	□
		第二卷•第一編	〃	□

五八一(I-III)	テツタウ中尉譯	日露戰爭(露國參謀本部記錄) 第三卷•第一編[:] 沙河	一九一一	□
五八二(I-II)	參謀本部	軍事學報 第一年•第二年	(一九〇四 一九〇五	□
五八三	□	一九〇二年度陸軍週報附錄集	□	□

(ロ) 成規

五八四[a-j]	□	陸軍條例(獨逸徵兵令追補規定)	(一八九四 一九〇四	□

五八五[a-g]	普魯西陸軍省	軍事法綱要	(一九〇〇 二九一一	□
五八六[abc]	□	陸軍々事裁判法	一八九八	□
五八七	□	軍事裁判法訴訟方式	一九〇〇	□
五八八	□	獨逸帝國陸軍刑法々典	一九〇六	□
五八九[a-d]	□	陸軍刑罰執行規定 第一編[:] 刑罰執行令	一九〇六	□
五九〇[a-d]	□	普魯西陸軍將校軍法會議最高法令	一九一〇	□

五九一	□	戰時陸軍刑法裁判法令及外國人に對する戰時法的特別取扱竝に俘虜に對する刑事裁判權執行に關する法令	一九〇〇	□
五九二	□	陸軍將校下士卒に對する警察の職務執行關係規定	一八八九	□
五九三[a-j]	□	步兵體操教範	一八九五	□
五九四[a-s]	□	步兵體操教範草案	一九一〇	□
五九五[ab]	□	乘馬隊體操教範草案	一九一二	□
五九六[a-d]	□	步兵標的設置教範	一九〇九	□
五九七	□	野砲及步砲兵標的設置教範	一九〇八	□
五九八[a-x]	□	機動演習令	一九〇八	□
五九九	□	部隊演習規定	一九〇三	□
六〇〇	□	部隊演習場規定	一九〇三	□
六〇一(I-II)	□	射擊場令及射擊場令附圖	一八九六	□
六〇二[a-e]	□	M/95 步兵裝備法	一八九九	□

六〇三[a-f]	□	八八年式銃及彈藥	一八九四	□
六〇四[a-g]	□	八八年式射擊手演習銃竝に彈藥	一八九三	□
六〇五[a-s]	□	九八年式小銃	一九一二	□
六〇六[a-f]	□	九八年式銃及銃劍	(一九〇一 一九〇三	□
六〇七[abc]	□	九八年式騎□[⊟兵]?銃	一九一二	□
六〇八[a-e]	□	徒步部隊の銃劍	一九〇八	□
六〇九	□	銃器保存手入法	一八九九	□
六一〇[a-e]	□	部隊武器保存規定	(一八九五 一九〇五	□
六一一	□	陸軍兵器手入規則	一八九五	□
六一二[abc]	□	八八年及九一年式銃器保存法	一九〇二	□
六一三[a-e]	□	九八年式銃器保存法	一九一〇	□
六一四	□	豫備機關銃隊裝具規定(第二草案)	一九〇四	□

六一五	□	機關銃器具印章番號規則	□	□
六一六	□	機關銃材料(草案)	一九〇四	□
六一七	□	豫備機關銃隊機關銃器具教程草案	一九〇四	□
六一八	□	機關銃隊武器材料保存管理規定案	一九〇五	□
六一九	□	機關銃隊兵器器具保存管理規定	一九〇九	□

六二〇	□	〇八年式及一一年式機關銃器具取扱竝に機關銃隊入門	一九一二	□
六二一	□	〇八年式及一一年式機關銃器具保存法	一九一〇	□
六二二	□	〇八年式機關銃器具保存法	一九一〇	□
六二三	□	照明拳銃及彈藥	一八九四	□
六二四	□	大測遠器(草案)	一九〇一	□
六二五	□	九九年式小測遠器(草案)	一八九九	□
六二六[a-d]	□	〇八年式小測遠器(草案)	一九〇七	□

六二七[a-d]	□	步獵狙擊•機關銃•騎•工兵用眼鏡	一九一一	□
六二八[abc]	□	自轉車規定草案	一九〇六	□
六二九	□	教導步兵大隊本部規定	一九〇六	□
六三〇[a-h]	□	平時衛生條例	(二八七八 二八九一	□
六三一	□	平時衛生條例追加	一八九一	□
六三二[abc]	□	戰時衛生勤務令	(二八七八 二九〇八	□
六三三	□	衛生裝備處置	一九一三	□
六三四[ab]	□	陸軍醫務報告規則	一九〇五	□
六三五[ab]	□	衛戍病院新築一般要項	一九〇四	□
六三六[a-m]	□	陸軍々人湯治其他特別療養規定	一九〇五	□
六三七[abc]	□	陸軍勤務能力檢查規定	(二八九四 二九〇九	□
六三八[abc]	陸軍大臣	行軍日射病に關する教示	一九〇四	□

六三九	□	日射病及凍死に關する教示	一九〇四	□
六四〇[a-e]	□	陸軍獸醫令草案	一九一〇	□
六四一[a-e]	□	陸軍獸醫令第一附錄	一九〇六	□
六四二[a-f]	□	仝　　上第二附錄	一九一三	□
六四三[a-g]	□	新馬補充令	一九一二	□
六四四[abc]	□	勤務馬飼草法	(二八九六 二九一三	□
六四五[ab]	□	馬匹金規定	一九〇二	□
六四六	□	屠獸作業竝に獸畜輸送規定	一九〇一	□
六四七	□	給養品受領及獸肉引取の爲に派遣されたる將校の諸規定	一九〇五	□
六四八(I[a-k]-II[a-g])	□	陸軍鐵道條例 第一編•第二編	(二八九九 二九〇二	□
六四九[ab]	□	集合停車場貨物廠勤務規定	一九〇三	□
六五〇		缺番		

六五一[a-e]	□	輸送指揮官規定	一九一二	□
六五二[ab]	□	行李•彈藥•從[從縱]?列•輜重•勤務規則附錄	一八九七	□
六五三[ab]	□	野戰郵便勤務令	一九〇七	□
六五四[ab]	□	野戰郵便勤務令實施規則定	一九〇七	□
六五五(I[a-j]-II[a-k])	□	築城令 第二編[:] 金櫃事務 第三編[:] 築城部員身分關係	(二八八九 二九一〇	□

六五六	□	要塞地帶土地所有制限に關する法律註解	一九一四	□
六五七[a-g]	□	要塞築城及砲兵工事々務規則	一八八三	□
六五八[a-k]	□	永久築城設備設計及工事々務要領	一九一〇	□
六五九[abc]	□	要要塞に於ける築城事務規定	一八八三	□
六六〇		缺番		
六六一	□	管區官廳としての要寨[寨塞]司令部の執務法	一八九二	□
六六二[a-j]	□	要塞工事に關する請負要領	一九〇五	□

六五三(I-IV)	□	徒歩砲兵特別規定 T編•U編•N編•H編	(一九一三 一九〇八 一九〇六 一九〇四	□
六六四	□	〇四年式一〇珊砲積載法	一九〇六	□
六六五	□	武庫主監規定	一九一〇	□
六六六[ab]	□	野砲兵材料監守勤務規定	(一八九九 一九〇八	□
六六七	□	クルツプ工場鋼鐵鑄管檢查假規定	一八八三	□
六六八[ab]	□	九八年式火器修繕法	一九一〇	□
六六九	□	銃器修理要領	一八九九	□
六七〇	□	砲兵技術學校化學實驗所化學的•物理化學的檢查料表	一九一〇	□
六七一	□	砲兵技術學校實驗所機械學的試驗料表	一九一一	□
六七二[abc]	□	銃器拂下價格表	一九一二	□
六七三[a-i]	□	携帶火器敗[販販]賣價格表	(一九〇二 一九一三	□
六七四[ab]	□	「スパンダウ」及「ジーグブルグ」火[器]工場製品價格表	一九〇五	□

六七五	□	兵器廠武器及修繕費價[格]表	一八九一	□
六七六	□	火藥工廠價格目錄	一九〇一	□
六七七	□	野砲兵輜重材料•砲兵工廠價格表 第一	一九〇六	□
六七八	□	徒[徒]歩•砲兵器具工廠價格表 第二	一九〇八	□
六七九[a-k]	□	衛戍勤務規定	一九〇二	□
六八〇	□	衛戍經理條例索引	一九一三	□
六八一	□	衛戍經理條例	一八九六	□
六八二(I-III)	□	衛戍經理條例 第一編•第二編•第三編	一九一三	II[ab]二册
六八三	□	衛戍經理部勤務令(衛戍管理条例)	一八八一	□
六八四[ab]	□	部隊金櫃規則	一八九七	□
六八五	□	補発助資金規定	一九〇六	□
六八六	□	普魯西王國衛戍官衙經理事務規則	一八四三	□

六八七	□	陸軍工事條例	一八九六	□
六八八[a-g]	□	衛戍工事條例	一八九六	□
六八九[a-f]	□	衛戍建物令	一八九九	□
六九〇[abc]	□	衛戍建物令 第一編	一八八九	□
六九一[abc]	□	衛戍建物令 附錄	□	□

六九二	□	陸軍櫪廐舍•屋蓋馬場及蹄鐵工場設備規定	一八八七	□
六九三	□	請負規定	一八八九	□
六九四(I[ab]-II[ab])	□	被服條例 第一編•第二編	(一九〇一 一九〇三	□
六九五(I[ab]-III[a-d])	□	被服條例 第二編附錄第一•仝第二•仝第三	(一九〇五 一九一〇	Ⅱハ一冊ノミ
六九六	□	普魯西陸軍將校及醫官被服規定	一八九九	□
六九七	□	普魯西陸軍將校•醫官•獸醫官被服規定	一九一一	□
六九八	□	普魯西陸軍官吏制服及徽章表	一九〇八	□

六九九	□	部隊被服經理に關する請負規定	一八八九	□
七〇〇[ab]	□	糧食局條例	一八九七	□
七〇一	□	普魯西陸軍平時給養規定草案	一八九八	□
七〇二[a-u]	□	普魯西陸軍平時給養規定	一九〇二	□
七〇三	□	軍隊炊事經理規定	一九一三	□
七〇四[abc]	□	野戰給養表	一九一〇	□
七〇五	□	平時武裝軍隊に對する現品給養法	一九〇一	□
七〇六[a-l]	□	普魯西陸軍手當規定	一八九九	□
七〇七[abc]	□	陸軍官宅料及地方等級別	一九〇四	□
七〇八[abc]	□	手當率と地方等級別	一九〇四	□
七〇九[a-i]	普魯西陸軍省	陸軍恩給法	一八九八	□
七一〇[a-j]	□	普魯西陸軍恩給規定	一九一二	□

七一一	□	普魯西陸軍恩給規定草案	一九〇六	□
七一二[a-e]	□	普魯西陸軍平時給料規定草案	一九一一	□
七一三[abc]	□	普魯西陸軍官宅料規定	一八九九	□
七一四[ab]	□	軍人旅行規則	一九〇四	□
七一五	普魯西陸軍省	各衛戍地間里程表	一八九六	□
七一六[a□]	[仝]?	入營除隊旅費規定	一八八七	□
七一七[ab]	仝	將校就任通知	一九一三	□
七一八[abc]	仝	將校文官任用令	一九一三	□
七一九[a-g]	仝	任用規則	一九〇七	□
七二〇[a-m]	仝	文官適任下士及任用證所有者の普魯西陸軍官廳に於て就任し得る地位明細錄	一九一一	□
七二一[a-g]	バイエルン陸軍省	文官適任下士及任用證所有者の「バイエルン」陸軍諸官廳に就任し得る地位明細表	一九一三	□
七二二[ab]	ザクセン陸軍省	文官適任下士其の他の「ザクセン」陸軍官廳其他に於ける就任位置詳細目錄	一九〇九	□

七二三[abc]	普魯西陸軍省	文官適任下士官吏任用規則	一九〇七	□
七二四[ab]	仝	中級官房,及下級官吏任用原則	一九〇七	□
七二五	仝	地方官廳其他に文官適任下士を判任官又は下級官吏としての任用規定集	一九〇一	□

七二六	□	文官遷任下士の地方官衙就任案內	□	□
七二七[ab]	□	陸軍請願表規定	一九〇一	□
七二八[abc]	□	身分登記及結婚に關する規定	一九〇三	□
七二九[ab]	□	普魯西陸軍々人及普魯西憲兵結婚規則	一九〇二	□
七三〇[ab]	□	火工人員身分關係規定	一九一〇	□
七三一[ab]	□	陸軍大學校勤務令	一九〇一	□
七三二[ab]	□	陸軍技術大學勤務規定	一九〇九	□
七三三	□	步兵學校勤務規定	一九〇三	□
七三四	□	築城學校勤務令	一八九五	□

七三五	□	士官學校勤務令	一九〇六	□
七三六	□	陸軍幼年學校生徒教育規定	一九〇六	□
七三七	□	軍用鳩飼養訓育法	一八八九	□
七三八	□	陸軍新教禮拜勤務令	一九〇二	□
七三九	□	軍人の兵器使用と內亂鎭壓動作に關する規定	一九一四	□
七四〇	□	部隊檢查規定	一九一一	□
七四一	□	作業部隊	一九一三	□
七四二	□	陸軍文庫管理規則	一八九〇	□
七四三(I-XX)	陸軍省	陸軍制令報 第二九年	一八九五	□
		仝 第三〇年	一八九六	II
		仝 第三一年	一八九七	III
		仝 第三二年	一八九八	IV

七四三(I-XX)	陸軍省	陸軍制令報 第三三年	一八九九	V
		仝 第三四年	一九〇〇	VI
		仝 第三五年	一九〇一	VII
		仝 第三六年	一九〇二	VIII[ab]
		仝 第三七年	一九〇三	IX
		仝 第三八年	一九〇四	X[ab]
		仝 第三九年	一九〇五	XI[ab]
		仝 第四〇年	一九〇六	XII[ab]
		仝 第四一年	一九〇七	XIII[abc]
		仝 第四二年	一九〇八	XIV[abc]
		仝 第四三年	一九〇九	XV[abc]
		仝 第四四年	一九一〇	XVI[abc]

七四三(I-XX)	陸軍省	陸軍制令報 第四五年	一九一一	XVII[abc]
		仝 第四六年	一九一二	XVIII[abc]
		仝 第四七年	一九一三	XIX[abc]
		仝 第四八年	一九一四	XX
七四四(I-XV)	仝	陸軍公報 第三二年	一八九八	□
		仝 第三三年	一八九九	II
		仝 第三四年	一九〇〇	III

		仝	第三五年	一九〇一	Ⅳ
		仝	第三七年	一九〇三	Ⅴ[ab]
		仝	第三八年	一九〇四	Ⅵ
		仝	第三九年	一九〇五	Ⅶ
		仝	第四〇年	一九〇六	Ⅷ

七四四(I-XV[])	陸軍省	陸軍公報	第四一年	一九〇七	Ⅸ
		仝	第四二年	一九〇八	Ⅹ
		仝	第四三年	一九〇九	Ⅺ
		仝	第四四年	一九一〇	Ⅻ
		仝	第四五年	一九一一	XIII
		仝	第四六年	一九一二	XIV
		仝	第四七年	一九一三	XV
七四五[a-d]	□	亞弗利加殖民地守備隊規則		一八九八	□
七四六[ab]	□	亞弗利加守備隊總合規定		一八九八	□
七四七(I[ab]-IV[ab])	□	一九〇五年度普魯西陸軍及第八軍團停年名簿		□	I[ab]
		一九一〇年度 仝	上	□	Ⅱ
		一九一二年度 仝	上	一九一二	Ⅲ[ab]

七四七(I[ab]-IV[ab])	□	一九一四年度普魯西陸軍及第八軍團停年名簿		一九一四	Ⅳ[ab]
七四八	□	築城人員階級錄		一九〇八	□
七四九[ab]	ヘルドルフ大佐	普魯西陸軍勤務規定 第一編 補充法[•] 第一部[:] 陸軍憲法•兵役義務•補充及監督		一八九二	□
七五〇[ab]	仝	仝 第一編 補充法[•]第三部[:] 陸軍教育制		一八九三	□
七五一[abc]	仝	仝 第一編 補充法[•]第五部[:] □馬補充•馬匹購買金		一八九六	□
七五二[a-d]	仝	仝 第二編 內務衛生勤務•官廳事務[•]第三部[:] 衛戍勤務•陸軍禮拜制		(一八九三 一八九五 一八九六)	□
七五三	仝	仝 第二編第四部		一八九五	□
七五四[ab]	仝	仝 第二編第五部		(一八九六 一九〇三	□
七五五[ab]	仝	仝 第三編 陸軍經理[•]第一部[:] 金櫃		一八九五	□
七五四六[ab]	仝	仝 第三編第二部[:] 平時給料		一八九五	□
七五七[ab]	仝	仝 第三編第三部[:] 給養		一九〇〇	□

七五八[ab]	ヘルドルフ大佐	普魯西陸軍勤務規定 第三編第四部[:] 被服裝具野戰器具		一八九九	□
七五九[a-e]	仝	仝	第四編第七部	一九〇二	□
七六〇[ab]	仝	仝	第四編	一九〇一	□
七六一	シユライヤア	陸軍刑法		一九〇四	□
七六二[abc]	デイツ註	獨逸法律集[:] 陸軍懲罰令		□	□
七六三	□	一九〇七年度獨逸帝國陸軍豫算		□	□
七六四	ノイマン	陸軍恩給法註解		一八七八	□
七六五[a-g]	シユミツト少佐	獨逸讀法		一九〇二	□

(ハ) 雜書

七六六[ab]	バイエル大尉	西南亞弗利加遠征軍幕僚に從ひて	一九〇九	□
七六七[abc]	シユミツト	西南亞弗利加の戰爭生活	一九〇七	□

七六八	□	獨逸領西南亞弗利加に於ける戰爭參加	一九〇七	□
七六九	□	南亞弗利加の二三年「嵐と日光」	一九〇二	□
七七〇[ab]	プアイフアア	山東省に於ける獨逸騎哨	一九〇九	□
七七一[a-i]	□	支那の戰爭(一八四〇年)と彼が今日の武力	一九〇〇	□
七七二	ゼーシラルン	皇帝旗の下に	一九一〇	□
七七三	シユライバース ホーフエン少佐	獨逸陸軍	一九一三	□
七七四	ハイン中尉	獨逸陸軍	一九〇一	□
七七五	フオン•クラーツ譯	フンベルト著吾人の防備は整へりや	□	□
七七六	シエルフ	入營に際し(壯丁教訓)	一九一〇	□
七七七	スポーン少佐	中隊長の懲罰權	一九〇二	□
七七八	コツプマン	獨逸帝國陸軍刑法精義	一九〇三	□
七七九[abc]	ブソルト	陸軍體操游戲指針	一九一一	□

七八〇[a-d]	グロナウ	自習文庫[:] 文官適任下士指針	(一九一三 一九〇五	□
七八一[a-d]	ウヰトウスキ	普魯西地方自治體に[於ける]文官適任下士の任用關係	□	□
七八二	ツムマツハ	文官適任下士自修教科書「文官過程」	一八九九	□
七八三	ローレンツ	文官適任下士職業撰定要覽	一九一三	□
七八四	シタインマイヤア ハニン	地方行政廳に於ける文官適任下士任用(諸規定)	一九一四	□
七八五	ゲーヤリング	文官適任下士提要 第三卷[:] 鐵道•裁判所•警察•郵便•稅務諸官廳	□	□
七八六	□	下士文庫 第一二卷[:] 交際儀禮	□	□
七八七	ドツソウ	陸軍文書事務案內	一九一四	□
七八八	エルツベルガア	文官適任下士問題[:] 吾人は如何にして援助すべきか	□	□
七八九	ボエツトヒアア	文官適任下士用實用作文法	一九一一	□
七九〇	□	文官適任下士用參考書目錄	一九一三	□
七九一[ab]	普魯西陸軍省	兵卒唱歌集	一八八一	□

七九二	ゲルスバツハ	兵卒唱歌集「小戰友」		□	□
七九三(I-XI[ab])	ジークマン	一八九七年度ポケツト軍屬曆		□	□
		一九〇一年度 仝		II	□
		一九〇六年度 仝	第一部	III	□
		仝	第二部	IV	□
		一九〇七年度 仝	第一部	V	□
		仝	[第二部][?]	VI	□
		一九〇八年度 仝	第一部	VII	□
		一九〇九年度 仝	第一部	VIII	□
		仝	[第二部][?]	IX	□
		一九一〇年度 仝	□	X	□
		一九一〇年度 仝	第一部	XI[ab]	□

七九四(I-V)	ジークマン	一九〇□年度陸軍諸官廳官吏必携曆(諸規定)	第二編	□	I
		一九〇六年度 仝	第一編	□	II
		一九〇八年度 仝	第二編	□	III[ab]
		一九〇九年度 仝	第一編	□	IV
		一九一〇年度 仝	第二編	□	V
七九五(I-IV)	フヰルクス	一九〇六年度陸軍ポケツト曆		□	I
		一九一一年度 仝		□	II
		一九一二年度 仝		□	III
		一九一三年度 仝		□	IV
七九六(I-III)	□	一九一二年度獨逸軍人同盟會年鑑		一九一二	I
		一九一三年度 仝		一九一三	II
		一九一四年度 仝		一九一四	III

七九七(I-IV)	□	一九一〇年度軍吏候補者必携年鑑		□	I
		一九一三年度 仝		□	II[ab]
		一九一四年度 仝	第一卷	□	III
		一九一四年度 仝	第二卷	□	IV
七九八(I-II)	□	獨逸下士曆		□	I
		一九一二年度 仝		□	II
七九九	ウエーデル	將校便覽手帖		一九〇九	□
八〇〇	□	一九一四年度獨逸軍事カレンダア		□	□
八〇一		缺番			
八〇二 I-72	普魯西陸軍省	再役下士教育讀本	第一卷	一九〇三	□
八〇三	仝	仝	第二卷	仝	□

(三) 海軍

(イ) 兵學

八〇四[a-s]	海軍省	海軍歩兵操典	(一八九九 一九〇七	□
八〇五[a-d]	仝	仝 附錄第二	一九〇九	□
八〇六	仝	歩兵射擊教範草案	一九〇五	□
八〇七[a-o]	仝	歩兵射擊教範	(一九〇九 一九一〇	□
八〇八[a-j]	仝	海軍小銃射擊教範	(一八九九 一九〇〇	□
八〇九[a-f]	仝	仝 草案	一九〇六	□
八一〇[ab]	航洋艦隊	航洋艦隊勤務教育入門	一九一二	□
八一一[a-k]	□	海軍砲兵須知	(一九一一 一九一三	□
八一二	ヨヌエルス	帝國海軍學校用勤務教育入門	一九一一	□
八一三	海軍省	水雷艦隊竝に水雷部歩兵操典	一九一〇	□

八一四	□	機關銃砲操典法	一九〇一	□
八一五	□	海軍砲兵砲車長提要	□	□
八一六	海軍省	一九〇四年式拳銃操法	一九〇六	□

八一七	□	獨逸海軍上陸法	一九一一	□
八一八	海軍省	上陸及端艇砲架に於ける八珊L/30端艇砲操法	一八八七	□
八一九	□	一二糎重砲架に於ける一二糎重砲操典	一八九三	□
八二〇	□	一二珊海軍鐵大砲操典	一八九三	□
八二一	海軍省	二八珊C/22榴彈中[有]軸砲架の二八珊L/12榴彈砲操法	一九一一	□
八二二	仝	一五珊海岸砲架の一五珊L/35第八六番及[第]八七番砲操法	一九一一	□
八二三	仝	二四珊海岸中有軸砲架の二四珊L/35第四九番及第五一番砲操法	一九一一	□
八二四	仝	C/1900前車を有せる端艇及上陸砲架の六珊L/21速射法[法砲]操法	一九〇九	□
八二五	仝	一〇•五珊C/91中有軸砲架の一〇•五珊L/35速射砲操法	一九〇九	□

八二六	海軍省	穹窖に於ける一五珊C/97中有軸砲架の一五珊Z/40速射砲操法	一九〇九	□
八二七	仝	二一及二八珊C/85海岸砲架の二一珊L/35砲及二八珊砲Z/35砲操法	一九一〇	□
八二八	仝	C/89中有軸砲架の八•八珊L/30速射砲操法	一九〇八	□
八二九[abc]	ステンツエル	獨逸海軍辭典	一九〇四	□
八三〇	ハインツ	海軍技術航海辭典(獨•伊•佛•英)	一九〇〇	□
八三一	ダボウキツヒ	仝　第一卷　(獨•伊•佛•英)	一八八三	□
八三二	デイツトマア大佐	獨逸海軍問答	一八九九	□
八三三	レウエントロウ大尉	獨逸海軍史	□	□
八三四	テスドルフ	獨逸帝國海軍史	一八八九	□
八三五	マルツアーン中尉	海戰史(大陸發見より今日に至る)	□	□
八三六	ハツセ譯	クラド著 日露戰爭海戰)	一九〇七	□
八三七	海軍々令部譯	ウラヂミル•セメノウ著 對馬海戰	一九〇七	□

八三八[ab]	海軍々令部	支那義和團事件中の獨逸海軍	一九〇三	□
八三九	ミユルラア中尉	支那動亂　第二卷	一九〇二	□
八四〇	ウキンタアハルダア中尉	支那動亂(墺太利海軍の活動)	一九〇二	□
八四一[ab]	ミユルラア中尉	支那に於ける我が海軍	□	□
八四二[a-g]	□	北清戰場說明(太沽•天津•北京•山海關)	一九〇〇	□
八四三	海軍々令部	ヘレロ暴動中西南亞弗利加海軍遠征隊	一九〇五	□
		(ロ) 成規		
八四四[a-p]	海軍省	海軍條例(獨逸徵兵令追補規定)	(一九〇九 一八九四	□
八四五[a-e]	仝	帝國海軍讀法	一九〇三	□
八四六[abc]	仝	帝國海軍法庭[庭廷]及法官勤務指令	一九〇四	□
八四七[abc]	□	海軍々事裁判所の外國との通信に關する指令	一九〇三	□

八四~~九~~八[a-i]	海軍省	帝國海軍將校軍法會議最高法令	一九一一	□
八四九	ハインリツヒ•デイツ註	仝　上	一九一一	□
八五〇	□	帝國海軍將校及醫官軍法會議最高法令	一九〇二	□
八五一	□	帝國海軍醫官軍法會議最高法令	一九一一	□

八五二[a-h]	海軍省	海軍刑罰執行令	一九〇八	□
八五三[a-l]	仝	海軍懲罰令	{一九〇二•一八九一 一九一四	□
八五四[a-f]	フヰーリツツ	海軍懲罰令註釋	(一九〇三 一九一二	□
八五五		缺番		
八五六	海軍省	陸軍部隊及官廳裁判權の規定に關する明細表(帝國海軍用版)	一九〇一	□
八五七[a-d]	リヒタア スツエスニイ	帝國海軍公務索引	一九一三	□
八五八		缺番		
八五九[abc]	海軍省	軍艦號令詞	一九〇二	□

い-116-

八六〇	□	帝國海軍編制規定	一八八八	□
八六一	□	帝國海軍陸上官衙編成規定	一八九九	□
八六二[a-l]	海軍省	艦內勤務諸規定集	一九〇九	□
八六三(I-II)	仝	仝　　草案 第一編•第二編	一九〇參[參三]	□
八六四[abc]	仝	帝國海軍哨艦勤務令	一九〇七	□
八六五[a-f]	仝	海上輸送令	一九〇七	□
八六六(I[a-e]-II[a-f])	仝	仝　　附錄 第一及第二 圖表	一九〇七	□
八六七([ɬ][a-d])[ɬ]	仝	海軍平時交代輸送規定(海上輸送令附錄 第二)	一九〇八	□
八六八[a-d]	仝	帝國海軍々艦郵便勤務規定	一九〇七	□
八六九	□	無線電信勤務規定	一九〇八	□
八七〇	海軍省	無線電信員	一九一〇	□
八七一[a-h]	□	海軍端艇勤務規定	一八九九	□

い-117-

八七二	□	ウヰルヘルムスハーフエン衛戍規定	一九一一	□
八七三	海軍省	帝國海軍々艦築造一般規定集	□	□
八七四[a-d]	□	帝國造船廠勤務令	一八八二	□
八七五[a-f]	海軍省	仝　　上 第一節[:] 編制及一般作業規定	一九一二	□
八七六[abc]	仝	仝上草案 第一編[:] 造船廠編制, 第一節[:] 一般事務及事務分掌規定	一八九八	□
八七七[a-f]	仝	仝上草案 第一編第二節[:] 造船廠人員及其勤務關係	一九〇〇	□
八七八[a-h]	仝	仝上草案 第二編[:] 造船作業, 第三節[:] 造船廠警戒及規律勤務 第四節[:] 軍艦	一八九八	□
八七九	仝	仝上草案 第二編[:] 造船作業, 第四節[:] 軍艦	一八九七	□
八八〇[a-f]	仝	仝上草案 第二編第五節[:] 工場勤務令	一八九九	□
八八一[a-e]	仝	仝上草案 第二編第六節[:] 海陸工務	一八九九	□
八八二[a-i]	仝	仝上草案 第二編第七節[:] 財政	一九〇〇	□

い-118-

八八三[a-i]	海軍省	帝國造船廠勤務令草案 第二編第八節[:] 用度事務	一八九四	□
八八四[a-h]	仝	仝　　上　　草案 第二編第九節[:] 金庫事務	一八九八	□
八八五[a-f]	仝	仝　　上　　草案 第二編第一〇節[:] 倉庫事務	一八九九	□
八八六[a-f]	仝	帝國造船廠所藏海圖及航海書籍目錄	(一九一〇 一九二四	□

八八七	仝	帝國造船廠に對する請負一般規定	一九〇七	口
八八八[ab]	仝	ウヰルヘルムスハーフエン帝國造船廠商業簿記規定草案	一九一〇	口
八八九	口	帝國海軍兵器廠及水雷廠作業令	一八九八	口
八九〇[a-g]	海軍省	海軍兵器廠勤務規定	一九〇五	口
八九一	仝	膠州兵器廠勤務規定	一九〇五	口
八九二	口	海軍兵器廠技工方面檢査事務規定	一八九九	口
八九三[ab]	仝	砲兵技術員	一九一二	口
八九四	口	海軍部隊及軍艦携帶火器管理及維持指令	一八八三	口

八九五	口	海軍兵器彈藥取扱及保存規定	一九〇九	口
八九六[a-f]	海軍省	演習彈藥管理規定	一九一三 一九〇〇	口
八九七[a-i]	仝	帝國海軍携帶火器管理規定	一九〇一	口
八九八		缺番		
八九九		缺番		
九〇〇[ab]	仝	諸砲及彈藥取扱竝に維持規定	一九一二	口
九〇一[abc]	仝	火器材料及彈藥取扱保存規定	一九〇九	口
九〇二	仝	軍艦砲兵速射砲及彈藥取扱竝に保存規定	一九〇〇	口
九〇三	仝	海兵團及海軍砲兵隊砲兵演習材料竝に火砲保存費管理規定	一九〇〇	口
九〇四	仝	一五珊砲及彈藥取扱竝に保存規定	一九一二	口
九〇五	仝	一九〇六年式二一珊砲及彈藥取扱及保存規定 VI	一九一二	口
九〇六	仝	一九〇八年式三〇•五珊砲及彈藥取扱及保存規定	一九一四	口

九〇七	海軍省	一九〇八年及一〇年式二八珊砲及彈藥取扱保存規定 X	一九一三	口
九〇八	仝	軍艦砲兵速射砲と彈藥	一八九八	口
九〇九		缺番		
九一〇[a-v]	仝	一九〇四年式拳銃	(一九〇六 一九一三	口
九一一	口	〇六年式小測遠器(草案)	一九〇七	口
九一二[a-d]	仝	一九〇八年度獨逸海軍器材規定	一九〇八	口
九一三	口	軍艦器具材料設備規定	一八九九	口
九一四[abc]	仝	海軍諸官廳高層建築物避雷針竝に其檢査規定	一九一一	口
九一五[ab]	仝	軍艦電氣裝置建設手入修繕法	一九〇一	口
九一六	仝	キール測特測候所勤務規定	一九〇一	口
九一七	仝	潛水夫勤務規定	一九一〇	口
九一八[ab]	口	帝國海軍全勤務作業に於ける災害豫防一般	一八九八	口

九一九	海軍省	水雷艇•潛水艇•測量艇•巡邏艇に於ける災害應急手當法	一九〇八	口
九二〇	口	海兵團及職工隊勤務手びき	一八九六	口
九二一[abc]	仝	帝國海軍信號旗敬禮訪問規則	一九〇四	口
九二二[a-l]	仝	海軍新教禮拜法	一九〇八	口

九二三[ab]	□	軍艦儀典	一八九八	□
九二四[a-f]	仝	陸上海軍官廳及部隊に對する備付海軍省書類定數表	一九〇五	□
九二五	□	帝國海軍所藏書式書籍事務用具目錄	一九〇二	□
九二六	□	一九一四年獨逸海軍々令部海圖索引地圖	□	□
九二七	仝	帝國海軍秘密書類取扱規定	一九〇一	□
九二八[a-d]	仝	軍艦備付圖書函圖書目錄草案	一九〇五	□
九二九	仝	仝	一九一四	□
九三〇[a-f]	仝	海軍官廳及陸上海軍部隊に對する海軍省印刷物豫算目錄	一九〇五	□

九三一	海軍省	帝國海軍體操教範	一九一〇	□
九三二[a-h[? k?]]	仝	從來使用外國語補遺辭典草案	一九〇五	□
九三三[a-d]	仝	帝國海軍將校語學研究規定	一九一〇	□
九三四[ab]	仝	海軍少尉候補生練習艦教育規定	(一九一〇 一九〇〇	□
九三五	仝	航海術教育規定草案	一九〇三	□
九三六	仝	海軍機關學校及兵曹學校勤務規定	一九一〇	□
九三七	仝	海軍砲兵部隊教育計劃	一九〇五	□
九三八[a-f]	仝	海軍幼年學校生徒教育規定草案	(一九一〇 一九一四	□
九三九[a-i]	仝	海軍文官適任下士教育規定	一九一三	□
九四〇[ab]	□	軍艦給任[任仕?]教育規定	(一九〇一 一九一一	□
九四一[a-e]	仝	帝國海軍々艦人員定數	一九〇七	□
九四二[a-n]	仝	海軍陸上官廳平時人員定數	一九〇八	□

九四三[abc]	海軍省	海軍陸上官廳其他に派遣すべき兵員定數表	一九〇二	□
九四四[ab]	仝	帝國海軍兵卒人員に關する組織的規定集	一九〇六	□
九四五[a-e]	仝	海軍兵器員使用規則草案	一九〇三	□
九四六	仝	軍艦兵員使用規則草案	一九〇三	□
九四七[a-e]	仝	兵員使用要項草案	一九〇三	□
九四八	仝	海兵團•職工隊•水雷隊兵員使用規則草案	一九〇三	□
九四九	仝	海軍將校團補充規定及施行規則	一九〇九	□
九五〇	仝	帝國海軍兵員諸規定集	一九〇六	□
九五一	仝	海兵團•造兵廠•水雷團兵員使用規則草案	一九〇三	□
九五二[a-w]	仝	海軍々人旅行條例	一八九二 一九一三	□
九五三[abc]	□	海軍衛生條例	一八九三	□
九五四(I[a-e]-III[abc])	仝	海軍衛生條例 第一卷[:] 陸上海軍衛生條例	一九〇八 一八九三	□

九五四(I[a-e]-III[abc])	海軍省	海軍衛生條例 第二卷[:] 海軍陸上衛生條例附錄	一八九三	II[abc]
	仝	第三卷[:] 艦內海軍衛生條例	一八九三	
九五五[abc]	仝	海軍衛生條例草案第一卷	一九〇八	□
九五六[a-s]	仝	仝 附錄[:] 看護用衛生材料豫算	一九〇三 一九一三	□

九五七[a-i]	仝	海軍定期醫務報告規定	一九〇二	□
九五八[a-h]	仝	海軍衛生材料廠勤務規定草案	一九〇二	□
九五九[a-i]	仝	海軍服務能力檢查法	一九一二	□
九六〇[ab]	仝	海軍擔架卒教育法	一九〇三	□
九六一	仝	衛戍病院新築一般規則	一九〇四	□
九六二[a-s]	仝	國庫規定	一九〇八	□
九六三[ab]	□	海軍國庫規定	一八八七	□
九六四[a-f]	仝	戰時金櫃規定	一九〇九	□

九六五[a-g]	海軍省	軍艦金庫規定	一九〇九	□
九六六[a-w]	仝	帝國海軍衛戍經理條例	一九〇一	□
九六七[ab]	仝	海軍衛戍經理部事務要領	一九一一	□
九六八[abc]	仝	軍艦事務に於ける經理規定草案	一八九六	□
九六九[ab]	仝	軍艦經理規定	一八九六	□
九七〇[abc]	仝	軍艦經理規定草案	一九一一 一八九六	□
九七一[ab]	仝	軍艦經理要領	一八九九	□
九七二	仝	海軍諸學校經理事務要領	一九〇二	□
九七三[ab]	□	海軍衛戍管理部器材經理•會計文書事務原則	一九一一	□
九七四	□	海軍官廳經理部事務規定	一八九四	□
九七五	仝	陸上學校及練習艦俸給計算及仕[仕支]拂規定	一九〇二	□
九七六[a-d]	仝	會計檢查院指令其他の規定	一九一四	□

九七七[a-p]	海軍省	海軍經理檢查執行規定	一八九三	□
九七八[a-l]	仝	帝國海軍衛戍工事令	一九〇九	□
九七九[a-q]	仝	帝國海軍衛戍建築物令	一九〇九	□
九八〇	仝	海軍墓地規則	一九一三	□
九八一[ab]	[仝]	軍艦維持及作業費	一九一〇	□
九八二[a-j]	仝	海軍步兵演習費管理規定	一九〇五	□
九八三	仝	水雷艇隊及潛水艇隊演習費管[理]規定	一九一三	□
九八四	仝	軍艦給仕隊演習費管理規定	一九〇五	□
九八五[ab]	仝	海岸[岸軍][ア]砲兵及水雷作業演習費管理規定	一九〇五	□
九八六	仝	海軍職工隊演習費管理規定	一九〇五	□
九八七[a-h]	仝	海軍給料法	一九〇九	□
九八八[1-33]	仝	帝國海軍平時給料規定	(一八九三 一九一四	□

九八九[ab]	海軍省	帝國海軍扶助基金總錄	一九一一	□
九九〇[a-l]	仝	將校准士官補助金竝に兵卒家族扶助料管理規定	一九〇二	□
九九一	仝	仝　上　草案	一八九九	□
九九二[a-d]	仝	帝國海軍恩給規定草案	一九〇八	□

九九三[abc]	仝	帝國海軍恩給規定	一九〇八	□
九九四[a-d]	仝	海軍將校恩給法竝に兵卒給與法	一九〇六	□
九九五[a-j]	仝	將校恩給法及兵卒恩給法附實施規則定	一九〇六	□
九九六[a-h]	仝	帝國海軍恩給下賜規定草案	一九〇八	□
九九七[a-k]	仝	帝國海軍馬匹金規定	一九〇五	□
九九八[a-j]	仝	海軍馬匹給養規定	一九一一	□
九九九[a-i]	仝	帝國海軍々艦給養規定	二九一一 二八八八	□
一〇〇〇[a-p]	[仝]	本國陸上海軍部隊給養規定	(二九一二 二九一二	□

一〇〇一	□	帝國海軍糧食費管理指令	□	□
一〇〇二	海軍省	戰時徵發法竝に施行令	一九〇四	□
一〇〇三[a-e]	仝	海軍戰時給養規定	一九一一	□
一〇〇四[a-g]	仝	海軍戰時現金給養規定	二九〇八 二九一二	□
一〇〇五[abc]	仝	帝國海軍給養官執務規定	一八八七	□
一〇〇六[a-e]	仝	海軍給養官吏任用試驗教育其他諸規定	一九一〇	□
一〇〇七[a-l]	仝	海軍被服規定	二九〇六 二八九二	□
一〇〇八	仝	仝　　上　第一•第二附錄	□	□
一〇〇九	[仝]	帝國海軍諸兵科被服規定	一九〇〇	□
一〇一〇[a-j]	仝	海軍步兵被服規定	一八九六	□
一〇一一[a-i]	仝	海軍將校被服規定	一九〇九	□
一〇一二[a-i]	[仝]	海軍步兵將校被服規定	一九〇〇	□

一〇一三[a-e]	海軍省	海軍被服官吏勤務指令	一九〇九	□
一〇一四	仝	海兵第三大隊及海軍基幹第三大隊特別被服規定	一九〇五	□
一〇一五[a-h]	仝	帝國海軍傷害保險實施規定	一九一二	□
一〇一六[a-p]	仝	帝國海軍々人身分に關する總合規定集	一九〇六	□
一〇一七	□	帝國海軍上伸[紳申]ˀ規則	一八九六	□
一〇一八	□	考料表作成規則	一九〇七	□
一〇一九	□	技倆報告書作成規定	一九〇七	□
一〇二〇[a-f]	仝	入國歸還旅費規定	一八八七	□
一〇二一[abc]	□	海軍准士官以下貯金規定	一九一二	□
一〇二二[ab]	□	帝國海軍准士官以下貯金規定草案	□	□
一〇二三	□	帝國海軍准士官以下貯金竝利子に關する規定草案	一九一二	□
一〇二四[a-h]	仝	文官適任下士の海軍諸官廳に任用され得る地位明細表	一九〇九	□

一〇二五[a-h]	海軍省	膠州守備及海軍防備本部規定	二九一一 二九〇三	□
一〇二六[a-k]	仝	膠州保護領守備及其海軍幹部隊總合規定	一九一一	□
一〇二七	仝	膠州殖民地守備及其幹部中隊規定集	一九〇二	□
一〇二八	□	青島海軍工場勞働令	一九〇二	□

一〇二九[a-d]	仝	膠州殖民地及東亞派遣隊豫算•官吏給料規則		一九一〇	□
一〇三〇	□	滑車規定(圖及表)		□	□
一〇三一(I-XLV[a-d])	仝	海軍制令報	第一年	一八七〇	□
			第二年	一八七一	II
			第三年	一八七二	III[abc]
			第四年	一八七三	IV[abc]
			第五年	一八七四	V[abc]
			第六年	一八七五	VI[a-e]

一〇三一(I-XLV[a-d])	海軍省	海軍制令報	第七年	一八七六	VII[a-d]
			第八年	一八七七	VIII[ab]
			第九年	一八七八	IX[a-d]
			第一〇年	一八七九	X[abc]
			第一一年	一八八〇	XI[abc]
			第一二年	一八八一	XII[abc]
			第一三年	一八八二	XIII[abc]
			第一四年	一八八三	XIV[abc]
			第一五年	一八八四	XV[abc]
			第一六年	一八八五	XVI[ab]
			第一七年	一八八六	XVII[a-d]
			第一八年	一八八七	XVIII[a-d]

一〇三一(I-XLV[a-d])	海軍省	海軍制令報	第一九年	一八八八	XIX[abc]
			第二〇年	一八八九	XX[abc]
			第二一年	一八九〇	XXI[abc]
			第二二年	一八九一	XXII[abc]
			第二三年	一八九二	XXIII[abc]
			第二四年	一八九三	XXIV[a-d]
			第二五年	一八九四	XXV[a-d]
			第二六年	一八九五	XXVI[a-f]
			第二七年	一八九六	XXVII[a-e]
			第二八年	一八九七	XXVIII[a-g]
			第二九年	一八九八	XXIX[a-g]
			第三〇年	一八九九	XXX[a-e]

一〇三一(I-XLV[a-d])	海軍省	海軍制令報	第三一年	一九〇〇	XXXI[a-k]
			第三二年	一九〇一	XXXII[a-m]
			第三三年	一九〇二	XXXIII[a-l]
			第三四年	一九〇三	XXXIV[a-m]
			第三五年	一九〇四	XXXV[a-m]
			第三六年	一九〇五	XXXVI[a-m]
			第三七年	一九〇六	XXXVII[a-n]
			第三八年	一九〇七	XXXVIII[a-m]
			第三九年	一九〇八	XXXIX[a-o]
			第四〇年	一九〇九	XL[a-p]
			第四一年	一九一〇	XLI[a-n]

		第四二年		一九一一	XLII[a-o]
					い-136-
一〇三一(I-XLV[a-d])	海軍省	海軍制令報 第四三年		一九一二	XLIII[a-q]
		第四四年		一九一三	XLIV[a-m]
		第四五年		一九一四	XLV[a-d]
一〇三二(I-II[a-d])	ホルドルフ	海軍制令報及海軍命令中の指令内容目録		一九〇四	□
		仝	上	一九〇〇	□
一〇三三	□	仝	上 第一附錄	一九〇四	□
一〇三四	□	仝	上 第二附錄	一九〇六	□
一〇三五	ホルドルフ	海軍諸指令内容目錄		一八九四	□
一〇三六	海軍省	海軍制令報附錄[:] 膠州制令報		一九一二	□
一〇三七	仝	海軍命令 第一年ヨリ第三年迄		(二八九九一	□
一〇三八(I[ab]-IX)	□	一八五二－六三年度海軍一般命令 第一[號]ヨリ第一〇〇號		□	I[ab]
		一八六四年度 仝	上	□	II[ab]
					い-137-
一〇三八(I[ab]-IX)	□	一八六五年度海軍一般命令		□	III
		一八六六年度 仝	上	□	IV
		一八六七年度 仝	上	□	V
		一八六八年度 仝	上	□	VI
		一八六九年度 仝	上	□	VII
		一八七〇年度 仝	上	□	VIII
		一八七一年度 仝	上	□	IX
一〇三九[ab]	□	北海鎭守府一般命令集		一九〇七	□
一〇四〇	□	軍港一般命令		一八九三	□
一〇四一[abc]	□	東洋巡洋艦隊一般命令集		一九一四	□
一〇四二	□	第二海兵團一般命令		一九〇二	□
一〇四三	□	一九一二年度海兵第三大隊大隊命令		□	□
					い-138-
一〇四四(I-IV)	□	一九〇〇年度帝國海軍豫算		□	I
		一九〇一－〇四年度 仝		□	II
		一九〇五－〇八年度 仝		□	III[ab]
		一九〇九－一二年度 仝		□	IV
一〇四五(I-XX[a-e])	□	一八九六年度獨逸帝國海軍階級錄		□	I
		一八九七年度 仝		□	II
		一八九九年度 仝		□	III[ab]
		一九〇一年度 仝		□	IV
		一九〇二年度 仝		□	V[ab]
		一九〇三年度 仝		□	VI[ab]
		一九〇四年度 仝		□	VII[a-d]
		一九〇五年度 仝		□	VIII[abc]
					い-139-
一〇四五(I-XX[a-e])	□	一九〇六年度獨逸帝國海軍階級錄		□	IX[a-d]
		一九〇七年度 仝		□	X[abc]

		一九〇八年度	仝	□	XI[a-d]
		一九〇九年度	仝	□	XII[a-f]
		一九一〇年度	仝	□	XIII[ab]
		一九一〇年度	仝 追補	□	XIV
		一九一一年度	仝	□	XV[abc]
		一九一一年度	仝 追補	□	XVI
		一九一二年度	仝	□	XVII[a-f]
		一九一二年度	仝 追補	□	XVIII[abc]
		一九一三年度	仝	□	XIX[ab]
		一九一四年度	仝	□	XX[a-e]

い-140-

一〇四六(I-XIV[a-d])	□	一八九九年度獨逸帝國海軍官吏階級錄		□	I
		一九〇一年度	仝	□	II
		一九〇三年度	仝	□	III
		一九〇四年度	仝	□	IV[abc]
		一九〇五年度	仝	□	V[ab]
		一九〇六年度	仝	□	VI[a-d]
		一九〇七年度	仝	□	VII[abc]
		一九〇八年度	仝	□	VIII[a-d]
		一九〇九年度	仝	□	IX[abc]
		一九一〇年度	仝	□	X[abc]
		一九一一年度	仝	□	XI[a-f]
		一九一二年度	仝	□	XII[abc]

い-141-

一〇四六(I-XIV[a-d])	□	一九一三年度獨逸帝國海軍官吏階級錄		□	XIII[a-f]
		一九一四年度	仝	□	XIV[a-d]
一〇四七(I-II)	□	一九一一年度海軍補任名簿		一九一一	□
		一九一四年度	仝	一九一四	□
一〇四八	ウテマン ハルムス	海軍衛生將校團名簿		一九〇九	□
一〇四九	ウーテマン	仝	第一附錄	□	□

(ハ) 雜書

一〇五〇[a-e]	ノイデツク シユロエダア	獨逸海軍	一九〇七 一九一一	□
一〇五一[ab]	ウヰスリセヌス	獨逸海軍の過去と現在	一九〇九	□
一〇五二	海軍省	海軍ルンドシヤウ特別號「最近十年間に於ける獨逸海軍思想の發達」	一九〇五	□
一〇五三	シトエワア	ウヰルヘルム二世皇帝と海軍	□	□

い-142-

一〇五四	ベルンスト[ヰド]ルフ	獨逸海軍生活	一九〇八	□
一〇五五	エルドアン	巡洋艦問答	一九一二	□
一〇五六	ペレルス	外國領海內に於ける軍艦の權利地位	□	□
一〇五七	ゲルスドルフ	獨逸艦隊は贅物なりや必要なりや	一九一二	□
一〇五八	ワロイス	海軍隨筆	□	□
一〇五九	□	露國東海新軍港リバウ	一八九七	□
一〇六〇	ゲルケ大尉譯	リバウより對馬まで(ポリトウスキ技師の手簡)	一九一一	□

一〇六一	ランゲンベルグ	砲艦「イルチス」の最後[後期]	一九一一	□
一〇六二	ヒルドブランド	下士文庫第四巻[:] 下士は海軍に就き何を知らざる可らざるや	□	□
一〇六三	海軍省	丁抹の港灣	一九〇二	□
一〇六四[abc]	シユラム	第二回ハーグ平和會議海戰法に關する審議及決議	一九一一	□
一〇六五	□	倫敦海戰法會議に於ける議事竝に決議	一九一一	□

い-143-

一〇六六[1-55]	フギユーニン中尉	海兵第三大隊史	一九一二	□
一〇六七[1-30]	ブンゲ	一八九八年－一九〇一年海兵第三大隊生活回顧錄	一九一四	□
一〇六八	□	海軍砲兵案內	一九〇五	□
一〇六九	□	帝國海軍機關士候補生用教科書	一九〇四	□
一〇七〇[ab]	海軍省	帝國海軍衛生部下士卒教程	一九〇六	□
一〇七一	仝	海軍兵卒必携手帖書式	一九〇九	□
一〇七二[ab]	伊太利海軍省編	伊太利艦船名簿	一九一二	(伊文)
一〇七三	□	一九一二年度英國海軍船艦表	一九一二	(英文)
一〇七四	□	海兵倶樂部一覽(一八九五－一九一二)	□	□
一〇七五	□	帝國海軍補助基金一覽	一九一一	□
一〇七六(I-VI)	ナウテイクス	一九〇一年度獨逸海軍年報	一九〇一	□
		一九〇六年度 仝	一九〇六	II

い-144-

一〇七六(I-VI)	ナウテイクス	一九〇八年度獨逸海軍年報	一九〇八	III[ab]
		一九〇九年度 仝	一九〇九	IV
		一九一〇年度 仝	一九一〇	V
		一九一二年度 仝	□	VI
一〇七七(I[ab]-II[abc])	獨逸海軍協會	一九一二年度獨逸海軍協會年鑑	□	□
		一九一三年[度] 仝	□	□
一〇七八(I[ab]-XII[abc])	□	一九〇三年度 海軍節用	一九〇三	I[ab]
		一九〇四年度 仝	一九〇四	II[abc]
		一九〇五年度 仝	一九〇五	III[ab]
		一九〇六年度 [仝]	一九〇六	IV[a-d]
		一九〇七年度 [仝]	□	V[ab]
		一九〇八年度 [仝]	一九〇八	VI[ab]

い-145-

一〇七八(I[ab]-XII[abc])	□	一九〇九年度 海軍節用	□	VII[abc]
		一九一〇年度 仝	□	VIII[abc]
		一九一一年度 仝	□	IX
		一九一二年度 仝	□	X
		一九一三年度 仝	□	XI[a-d]
		一九一四年度 仝	□	XII[abc]
一〇七九(I[ab]-IX[1-34])	□	繪入獨逸海軍曆 第六年	一九〇六	I[ab]
		仝 第七年	一九〇七	II[ab]
		仝 第八年	一九〇八	III
		仝 第九年	一九〇九	IV[abc]
		仝 第一〇年	一九一〇	V[ab]

	仝	第一一年	一九一一	VI[a-e]
				い-146-
一〇七九(I[ab]-IX[1-34]) ▭	繪入獨逸海軍暦	第一二年	一九一二	VII[a-f]
	仝	第一三年	一九一三	VIII[a-h]
	仝	第一四年	一九一四	IX[1-34]
一〇八〇 ▭	海軍ルンドシヤウ	第一八年第一號	一九〇七	▭
一〇八一(I-X) ▭	仝	第一九年第一號	一九〇八	I
	[仝]	第二號	〃	II
	[仝]	第三號	〃	III
	[仝]	第四號	〃	IV
	[仝]	第五號	〃	V
	[仝]	第六號	〃	VI
	[仝]	第七號	〃	VII
	[仝]	第八•九號	〃	VIII
				い-147-
一〇八一(I-X) ▭	海軍ルンドシヤウ	第一九年第一一號	一九〇八	IX
	[仝]	第一二號	〃	X
一〇八二(I-XI) ▭	仝	第二〇年第一號	一九〇九	I
	[仝]	第二號	〃	II
	[仝]	第三號	〃	III
	[仝]	第四號	〃	IV
	[仝]	第五號	〃	V
	[仝]	第六號	〃	VI
	[仝]	第七號	〃	VII
	[仝]	第八•九號	〃	VIII
	[仝]	第一〇號	〃	IX
	[仝]	第一一號	〃	X
				い-148-
一〇八二(I-XI) ▭	海軍ルンドシヤウ	第二〇年第一二號	一九〇九	XI
一〇八三(I-XII)▭	仝	第二一年第一號	一九一〇	I
	[仝]	第二號	〃	II
	[仝]	第三號	〃	III
	[仝]	第四號	〃	IV
	[仝]	第五號	〃	V
	[仝]	第六號	〃	VI
	[仝]	第七號	〃	VII
	[仝]	第八號	〃	VIII
	[仝]	第九號	〃	IX
	[仝]	第一〇號	〃	X
	[仝]	第一一號	〃	XI
				い-149-
一〇八三(I-XII)▭	海軍ルンドシヤウ	第二一年第一二號	一九一〇	XII
一〇八四(I-XI) ▭	仝	第二二年第一號	一九一一	I
	[仝]	第二號	〃	II
	[仝]	第三號	〃	III

	[仝]	第四號	〃	Ⅳ
	[仝]	第五號	〃	Ⅴ
	[仝]	第七號	〃	Ⅵ
	[仝]	第八號	〃	Ⅶ
	[仝]	第九號	〃	Ⅷ
	[仝]	第一〇號	〃	Ⅸ
	[仝]	第一一號	〃	Ⅹ
	[仝]	第一二號	〃	Ⅺ

い-150-

一〇八五(I-XI) □	海軍ルンドシヤウ	第二三年第一號	一九一二	Ⅰ
	[仝]	第二號	〃	Ⅱ
	[仝]	第三號	〃	Ⅲ
	[仝]	第四號	〃	Ⅳ
	[仝]	第六號	〃	Ⅴ
	[仝]	第七號	〃	Ⅵ
	[仝]	第八號	〃	Ⅶ
	[仝]	第九號	〃	Ⅷ
	[仝]	第一〇號	〃	Ⅸ
	[仝]	第一一號	〃	Ⅹ
	[仝]	第一二號	〃	Ⅸ[~~Ⅸ~~Ⅺ]
一〇八六 □	仝	第二三年第二編(六月－一二月)	一九一二	□

い-151-

一〇八七(I-XI) □	海軍ルンドシヤウ	第二四年第二號	一九一三	Ⅰ
	[仝]	第三號	〃	Ⅱ
	[仝]	第四號	〃	Ⅲ
	[仝]	第五號	〃	Ⅳ
	[仝]	第六號	〃	Ⅴ
	[仝]	第七號	〃	Ⅵ
	[仝]	第八號	〃	Ⅶ
	[仝]	第九號	〃	Ⅷ
	[仝]	第一〇號	〃	Ⅸ
	[仝]	第一一號	〃	Ⅹ
	[仝]	第一二號	〃	Ⅺ
一〇八八(I-VI) □	仝	第二五年第一號	一九一四	Ⅰ

い-152-

一〇八八(I-VI) □	海軍ルンドシヤウ	第二五年第二號	一九一四	Ⅱ
	[仝]	第三號	〃	Ⅲ
	[仝]	第四號	〃	Ⅳ
	[仝]	第五號	〃	Ⅴ^{ab}
	[仝]	第六號	〃	Ⅵ
一〇八九^{ab}	海軍省醫務局	キールウヰツク海軍病院	一九〇七	□
一〇九〇(I^{ab}-IX) 仝	海軍衛生制度說明	第一卷	一九一〇	Ⅰ^{ab}
	仝	第二卷	一九一一	Ⅱ^{ab}
	[仝]	第三卷	一九一一	Ⅲ^{ab}
	[仝]	第四卷	一九一三	Ⅳ^{ab}
	[仝]	第五卷	〃	Ⅴ
	[仝]	第六卷	〃	Ⅵ

一〇九〇(I[ab]-IX) 海軍省醫務局	海軍衛生制度說明	第七卷	一九一三	VII[ab]
	[仝]	第八卷	一九一四	VIII[ab]
	[仝]	第九卷	〃	IX
一〇九一(I-IV) □	一九〇三年度ゼーマンスハウス	第九年報	□	I
	一九〇六年度 仝	第一一年報	一九〇七	II
	一九〇八年度 仝	第一三年報	一九〇九	III
	一九一一年度 仝	第一六年報	一九一二	IV
一〇九二(I-XIV) 海軍省醫務局	一八九五年 - 一八九七年	獨逸帝國海軍醫務報告	一八九九	I
	一八九七年 - 一八九八年	仝	一九〇〇	II[ab]
	一八九九年 - 一九〇一年	仝	一九〇三	III
	一九〇一年 - 一九〇二年	仝	一九〇四	IV[ab]
	一九〇二年 - 一九〇三年	仝	一九〇五	V[abc]

一〇九二(I-XIV[])] 海軍省醫務局	一九〇三年 - 一九〇四年	獨逸帝國[海軍]醫務報告	一九〇六	VI[a-d]
	一九〇四年 - 一九〇五年	仝	一九〇七	VII
	一九〇五年 - 一九〇六年	仝	一九〇八	VIII[ab]
	一九〇六年 - 一九〇七年	仝	一九〇九	IX
	一九〇~~八~~七年 - 一九〇八年	仝	一九一〇	X
	一九〇八年 - 一九〇九年	仝	一九一一	XI
	一九〇九年 - 一九一〇年	仝	一九一二	XII[ab]
	一九一〇年 - 一九一一年	仝	一九一三	XIII
	一九一一年 - 一九一二年	仝	一九一四	XIV
一〇九三[abc] 仝	西南亞弗利加(一九〇四 - 〇五年)及東亞弗利加(一九〇五 - 〇六年)海軍~~衛生隊~~遠征隊衛生報告		一九〇八	□
一〇九四[a-j] 海軍省	帝國海軍航海及領海外防備交代輸送航海證憑記錄		一九〇六	□
一〇九五[a-d] □	獨逸海軍唱歌集「海の息吹」		一八九五	□

一〇九六[abc] □	海兵第三大隊軍樂隊十年間音樂會報		□	□

D. 數學•哲學•宗教•教育

(一) 數學

番號	著譯者名	書名	[發行]年代	註
一〇九~~四~~七[ab]	ブレミカア	クレレ氏係數表	一八九九	□
一〇九八[ab]	グレヴエ	五數字式對數表	一八九七	□
一〇九九	フアーバア	計數棒使用法	□	□
一一〇〇	コールラウシユ	微分積分學 附 微分方程式	一九〇七	□
一一〇一	ボルテ	商船學校用立體幾何學竝に球面三角形	一九一一	□
一一〇二	アレキサンドロツフ	初等幾何學問題	一九〇三	□
一一〇三	スプーカア	平面幾何學教科書	一八八四	□
一一〇四	ヴエルトマンコル	初等及高等數學の法式	一八九九	□

一一〇五	フランゲンハイム ボーゼルン	遠近畫法針指針•純正數學の解答	一八八七	□
一一〇六	フラゲンハイム	直線遠近法入門	一八八〇	□
一一〇七	フオルシユハイマア	平面及曲面容器底面積計算法	一八九四	□
一一〇八	デイングラア	應用幾何學原理	一九一一	□
一一〇九	チムマアマン	三角形•方形及多角形分割法	一八九六	□
一一一〇	ライト	算術代數問題集	一九〇五	□
一一一一	ミユルラア ヒーツカア	高等學校用計算法	□	□
一一一二[ab]	ウルリツヒ	自修教科書 計算法	一九〇七	□
一一一三[a-z]	シユルツエ	自修教科書 正式計算法 附 商業算術	(一九〇二 一九一三	□
一一一四[a-j]	アルテンドルフ	官吏用 實用計算法	一九一一 一九一〇	□
一一一五[1-39]	仝	文官適任下士用 實用計算法	一九〇三	□
一一一六(I[a-k]-II[a-h])	クリーチユ	文官適任下士及官吏用 計算法 第一編•第二編	一八九三 一八九四	□

一一一七	コエルチユ	小中學算術書	□	□
一一一八[1-52]	ヘスタース ロエム	獨逸小學校用算術書	一九〇七 一九〇六	□
一一一九[ab]	□	土地測量法(IX)	一九〇三	□
一一二〇	ジヨルダン	測量學提要 第三卷	一八九六	□
一一二一	□	地形學階梯	一九〇二	□
一一二二	ガウス	土地區劃法	一八九六	□
一一二三	シユルタア	普魯西地積及測量官吏必携	一九〇一	□
一一二四(I-IV)	ヒユルテン	ラインウエストフアリア測量協會雜誌 自第二六年至第二九年	(一九〇六 一九〇九	□
一一二五[a-f]	□	獨逸膠州領測量書 一八五八－一九〇〇年	一九〇一	□

(二) 哲學

一一二六	□	人間	□	□
一一二七	キユーン	ラスキン著「人間相互」	□	□
一一二八	オストワルド	一元的世紀	一九一三	□
一一二九	エス•ゼ•ウヰガー編	階梯支那研究叢書 支那哲學	一九〇六	(支那文)
一一三〇	アラバスタア	三位一體の力(三才)	□	(英文)
一一三一	ヘンリ•バルフオア	大哲南華の著 莊子	一八八一	(英文)
一一三二	ガイルス譯	莊子	一八八九	(英文)
一一三三	リチヤード ウヰルヘルム	獨譯列子冲虛直經	一九一一	□
一一三四	フヰツシヤー ペンシオン譯	ラ•ルゼン著戰爭と人(丁抹戰爭)	一九〇五	□
一一三五	フヰツシヤー	ルツソー著懺悔錄	一九一一	□
一一三六	シヨペンハウエル	處世警句	□	□

一一三七	フアイス譯	ラスキン著人世警句集	□	□
一一三八	グムプロウヰツツ	社會學初步	一九〇五	□

一一三九	ウエーベルグ	人生社會主義より見たる土地改良	一九一三	□
一一四〇	チエペ	儒教 第一編[:] 孔子傳	一九一〇	□
一一四一	リチヤード ウヰルヘルム	獨譯論語	一九一〇	□
一一四二	スタニスラ•ル•ガル譯註	朱熹と其の學說及感化	一八九四	(佛文)
一一四三	河間府天主教堂譯註	支那の道德及習慣	一九〇五	(支那文)
一一四四	ウエーゲナア	吾等若き人達	□	□
一一四五	トレプテ	獨逸男兒の社會學校にて	□	□
一一四六	サツカレイ	俗物篇及倫敦見物	一九〇四	(英文)

い-161-

(三) 宗教

一一四七	獨逸殖民協會青島部コエスタニス	支那人の宗教	一九一一	□
一一四八	シトラウス	古代支那の一神教	一八八五	□
一一四九(I-IV)	ドグルート	支那の宗教制 第一編第一卷[:] 死者の處分	一八九二	(英文)
		第二編第一卷	一八九四	(〃)
		第三編第一卷	一八九七	(〃)
		第五編第二卷	一九〇七	(〃)
一一五〇	アイテル	支那佛語辭典	一八八八	□
一一五一	コープレストン	佛教マガタと錫蘭に於ける今昔	一九〇八	(英文)
一一五二	ビクシユ	佛教問答	一八九八	□
一一五三	アイテン	佛教三講	一八八四	(英文)
一一五四	ワイグ	東亞社會研究 第九號[:] 古代及近代の佛教 第一	一九〇八	□

い-162-

一一五五	オルデベルヒ	佛陀(彼が生活•彼が教育•彼が教區)	一九〇三	□
一一五六	ワツタース	支那佛寺の十八羅漢	一八九九	(英文)
一一五七	マーゴリオス	マホメツト教	□	(〃)
一一五八[ab]	エメト	猶太教祈禱書	一九〇九	(猶太語)
一一五九	□	東洋諸國教會史	一八九六	(英文)
一一六〇	ユーシル	支那に於ける教會	一九〇七	(〃)
一一六一	ロツス	滿洲に於ける教會制	一九〇三	(〃)
一一六二	□	支那に於ける宣教師	□	(〃)
一一六三	ジ•ビ•ピオレ師	第十九世紀に於ける佛國加特利教會の事業(支那及日本)	□	(佛文)
一一六四	□	支那基[督]教紀念祭演說集	一九〇七	(英文)
一一六五	マクジリヴレイ	支那に於ける新教々會の一世紀(一八〇七－一九〇七)	一九〇七	(〃)
一一六六	モンタレムベルト	カトリツク教出版教[祿協]會第二年 ラ•モリシエール將軍其他	一八六五	□

い-163-

一一六七	ハインリツヒ	カトリツク教出版協會第三年 修道院と其他	一八六六	□
一一六八	□	仝 第四年 文學と基[督]教教育其他	一八六八	□
一一六九	イバツハ	仝 第五年 切迫せる宗教會議其他	一八六九	□
一一七〇	クランツ	エルンスト•フアアバア博士	一九〇一	□
一一七一	ゼールバツハ	敬神者と贖[? 瀆?]神者の死	一八六五	□

一一七二	北獨逸基[督]教協會譯	エルサレムの最後の日	一八七六	□
一一七三	□	爾等が王國は來るべし	一九一三	□
一一七四	リーズン	耶蘇は何を曰ひしか	一九一三	(英文)
一一七五	ベンゲルン	基[督]教の黙示錄	一八五五	□
一一七六	ゼグール	修身敬神の道しるべ	一八七三	□
一一七七	バンニヤン	巡禮の旅	□	(獨譯)
一一七八	ホルン	神の指	一八九一	□

一一七九	ヨハン•バプチスト•シヤート	愛の樂園	一九一〇	□
一一八〇	シユプアゲオン	予は信ずべきか?	□	□
一一八一[ab]	ビユツトナア	治癒せず! 治すべからざるか?	□	□
一一八二[a-d]	レーデブール	此の世の闇に日の光	一九〇〇	□
一一八三	仝	此の世の闇に永夏の光	一九〇〇	□
一一八四[a-e]	ゴスラア	聖き泉より	一八九七	□
一一八五[a-d]	フヰツシヤア	平和と歡喜	一八九七	□
一一八六[a-d]	ブリング	病患の書	一八九九	□
一一八七[a-e]	ベンダア	哀痛	一八九九	□
一一八八[a-e]	□	基[督]教雜誌協會小品集	□	□
一一八九	ロツゲ	希望(說教集)	一九〇五	□
一一九〇	ゴツフヰーネ	說教集	一八九一	□

一一九一	□	新教信者用教書 命の木 一九〇八年度	□	□
一一九二	□	聖母マリア勤行書	□	(拉•獨文)
一一九三[ab]	□	軍艦用說教書	一八九八	□
一一九四[ab]	フロムホルツ	軍艦用說教集	一八七九	□
一一九五	□	基[督]教寺[?事?]典	□	□
一一九六	エミング	アロスシユウ祈禱書	一八九八	□
一一九七	□	海員祈禱書	□	□
一一九八	□	イスラエル人用祈禱書	一九〇九	(ヘブライ文)
一一九九[ab]	ルーテル譯	聖書(新舊約全書)	一八八五	□
一二〇〇	□	舊新約全書	□	□
一二〇一[a-d]	ルーテル	新約全書	一八四〇•一九〇三 一九〇〇	□
一二〇二[abc]	ルーテル譯	繪入新約全書	一九〇四	□

一二〇三	□	新約全書	~~一九〇五~~一八九八	(伊文)
一二〇四	□	仝	一八九八	(支那文)
一二〇五	□	新約聖書	□	(支那文)
一二〇六	ホフマン	新約教書 第一卷第一部[:] ポウルの書	一九一〇	□
一二〇七	□	讚美歌集 附祈禱書	一八九八	□

一二〇八[abc]	サニキイ	讃美歌集		□	(英文)
一二〇九	□	讃美歌集(三〇〇種)		□	(英文)
一二一〇[1-138]	フオルマル	舊教陸軍祈禱及聖歌集		一九〇六	□
一二一一[1-27]	□	普魯西陸軍舊教祈禱及聖歌集		□	□
一二一二[ab]	□	新教陸軍聖歌及祈禱書		一九〇六	□
一二一三[1-219]	□	新教海軍聖歌及祈禱書		一九〇七 一八八六	□
一二一四	□	支那新報 第四五巻 第七號		一九一四	(英文)

い-167-

一二一五(I-III)	メレンスキイ主幹	教會の友 第五參號ヨリ第五五號		一八九八・一八九九 一九〇〇	□
一二一六	□	「エキスポジタア」一九一四年六月號		□	(英文)
一二一七	□	共濟會雜誌「日光」第七年 第一一號		一九一四	□
一二一八	カイザーウエルト尼蘭學校	一八五五年度基[督]教雜誌		□	□
一二一九(I-XIV)	□	獨逸カトリツク教雜誌 第一年		一八六六	I
		第二年		一八七一[?]	II
		第三年		一八六八	III
		第四年		一八七〇	IV
		第五年		一八七〇	V
		第六年		一八七一	VI
		第七年		一八七二	VII
		第八年		一八七三	VIII

い-168-

一二一九(I-XIV)	□	獨逸カトリツク教雜誌 第一〇年		一八七五	IX
		第一一年		一八七六	X
		第一二年		一八七七	XI
		第一六年		一八八一	XII
		第一七年		一八八二	XIII
		第一八年		□	XIV
一二二〇(I[ab]-II)	ヒユルスカムプ	時折[?折節?]雜誌 第七卷•第八卷		一八七一・一八七〇 一八七三	IX
一二二一	□	獨逸カトリツク教時折[?折節?]雜誌 第九年第一卷		一八七四	□
一二二二		缺番			
一二二三	□	基[督]教信徒事案報(一九〇九年五•九•一〇月)		一九〇九	(英文)
一二二四	□	一九〇〇年度基[督]教國民曆		□	□
一二二五	□	支那基[督]教紀念發[發登]記錄		一九〇七	(英文)

い-169-

一二二六(I-VII)	□	一八九八年度 伯林新教播布會報告		□	I
		一八九九年度 仝		□	II
		一九〇〇年度 仝		□	III
		一九〇二年度 仝	第七八年	一九〇二	IV
		一九〇四年度 仝	第八一年	一九〇五	V
		一九〇五年度 仝	第八二年	一九〇六	VI
		一九〇七年度 仝	第八四年	一九〇八	VII
一二二七(I[ab]-IV)	□	一九〇八年度 伯林傳道協會年報		一九〇九	そのハ一二三六ノモノト同種ナルベシ
		一九〇九年度 仝		□	II

		一九一〇年度 仝	一九一一	Ⅲ
		一九一一年度 仝	一九一二	Ⅳ
一二二八	□	伯林婦人宗教協會支部報告 一九〇四年度第三期	一九〇四	□

い-170-

一二二九(I-Ⅱ)	□	一九〇四年度 大同新教々會組合 第二〇回年報	一九〇四	□
		一九〇四－〇五年度 仝 第二一回 仝	一九〇五	□
一二三〇	□	世界各國に於ける四福音書見本	一九〇四	□

(四) 教育

一二三一	パウルゼン	獨逸教育の發達	一九〇六	□
一二三二	ベルドロウ	國民教育者としてのホーエンツオルレルン家	一八九〇	□
一二三三	□	教育詳論 五月號	一九一二	(英文)
一二三四(I-X)	□	極東佛西學校報告 自第二卷至第一一卷	自一九〇二 至一九一一	(佛文)
一二三五(I^{abc}-VII^{abc})□		一九〇三－〇四年度 青島總督府學校年報	□	□
		一九〇六－〇七年度 仝	□	Ⅱ
		一九〇七－〇八年度 仝	□	Ⅲ

い-171-

一二三五(I^{abc}-VII^{abc})□		一九〇八－〇九年度 [青島]總督府學校年報	□	Ⅳ
		一九〇九－一〇年度 仝	□	Ⅴ
		一九一〇－一一年度 仝	□	VI^{abc}
		一九一三－一四年度 仝	□	VII^{abc}
一二三六^{ab}	□	青島德華高等學堂一覽	一九一三	□
一二三七	□	青島德華高等學堂規則	一九一三	□
一二三八	□	青島特別高等專門學校簡章	一九一三	(獨支文)
一二三九	□	青島特德華高等學堂下級教案	一九一二	□
一二四〇	□	一九一一年度 山東クリスチヤン大學年報	□	(英文)
一二四一	□	漢堡殖民學校 第一年報	一九〇九	□
一二四二	フオエルスタア	漢堡學術奬勵會十年間講演報告(一八九五 一九〇五)	一九〇五	□
一二四三(I-Ⅱ)	仝	漢堡學術奬勵會 一九〇七年度講演報告	一九〇八	□
		仝 一九〇九年度 仝	□	□

い-172-

一二四四(I-Ⅱ)	漢堡殖民學校	一九〇九－一〇年度 冬期講演表	一九〇九	□
		一九一二－一三年度 仝	一九一二	□
一二四五	□	マリオン•レロイ•バートンのスミス大學校長就職式	一九一一	□

い-173-

E. 歴史•地理

(一) 歴史

(イ) 世界歴史, 各國史

番號	著譯者名	書名	[發行]年代	註
一二四六	レトウヰツシユ シユミーレ	中等歴史年表	一八八四	□
一二四七$^{1-50}$	ミユルラア	自修文庫 世界歴史	(一九〇二 一九一三	□

一二四八	デイツトマアル	世界歷史入門	一八七五	□
一二四九	クレエ	民族移住時代	一八九一	□
一二五〇	ウエルタア	世界歷史 第二編	一八八三	□
一二五一	シエーフアア	近世々界史 第一卷	一九一〇	□
一二五二(I-IV)	イエーガア	近世史(維納會議より現代迄) 第一卷(二八一五―一八四八)	一九〇四	□
		仝 第二卷(一八四八―一八六三)	〃	□

一二五二(I-IV)	イエーガア	近世史(維納會議より現代迄[)] 第三卷(一八六三―一八七二)	一九〇四	□
		仝 第四卷(一八七一―一九〇〇)	〃	□
一二五三(I-II)	仝	第十九世紀 第一卷(一八〇〇－一八五二)	一九〇九	□
		仝 第二卷(一八五二－一九〇〇)	〃	□
一二五四	ウオルフ	政治思想涵養「應用歷史」	一九一一	□
一二五五	フヰシヤーベンツオン譯	ラルゼン著近世國民の戰爭	一九〇七	□
一二五六	フアルケンシタイン	地理的發見旅行史 第四•第五卷	一八二八	□
一二五七[ab]	シエーフアア	殖民史	一九一〇	□
一二五八	ポエルマン	獨逸史年代表	□	□
一二五九[1-37]	ノイバウア	中學校用歷史教科書 第二編[:] 獨逸史	一九一二―一九一三	□
一二六〇[ab]	アイハルト エデナア	獨逸歷史	一九一〇―一九〇六	□
一二六一	フランケ	實用獨逸歷史教科書 第二編	一八九二	□

一二六二	ステフアン	獨逸帝國の曙光時代	□	□
一二六三(I-II)	ギルシユナア	獨逸皇帝治世 第一卷•第三卷	□	□
一二六四(I-VII)	ジイベン	ウヰルヘルム一世の獨逸帝國創業 第一卷	一八九二	I
		第二卷	一八九六	II
		第三卷	一八九二	III
		第四卷	〃	IV
		第五卷	〃	V
		第六卷	一八九九	VI
		第七卷	〃	VII
一二六五	□	ホーエンツオルレルン年鑑 第一卷－第一七卷(一八九七－一九一三)內容目錄	□	□
一二六六	チンゲラア	獨逸帝室ホーエンツオルレルン	一八九七	□
一二六七	ゲルハルトマミントール	ホーエンツオルレルン家初代史 神の爭奪	一九〇三	□

一二六八	ベルナア	普魯西王國史	一八九六	□
一二六九	ピユツツ	普魯西歷史教程	一八九五	□
一二七〇	シユミツト	普魯西軍人讀本 祖國史	一八八九	□
一二七一	ムント	巴里皇帝叙記 第一編	一八五七	□
一二七二	ゴツトヘルフ	西端[~~西端~~瑞西?]國民生活 第二卷	一八五〇	□
一二七三	ウオルタア•スコツト	スコツトランド史「祖父の話」	一九〇二	(英文)
一二七四	□	佛蘭西皇帝錄 第二	□	□
一二七五	マスペロ	古埃及	一九一一	□
一二七六	ウヰルト	土耳古の歷史	一九一二	□

一二七七	クラウゼ	西[亞ˀ 西亞ˀ]細亞に於ける露國(一五五八－一八九九)	一八九九	(英文)
一二七八	フアーバア	支那歷史年代便覽	一九〇二	□
一二七九	□	中西年歷[曆曆]ˀ合攻(一七五一－二〇〇〇)	一九〇五	(英支文)

い-177-

一二八〇	ペテル黃	中西歷[曆曆]ˀ日合璧	一八八五	(英支文)
一二八一	アチヤス•チヤン編	極東諸國對照歷史年表	一九〇五	(佛文)
一二八二	フオン•フリース	支那歷史	一八八四	□
一二八三(I-II)	ブールガア	支那歷史 第一編•第二編	一八九八	(英文)
一二八四	仝	支那小史	一八九三	(英文)
一二八五	ポツト	支那歷史通覽	一九〇三	(英文)
一二八六	フアーバア	歷史より見たる支那	一八九五	□
一二八七[a-i]	□	支那の歷史的發達概覽	一九一二	□
一二八八	マルテイン	支那の歷史哲學及宗教	一八九四	(英文)
一二八九(I-III)	エスピ•ウヰガー編	階梯支那研究叢書 第一〇[:] 歷史 第一卷	一九〇三	(支佛文)
		第二卷	一九〇四	(〃)
		第三卷	一九〇五	(〃)

い-178-

一二九〇(I-V)	エヅワール•シヤヴンヌ譯註	司馬遷の歷史的記錄 第一卷	一八九五	(佛文)
		第二卷	一八九七	(〃)
		第三卷	一八九八	(〃)
		第四卷	一九〇一	(〃)
		第五卷	一九〇五	(〃)
一二九一	アルベール•シエツプ	吳朝史	一八九六	(佛文)
一二九二	ロツス	滿洲朝(清朝の統治)	一八八〇	(英文)
一二九三	モンタルト•ツージニサス	上海史	一九〇九	(〃)
一二九四	クラウゼ	中國衰過	一八九八	(〃)
一二九五	チエペ	日支歷史的關係(太古より一六〇〇年代に至る)	一九〇七	□

い-179-

(ロ) 傳記

一二九六	シユミツド	オイスタヒユス(基督前の話)	□	□
一二九七	ベラニ	墨西哥の發見と點[點占]領	一八四七	□
一二九八	ワイトブレヒト	羅馬の戰爭(十六世紀史の一節)	□	□
一二九九	レツダアホーゼ	オラニエンのウヰルヘルムと和蘭の叛亂	□	□
一三〇〇	グルニドマン	ハンザの話「伯爵騷動」	□	□
一三〇一	ヘルヒエンバツハ	巴里よりモスカウへ	□	□
一三〇二	デンハルト譯	エルクマン•カトリアン著「ワータアロー」其他	□	□
一三〇三	ゴールドシユミツト譯	エルクマン•カトリアン著「ワータアロー」其他	□	□
一三〇四	ローレンツ	第十九世紀の政治家と歷史家	一八九六	□
一三〇五	フオン•ホルレベン	近代海上の英雄と海戰	一九〇七	□
一三〇六	ツオルリング	巴里人界漫遊 第二卷	□	□

一三〇七	クルニツク撰	ルーズヴエルト著後部森林人の國にて	一九一〇	□
一三〇八	フエルン	練[練錬]?金者(少年歴史物語)	□	□
一三〇九	フラチン•パーシヤ	スダンに於ける火と劍	一九〇六	□
一三一〇	イエンゼン	ブランデンブルク亭萬歳	一九〇二	□
一三一一	クレー	一獨逸國民の名譽と滅亡(五三五－五五五 ゴート戰爭)	一八八七	□
一三一二	ホルン	維納の包圍(一六八三)	一八九九	□
一三一三abc	シルラア	三十年戰史	□	□
一三一四(I-II)	アイヒエンホルツ	獨逸に於ける七年戰史 第一編•第二編	□	□
一三一五	レツダアホーゼ	七年戰爭	□	□
一三一六	シユミツト	フリードリヒ•ウヰルヘルム三世及ルイゼ時代(一八〇〇－一八〇九)	□	□
一三一七	フオン•カルロウヰツツ	歴史物語 我等が祖父の時, 第二七, 新時代の展開(一八一五－三一年)	□	□
一三一八	エルム	獨立戰爭(一八一三－一八一五)	□	□

一三一九	ヤーン	獨逸獨立戰爭(一八一三－一八一五)	一八九三	□
一三二〇	ツユルレ	獨立戰爭(一八一二－一八一五) 第一卷	□	□
一三二一	ブリユーメル	一八四八－四九年獨立革命史	一八九八	□
一三二二(I-II)	ビーダアマン	予の生涯と其時代 第一卷 一八一二－一八四九	一八八六	□
		仝 第二卷	〃	□
一三二三	パーペ	舊より新帝國へ	一八八八	□
一三二四	フオン•ウヰンタアフエルド	光榮ある三戰役史	□	□
一三二五	マイスタアグリイヒエン	普墺戰爭回顧•普佛戰爭回顧	□	□
一三二六	ジイベル	普佛戰爭の淵源	一九一〇	□
一三二七	ゲオルギ	一八七〇－七一年大戰	一八九五	□
一三二八	グルーベ	隣人ローマン民族(普佛戰爭)	一八九五	□
一三二九	ドエル	一八七〇－七一年獨佛戰爭 第三卷	一八七一	□
一三三〇ab	クライン	一八七〇年フロエシユワイラア記錄	一九一三 一九〇四	□

一三三一	キユーン	ロイテン	□	□
一三三二	フロムメル	おゝストラスブルグ 汝 美しの町よ	一八九八	□
一三三三	ミユルラア	ストラルズンド包圍	一八八〇	□
一三三四	フエルヂナンド•シユミツト	ケーニヒグレツツ	□	□
一三三五	ブライブトロイ譯	セダン回顧錄	□	□
一三三六	レストルフ	セダン	一八九五	□
一三三七	ルツペルスベルグ	ザールブリユツケン戰爭記錄	一九一一	□
一三三八ab	フロムメル	王の軍服にて	一八九六 一九〇八	□
一三三九		缺番		
一三四〇ab	ミユルラア	獨帝二十五年祭	一九一三	□
一三四一	コンラデイ	泰西に於ける支那文明の影響	一八九八	□
一三四二	パアカア	支那と歐洲との交通	□	(英文)
一三四三ab	アイテル	支那に於ける歐人(香港史)	一八九五	(〃)

一三四四	アンリイ•コルデヰエ	第十九世紀の支那に於ける佛蘭西	一八八三	(佛文)
一三四五	獨逸殖民地協會青島部	ウヰルヘルム　歴史上より見たる外國と支那との關係	一九〇九	□
一三四六	□	一八九一年　支那に於ける反外國騒亂	一八九二	□
一三四七	アレン	北京公使館の包圍	一九〇一	(英文)
一三四八	リンドセ•ブライン	支那「泰平」の亂	一八六二	(〃)
一三四九	スチユーベ譯	ワシルエフ著 支那の開發	一九〇九	□
一三五〇	フホールコム	明初年代カサイ皇室の兒孫	一九〇六	□
一三五一	フオーシイス	一九〇〇年支那動亂の殉難者	一九〇四	(英文)
一三五二	ドクトル•シユレーゲル	支那娼史	一八八〇	(佛文)
一三五三	ドミス•ガンダール	支那大運河沿革	一八九四	(佛文)
一三五四	シユミツト	クヰツツオウ(十四世紀末物語)	□	□
一三五五	キユーン	バルバロツサ	□	□

一三五六	オエルテル	フリードリヒ一[═]一世　バルバロツサ	一八九四	□
一三五七	エルテル	カール大王	一八九四	□
一三五八	オエルテル	オツト第一世大王	一八七七	□
一三五九	シユツプ	フリードリヒ•ウイルヘルム大撰[撰選]帝候[候侯]	一八九四	□
一三六〇	フエーゼ	フリードリヒ大王	□	□
一三六一	ニコライ	普魯西王フリード[リヒ]二世の逸話	□	□
一三六二	フオン[•]ホルン	ハンス•ヨアヒム•フオン[•]チーテン傳	□	□
一三六三	シユミツト	ヨゼフ二世皇帝	□	□
一三六四	ウエルデイヒ	老デツサウ人(レオポルド一世)の生涯と事蹟	一九〇三	□
一三六五	エンゼ	アンハルト•デツサウのレオポルド公	□	□
一三六六	ハインリツヒ	フリードリヒ•フリーゼンとリユツツオウ旗下の士	一八九〇	□
一三六七	ゾンネンブルグ	ゴツトフリード•フォン[•]ストラスブルグ	□	□

一三六八	シユツプ	ウヰルヘルム第一世皇帝	一八九九	□
一三六九	コエラア	獨逸皇帝ウヰルヘルム一世	一八九〇	□
一三七〇	オツト	吾等が皇帝ウヰルヘルム一世	□	□
一三七一	フヰツシヤア	獨逸大帝ウヰルヘルム一世	一八九七	□
一三七二	オンケン	吾が大帝ウヰルヘルム(百年祭紀念誌)	□	□
一三七三	エルム	鐵王子(フリードリヒ•カール親王)	□	□
一三七四	ラングート	普魯[西]親王ハインリツヒ	一八九三	□
一三七五	ホルン	老フリツツ	□	□
一三七六	ラングート	プリンツ•ハインリツヒ•フオン•フ[═プ]ロイセン	一八九三	□
一三七七	ガーレツプ	ウヰルヘルム一世旗下の傑士　第一卷[:] フリードリヒ•カール親王	一八九□	□
一三七八	仝	右　第五卷[:] アルベルト•フオン•ローン伯	一八九一	□
一三七九	クロエデン	普王フリードリヒ•ウヰルヘルム第三世	一八四〇	□

一三八〇	ロツゲ	演説家ビスマーク	一八九九	□
一三八一	シユミツト ヘンニヒカア	ビスマークの逸話	□	□
一三八二	ミユラアボーン	モルトケ伯	□	□
一三八三	ヴルンハーゲン フオン・エンゼ	ブリユツヒヤア公	□	□
一三八四	ホルン	シヤルンホルスト	一八九九	□
一三八五	ホエツカア	フリードリヒ•ルードウヰヒ•シユロエダア	□	□
一三八六	チームセン	ゲオルグ•ウエンツエスラウス•フオン•クノーベルスドルフ	□	□
一三八七	ノイマン	ズルツバツハの恩人	一九〇二	□
一三八八	チームセン	ジツキンゲンのフランツ	□	□
一三八九	サルツアア	フリードリツヒ•フオン•アイゼンハルト將軍の回顧錄	一九一〇	□
一三九〇	ウエルナア	カピテン•ラ?ツヒヤア 第一編	一八九六	□
一三九一	マヌエル博[? 傳?]士	アルベルト•ビチュス	□	□

一三九二	シユミツト•ワイセンフエルス	クルツプと其の事業	□	□
一三九三	ロムペル	スタイン長官と對英戰に於けるドラスヴール人 第一編[:] スタイン長官	□	□
一三九四	ガイザア	鐵石心(宗教家ヨハネスマイヤアの事)	一九〇五	□
一三九五	ホエツカラ[ヲア]	諷刺詩人ヨゼフ[•]ハイドウン	□	□
一三九六	ビーデンカツプ	詩人牧師マツクス[•]アイト	一九一〇	□
一三九七[I-II]	ハイネ	奈翁 第一卷[•]第二卷	一八四〇	□
一三九八	ウオルフ譯	テイヌ著「奈翁」	一九〇七	□
一三九九	レンツ	ナポレオン	一九〇五	□
一四〇〇	ムント	ミラボウ伯 第二卷	一八五八	□
一四〇一	ウエルデイヒ	シルと十一兄弟	□	□
一四〇二	ブリユーメル	瑞典王グスタフ•アドルフ	一八九四	□
一四〇三	レムケ	マルコ[•]ポロ	一九〇七	□

一四〇四	ボンド譯	プリニユース: フヰスク	一八三五	□
一四〇五	キユール	フリースランド人「ハルロ•ハルリング」	一九〇六	□
一四〇六	ジエピ•クラーク	「シヤネツト•クラーク」傳	□	□
一四〇七	ウヰスタア	リン•マツクリーン	□	(英文)
一四〇八	ブールヂヤア	サア•ホリデイマカアトネイの一生	□	(英文)
一四〇九	□	マリイ•ナトウシユス傳	一八九四	□
一四一〇	プレーン•フオン•デウヰツツ	資財の王 第一卷[:] 外國大財產家	□	□
一四一一	エヅワールシヤワンヌ譯註	法律研究の爲め泰西に赴きし名僧に關する唐朝時代の記錄	一八九四	(佛文)
一四一二	カール	清國慈禧皇太后	一九〇六	(英文)
一四一三	ドグラス	現代の公人 李鴻章	一八九五	□

(ハ) 雜書

一四一四	ハイヒエン譯	ネ エルン著 海の英雄 第一巻	□	□
一四一五(I-II)	ヂヤイルス	支那古今姓氏族譜 第一巻 第二巻	一八九四	(英文)
一四一六(I-II)	□	極東雜誌 第二巻 第三巻	(一九〇三 一九〇六	□

(二) 地理

(イ) 世界地理, 各國地理

一四一七	□	マイヤナ[~~ホ~~ア]小地圖	一九〇〇	□
一四一八[ab]	□	世界地圖	□	□
一四一九[ab]	デベス	學校用地圖	一九一二	□
一四二〇	シドウ ワグナア	學校用地圖	一九一〇	□
一四二一[a-d]	シユミツト	小學地圖	一九一〇	□
一四二二[1-37]	ランゲ	小學校用地圖	□	□

一四二三	ウエーア アルテンドルフ	下士用地圖	□	□
一四二四	□	文官適任下士用地理劃圖例	□	□
一四二五	□	ビルツ家庭全書 第四巻[:] 世界地理	□	□
一四二六	スコーベル	地理精錄(一般地理•風俗學•經濟地理) 第二巻	一九一〇	□
一四二七(I-IV)	フオツシヤー ガイストベック	高等地理學 第二編	一九一二	□
		第三編	一九一一	□
		第四編[:] 獨逸帝國	□	□
		第五編	一九一一	□
一四二八	ゼトリツヒ	地理學	一九〇八	□
一四二九	ヘルワルド	地球と其の國民	□	□
一四三〇[ab]	キルヒホフ	地理教科書	一九〇八 一八八九	□
一四三一(I-II)	仝	學校用地理教科書 第一編•第二編	一九〇九 一九〇五	□

一四三二[1-43]	ダニエル	地理學入門	(一九一三 一九〇一	□
一四三三[a-i]	シユルツエ	自修文庫 地理學	(一九〇四 一九一三	□
一四三四	ホ[~~ホ~~ボ]エツトヒヤア	文官適任下士用地理學	一九一二	□
一四三五[1-86]	ゲルブレヒト	文官適任下士用參考書 地理	(一八九八 一九〇九	□
一四三六(I-III)	マイヤア	獨逸地名辭典 第一巻[:] A-K	一九一二	□
		仝 第二巻[:] L-Z	一九一三	□
		仝 第一補遺	一九一三	□
一四三七	ブルンヒヨウ	獨逸帝國內居住地表 第一編[:] A-K	□	□
一四三八(I-II)	〃	〃 第一編[:] A-L	一八九七	□
		第二編[:] M-Z	一八九七	□
一四三九	〃	獨逸帝國內居住地表	一八九七	□
一四四〇	ノイマン	獨逸帝國地名辭典	一九〇五	□

一四四一	レーム	獨逸巡り	一九一一	□
一四四二	スプリガーデ モイゼル	獨逸殖民地々圖附解說	一九一二	□

一四四三[a-k]	□	獨逸殖民地圖附一九一一年度年鑑	□	□
一四四四	ハイルボルン	獨逸殖民地	□	□
一四四五	ドーヴエ	獨逸殖民地第二南洋と膠州	一九一一	□
一四四六(I-IV)	シトランツ	一九〇八年度繪入獨逸殖民地曆	□	□
		一九〇九年度　仝	□	□
		一九一一年度　仝	□	□
		一九一四年度　仝	□	□
一四四七	ロスコシユニイ	歐羅巴の殖民地　西部亞弗利加「ゼネガール」より「カメルン」迄	□	□
一四四八	リツタア	大陸發見	一九〇八	□
一四四九	ゲーテ	イングランド, ウエルス及アイルランド	□	□

一四五〇	クエルベルグ	瑞典とコペンハーゲン(旅行案內)	一九一二	□
一四五一	ブラツタ リツタア	亞細亞	□	□
一四五二	ハツクマン	東方世界	□	□
一四五三[ab]	フオスベルグレコウ	一九一二年度亞細亞年鑑	一九一二	□
一四五四	ハーン	日本	一九一一	□
一四五五	アルフレツド•ステツド	吾等が祖國　日本	一九〇四	□
一四四六(I-II)	ジーボルド	日本　第一卷[•]第二卷	一八九七	□
一四五七	佛國領事アムボル	臺灣島	一八九三	(佛文)
一四五八	ジロスツエウスキ	朝鮮	□	□
一四五九	クーク	支那	一八五八	(英文)
一四六〇	□	支那一覽	□	□
一四六一(I-II)	ウヰリヤムス	中國總論　第一編[•]第二編	一八九五	(英文)

一四六二	テイセン	支那十八省　第一編[:] 支那一般地理	一九〇二	□
一四六三	カルリ	浙江省	一八九九	(伊文)
一四六四	アンリイ[•]アーヴル	安徽省	一八九三	(佛文)
一四六五	上海案內所	山東	一八九八	(英文)
一四六六[abc]	□	山東省略解	一九〇〇	□
一四六七	ロエルフアア	山東省地質一覽	一九〇一	□
一四六八	モーツ	獨領山東省地名錄	□	□
一四六九[ab]	□	山東鐵道と其沿線地方	一九一二	□
一四七〇	ウヰンタア	青島	一九一一	□
一四七一[ab]	ベーヌ?•クリーガア著	青島案內記	二九〇四 一九〇五	(獨英文)
一四七二	ヘツツラア	獨領膠州灣	一八九八	□
一四七三	ボイエド	北京	一九〇六	□

一四七四	ルヰ•ガイアール	開港場　南京	一九〇一	(佛文)
一四七五	ゼツカア	申(支那繁華都市招[~~招~~紹]介)	一九一三	□
一四七六	ケンネリイ	支那及其屬領の市町開港場表	一九〇八	(英支文)

一四七七	アンリイ•アヴル	揚子江を扼せる崇文島	一八九二	(英佛文)
一四七八	リヒヤード•ウキルヘルム	嶗山	一九一三	□
一四七九	藍叔玉筆鈔	嶗山誌	一九一二	(支文)
一四八〇	モンタキユーベル ウッドヘッドソン共編	一九一二年度支那年鑑	□	□
E(ニ)•(イ)番外I-II	デイツセン編	リヒトホーフエンの支那日記 第一卷[•]第二卷	一九〇七	□

(ロ) 風俗

一四八一	□	北米合衆國よりの書翰 第二卷	□	□
一四八二	フアルケンホルスト	亞弗利加の小獨逸 第一[:] 殺木者	□	□

一四八三	ヒツチエンス	埃及の呪文	一九一一	□
一四八四	ガイルス	支那及支那人	一九〇二	(英文)
一四八五(I^{ab}-II^{ab})	フランシス[•]ダヴキス	支那人 第一卷[•]第二卷	二八三六 二八三四	(英文)
一四八六^{ab}	ドウクラス	支那の社會	一八九五	(英文)
一四八七	ボール	支那事情	一九〇四	(英文)
一四八八	パーカア	支那風俗	一八九九	(英文)
一四八九	ステンツ	南部山東風俗論?	一九〇七	□
一四九〇	ルーントラート	中國より(支那風俗)	□	□
一四九一	ヒルト	支那研究 第一卷	一八九〇	□
一四九二^{ab}	ブラント	支那國民研究 □□小女と夫人	一九〇〇	□
一四九三	河間府天主堂出版	近世支那民俗學	一九〇九	(佛文)
一四九四	マルテイン	支那南北の生活	一八九七	(英文)

一四九五	マクゴワン	側面より見たる支那生活	一九〇七	□
一四九六	ホフマイスタア	支那に於ける予の經驗	□	□
一四九七	ホシイ	西部支那に於ける三年間	一八九七	(英文)
一四九八	ガンドレイ	支那の過去と現在	一八九五	(英文)
一四九九	コーネビイ	サーチライト下の支那	一九〇一	(英文)
一五〇〇	ジヨンストン	北支那に於ける獅子と龍	一九一〇	(英文)
一五〇一	シエラート譯	支那人チエン•キ•トン將軍著支那の社會的描寫	一八九〇	(英文)
一五〇二	□	廣東漫錄 第三	一八三一	(英文)
一五〇三	ロ?イグ	東亞社會研究 第四[:] 支那人の死と葬儀	一九〇六	□
一五〇四	北京ラザリスト教會宣教師ファヴキエ	北京の由來と案內	一八九七	(佛文)
一五〇五	エチエンヌ•ヂー	支那の文官試驗	一八九四	(佛文)
一五〇六	アンリー•アヴル譯註	西安府に於ける基督教徒の碑	一八九五	(佛文)

一五〇七(I-II)	英國亞細亞協會(上海)	英國亞細亞協會北支那支部雜誌 第十六卷第一部 全 一九一四年 第四五卷	一八八二	(英文[])
一五〇八(I-II)	□	東亞畫報 第三卷 自第一號至第四號及第五號より第八號	一九〇五	□

(ハ) 紀行

一五〇九(I-II)	フレー	獨逸國にて(ライン地方とウエストフアーレン)	□	□
		仝 第二編(漢堡よりオストマルケンまで)	□	□
一五一〇	ケムメル	伊太利とシシリイの秋	一九〇〇	□
一五一一	ドミニツク デユランデヰ	伊國の塵(自動車乘の手帳)	□	(佛文)
一五一二	クライパア譯	アムンドセン著西北水道(北極航行)	一九〇八	□
一五一三	フヰルヒナア セールハイム	北氷洋スピツツベルゲン横斷記	一九一一	□
一五一四	グレツツ	南部亞弗利加自動車横斷記	一九一〇	□

い-199-

一五一五	ケーネル譯	ケルストロエム著南亞弗和[稱利]加の十八年[171]	一八九九	□
一五一六	フレーテン譯	トムソン著東亞弗利加研究旅行[:] マサイ地方跋涉	一八八五	□
一五七[七一]七(I[a-d]-VI)	ロマイヤ ウヰスリセヌス	獨逸海軍及殖民文庫 南船北馬 第一卷	一九〇八	□
		第二卷	〃	II[a-l]
		第三卷	〃	III[a-f]
		第四卷	〃	IV[a-d]
		第五卷	〃	V[ab]
		第六卷	一九一一	VI
一五一八	ゴルツ	東方旅行記(アラビヤ地方)	□	□
一五一九	シユロエダア フラシツ	東亞旅行	□	□
一五二〇	マルチン	予が最近の東亞旅行	一九一一	□
一五二一	チーグラア	東洋紀行 第二編	一八五五	□

い-200-

一五二二	ゲルマンス	東亞漫遊(北支那•朝鮮•日本)	一九一三	□
一五二三	フオン•ヘツセワルテツク	支那と日本	一八九七	□
一五二四	ステンツ	一宣教師の支那漫遊	一八九九	□
一五二五	ザルツマン	若き支那より(革命後の旅行記)	一九一二	□
一五二六	ゴールドマン	支那の一と夏 第二卷	一八九九	□
一五二七	ザルツマン中尉	中央亞細亞鞍上横斷記	一九〇三	□
一五二八	ヘデイン	亞細亞沙漠横斷記 第二卷	一八九九	□
一五二九	ハツクマン	支那西藏ビルマ國境地方旅行記	一九〇五	□
一五三〇(I-II)	コルクハウン	黃金國跋涉 第一卷[•]第二卷(南支那境界地方及ビルマ)	一八八三	(英文)

F. 言語學[•]辭典

(一) 言語學

い-201-

一五三一	ドウンガア	鋭敏なる言語感の助長	一九〇七	□
一五三二	アントン、フオン、ヴエリクス	將來の記憶術に關し[て]	一九一二	□
一五三三	イヴアン•モルガン譯註	文理と支那思想の典型	一九一二	(英文)
一五三四	ルヰ[•]ガイヤール	支那に於ける萬字型と類似物の研究	一八九三	(佛文)

[171] 原文では"南"•"亞"兩字間に1字分の空欄が有るが, 翻刻に際して削除.

一五三五	クル	獨逸姓名解		一九〇九	□
一五三六	〃	獨逸個人名表		一九一〇	□
一五三七(I-XV)	アーレント編	伯林大學東洋語學校報告	第一年[:] 東亞研究	一八九八	I
			第二年 仝	一八九九	II
			第三年 仝	一九〇〇	III
			第四年 仝	一九〇一	IV
			第五年 仝	一九〇二	V
			第六年 仝	一九〇三	VI

い-202-

			第七年 仝	一九〇四	VII
			第八年 仝	一九〇五	VIII
			第九年 仝	一九〇六	IX
			第十一年 仝	一九〇八	X
			第十二年 仝	一九〇九	XI
			第十三年 仝	一九一〇	XII
			第十四年 仝	一九一一	XIII
			第十五年 仝	一九一二	XIV
			第十六年 仝	一九一三	XV
一五三八	グリムマア	拉丁字獨逸入門書		□	□
一五三九[a-o]	マイヤア	獨逸語教科書		一九一三	□
一五四〇	セヴエンソン	獨逸語會話實用教科書		□	(瑞典語)

い-203-

一五四一	ウヰルヘルム	華德進階德文本		一九〇三	□
一五四二(I-II[a-n])	クランツ	德文入門 第二卷		一八九九	(獨支)
			第三卷	一八九九	(〃)
一五四三[abc]	李周臣	德字變法入門		一九〇九	□
一五四四	トイフェル	德國話規二集 名變法 上卷		一九〇四	(獨支)
一五四五	ローベルベーウオールフロム兩教授	獨逸文典		一八九三	(佛)
一五四六	カト	正しく話せ(獨逸文法)		□	□
一五四七[1-34]	マイヤア	中學校用獨逸文法書		一九一三	□
一五四八[a-k]	ユーベルア[子]アツカア	自修文庫 獨逸文法附正字法		一九一一 一九〇四	□
一五四九(I[a-k]-II[a-z])	カーンマイヤシュルツエ	獨逸語練習書 第一•第二•第三卷		一九〇三	I[a-k]
			仝 第五	(一九〇〇 一九〇八	II[a-z]
一五五〇	□	一年志願兵試驗準備 ルスチン式通信教授「獨逸語」		□	□

い-204-

一五五一[1-86]	□	獨逸正字法附語彙		(一九〇〇 一九一三	□
一五五二[1-74]	ユーベルアツカア	自修文庫 獨逸作文法		(一九〇三 一九一三	□
一五五三	プリツゲ	獨逸作文形式法		一九〇八	□
一五五四[ab]	ゲムスマルドフエルド	獨逸文章記號用法		□	□
一五五五	デンカア	序詞集		□	□
一五五六	ブツシユ	自修教科書 演說及式辭		一九一〇	□
一五五七	ツムマツハ	自修文庫 公文書作成法		一九一二	□

一五五八	ユーベルアツカア	自修文庫 書翰文範	一九〇二	□
一五五九	アルテンドルフ	獨逸文範	一九一〇	□
一五六〇[ab]	ラウテンハムマア	ガーベルスベルグ速記法教科書	□	□
一五六一	レツチユ	ガーベルスベルグ式速記術階梯	一八九三	□
一五六二[1-29]	ベツクラア	ストルツエ[=]シユライ獨逸速記入門	一九〇三・一八九八 一九〇八	□

一五六三[ab]	□	ストルツエ[=]シユライ式獨逸速記術案内	一九〇九 一九〇四	□
一五六四	ゾンタツハ	獨逸速記術實用教科書(ストルツ[エ=]シユライ)	□	□
一五六五	ゾンターク	ストルツ[エ=]シユライ式速記術實用教科書	□	□
一五六六[abc]	ヘル	獨逸速[記]術教科書(ストルツエ=シユライ)	一九一一	□
一五六七	シユライ	チルラア連山旅行記(速記)	一八九八	□
一五六八	ガングホーフアア	マムメルガウの佛像師(速記術)	□	□
一五六九	スピールマン	小說「カウブのエルスライン」ストルツエ=シユライ速記術	□	□
一五七〇(I-IV)	バトケ	速記術協會雜誌 第十七年	一八九九	□
		第十八年	一九〇〇	□
		第十九年	一九~~一〇~~〇一	□
		第二十年	一九〇二	□
一五七一	コプリアン	速記術の友 第二期	一九一三	□

一五七二	シユルツエ	速記術滑稽雜誌 第五年	一八九九	□
一五七三	ウヰツトケン	獨逸陸軍速記術雜誌「再役下士」第十三年	一九一一	□
一五七四	□	ルスチン式速記術通信教授 第一信	□	□
一五七五	ウオルタア	自修文庫 速記術	一九一一	□
一五七六[ab]	プレツツ	佛語初步	一九〇八	□
一五七七	ゲオルグ	佛蘭西語初等文法	一九〇九	□
一五七八	グランツ	ノイフエルド語學指南「佛語」	□	□
一五七九	□	佛語其他自習書	□	□
一五八〇	□	一年志願兵試驗準備 ルスチン式通信教授「佛蘭西語」	□	□
一五八一[1-64]	ゲルブレヒト	文官適任下士用參考書 佛蘭西語	□	□
一五八二[a-t]	グランツ	ノイフエルド 語學指南「英語」	□	□
一五八三[ab]	シユウヰイガア	英語教科書	一九一〇 一九一一	□

一五八四	クリューガア トレッテイン	英語教科書	一九〇一	□
一五八五	□	ランゲンシヤイト英語通信講義 第一信	□	□
一五八六	ブラシユケ	商業用英語	一九一一	□
一五八七	ボエルマン	英語	一九〇九	□
一五八八	コツホ	實用英語	□	□
一五八九	ザウレ	高等女學校英語讀本 第一卷	一八八五	□
一五九〇		缺番		
一五九一	ヘツサア	支那文法	一九〇九	□

一五九二	ハース	支那文件字句入門	一八八八	(英文)
一五九三[abc]	ザイデル	支那語會話文法	一九〇一	□
一五九四[a-h]	ザイデル	支那語入門	一九〇一	□
一五九五	聯養 カムメリヒ	伯林東洋語學校教科書 支那時文入門	一九一二	□

一五九六[a-i]	モエルレンドルフ	支那官話實用自修書	一八九一 一九〇〇	□
一五九七(I-II)	ウエート註	文件自□集(支那文書範例) (支那文)	一九〇五	□
		仝 (英文)	〃	□
一五九八[abc]	ウヰルヘルム	蒙學初歩(支那字書讀法)	一九〇六	(支)
一五九九	バルロツク	支那文語累進練習書	一九〇二	(英)
一六〇〇	ガイルス	語學擧隅	一八七三	(英支)
一六〇一	モール	支那語教科書	一九一四	□

(二) 辭典

一六〇二	ドウテン	獨逸正語辭典	一九一一	□
一六〇三[a-d]	フオーゲル	獨逸語文法正語辭典	一九〇三	□
一六〇四	ユーベルアツカア	自修文庫 正語辭典及外國語辭典	一九〇六	□

一六〇五[1-29]	□	普魯西官房用獨逸正字語彙	一九〇三	□
一六〇六	キーゼウエツタア	ポツケツト外國語辭典	□	□
一六〇七	ザツハス	佛獨及獨佛辭典	一八九七	□
一六〇八	ボーホ フライ共著	獨露辭典	□	□
一六〇九	パウロウスキ	露獨辭典	一九〇〇	□
一六一〇(I-II)	ボーホ アルコシイ	西獨•獨西辭典 第一卷[:] 西獨辭典	一八八七	□
		仝 第二卷[:] 獨西辭典	□	□
一六一一	□	西獨袖珍辭典 第一卷	一八九三	□
一六一二	ランゲ	日獨辭典 第一卷	一九一三	□
一六一三	ガイルス	支英辭典	一八九二	□
一六一四	ガイルス註	極東研究參考語解	一八八六	(英文)
一六一五	レラフラン クニヴルニル編	支佛辭典	一八九〇	□

一六一六	クーヴルール編	支那語古典の字引	□	(佛文)
一六一七	スーシル	四千字支英ポケット辭典	一九〇四	□
一六一八[a-j]	ザイデル	北支那口語辭典	一九〇一	□
一六一九(I[ab]-III)	南山東カトリツク組合	德華字典 第一卷•第二卷•第三卷	一九〇六 一九〇七	I[ab]•II•III
一六二〇	ウヰルヘルム	華德常用簡易辭典	一九〇九	□
一六二一	□	支=英辭書 八〇一頁「ミン」以下	□	□
一六二二	□	支那百科辭書(英佛文譯)	□	□

G. 自然科學

(一) 一般

一六二三	ビルツ編	家庭教育 博物學	□	□
一六二四	ベタアンン キンベルタ	世界萬物と人類は如何に成立せしか	一九〇六	□

い-211-

一六二五	キユーン	世界的發明界	□	□
一六二六(I[ab]-II)	ノイマイヤア	科學研究旅行指南 第一卷 第二卷	一八九一 一八八八	□
一六二七	フリードリヒ公	南部亞弗利加へ(一九〇七 - 〇八年中央亞弗利加學術研究遠征隊記錄)	一九〇九	□
一六二八(I-V)	ダンケルマン	獨逸保護領研究旅行報告 第十五卷第二 - 四號	一九〇二	□
		第十六卷第一 - 四部	一九〇三	II
		第十七卷第一 - 四部	一九〇四	III
		第十八卷第一 - 四部	一九〇五	IV
		第十九卷第一 - 四部	一九〇六	V
一六二九	□	在ギーセン自然科學及醫學上へツセン協會報 自然科學部 第三卷(一九〇八 - 〇九)	一九一〇	□

(二) 物理學•化學

一六三〇	クリユーガア	物理基本	一八□□	□

い-212-

一六三一	ホイツシ	物理入門	一八九二	□
一六三二	クリスト	物理學初步	一八九三	□
一六三三	ズンプフ	物理初步	一九〇一	□
一六三四	ホイシ	物理學教科書	一八九四	□
一六三五	ボルケ	航海學校用物理入門	一九一二	□
一六三六	クレーマン	機械光[?光工?]學家[?豪科?]助手試驗用參考書	一九〇九	□
一六三七	□	純正及應用物理學(寫眞模畫)	一八八七	□
一六三八	□	寫眞模畫	□	□
一六三九	フキンケルシタイン	アルヘニユスの「理論化學」	一九〇九	□
一六四〇	ツアルト	萬有の基礎 原子と分子	□	□
一六四一	ロエブ	化學入門	一九〇九	□
一六四二	オルシード	大自然の工場より	□	□

い-213-

一六四三	ブーフホルツ	重量分析要領	一九一二	□
一六四四	アレント	化學礦物學一班[斑斑]	一九〇四	□
一六四五	グツトマン	射擊及爆破材料	一九〇〇	□
一六四六(I-VII)	ベイヤア其他	リービヒ化學年報 第三八八卷	一九一一	□
		第三九〇卷	一九一二	□
		第三九一卷	〃	□
		第三九四卷	〃	□
		第三九五卷	一九一三	□
		第三九六卷	〃	□
		第三九九卷	□	□

(三) 天文•地文

一六四七	ダンネマン	吾が世界萬有は如何に成立せしか	□	□
一六四八	マイヤア	太陽と星	□	□
一六四九	レンツ	潮の滿干と海面に及す風の作用	一八七九	□
一六五〇	ベルグホルツ	極東の颱風	一九〇〇	□
一六五一	フライベ	氣象表使用法	一九〇六	□
一六五二	フレイフエヤア	一八九二－一九一一年 英支カレンダアー	一八九六	□
一六五三[ab]	□	青島に於ける氣象觀測報告(自一八九八至一九〇八)	□	□
一六五四	マイヤア	地震と火山	□	□
一六五五	ハース	水源學	一八九五	□
一六五六	グルーナア	礦物及地質學一班[斑]	一八九六	□
一六五七	リユドルフ	礦物及地質學一班[斑]	一九〇六	□
一六五八	ペテルス	礦物及地質學教科書	一九〇五	□

一六五九	テルツア	地質調査製圖法	一九〇六	□
一六六〇	ラニツク	西部山東岩石論	一九〇八	□
一六六一	モンケ	山東省地質論 イエン•チ•ヤイに於ける上部寒布利亞層の甲殻類	一九〇二	□

(四) 動物•植物•礦物

一六六二	エングレーダア	博物學入門 第一編[:] 動物	□	□
一六六三	マルチン	博物學 第二卷(動物)	一八八二	□
一六六四	仝	博物學附圖 第三編[:] 動物	一八七八	□
一六六五	ブレーム	動物界 第二卷[:] 鳥類	一八七三	□
一六六六	ウヰルヘルム	自然科學に就いて 鳥類 第一卷	一八三四	□
一六六七	仝	仝 魚類 第一卷	一八三四	□
一六六八	アプレシタイン	大洋の動物生活	一九〇五	□

一六六九	マーシヤル	深海と其の社界[畀會]	一八八八	□
一六七〇	メータアリンク	蜜蜂の生活	一九一一	□
一六七一	白木技師	臺灣の蟋蟀論	一九一一	□
一六七二	ホフマン	蝶々の友	□	□
一六七三	バーデ	標本蒐集	□	□
一六七四	エミル•プラス	東亞の有用動物	一九〇四	□
一六七五[abc]	伯林動物園	伯林動物園動物蒐集•保藏包裝法案內	一九〇二	□
一六七六(I-II)	エングラア プラントル	原始植物界 第一編第一部の a. b.	一九〇〇	□
		仝 第一編第一部 一九〇六年末迄	一九〇七	□
一六七七	ピリング	植物形態圖使用說明書	一八九五	□
一六七八	クルトリブス	自然科學に就て: 植物界 第十卷[:] 觀賞植物と其の栽培法	一八二一	□
一六七九	ウヰルヘルム	自然科學に就て: 植物界 第五卷[:] 果實•香料•油•砂糖	一八一三	□

一六八〇	ツアング	松葉の解剖とピヌス族の系統的分類に對する其の應用	一九〇四	□
一六八一	サアヂアント	キユベツク•モントリオール附近クラテグス集[落]に對する註記	一九〇一	(英文)
一六八二	仝	東部加奈陀及ニユーイングランドに於て新に認められたるクラテグス族第四及第五	一九〇三	(英文)
一六八三	仝	ニユヨーク•ローチエスタアに於けるクラテグス	一九〇三	(英文)
一六八四	ギルグロエゼナア編	ネーベル=チムマアマン編膠州及其附近の植物集 追補	一九〇四	□
一六八五(I-II)	ブレトシユナイダア	支那の植物 第二編[•]第三編	一八九五	(英文)
一六八六(I-II)	仝	支那に於ける歐人植物發見史 第一•第二	一八九八	(英文)
一六八七(I-II)	ゴントリーブウヰルヘルム	自然科學に就て 礦物界 第一卷[•]第二卷	一八三四 一八三八	□
一六八八	リンネ	岩石學	一九〇一	□
一六八九	グルーナア	礦物學と地質學	一八九六	□
一六九〇	バウアー	礦物•地質•考古學年報 第一編第二卷	一九〇九	□

(五) 人類學•考古學

一六九一	シユラアダア	印度ゲルマニヤ族	一九一一	□
一六九二	ダイバア	生の過程と終焉	一九〇六	□
一六九三(I-II)	ローレンツ	東亞の地質及考古學 第一卷	一九〇五	□
		第二卷 考古學	一九〇六	□
一六九四		缺番		

H. 醫學

一六九五	タイヒマン	生と死	□	□
一六九六	デツカア	勝ち誇りたる細胞國	□	□
一六九七[ab]	アーベル	細菌學提要	一九〇一	□
一六九八		缺番		
一六九九	クーネ	新治療學	一九〇二	□
一七〇〇	ワイル	衛生學提要	一九〇一	□
一七〇一	仝	コエルン市の衛生	一九〇六	□
一七〇二	仝	コエベンハーヴン市の衛生	一九〇七	□
一七〇三	コリン	先天的色盲診斷	一九〇六	□
一七〇四[a-l]	スターガルトオロフ	色盲診斷法	一九一二	□

一七〇五	□	溺死假死に於ける人工呼吸法	□	□
一七〇六	ライス	膽石•腎臟結石•膀胱結石•自然療法	一九〇三	□
一七〇七	ラボウ	臨床家用藥劑處方	一九〇一	□
一七〇八	シユナイダアフオーグル共著	塊太利製藥法註解 第三卷	一八九三	□
一七〇九	スチユアート改訂	ポーター•スミス著支那の藥劑 植物界	一九一一	□
一七一〇	ブライテンシタイン譯	支那の法醫學	一九〇八	□
一七一一(I-II)	アーベルギユンタア	伯林ダーレム王室 用水衛生試驗所報告 第一七號[•]第一八號	一九一三 一九一四	□
一七一二		缺番		

一七一三	□	衛生雜誌「健康」第三七年		一九一二	□
一七一四(I-XIX)	メンゼ	船舶及熱帶衛生雜誌 第一七卷第一號		一九一三	I
			第二號	〃	II
			第三號	〃	III
					い-221-
		船舶及熱帶衛生雜誌	第四號	一九一三	IV
			第六號	〃	V
			第七號	〃	VI
			第八號	〃	VII
			第九號	〃	VIII
			第一一號	〃	IX
			第一二號	〃	X
			第一三號	〃	XI
			第一四號	〃	XII
			第一五號	〃	XIII
			第一六號	〃	XIV
					い-222-
			第一七號	〃	XV
			第二〇號	〃	XVI
			第二一號	〃	XVII
			第二二號	〃	XVIII
			第二四號	〃	XIX
一七一五(I-II)	□	在ギーセン理學[•]醫學上ヘツセン協會報 醫學部 第四卷[•]第五卷		一九〇八 一九〇九	□
一七一六[ab]	上海市會	一八九九年度醫務局年報		一九〇〇	(英文)
一七一七	支那稅務署	衛生報告(一八九八年前半期)		一八九九	(英文)
一七一八(I[ab]-II[abc])	仝	仝	(一八九九年前半期)[•](一八九九年後半期)	一九〇〇 一八九九	(〃)
一七一九(I[ab]-II)	仝	仝	(一九〇〇年前半期)[•](一九〇〇年後半期)	一九〇二 一九〇〇	(〃)
一七二〇[ab]	仝	衛生報告(一九〇一年前半期)		一九〇三	(〃)
一七二一[ab]	仝	仝	(一九〇二年前半期)	〃	(〃)
					い-223-
一七二二[ab]	仝	仝	(一九〇三年後半期)	一九〇四	(英文)
一七二三[ab]	仝	仝	(一九〇四年後半期)	一九〇五	(〃)
一七二四[ab]	仝	仝	(一九〇四 - 一九一〇年度)	一九一一	(〃)

J. 工藝

(一) 一般

番號	著譯者名	書名		發行年代	註
一七二五(I-VII)	リユーガア	工藝辭典 自第一卷至第七卷		□	□
一七二六([ɬ]	仝	工藝百科辭典 第一卷		□	□
一七二七(I[a[-]d]-II[abc])	伯林大學「ヒユツ」協會	工業家提要 第一卷[•]第二卷		一九〇二	□
一七二八[a[-]d]	仝	工藝家提要 附錄		一九〇二	□
					い-224-
一七二九	ジヨリイ	一八九八年度 工業年鑑		□	□

一七三〇[a-d]	仝	一九〇三年度 仝上		□	□
一七三--(I-XVI)	グラーサ[步ザ]ア	工業年報	第五〇卷•第五一卷	一九〇二	I•II
		仝	第五二卷•第五三卷	一九〇三	III•IV
		仝	第五四卷•第五五卷	一九〇四	V•VI
		仝	第五六卷•第五七卷	一九〇五	VII•VIII
		仝	第五八卷•第五九卷	一九〇六	IX•X
		仝	第六〇卷•第六一卷	一九〇七	XI•XII
		仝	第六二卷•第六三卷	一九〇八	XIII•XIV
		仝	第六四卷•第六五卷	一九〇九	XV•XVI
一七三二	□	獨逸工業協會雜誌目錄 一八九四 - 一九〇三年		一九〇四	□
一七三三(I-VIII)	ペテルス主幹	獨逸工業協會雜誌	第四六卷第一號[•]第二號	一九〇二	I•II

一七三三(I-VIII)	ペテルス主幹	獨逸工業協會雜誌	第四七卷第一號[•]第二號	一九〇三	III•IV
			第四八卷第一號[•]第二號	一九〇四	V•VI
			第四九卷第一號[•]第二號	一九〇五	VII•VIII
一七三四(I-X)	ホツプ主幹	墺太利工業協會雜誌	第五五年	一九〇三	I
			第五六年	一九〇四	II
			第五七年	一九〇五	III
			第五八年	一九〇六	IV
			第五九年	一九〇七	V
			第六〇年	一九〇八	VI
			第六一年	一九〇九	VII
			第六二年	一九一〇	VIII
			第六三年	一九一一	IX

			第六四年	一九一二	X
一七三五(I-VII)	ハンノーバア建築機械工業家組合	建築及機械工業雜誌	一九〇二年度	一九〇二	I
			一九〇三年度	一九〇三	II
			一九〇四年度	一九〇四	III
			一九〇九年度	一九〇九	IV
			一九一〇年度	一九一〇	V
			一九一一年度	一九一一	VI
			一九一二年度	一九一二	VII
一七三六	□	殖民地經濟委員會殖民地工業部會報		一九一〇	□
一七三七	□	賃金對數表		一八九九	□
一七三八	ヨルダン	計速[速測?]器對數表		一八九九	□
一七三九	□	一八九四年獨逸工業協會第三五回總會記事		□	□

(二) 電氣

番號	著譯者名	書名	發行年代	註
一七四〇	フオエルスタア	ダイナモと蓄電槽 第一卷	一九〇〇	□
一七四一	仝	電燈と電氣裝置 第二卷	一九〇一	□
一七四二	ミルラア	都市に於ける電燈の說設備 第一•二部	一八九六	□
一七四三	パツソウ	公私經營電燈[•]瓦斯燈竝に電車事業	一九一二	□

一七四四	ガイスベルグ	電燈裝置要領	一九〇二	□
一七四五	仝	電燈及電力裝置の建設と維持	一九〇〇	□
一七四六	ミツノス及ゲネスト	會社 私設電信•電話及避雷針案內	一九一四	□
一七四七	□	電信建設令	□	□
一七四八[a-d]	獨逸電氣工業協會	電氣機械及變壓器に關する諸規則	一九〇二	□

一七四八[番外]	仝	高壓電氣裝置安全規則	一八九八	□
一七四九	仝	高壓電流裝置安全規則	一八九八	□
一七五〇[a-d]	仝	高壓電流裝置建設規定 一: 低壓裝置	一九〇三	□
一七五一	ウエーバア	高壓電流裝置建設安全規定解說	一九〇四	□
一七五二(I-III)	□	電氣工業雜誌 第二四年度	一九〇三	□
		仝 第二五年	一九〇四	□
		仝 第二六年	一九〇五	□

(三) 機械•造船

一七五三(I-II)	ケツク	機械學講義 第一編[:] 硬體自力學	一九〇〇	□
		第二編[:] 一般機械學	一八九八	□
一七五四(I-III)	フオエツプル	機械學講義 第一卷[:] 機械學一般	一九〇〇	□

一七五四(I-III)	フオエツプル	機械學講義 第三卷[:] 固定論	一九〇〇	□
		第四卷[:] 力學	一九〇一	□
一七五五	メールテイス	機械學(熱力機械學)	一八八七	□
一七五六(I-II)	バツハ	機械要素(計算構造)第二卷第三卷圖表	一九〇三	□
一七五七	フアータア	吾が熱力機械の進步	□	□
一七五八	仝	最新熱力機關(瓦斯エンヂン)	□	□
一七五九	フリユルム	蒸氣機關	□	□
一七六〇	バスレイ	舶用機關 第一卷[•]第三卷[•]第三卷附圖	一八八五 一八八六	□
一七六一	シユールマン	灣港埠頭に於ける大量回轉起立機	一九〇四	□
一七六二	ノイマン	風モートル	一八八一	□
一七六三[a-e]	サ?ストホツフ	機械建築に關する經費計算法	一九〇二•一九〇九 一八九七	□
一七六四	□	クルツプ會社鑄鋼鐵管鑑査假規定	一八八三	□

一七六五	□	デユツセルドルフ機械製造株式會社カタログ	□	□
一七六六	ミユラルン フオニハルン	獨逸造船工業	□	□
一七六七	カンニンガム	造船工業の法則と實施	一九〇四	□
一七六八	フオリヒイハイマア	浮船渠計算	一八九二	□

(四) 採礦•冶金

一七六九	ゲルケ其他	工業界より(石炭•鐵•造船工業)	□	□
一七七〇	ハールマン	北佛蘭炭坑地方の運河港に於ける石炭の積載	一八九三	□
一七七一	メールチンス	歷史的冶金工藝的關係より見たる鐵及鐵材構造	一八八七	□
一七七二	ブルバツハ製鐵所	ルクセンブルグ及ザールブリユツク製鐵會社鐵材斷面圖表	一八九七	□

一七七三	リード	支那礦山事情	□	□

い-231-

一七七四	グロツスアン	支那鑛業研究の爲に	一九一三	□
一七七五	モース	支那の冶金	一九〇九	□

(五) 土木

番號	著譯者名	書名	發行年代	註
一七七六(I-II)	シヨエナアマルクスチユーバア	地上建築辭典 前篇[•]後篇	□	□
一七七六(I[ab]-VIII)	獨逸建築雜誌社	建築學 第一卷第一部[:] 家屋建築	一九〇三 一八九五	I[ab]
		第二部	一八九六 一九〇五	II[abc]
		第二卷第一部	一八九七	III[ab]
		第二部	一八九九	IV
		第三部	一九〇〇	V[ab]
		第四部	〃	VI

い-232-

		第五部	一九〇二	VII[ab]
		第六部	一九〇四	VIII
一七七八	エツセンワイン其他	建築術提要 第一編[:] 一般地上建築學 第一卷第一節[:] 序論及建築材料	一八八〇	□
一七七九	ランヅベルグ	仝 第一編[:] 仝 第一卷第二節[:] 地上建築構造の靜力學	一八九九	□
一七八〇	ビユーレマン	仝 第一編[:] 仝 第二卷[:] 建築形態論	一九〇一	□
一七八一	ボルマン	仝 第一編[:] 仝 第四卷[:] 建築製陶術	一八九七	□
一七八二	コツホ	建築術提要 第一編[:] 一般地上建築學 第五卷[:] 建築指導	一九〇一	□
一七八三	ドウルム	仝 第二編[:] 建築樣式 第一卷[:] 希臘の建築	一八九二	□
一七八四	ホルチンガア	仝 第二編第三卷第一部[:] 古基[督]教式及ビザンチオン式	一八九九	□
一七八五	フランツバーシヤ	仝 第二編第三卷第二部[:] イスラムの建築術	一八九六	□
一七八六	エツセンワイン	仝 第二編第四卷[:]ローマン式及ゴシツク建築術 第二節[:]住宅	一八九二	□
一七八七	ハサク	仝 第二編第四卷第三節[:] 教會建築	一九〇二	□

い-233-

一七七[七八]八	ハサク	建築術提要 第二編第四卷第四節[:] 教會建築各部分	一九〇三	□
一七七[七八]九	ドウルム	仝 第二編第五卷[:] 伊太利レネサンス建築術	一九〇三	□
一七九〇	ガイミユルラ	仝 第二編第六卷[:] 佛國レネサンス 第一節[:]建築樣式の變遷	一八九八	□
一七九一	仝	仝 第二編第六卷第二節[:] 構造的美術樣式 教會建築	一九〇一	□
一七九二	ベツオルド	仝 第二編第七卷[:] 獨逸のレネサンス	一九〇〇	□
一七九三	マルクス其他	仝 第三編[:] 地上建築構造 第一卷[:] 石材•鐵材•木材の構造要素其他	一八九一	□
一七九四[ab]	仝	仝 第三編第二卷[:] 境界構造 第一部[部節?:] 壁及窗	一八九一 一九〇〇	□
一七九五[ab]	ホ?ウルベツク其他	仝 第三編第二卷第二節[:] 廊下及露臺其他	一八九九	□
一七九六[ab]	バルクハウフセン其他	仝 第三編第二卷第三節[:] 梁蓋其他	一八九五 一九〇一	□
一七九七[ab]	シユミツトランヅベルグ	仝 第三編第二卷第四節[:] 屋蓋及屋根[•]支柱	一八九七 一九〇二	□
一七九八	コツホ其他	仝 第三編第二卷第五節[:] 屋根其他	一八九九	□
一七九九[ab]	シユミツト其他	仝 第三編第三卷第一節[:] 窗戶其他	一九〇一 一八九六	□

一八〇〇[ab]	シユミツト其他	仝	第三編[:] 地上建築構造 第三巻第二節[:] 建物内交通裝置 階段[•]エレベータ其他	一八九八 一八九二	□
一八〇一	コツホ	仝	第三編第三巻第三節[:] 壁[•]天井	一九〇三	□
一八〇二[ab]	シユミツト其他	仝	第三編第四巻[:] 證明•換氣•保溫•排水裝置	一八九〇	□
一八〇三			缺番		
一八〇四	フオーゲン	仝	第三編第五巻第一節[:] 臺所裝置	一九〇七	□
一八〇五	マルクス	仝	第三編第五巻[:] 炊事•洗濯•浴場其他	一八九二	□
一八〇六	仝	仝	第三編第六巻[:] 防水•防火設備其他	一八九一	□
一八〇七	ワイスバツハ	仝	第四編[:] 建物設計裝置設備 第一節[:] 住宅 第二巻[:] 住宅商業交通用建物	一九〇二	□
一八〇八	ツアール其他	仝	第四編第二巻第二節[:] 事務所其他	一九〇二	□
一八〇九[ab]	ノイマン	仝	第四編第二巻第三節[:] 郵便電信勤務用建物	□	□
一八一〇	シユーベルト其他	仝	第四編第三巻[:] 農事家屋 第一節[:] 厩舍其他	一九〇一	□
一八一一[ab]	オストホフ其他	仝	第四編第三巻第二節[:] 市場	一八九一	□

一八一二	ワグナア	仝	第四編第四巻第一節	一九〇四	□
一八一三	リーブライン其他	仝	第四編第四巻第二節	一九〇四	□
一八一四[ab]	クーン	仝	第四編第五巻[:] 療養院 第一節[:] 病院	一九〇三 一八九七	□
一八一五[ab]	フオイゲス フシク其他	仝	第四編第五巻第二節[:] 各種療養院	一九〇三 一八九二	□
一八一六	ゲンツアア	仝	第四編第五巻第三節[:] 浴場	一八九九	□
一八一七	仝	仝	第四編第五巻第四節[:] 洗濯所	一九〇〇	□
一八一八[ab]	ベーンケ其他	仝	第四編[:] 建物設計裝置設備 第六巻[:] 學校[•]博物館 第一節[:] 學校	一八八九 一九〇三	□
一八一九	エツガアト其他	仝	第四編第六巻第二節 a	一九〇五	□
一八二〇	ロユリフキヒ フロード其他	仝	第四編第六巻第二節 b	一九〇五	□
一八二一	シユミツト其他	仝	第四編第六巻第三節[:] 畫室其他	一九〇一	□
一八二二	グ[?]ルンチエク其他	仝	第四編第七巻[:] 官衙建物	一八八七	□
一八二三	ワーグナア其他	仝	第四編第七巻第二節[:] 議院其他	一九〇〇	□

一八二四	グルリツト	仝	第四編第八巻[:] 教會•紀念碑•齋場 第一節[:] 教會	一九〇六	□
一八二五	ストユツベン	仝	第四編第九巻[:] 都市建設	一八九〇	□
一八二六	ラムベルト其他	仝	第四編第十巻[:] 庭園建築術	一八九八	□
一八二七	ベンケ		建築術の進歩 第一[:] 學校瓦斯暖爐	一八九四	□
一八二八	シヤハト シユミツト	仝	第二[:] 硝子屋根と屋蓋窗	一八九四	□
一八二九	フキツシヤア	仝	第五[:] 劇場其他の集合所の暖爐通氣照明	一八九四	□
一八三〇	ゴユツケ	仝	第六[:] 建築術社會的任務 (一)社會保安の公共的建築	一八九五	□
一八三一	ヒントレーゼー	仝	第八號 (一)瑞典話[話[?]]丁抹及フキンランドの小學校建物	一八九五	□
一八三二	ゲルハルド	仝	第十[:] 米國建築物の排水裝置	一八九七	□
一八三三	ウオルフ	仝	第十一[:] フランクフルトアムマイン市の公共浴場	一八九七	□

一八三四(I-IV)	ワルト	ブライマン建築構造學	第一[:] 石材	一八九六	I
		仝	第二[:] 木材	一九〇〇	II

[一八三四(I-IV)]	コエニガア	ブラン[ヘイ]ア[マ]ン建築學構造學	第三[:] 鐵材	一八九〇	III
一八三四(I-IV)	シヨルツ	仝	第四[:] 各種構造	一九〇〇	IV
一八三五(I-XIII)	クラーゼン	各種建築基準範例	第一部[:] 住宅と事務所	一八八四	I
			第二部[:] 旅館と料亭	〃	II
			第三部[:] 學校舍	〃	III
			第四部[:] 療養院	〃	IV
			第六部	〃	V
			第七部	一八八九	VI
			第八部	〃	VII
			第九部	〃	VIII
			第十部	一八八七	IX
			第十一部	一八八九	X

			第十二部	一八九〇	XI
			第十四部	□	XII
			第十五部	一八九六	XIII
一八三六		オストホフ	小中都市の屠獸場	□	□
一八三七		バルツアア	日本ノ家屋	□	□
一八三八		オツパアマン	建築作業の一般的條件	一八九六	□
一八三九		ジーベルト	建築術ニ於ける規則及原則	一九〇三	□
一八四〇		クリユーガア	工事指導と建設法(建築警察法)	一八八七	□
一八四一		シユルガア	建築及ヒ防火警察 第一編[:] 地方建築令	□	□
一八四二		エングラード	バイエルン建築令	一九一三	□
一八四三		伯林建築組合	伯林建築地方慣例	一九〇二	□
一八四四		ベンクウキツク	地上建築の見積	一九〇〇	□

一八四五[a-d]		シユワトロ	地上建築經費計算法	一九〇一 一九〇二 一九〇五	□
一八四六		シヤロウスキー	鐵骨構造範例	一八九五	□
一八四七		フオエルスタア	地上建築鐵骨構造 補遺編	一九〇三	□
一八四八		ラーベス	地上建築に對する圓筒支柱横斷面規定係數表	一八九三	□
一八四九		ヒルシユ	建築組立編初步 第四編ノ一	一九〇九	□
一八五〇		バツハ	彈力と固定	一九〇二	□
一八五一	ポストウヴンシツツ		穹窿支柱彈力性 楕圓の計算的法則と利用	一九一〇	□
一八五二	シヤヘンマイヤア		複層彈性穹窿	一九一〇	□
一八五三		ピーチエ	工場煙突(計算と設計)	一八九六	□
一八五四		フアール	築上及鐵煙突竝に屋蓋構造設計及定着度計算法	一九〇四	□
一八五五		□	ポーマン式球莖狀鐵蓋屋	□	□
一八五六	ビユツシヤア及ホフマン會社		防水建築材料 第一編[:] 屋蓋	一八九九	□
一八五七(I-II)		リ[?]ーチエル	換氣及暖房裝置計算及設計法 第一編	一九〇二	□

		第二編[:] 表及圖表	一九〇二	□
一八五八	伯林建築家組合	宗教改革より現代に至る新教々會建築	一八九三	□
一八五九	ゴムメル	祭壇•演壇•教會用椅子形式圖案(32葉)	□	□
一八六〇	ベルツ シルリング	花園と花環 第一卷[:] 墓標•墓場裝飾	一九一一	□
一八六一(I-III)	テードリング	ロマン式[•]ゴシツク式[•]ルネツサンス式教會□□設備圖案 第一輯(□葉)□		□
		第二輯(八葉)□		□
		第三輯(八葉)□		□
一八六二	フエルデツク	近世寺院裝飾	□	□
一八六三	ロスムート□	室內裝飾術	□	□
一八六四(I^{ab}-II^{ab})	伯林建築協會	伯林と其營造物 第一[:] 土木 第二•第三[:] 地上建築	一八九六	□
一八六五	ゴツトロープ	北獨逸煉瓦ゴシツク式形態論	一九〇〇	□
一八六六(I-II)	モールマン	ゴシツク建築構造法 第一卷•第二卷	一八九〇 一八九三	□

一八六七(I-II)	シイーフアア	中世紀建築圖集 第二卷•第三卷	一八八六 一八九五	□
一八六八	□	城堡建築圖集	□	□
一八六九(I-X)	エブハルト	獨逸城砦 自第一輯至第十輯	自一八九九 至一九〇七	□
一八七〇(I^{ab}-II^{ab})	パウルス	ウエルテンベルグ王國の古代藝術記念物 第一卷•第二卷	一八八九•一八九七 一八九三	□
一八七一(I-II)	ラムベルト	其他 一六 - 一八世紀獨逸建築の基幹	一八九〇	□
		第一部[:] 前期及後期ルネツサンス(一五〇〇年 - 一六五〇年)		
		第二部[:] バロツク及ロココ式(一六五〇年 - 一八〇〇年)	一八九三	□
一八七二	クラウト マイヤー	木匠術 第一卷[:] 本文	一八九九	□
一八七三	カウフマン	リノリユム使用取扱法	一九〇二	□
一八七四	□	建築術及美術工藝に關する圖□目錄	□	□
一八七五	□	漢堡埠頭倉庫第四五號建築圖	□	□
一八七六	□	漢堡埠頭倉庫附屬物圖	□	□
一八七七	工務省	建築時報內容目錄 一八五一 - 一九〇〇	一九〇四	□

一八七八(I-XXII)	仝	建築時報 第四一年	一八九一	I
		第四二年	一八九二	II
	仝	第四三年	一八九三	III
		第四四年	一八九四	IV
		第四五年	一八九五	V
		第四六年	一八九六	VI
		第四七年	一八九七	VII
		第四八年	一八九八	VIII
		第四九年	一八九九	IX
		第五〇年	一九〇〇	X
		第五一年	一九〇一	XI
		第五二年	一九〇二	XII

一八七八(I-XXII)	工務省	建築時報 第五三年	一九〇三	XIII

			第五四年	一九〇四	XIV
			第五五年	一九〇五	XV
			第五六年	一九〇六	XVI
			第五七年	一九〇七	XVII
			第五八年	一九〇八	XVIII
			第五九年	一九〇九	XIX
			第六〇年	一九一〇	XX
			第六一年	一九一一	XXI
			第六二年	一九一二	XXII
一八七九(I-XXII) 工務省	建築時報	附圖	第四一年	一八九一	I
			第四二年	一八九二	II

			第四三年	一八九三	III
			第四四年	一八九四	IV
			第四五年	一八九五	V
			第四六年	一八九六	VI
			第四七年	一八九七	VII
			第四八年	一八九八	VIII
			第四九年	一八九九	IX
			第五〇年	一九〇〇	X
			第五一年	一九〇一	XI
			第五二年	一九〇二	XII[ab](b第一號ヨリ第三號マデ)
			第五三年	一九〇三	XIII
			第五四年	一九〇四	XIV

一八七九(I-XXII) 工務省	建築時報	附圖	第五五年	一九〇五	XV
			第五六年	一九〇六	XVI
			第五七年	一九〇七	XVII
			第五八年	一九〇八	XVIII
			第五九年	一九〇九	XIX
			第六〇年	一九一〇	XX
			第六一年	一九一一	XXI
			第六二年	一九一二	XXII
一八八〇(I-XXII) 工務省	建築管理中央公報		第一一年	一八九一	I
			第一二年	一八九二	II
			第一三年	一八九三	III
			第一四年	一八九四	IV

			第一五年	一八九五	V
			第一六年	一八九六	VI
			第一七年	一八九七	VII
			第一八年	一八九八	VIII
			第一九年	一八九九	IX
			第二〇年	一九〇〇	X[ab]
			第二一年	一九〇一	XI[ab]
			第二二年	一九〇二	XII
			第二三年	一九〇三	XIII
			第二四年	一九〇四	XIV

			第二五年	一九〇五	XV
			第二六年	一九〇六	XVI
					い-247-
一八八〇(I-XXII)	工務省	建築管理中央公報	第二八年	一九〇八	XVII
			第二九年	一九〇九	XVIII
			第三〇年	一九一〇	XIX
			第三一年	一九一一	XX
			第三二年	一九一二	XXI
一八八一(I-IV)	ハンノヴァ建築工業協會	一九〇五年度	建築工業雜誌	□	□
		一九〇六年度	仝	□	□
		一九〇七年度	仝	□	□
		一九〇八年度	仝	□	IV
一八八二(I-IV)	□	獨逸建築雜誌	一九〇二年度 一九〇三年度 一九〇五年度 一九一一年度	□	□
一八八三(I-VII)	□イ□ローア ワイダレ主幹	建築ルンドシヤウ(簡報)	第一年	一八八五	I
					い-248-
			第三年	一八八七	II
			第四年	一八八八	III
			第六年	一八九〇	IV
			第七年	一八九一	V
			第八年	一八九二	VI
			第十年	一八九四	VII
一八八四	□	土木建築雜誌	第五二年	一九〇二	□
一八八五(I[ab]-IV)	獨逸建築雜誌社	獨逸土木建築曆	一九〇六年度	□	I[a-b]
			一九〇七年度	□	II
			一九一一年度	□	III
			一九一二年度	□	IV
一八八六	□	一九〇四年度南獨土木建築家曆	第二編	□	□
					い-249-
一八八七	トルクミツト	土木工事監督竝に指導		一八九九	□
一八八八	シユルツ	普魯西王國土木管理勤務		一八九七	□
一八八九[a-d]	ブレンケツケ	土工事		一九〇六 一八八七	□
一八九〇[abc]	仝	土工事	補遺	一八九五	□
一八九一	ヘンツ ストレッカド	實用土工事		一八七四	□
一八九二	ヘンレ[ヘ?]ツ	土工事指針圖表		一八九六	□
一八九三		缺番			
一八九四	ライゼ	瑞西の土工建築物		一八八七	□
一八九五[abc]	オバアシユルテ マイヤア ウエーゲル	工業綱要	第一編第一巻[:] 鐵道豫備工事工事指導	一八九八 一九〇四	□
一八九六[abc]	マツケンゼン其他	仝	第一編第三巻[:] 土崩隧道工事	一八八七	□
一八九七	ライスレ	仝	第一編第四巻前半[:] 道路築設竝電車	一九〇三	□
一八九八	仝	仝	仝 後半[:] 仝	一九〇三	□
					い-250-
一八九九	マツケンゼン	仝	第一篇第五巻[:] 隧道工事	一九〇二	□

一九〇〇	マイヤー	仝	第一編補遺[:] 土工事(第七章 壓搾空氣基礎工事を除く)	一八九六	□
一九〇一	フレンケル	仝	第二編第三巻[:] 遊動橋梁	一八八八	□
一九〇二	メラン シエンファア	仝	第二編第四巻[:] 穹窿鐵橋及吊橋	一八八八	□
一九〇三	ハインツエリング ヒンリックス	仝	第二編第五巻[:] 橋梁鐵柱鐵橋の架橋及保立	一八八九	□
一九〇四	ゲルハルト其他	仝	第三編第一巻前半[:] 治水工事豫備檢査 內地水系水門工事	一八九二	□
一九〇五	フランチエス	仝	第三編第一巻[:] 築港	一九一二	□
一九〇六	レーボツク	仝	第三編第二巻第一部[:] 堰關と魚路	一九一二	□
一九〇七	ブレンエツケ ルドロツク	仝	第三編第二巻第二部[:] 水門交通運河	一八九五	□
一九〇八	フランチエス ゾンネ	仝	第三編第三巻[:] 海岸及河口防水工事	一九〇一	□
一九〇九	フリユーリング其他	仝	第三編第三[~~二~~四?]巻[:] 都市の水道	一九〇四	□
一九一〇	ゾンネ	仝	第三編第五巻[:] 內地航行交通運河河流運河工事	一九〇六	□

一九一一	ブレンエツケ	工業綱要	第三編第八巻[:] 運河水門	一九〇四	□
一九一二	フランチエス其他	仝	第三編補遺[:] 海水運河河口海港 第三部	一八九四	□
一九一三	フランチエス	仝	第四編第一巻[:] 水揚機浚渫□的機及附屬機械	一八九七	□
一九一三番外	ロエウエ其他	仝	第五編第一巻[:] 鐵道工事一般竝に軌道と車軸	一八九七	□
一九一四	仝	仝	第五編第二巻[:] 鐵道計算構造 上部工事の實施と維持	一八九七	□
一九一五	仝	仝	第五編第三巻[:] 轉轍と交叉線回轉及移動軌道	一八九八	□
一九一六	仝	仝	第五編第四巻[:] 停車場の按排 第一部	一九〇七	□
一九一七	ウンウヰン	都市建設と原理		一九一〇	□
一九一八	スチユ□ベン	現代に於ける都市道路と沿革		一八九五	□
一九一九	シユミツト	都市の地下工事 第一巻[:] 都市の街路の一般地下工事		一八九七	□
一九二〇	□	漢堡に於ける街路清掃		□	□
一九二一	ア[~~子~~マ]イヤア	漢堡に於ける排泄物燒却所		一九〇一	□

一九二二(I-II)	グラーン	獨逸帝國者[~~者~~市]用水設備 第一巻[:] 普魯西國		□	□
			第二巻[:] 普魯西以外の獨逸諸聯邦	一九〇二	□
一九二三	ガイスラア	水道及瓦斯燈設備		一九〇二	□
一九二四	ハイネマン	地方町村水道設計		一九一〇	□
一九二五	クナウノ	下水渠設備の缺點		一八八四	□
一九二六	フロムマア	家庭用水排水•便所裝置		一九〇九	□
一九二七	マイリヒ	上部シレジヤ ホイテン市及ロツスベルグ下水排泄設備		一八九七	□
一九二八	シユツク	カールスルーエ下水灌漑設備		一八九三	□
一九二九	□	伯林市地水整理 第二編[:] 圖表		□	□
一九三〇	トルクミツト	治水術の基本		一九〇七	□
一九三一ab	フランチエス	治水工事		一八九〇	□
一九三二	チーグラー	谿谷堰堤工事		一九〇〇	□

一九三三	マツテルン	水力の利用		一九〇六	□
一九三四	ウヰリヤムス	河流築堤法		一八九八	□

一九三五	ライナア	河底規正工事	一九〇九	□
一九三六	ドエル	漂石を有せる水路(特に上部ライン河)の規正	一八九六	□
一九三七	ミユルラア	和蘭陀ゼーランド前治水制	一八九八	□
一九三八	ボルヒヤレト	レムシヤダア堰關池	一八九七	□
一九三九	インツエ	一八八九－一九〇三年ライン地方及ウエストフアーレンに於て鎔谷堰堤工事の發達	□	□
一九四〇	エルスナア	沈澱泥土の取扱と利用	一九一〇	□
一九四一	□	一九一一年一〇月黄浦規正案	一九一二	(英文)
一九四二	ブーベンデイ	築港統計	一九一〇	□
一九四三	ランヅベルグ	船舶通過水門鐵支柱	一八九四	□
一九四四	ヴオカシンベイ	佛國の海港	一八八六	□

い-254-

一九四五(I-VI)	佛國工務所	佛國の海港(ボルドウ[港]の部)	一八八六	(佛文)
〃	〃	仝 (アルゼリ港の部)	一八九一	〃 II
		仝 (ブレスト港の部)	一八七九	〃 III
		仝 (ブローギ港の部)	一八七四	〃 IV
		仝 (シエールブルグ港の部)	一八七七	〃 V
		仝 (ハーブル港の部)	一八七五	〃 VI
一九四六(I-II)	ヰネツトドロシユ□ン男ヴエ□ラール	大西洋岸北亞米利加の海港(第一 加奈太)	一八九八	(佛文)
		仝 (第二 合衆國航路港灣の行政制度)	一九〇二	(〃)
一九四七	仝	歐米築港圖	□	(〃)
一九四八(I-II)	仝	築港圖解[解釋? 釋解?] 第一卷•第二卷	一九〇〇 一九〇一	(〃)
一九四九	□	ドルトムンド築港落成式紀念誌	□	□
一九五〇	レヒテルン アーノルド	ウヰルヘルムスハアセ[セフエ]ン第二入口築港工事	一八九一	□

い-255-

一九五一	ロエウエ論	兩海(東北)運河開通記念誌	一八九五	□
一九五二	□	漢堡港築港圖	□	□
一九五三	ライブブランド	穹窿橋梁	一八九七	□
一九五四	デイツ	遊動橋梁	一八九四	□
一九五五	シユペツク	輸送吊橋の沿革と理論	一九〇八	□
一九五六	バイヤア	橋梁固有重量好況基底橋脚の歷史的發達	一九〇八	□
一九五七	マイヤア	基礎工事(壓搾空氣を使用せざる)	一八九八	□
一九五八	テヨツケ	壓搾空氣基礎工事	一八九六	□
一九五九	ジンガア	工事用地盤檢査(特に山地鐵道に就き)	一九一一	□
一九六〇	ウヰルマン	道路構築	一八九五	□
一九六一	ロエウエ	道路建築法	一八九五	□
一九六二	バルクハウゼン其他	土工作業道路工事架橋工事	一八九二	□

い-256-

一九六三	リーゼ	瑞西の道路鐵道橋梁土木工事(圖集)	一八八七	□
一九六四	ウヰルマン	隧道に對する山嶽壓下現象の二三に就て	一九一一	□
一九六五	クロエンケ	鐵道道路灣曲設計指針	一九一一	□
一九六六	abcサラチン オーバアベック編	鐵道道路隧道カーヴ表	一八九九 一九〇二	□

一九六七(I-IX)	バルクハウゼン其他	現代の鐵道工事 第一卷第一節[:] 瀘關車	一九〇三	I
	仝	第二節[:] 鐵道工場	一八九八	II
	仝	第二卷第一節[:] 線路敷設と軌道構成	一九〇六	III
	仝	第二節[:] 上部工事と軌道構成	一九〇八	IV
	仝	第四節[:] 信號及警戒裝置	一九〇四	V
	仝	第三卷第一節[:] 鐵道堡線	一九〇一	VI
	仝	第二節[:] 經營統計及鐵道經濟關係	一九〇二	VII
	仝	第四卷 A節[:] アプト式鐵道	一九〇五	VIII

一九六七(I-IX)	バルクハウゼン其他	現代の鐵道工事 B及C節[:] 市街鐵道其他	一九〇七	IX
一九六八	□	伯林市街鐵道(建築時報特別號)	一八八六	□
一九六九	バルクハウゼン	鐵道建設と經營材料	一九一四	□
一九七〇[ab]	コエネン	支柱及梁の張行對數表	一八九八 一八八八	□
一九七一	ブーレ	□[⿰糸殼]?類[•]石炭輸送及保藏設備	一八九九	□
一九七二	ビユーデンクシユニーマン	ポートランドセメント	一九〇五	□
一九七三[ab]	□	ポートランドセメント及鐵 ポートランドセメントの統一的供給及檢査に關する獨逸の方則	一九一〇	□
一九七四	ザリガア	鐵筋コンクリート	一九〇六	□
[一]九七五	ハムブロツホ	ライン產「トラツス」	一九〇三	□
一九七六	□	グリユンツワイヒ及ハルトマン人造キルク石製造工場案內	□	□
一九七七	ゲーリング	土工事の計算及輸送費	一八九八	□
一九七八	□	獨逸ベトン組合第八會[會同]總會報告	一九〇五	□

一九七九(I-IX)	ゴエケジンテ主幹	都市建築雜誌 自第一年至第九年	自一九〇四 至一九一三	□
一九八〇(I-XV)	ブンテ主幹	瓦斯燈水道雜誌 第四〇年	一八九七	I
		第四一年	一八九八	II
		第四二年	一八九九	III
		第四三年	一九〇〇	IV
		第四五年	一九〇二	V
		第四六年	一九〇三	VI
		第四七年	一九〇四	VII[ab]
		第四八年	一九〇五	VIII
		第四九年	一九〇六	IX
		第五〇年	一九〇七	X
		第五一年	一九〇八	XI

一九八〇(I-XV)	ブンテ主幹	瓦斯燈水道雜誌 第五二年	一九〇九	XII
		第五三年	一九〇[~~〇~~]一〇	XIII
		第五四年	一九一一	XIV
		第五六年	一九一三	XV
一九八一(I-X)	□	交通及道路工事雜誌 第二〇年	一九〇三	I
		第二一年	一九〇四	II
		第二二年	一九〇五	III
		第二三年	一九〇六	IV
		第二四年	一九〇七	V

			第二五年	一九〇八 VI
			第二六年	一九〇九 VII
			第二七年	一九一〇 VIII

い-260-

			第二八年	一九一一 IX
			第二九年	一九一二 X
一九八二(I-VI)	アルブレヒト主幹	衛生工事雑誌	第九年	一九〇七 I
			第十一年	一九〇九 II
			第十二年	一九一〇 III
			第十三年	一九一一 IV
			第十四年	一九一二 V
			第十五年	一九一三 VI
一九八三	□	一九一〇年度ベトン年鑑		一九〇九 □
一九八四(I-II)	□	一九一三年度セメント暦及一九一四年度 仝		□ □
一九八五	□	一九〇四年度土木建築新聞カレンダア		□ □

い-261-

(六) 雑

番 號	著譯者名	書 名	發行年代	註
一九八六	ワルデツク	陶器石灰セメント石膏工業 第二編[:] 石灰及セメント製造	一九〇三	□
一九八七	ゾエルトナア	ブランデー蒸□[缶溜]	一九一三	□
一九八八	メイバウム コクニー	穿孔に對する松脂板の對抗能力に關する報告	一八九五	(英)

K. 交通

番 號	著譯者名	書 名	發行年代	註
一九八九	デイツク	海路法	一九一四	□
一九九一[ab]	□	海員組合帆船災害豫防規定	一八九九	□
一九九〇	ブツデ	海路法航海日誌其他海員必要事務	一九一三	□
一九九二	ベルテス	ポケツト海圖	一八九九	□

い-262-

一九九三	シユーマツヒヤア	東亞に於ける都市の交通	一八九九	□
一九九四	□	支那海事辭典 第三卷	一八九四	□
一九九五	獨逸海事監督局	支那の重要港(船長航海□□)	一九〇一	□
一九九六[ab]	支那稅務署	通商各關海江警船示册 第□二簿(一九一三年度)	一九一四	(英支文)
一九九七	ボルトフエルト	船員必携帳	一九〇五	□
一九九八(I-IV)	□	北米合衆國大西洋岸水先案內書 第三	一九〇三	(英文)
		第五	一九〇四	(〃)
		第七	一九〇六	(〃)
		第八	一九〇八	(〃)
一九九九	ブーフハイスタヤ ベンスベルグ	エルベ下流舟行に對する漢堡の施設	一九〇一	□
二〇〇〇	デイツトマア	獨逸商船要覽	一八九二	□
二〇〇一(I-II)	內務省	獨逸船舶名簿	一九一三 一九二三	□

い-263-

二〇〇二	□	蘭領印度船舶名簿	一九一四	(和蘭文)
二〇〇三(I-III)	ストウドニツツ	船舶 第廿四年•第二十五年•第二十六年	一九〇三•一九〇四 一九〇五	□
二〇〇四(I-III)	獨逸河江航行協會	國內航行雜誌 第十年•第十一年•第十二年	一九〇三•一九〇五 一九〇六	□
二〇〇五	□	一八九八年度海事協會報告	□	□
二〇〇六	□	北獨逸ロイド社案內	□	□
二〇〇七	□	山東鐵道運行令	一九〇四	□

L. 商業

番號	著譯者名	書名	發行年代	註
二〇〇八(I-II)	マイヤア ロートシルド	商業總論 第一卷•第二卷	一九一一	□
二〇〇九	ロートシルド	商業要覽	一九〇八	□

い-264-

二〇一〇	オプスト	商業要綱	一九〇九	□
二〇一一	仝	貨幣 銀行及取引所	□	□
二〇一二	ドイツチユ	通貨 金銀塊 爲替 株券及割增金附證券仲買	一九〇五	□
二〇一三	ア□スマン	鑛油及酒精取引要覽	□	□
二〇一四	ツ□エツプル	米露石油の競爭	一八九九	□
二〇一五	トロイバア	獨逸帝國度量衡及貨幣	一九〇三	□
二〇一六	內務省	獨逸對外貿易要覽	一九一二	□
二〇一七	シヨルツ フオークト	日本との貿易	一九一三	□
二〇一八	シユロエツシング	現代の商人(商業參考書)	□	□
二〇一九	ランデンベルガア	商業用文 第三編	□	□
二〇二〇	オルロツプ	英語商業用文入門	一九〇六	□
二〇二二[二一](I-II)	プルツツアー其他	一般商業通信文(十五箇國語) 獨逸篇	□	□

い-265-

		佛蘭[西]篇	□	(佛文)
二〇二二	マルテンス	獨逸領事法及殖民地法	□	□
二〇二三	シヤーニガン	支那の法律と商業	一九〇五	(英文)
二〇二四[ab]	ウヰリヤムス	支那商業案內	一八六三	(〃)
二〇二五	ブレナン	支那商港に於ける貿易狀態	一八九八	(〃)
二〇二六	ビユーケ	東亞派遣實業視察委員報告 第一册(秘密)	一八九七	□
二〇二七	朝鮮稅關	一九〇三年度關稅及貿易の報告	一九〇四	□
二〇二八	□	關稅商品錄	一九〇六	□
二〇二九(I-V)	□	一八九八年度ライプチヒ商業會議所年報	一九〇〇	I
		一八九九年度 仝	□	II
		一九〇〇年度 仝	□	III
		一九〇一年度 仝	□	IV

い-266-

		一九〇三年度 仝	□	V
二〇三〇(I-VI)	□	一九〇七年度ドルトムンド商業會議所年報 第一編	一九〇八	I
		仝 第二編	〃	II

		一九〇八年度 仝	第一編	一九〇九	III
		仝	第二編	〃	IV
		一九〇九年度 仝	第一編	一九一〇	V
		仝	第二編	〃	VI
二〇三一	ヒウエツト	香港商業會議所沿革		一九一一	(英文)
二〇三二	□	一九一二年度青島商業會議所報		□	□
二〇三三(I-V)	內務省	商工業報告 第十四卷		一九一〇	I
		第十五卷		一九一一	II
		第十七卷		一九一二	III[ab]

い-267-

二〇三三(〃)	內務省	商工業報告 第十八卷		一九一三	IV
		第十九卷		〃	V
二〇三四[abc]	□	一九一貳年度獨逸輸出工業年鑑		□	(英文)
二〇三五(I[ab]-XI)	□	一九〇一年度東洋商業年鑑		□	(英文) I[ab]
		一九〇二年度 仝		□	(〃) II
		一九〇三年度 仝		□	(〃) III
		一九〇四年度 仝		□	(〃) IV
		一九〇六年度 仝		□	(〃) V
		一九〇七年度 仝		□	(〃) VI
		一九〇八年度 仝		□	(〃) VII
		一九〇九年度 仝		□	(〃) VIII
		一九一〇年度 仝		□	(〃) IX

い-268-

		一九一一年度 仝		□	(〃) X
		一九一二年度 仝		□	(〃) XI
二〇三六(I-II)	□	一九〇一年度殖民地商業人名錄		□	□
		一九一一年度 仝		□	□
二〇三七	□	米國貿易索引(米國商工業家名簿)		一八九九	□
二〇三八(I-VII)	內務省	獨逸商業雜誌 三月號(I) 四月號(II) 五月號(III) 六月號(IV) 七月號(V) 八月號(VI) 十二月號(VII)		一八九〇	□
二〇三九(I-X)	仝	仝 一月號(I) 二月號(II) 五月號(III) 六月號(IV) 七月號(V) 八月號(VI) 九月號(VII) 十月號(VIII) 十一月號(IX) 十一月號(X)		一八九〇	□

い-269-

二〇四〇(I-XII)	仝	仝 自一月號 至十二月號		一八九二	I-XII
二〇四一(I-XII)	仝	仝 自一月號 至十二月號		一八九三	I-XII
二〇四二(I-VIII)	仝	仝 一月號(I) 二月號(II) 五月號(III) 七月號(IV) 八月號(V) 九月號(VI) 十月號(VII) 十一月號(VIII)		一八九四	□
二〇四三(I-XII)	仝	仝 自一月號 至十二月號		一八九五	I-XII
二〇四四(I-VII)	內務省	獨逸商業雜誌 一月號(I) 二月號(II) 四月號(III) 五月號(IV) 六月號(V) 九月號(VI) 十月號(VII)		一八九六	□
二〇四五(I-XII)	仝	仝 自一月號 至十二月號		一八九七	I-XII
二〇四六(I-X)	仝	仝 一月號(I) 二月號(II) 三月號(III) 四月號(IV) 五月號(V) 六月號(VI) 八月號(VII) 九月號(VIII) 十一月號(IX) 十二月號(X)		一八九八	□

二〇四七(I-XI)	仝	仝 自一月號 至十一月號	一八九九	I-XI
二〇四八(I-XI)	仝	仝 自一月號 至十一月號	一九〇〇	I-XI
二〇四九(I-XII)	仝	仝 自一月號 至十二月號	一九〇一	I-XII
二〇五〇(I-XII)	仝	仝 自一月號 至十二月號	一九〇二	I-XII
二〇五一(I-XI)	仝	仝 自一月號至三月號(I-III) 五月號(IV) 六月號(V) 七月號(VI) 八月號(VII) 九月號(VIII) 十月號(IX) 十一月號(X) 十二月號(XI)	一九〇三	□
二〇五二(I-XI)	仝	仝 自一月號 至十一月號	一九〇四	I-XI

M. 農業•林業•牧畜•漁業

番號	著譯者名	書名	發行年代	註
二〇五三	ヒルアン ベルリン	獨逸農作物栽培	一九一〇	□
二〇五四[ab]	チムマアマン	獨逸殖民地に於ける綿花栽培法	一九一〇	□
二〇五五	ヘツス	耕地改良法の進歩	一八九二	□
二〇五六	アイスバイン	耕地機械耕作に對する蒸氣の應用	□	□
二〇五七	キルヒナア	穀類の敵	一九〇三	□
二〇五八	ヒルトナア	莢豆種子の發育狀態と有機作用に依る其の影響	一九〇二	□
二〇五九	リンダア譯	スタニスラウス•ヂユリアン譯桑樹栽培と養蠶	一八四四	□
二〇六〇	フランケ譯註	漢堡殖民學機[機校]論說 第十一卷[:] 耕織圖(支那の農耕と織染)	一九一三	□

二〇六一[ab]	スパン	農藝代[伐大?]學入門 第一[:] 無機篇	一九一三	□
二〇六二	シユライヤア	農家文書範例	一九〇一	□
二〇六三	エルザスロートリンゲン農業雜誌社	エルザス ロートリンゲン冬期農業學校教科書 第二卷[:] 牧畜論 農業經營論	一九〇九	□
二〇六四(I-IV)	殖民省	獨逸殖民地肥培試驗 自第一號至第四號	一九一三	□
二〇六五	□	熱帶農業「栽培者」雜誌 第四年第一號	一九〇八	□
二〇六六(I-IV)	ワルブルグ ローアルトマン	熱帶農業雜誌「栽培者」內容目錄 第七年	一九〇三	I
		仝 第十八 - 第廿五號	一九〇五	II
		仝 第十年第十一號	一九〇六	III
		仝 第十四年第三號	一九一〇	IV
二〇六七(I-III)	□	獨逸農業協會年報 第二七卷第一刊	一九一二	□
		仝 第二七卷第三刊	〃	□
		仝 第廿八卷	一九一三	□

二〇六八	□	伯林高等農業學校年報	一九一三	□
二〇六九	□	農科大學學術報告 第五卷第二號	明?治?五年(英獨文)	
二〇七〇	□	プロスカウ果實學校報	一九〇三	□
二〇七一	ウオルトマン	ガイセンハイム葡萄果樹栽培學校一九〇九年度報告	一九一〇	□
二〇七二[ab]	德華高等學堂農林科	農學科報告 第二冊[:] 試驗作業(一九一一 - 一二年試驗)	一九一三	(支文)
二〇七三	ワーグナア	德華高等學堂農林科報告 第三[:] 高粱の肥料攝取と要求	一九一三	□
二〇七四(I-VI)	獨領東亞弗利加總督府	獨領東亞弗利加農林事業報告 第一卷第一號	一九〇二	I

		第二號	〃	II
		第三號	一九〇三	III
		第四號	〃	IV
		第六號	〃	V
		第七號	〃	VI

い-274-

二〇七五(I-VIII)	仝	仝 第二卷 自第一號至[第]八號	一九〇四•一九〇五 一九〇六	I-VIII
二〇七六(I-V)	仝	仝 第三卷 自第一號至第五號	一九〇六 一九〇七	□
二〇七七	バイラア	植林に對する人工施肥	一九〇七	□
二〇七八	シルリング	高低森林に於ける經營收益法	一九〇八	□
二〇七九	シトエツツアア	森林價格計算法附山林靜力學	一九〇八	□
二〇八〇(I-II)	サージャント	新シイ[ˀ タニ ˀ]知られたる北米の樹木 第三•第四	一九〇一	(英文)
二〇八一	ヘルマン	普魯西林學圖	一八九八	□
二〇八二	ノイダイムマア	林務官讀本	一八九九	□
二〇八三	ワグナア	牧牛法講義	□	□
二〇八四	□	飼秣論	□	□
二〇八五	テンネツカア	乘馬愛馬家飼馬法	一七九九	□
二〇八六	オストホフ	屠獸場と牛市場	一九〇三	□

い-275-

二〇八七	シユワルツ	官公業屠獸場及牧場建築設置經營法	一九〇三	□
二〇八八	ランペ	養蜂	一八九九	□
二〇八九	サヨ	吾等が密[蜜蜜]蜂	□	□
二〇九〇	タウルケ	養魚と貯魚	一九〇八	□

い-276-

[白 紙]

い-277-

N. 文學•美術•音樂

(一) 文學

(イ) 全集•評論

(1) 全集

二〇九一(I-XXIV) □	ゲーテ全集	第一卷•第二卷[:] 歌謠•詩等	一八五三	I
	仝	第三卷•第四卷[:] 韻文•散文•短句	一八五三	II
	仝	第五卷•第六卷[:] ヘルマンとドロテーア アヒレイス ライネケの狐	一八五三	III
	仝	第七卷•第八卷[:] 愛人の氣嫌其他	〃	IV
	仝	第九卷•第一〇卷[:] ゲツツ、フオン、ベルリツ ヒンゲン エグモント其他	一八五四	V
	仝	第一一卷•第一二卷[:] フアウスト	〃	VI
	仝	第一三卷•第一四卷[:] イフヰゲニイ ウエルテルの惱み	〃	VII
	仝	第一五卷•第一六卷[:] ワールフエルワントシヤフト ウヰルヘルムマイスタア	一八五五	VIII

い-278-

	仝	第一七卷•第一八卷[:] ウヰルヘルムマイスタア其他	一八五五	IX
	仝	第一九卷[:] 小說	〃	X

		仝	第二一卷•第二二卷[:] 予の生涯より	〃	XI
		仝	第二三卷•第二四卷[:] 伊太利旅行其他	[〃?]	XII
		仝	第二五卷•第二六卷[:] 一七九二年佛蘭西遠征其他	一八五六	XIII
		仝	第二七卷[:] 雜錄	〃	XIV
		仝	第二八卷•第二九卷[:] ベンヴエヌト, ツエリニ其他	〃	XV
		仝	第三〇卷[:] ウヰンケルマン其他	一八五七	XVI
		仝	第三一卷[:] 藝術評論	〃	XVII
		仝	第三二卷[:] 獨逸文學	〃	XVIII
		仝	第三三卷•第三四卷[:] 外國文學竝に國民的詩其他	〃	XIX
		仝	第三五卷[:] 舞臺に於けるゲツツ•フオン•ベルリツヒンゲン	一八五八	XX

		ゲーテ全集	第三六卷[:] 光學 附錄 其他	一八五八	XXI
		仝	第三七卷•第三八卷[:] 色論•教授篇•論駁篇	〃	XXII
		仝	第三九卷[:] 色論史	〃	XXIII
		仝	第四〇卷[:] 色論史補遺•氣象學•自然科學	〃	XIV
二〇九二(I-II)	スチーラア	ゲーテ著作集	第五卷[:] フアウスト	□	□
		仝	第一三卷[:] ウヰルヘルム•マイスタアの放浪時代	□	□
二〇九三	プレム編	ゲーテ拔萃集	第一三卷 - 第一六卷	□	□
二〇九四(I-IV)	□	シルラア全集	第一卷第一期作	□	I
		仝	第五卷 - 第六卷	一八六九	II
		仝	第九卷•第十卷[:] 三十年戰史, 散文	〃	III
		仝	第一一卷•第一二卷	□	IV
二〇九五(I-II)	クツチヤア編	シルラア全集	第六編[:] ウヰルヘルムテル, デメトリユスの藝術叢拇漫筆	□	□

		シルラア全集	第八編[:] 美的養育, 無邪たる感傷的作詩に就て	□	□
二〇九六(I-II)	カルペレス編	シルラア全集	第四 - 第六卷	□	□
		仝	第十卷	□	□
二〇九七	スチーラア	シルラア著作集	第四卷[:] ワレンシタイン	□	□
二〇九八(I-III^{ab})	ミユルラア編	ロイタア全集	第一卷 - 第八卷	□	I
		仝	第九卷 - 第一三卷	□	II
		仝	第一四卷 - 第一八卷	□	III^{ab}
二〇九九(I-II)	□	ロイタア全集(七卷の中)	第四卷及第五卷	一八八三	□
二一〇〇	□	フリツツ•ロイタア全集		□	□
二一〇一(I-VI)	□	ハツクレンダア全集	第七卷[:] 商業と旅行其他	一八六三	I
		仝	第九卷	〃	II
		仝	第一五卷[:]「密使」「エレキ治療」「有罪!」「歐洲の奴隷生活」	〃	III

		ハツクレンダア全集	第廿三卷[:] 西班牙の冬 第二部	一八六〇	IV
			第二九卷•第卅卷[:] 陣中生活第二部 新ドンキホーテ	〃	V
			第卅九卷•第四十卷[:] 戰爭と平和 旦睹の夏	〃	VI
二一〇二	ゴツトシヤル編	ウーランド集(四卷)	第一 - 四卷	□	□
二一〇三	ジーゲン編	クライスト全集	第一 - 四卷	□	□
二一〇四	□	アンツエングルーバア全集	第二卷	一八九七	□
二一〇五	シテルン編	ヘンデル拔萃集	第三卷	□	□
二一〇六	チムマア編	ケルナア集	第二卷	□	□

二一〇七	□	リヽエンクローン全集 第一巻[:] 戰爭小說		□	□
二一〇八(I-II)	□	ヨハン•マイヤア全集 第七巻[:] 戲曲 及 第八巻		一九〇六	□
二一〇九(I-V)	テーデン編	ゲルシテツカア集 亞米利加(第一巻及第二巻[])		I, II	□
		仝	旅行(南米•カリフオルニア•南洋)	III	□

		仝	叢林にて	IV	□
		仝	セイル•アギラ	V	□
二一一〇(I-II)	□	ハウフ全集(六巻の內) 第一－三巻及第四－六巻		□	□
二一一一	シユワブ編	ハウフ全集 第四巻		□	□
二一一二	ストルム	ストルム全集 第六巻[:] ハンスとハインツ		□	□
二一一三	ケルラア編	ヘーベル全集 第一－第三巻		□	□
二一一四	□	ヴン•デア•エ ルデ全集 第四巻		一八三七	□
二一一五	フオツス譯	ホーマア集 第一巻		□	□
二一一六(I-II)	□	北米クラシツク文學 第一巻[:]パウルヂング著いざ西へ?	第一編	一八三七	□
			第二巻[:]パウルヂング著いざ西へ? 第二編	〃	□
二一一七(I-II)	□	仝	第五巻[:]パウルヂング著新世界の舊時代	第一編 一八四〇	□
			第六巻[:]仝	第二編 〃	□

二一一八(I-III)	□	北米クラシツク文學 第七巻[:]バート著鷹の巢出の鷹	第一編	一八四〇	□
		第八巻[:]仝	第二編	〃	□
		第九巻[:]仝	第三編	〃	III
二一一九(I-II)	□	仝	第十一巻[:]バート著森の悪魔 第二編	一八四一	I
			第十二巻[:]仝 仝 第三編	〃	II
二一二〇(I-II)	□	クーパア全集 ベネヂクト派僧侶 第一編•第二編		一八三二	□
二一二一	ニーチユ譯	仝	第三編[:] 歸國行	一八三八	□
二一二二	□	仝	勇者	一八三二	□
二一二三	□	仝	水魔—名海豚	一八三一	□
二一二四	ドエリング譯	仝	殿の「モヒカン」人	一八三四	□
二一二五	モイラア譯	仝	猩々海賊	一八二八	□
二一二六	□	仝	ベルンの刑手—名葡萄摘み	一八三三	□

二一二七(I-II)	ツアルノウスキ譯	仝	鹿殺し 第一編•第三編	一八四一	□
二一二八(I-II)	□	仝	移住者 第一編•第二編	一八三八	□
二一二九(I-II)	モイラア譯	仝	國境に住む人 第一-三巻 第四-六巻	一八二九	□
二一三〇(I-II)	仝	仝	モンキンス 第一編•第二編	一八三五	□
二一三一(I-II)	ウンゲ ウキツタア譯	仝	北米人(ハーゲシトルレ シユエンの話) 第一-三巻 第四-六巻	一八二九	□
二一三二(I-III)	キユンツエル譯	仝	北米海軍の沿革と其戰績 第二•三•四編	一八四〇	□
二一三三(I-II)	ニーチユ譯	仝	伊太利 第一編•第二編	一八三八	□
二一三四(I-II)	仝	仝	瑞西旅行 第一編•第二編	一八三六	□
二一三五(I-II)	仝	仝	佛國滯在, ライン旅行及第二次瑞西旅行 第一編 第二編	一八三七	□
二一三六	仝	仝	英國と首都の社交生活 第二編	一八三七	□

二一三七(I-II)	仝	仝	歸航一名狩 第一編•第二編	一八三八	□
二一三八	□	仝	歐羅巴回顧 第一編	一八三七	□

二一三九(I-II)	□	クーパア全集	カスチリアのメルセデス 第二編•第三編	一八四一	□
二一四〇(I-II)	モイラア譯	仝	リオネル•リンコルン一名ボストンの包圍 第四卷•第十一卷	一八二七	□
二一四一(I-II)	ニーチユ譯	仝	エヴちゃん一名故郷第一編•第二編	一八三九	□
二一四二(I-III)	□	仝	二提督 第一編•第二編•第三編	一八四二	□
二一四三		缺番			
二一四四	モイラア譯	仝	荒野原 第四編	一八二八	□
二一四五	トロイ	仝	水先案內 第四卷	一八二七	□
	(2) 評論				
二一四六	ウォルフ	ゲーテの生涯と作物		一八九五	□
二一四七	アンゲロ ヅオツトリ師譯註	支那文學研究 第一卷[:] 家庭教訓		一八七九	拉丁文
二一四八	仝	仝	第二卷[:] 古典研究	〃	〃
二一四九	仝	仝	第三卷[:] 經書研究	一八八〇	〃

二一五〇	アンゲロ ヅオツトリ師譯註	支那文學研究	第四卷[:] 修辭法型範	一八八〇	拉丁文
二一五一	〃	〃	第五卷[:] 美辭と詩に就て	一八八二	〃
二一五二	マイヤース註	支那文學語解		一九一〇	英文
	(ロ) 詩文				
二一五三[ab]	ロエウエンベルグ	近代名詩撰[撰選]「金色の泉」		□	□
二一五四	プリンツホルン撰[撰選]	英米名詩撰[撰選]「太西の兩岸」		□	□
二一五五	フレンケル	獨逸の詩と思想(海軍々人の爲に)		□	□
二一五六	コルツム	ヨブシアーデ		□	□
二一五七	伯林婦人會編	ゲルマニア(獨詩と女流詩人)		一八六一	□
二一五八	ブラウン編	獨逸詩歌のマルテイン•ルーテル		一八八三	□
二一五九	ゾイフアア編	シユウヲバの國(シユワビヤ方言詩集)		□	□
二一六〇	イリツエツク	グードルンとデイトリツヒの叙事詩(附辭書)		□	□

二一六一	□	少年抒情詩集「嫩芽と花」		□	□
二一六二	□	リツタアハウス詩集		□	□
二一六三	ゲーテ	ライネケの狐		□	□
二一六四	□	家庭文庫 第一一卷[:] シルラアの哲學詩		一九〇八	□
二一六五	ヘルダア	ケ?ツト		一八七七	□
二一六六		缺番			
二一六七	フリンツロイタア	物語と詩 第一編		□	□
二一六八	シヤルテンマイヤアレデイウキウス	南亞戰爭 第一編[:] 倫敦よりブロエムフオンタイン迄		一九〇二	□
二一六九	エル•シユミツト譯註	高等獨逸詩學修書 第二卷[:]ゲーテ著「ヘルマン」と「ドロテーア」		一八九一	獨佛
二一七〇	ゲルンス	吟誦詩集		一九〇四	□

二一七一	ミユルラア譯	ホラチユス著「カルミナ」	一八九八	伊文
二一七二	□	雛菊を求めて	□	英文

い-288-

二一七三	マーティン	支那傳詩及其他の詩	一八九四	英文
二一七四	ベートゲ譯	支那叙情詩集 明笛	一九〇七	□
二一七五	フランシス タヴキス譯	漢文詩解	一八三四	英文
二一七六	ラヴエレンツ	海軍ストリユーウエルペタ	一九〇一	□
二一七七	ベルナウア	一不良少年の唄	□	□
二一七八	ゲーテ	予の生涯より(詩と眞理)	一九一一	□
二一七九	ヴキンストン チヤーチル	クリユ夫人の經歴	一九〇八	英文
二一八〇	コンラード譯	ヘンリ•ロツシユフオール著「予が生涯の冒險」 第一卷	一九〇〇	□
二一八一	キユーゲルゲン	思出の記	一八七〇	□
二一八二	ドライフス	予が生涯の五箇年	一九〇一	□
二一八三	オツト•エルンスト	小品集「日光」	□	□
二一八四	フオン•オンプテダ	登山生活「エキセルシオア」	一九〇九	□

い-289-

二一八五	ロールバツハ	西南亞弗利加の苦き月日より	一九〇九	□
二一八六	グライヘン ルスウルム	伊太利 さらば!	□	□
二一八七	マイ	荒蕪クルヂスタン跋涉	□	□
二一八八	ロバート ルイ スチーブンソン	バランソ レーの主人 或る冬の物語	一八八九	英文
二一八九	アルヴエルデス	予の日記(西南より)	□	□
二一九〇	コツホブロイベルグ	佛國の二年(一八七〇- 七一年戰史)	一八九一	□
二一九一	ラインハルト	響と煙	□	□
二一九二	トロイヤン	要塞幽閉二箇月	一八九九	□
二一九三	シユロエダア	「東方世界」より一八九二- 一九〇七年拔萃	一九〇八	英獨文
二一九四[ab]	エスペル	上海漫語	一九一三	□
二一九五		缺番		

(ハ) 戲曲•小說•稗史•物語

い-290-

(1) 戲曲

二一九六	レン[ネツ]シング	ミンナ•フオン•バルンヘルム	一九一〇	□
二一九七[ab]	フンケ註	レツシング著「ミンナ•フオン•バルンヘルム」	一九一〇	□
二一九八	エルシユカア編	仝	一八九五	□
二一九九	シルラア	ドン•カルロス	□	□
二二〇〇[ab]	仝	マリヤ•スチユアルト	一八五一	□
二二〇一[ab]	仝	オルレアンの少女	一八九五	□
二二〇二(I-II)	仝	ワレンシタイン 第一編•第二編[:] ワレンシタインの死	□	□
二二〇三	仝	ワレンシタイン	一八九六	□
二二〇四[abc]	仝	ウヰルヘルム•テル	一九〇七	□

二二〇五	グリム譯	シルラア著「ウヰルヘルム•テル」	獨佛文	□
二二〇六	ゲーテ	ゲツツ•フオン•ベルリツヒンゲン	□	□

い-291-

二二〇七	ハウプトマン	日の出前	一八九九	□
二二〇八	リリエンクローン	獨逸の忠精	□	□
二二〇九	フオン•シユレーゲル	シエークスピヤ著「ロメオとヂユリヤ」	□	□
二二一〇	ランゲ譯	イブセン戯曲集 第二卷	□	□
二二一一	ホフマンスタール	エレクトラ(シトラウス作曲)	□	□
二二一二	クラツト	山守の娘	□	□
二二一三	ヘルツオーグ	ニツセンスコーグにて	一九〇七	□
二二一四	カールワイス	ヘラシムソン	一九〇二	□
二二一五	スツツケン	ガワン	□	□
二二一六	□	アドルフ•デア•キユーネ	一八四六	□
二二一七	ウヰルナア グリユンバウム	歌劇「成金王女」	□	□
二二一八	サー•エドワード バルワー•リットン	「ポムペイ」の最後の日	□	佛文

い-292-

二二一九	ヘルブリツヒ	體操教授罰(滑稽一幕)	□	□
二二二〇[ab]	デルマ其他	ホーエンツオルレルン(普國二百年祭演戯)	□	□
二二二一	メリツツ編	オペラ補導(オペラ拔萃二百卅五)	一九〇一	□
	(2) 小說			
二二二二	アイゼンシツツ譯	ヴエルガ著シシリイ島農夫物語	一九〇八	□
二二二三	ヘルマン•アイラア	アレキサンダア•デユマア著「ハミルトン夫人」	□	□
二二二四(I-II)	アウアーバツハ	森の寂寞 第一卷•第二卷	一八七四	□
二二二五	アスムスゼン	休みなき人々	一九一二	□
二二二六	アレキシス	愛國小說 伯林のローランド	□	□
二二二七	仝	狼人	一九〇九	□
二二二八	仝	フオン•ブレドウ君の袴	□	□
二二二九	アルドダメ ダメロウ	大衛戍地	□	□

い-293-

二二三〇	アルトマン	小間物集	□	□
二二三一	アンツエン グルーバア其他	十傑作集	□	□
二二三二	イエンゼン	荒野を越えて	□	□
二二三三	仝	フリードリヒ王 第三卷	□	□
二二三四	ウヰツク	新人間	□	□
二二三五	ウヰストキルヒ	ワイヤモア伯爵	□	□
二二三六	ウエルダア	武骨漢ロイトリンゲン	一九一〇	□
二二三七	ウオルフ	グリンメルスハウゼン著「シムプリチシムス」	□	□
二二三八(I-II)	ウオルツオーゲン	哀れ罪の女 第一卷•第二卷	一九〇一	□
二二三九	ウエールス	獨身女	一□□八	英文

二二四〇	仝	予が最初の冒險	□	□
				い-294-
二二四一	ウエールス	善良なる鰐魚	一八九三	□
二二四二(I-VI)	ヴエリイ	ウエストフアーレンの血 第一輯	□	I
		第二輯	□	II
		第三輯	□	III
		第五輯	□	IV
		第六輯	□	V
		第七輯	□	VI
二二四三	エヹ レット•グリーン	魔法島	□	英文
二二四四	エツクシタイン其他	滑稽小說其他	□	□
二二四五	オツペンハイム	使嗾者	□	英文
二二四六	仝	未曾有の組合	一九一四	〃
二二四七	ジヨルジユ•オウネ	人世の爭鬪•化物	□	佛文
				い-295-
二二四八	オムプテダ	デウニーズ•ド•モンミデヰ	□	□
二二四九	オムプテダ譯	モパツサン全集 第七卷[:] 精靈	一八九九	□
二二五〇	オツテン	デ•ウヰツト著「デツサのオルフイイス」	□	□
二二五一	ガイスラア	沖の小島	一九〇七	□
二二五二	フオン•カイゼルリング	ベアーチとマライレ	□	□
二二五三	ガーレン	ブランダウ男と其の公子 第三卷	一八六五	□
二二五四	ガングホーフアア	山國	□	□
二二五五	仝	五月嵐	□	□
二二五六ab	仝	ラチエレ•スカルパ	□	□
二二五七	ガーヴアイス	宿命	□	英文
二二五八	仝	婦人としてのスタウンチ	□	英文
二二五九	ギバラ譯	マグネイ著男地獄	□	□
				い-296-
二二六〇	キヨルナア其他	女教師其他	□	□
二二六一	クウオスキ	舞姫の思出	□	□
二二六二	クローカア	彼等の一家 第一卷	一九〇七	□
二二六三	ダリン	エリザベスの訪れ	一九〇二	□
二二六四	クレツツアア	黑絆纏	□	□
二二六五	□	クーパア著「カスチリヤのメルセデス」第一編	一八四一	□
二二六六	クラウゼン	泣と笑	□	□
二二六七	クライバア譯	ブロエンシテツト著ボルトン塔	一八九九	□
二二六八	クロエガア	ハイン•ウヰーク物語	一八九九	□
二二六九	グレーフアア	エドウヰンが補習時間を課せられの事	□	□
二二七〇	仝	故シムケス夫人(滑稽小說 伯林生活)	□	□
二二七一	仝	青色判事	□	□

二二七二	グロート	母の言葉	一九〇五	□
二二七三	カロリン・グロウエンル夫人	「ソーントン夫人の計策」	一九〇七	英文
二二七四	クリユードツン	仲買人	一九〇五	英文
二二七五	クリツフオード	最後の接觸	一八九三	〃
二二七六	グレツトン	イングラム	□	〃
二二七七ab	ゲルシテツカア	曲馬師	□	□
二二七八	仝 其他	ミシシツピ物語其他	□	□
二二七九	ゲルハルド	ヨドウテン街に於て	□	□
二二八〇	ケトヴオエヌ	村の公證人	□	□
二二八一	ゲーテ	ヘルマンとドロテーア	一八九五	□
二二八二	ゴツトヘルフ	小作人ウーリ	一八四九	□
二二八三	ゴンクール	エリザ	一九〇五	□

二二八四	コリンス	白衣の女	□	英文
二二八五	コールラオシユ	セヴエリイ著「ジオンダロウの死」	□	□
二二八六	コレリ	テルマ 前篇	□	英文
二二八七	コンラード	眞紅の闇	□	□
二二八八	仝	機會	□	英文
二二八九	コンラードラムロ	時計草	□	□
二二九〇	コナン・ドイル著	「踊り人形」外探偵小說	□	□
二二九一	ラウテンバツハクライナア譯	コナン・ドイル著「シヤーロツクホルムス・一年」	一九〇八	□
二二九二	□	仝 「バスカーヴヰユの犬」	一九〇七	□
二二九三	□	仝 「四」の記號	一九〇二	□
二二九四	コナン・ドイル	密[審蜜]柑の種(獨譯)	□	□
二二九五ab	仝	クルームバアの神秘	□	英文

二二九六	ザルトリユス	迷い・野うばら其他	□	□
二二九七	サマロウ	英雄と皇帝	□	□
二二九八	シユリヒト	ペンジオノポリス 第二卷	□	□
二二九九	仝	豫備少尉	一九〇七	□
二三〇〇	仝	グツシ男爵夫人	一九一二	□
二三〇一	シユビン	蔭[蔭陰]翳	一八九三	□
二三〇二	仝	白や(犬小說)	一九〇〇	□
二三〇三	シヨーベルト	醜女 第三卷	一九〇二	□
二三〇四	シヨルツ譯	ゴルキ著世界の痛苦	一九〇一	□
二三〇五	シトラウス	天使の王	□	□
二三〇六	シターヴエ	雪に埋るゝ焰	□	□
二三〇七	シエル	シエル小說集 第一・第二卷[:] シルラア	□	□

二三〇八	シユツエ	啓ちゃんと角ちゃんとあたい	一九〇一	□
二三〇九	スコウロネーク	許嫁船	□	□
二三一〇	スペル	往時の眞面目と戯れ「斯くありき」	一九〇二	□
二三一一	ステングリン	正しき者	□	□
二三一二	スプリンガルド譯	白耳義物語 クラリツサ	□	□
二三一三	ヴオータア•スコツト	「セント ロナン」の井戸	□	□
二三一四[ab]	スコツト	イヴンホー(獨譯)	□	□
二三一五	ステヴンス	サラの樂園	□	英文
二三一六	スタリプール	珊瑚船	□	英文
二三一七	スチユアート	無茶苦茶	□	英文
二三一八	ステイル	キング ユラント	□	英文
二三一九	ホーレー•スマート	廻る砥石	一九〇七	英文

二三二〇	ステフエンス	金壺	一九一二	英文
二三二一	ストエバア	ガスタインの仕立屋其他	一八九六	□
二三二二	セイブト譯	ヂツケンス著クリスマスの夜其他	□	□
二三二三	ハインリッヒ、フォン、ゼルビッツ	バイエルン往時軍人生活「今は昔」	一八九五	□
二三二四	セーンピエール	バウルとヴ[ア]ーヂニイ(獨譯)	一八九九	□
二三二五	ゾンネンブルグ	ウエスタアランドの船長	□	□
二三二六	ゾフアア譯	アイル著彼女は彼を教育すべし	□	□
二三二七	ゾーン	誘惑	□	□
二三二八	ゾムマアフエルド	カモラ組の秘密	□	□
二三二九	ゾラ	ルールド	□	□
二三三〇	仝	テレーゼ•ラクヰン	□	□
二三三一	仝	パスカル博士	□	□

二三三二	仝	アベモレの罪	□	□
二三三三	□	ゾラ著クラウデの懺悔	□	□
二三三四	□	仝　ニノンへの物語	□	□
二三三五	□	仝　「巴里の胃袋」	□	□
二三三六	□	仝　生の樂み	□	□
二三三七	ゾラ	候[候侯]爵夫人の肩	一八九九	□
二三三八	ヴアイヅテリイ譯	ゾラ著「羅馬」	一九〇四	英文
二三三九	ヘルリング譯	仝　撲殺者	□	□
二三四〇	ホルヒヤート譯	「オイゲン•ルーゴン閣下」	□	□
二三四一	ローゼ譯	ゾラ著僧侶の失脚	□	□
二三四二	ワーゲホーフエン	仝　「一少年の告白」	□	□
二三四三(I-II)	ダヌンチオ	享樂 第一卷•第二卷(獨譯)	□	□

二三四四	タネラ	センホラ アニンハ(ブラジル小説)	□	□
二三四五	チーグラア	綠の水	□	□
二三四六	チイナン	ジユリヤ	□	(英文)
二三四七	メーリ•チヤムリ	にも拘らず	□	(〃)
二三四八	ヂツケレ[ﾚﾝ]ス	ドムベイと息子	一九〇三	□
二三四九	ツ'オベルテイツツ	勝利	一九一二	□
二三五〇	仝	舞臺監督殿	□	□
二三五一	ヅーダアマン	暗愁	一九一一	□
二三五二	テーデン	二隻のヨツト	□	□
二三五三	テツシユナア	ランドシタインの公達	□	□
二三五四	テイメ	探偵小說「僧侶の辯護人」「山中逃亡」	□	□
二三五五	デインクラーゲ	「燈火は燿やけり!」	□	□

二三五六	デヰ デ譯	ヂヤボレウ著「犧牲の女」	□	□
二三五七	トーマ	鹿盜人	□	□
二三五八	トラウト	甘き夢	□	□
二三五九(I-III)	トレサニ	美しき粗き中尉時代 第一卷•第二卷•第三卷	一八九九	□
二三六〇	ドエリング	ヤドウヰガ 第一編	一八九九	□
二三六一	トルストイ	チヨーピン, プレルード	□	□
二三六二	仝	軍艦, ソナタ	□	□
二三六三	ロエウエンフエルド譯	トルストイ著「コサツク」	□	□
二三六四	フオン•トレスコウ譯	アーヴヰング著アストリア 第一卷	一八三七	□
二三六五	ナンゼン	ユリーの日記	□	□
二三六六	ナスト	普魯西リタウエン物語「沼の伏屋」	□	□
二三六七	ナトウシユス	小說撰[撰選]	□	□

二三六八	ノイデツク	海へ	□	□
二三六九	ノインテツタア	ペタア•エツゲ著「ガムメルホルム」	一九〇一	□
二三七〇	ノツタア譯	バルワア著「オイゲンアラム」第一卷	□	□
二三七一	カール•ハンゼン	ヘンリツク エツテ	一九〇四	□
二三七二	フオン•ハイゲル	侮慢者	□	□
二三七三	パスクエ	ハンス•クレーベルヒ	□	□
二三七四	ビアツリスバラドウン	夜航船	□	(英文)
二三七五	バルチエ	エリザベト•コエツト	□	□
二三七六	バイヤアライン	シミルデ•ヘーゲワルド	□	□
二三七七	バウデイツシン伯爵夫人	露西亞を戀ひて	□	□
二三七八	ハーゼ	沼地にて	一九一二	□
二三七九	ハルト	チターネンの家	一九一四	□

二三八〇	バルツアク	老孃	一九一〇	□
二三八一[ab]	ハース	グルンドの山守	□	□
二三八二	ハールハウス	錫杖の下に	一九〇六	□
二三八三	パルロウ	丁抹の國旗と獨逸の國旗	□	□
二三八四	バルテルス	デイトリツヒ•ガブラント 第一巻	一八九九	□
二三八五	ハイベルグ	藥劑師ハインリツヒ	□	□
二三八六	仝	他人 一度は天に	□	□
二三八七	ハツクレンダア	藝術家 第三編	□	□
二三八八	仝	タンホイザア	一八八九	□
二三八九	□	ハウフ短篇集	□	□
二三九〇	ウヰルヘルム•ハウフ	帝の肖像其他	□	□
二三九一	ハウフ譯	トルストイ著「戰と平和」	□	□

二三九二		缺番		
二三九三	□	バウルデイング著和蘭軍 第二編(獨譯)	一八三八	□
二三九四	ハイヒエン譯	ゾラ著夢	□	□
二三九五	仝 譯	ヴエルン著完備	□	□
二三九六	仝 譯	仝 メキシコ物語	□	□
二三九七	仝 譯	仝 地球より月へ	□	□
二三九八	仝 譯	仝 月世界旅行	□	□
二三九九	仝 譯	仝 征服者ロブール	□	□
二四〇〇	仝 譯	仝 苦難の支那人	□	□
二四〇一	仝 譯	仝 焰の島海	□	□
二四〇二	仝 譯	仝 「酸博士の空想」	□	□
二四〇三	仝 譯	仝 富札九六七二號	□	□

二四〇四	仝 譯	仝 金剛石の國	□	□
二四〇五	仝 譯	仝 帆船シヤンツエロア	□	□
二四〇六	仝 譯	仝 毛皮の國	□	□
二四〇七	仝 譯	仝 「マイスタア•アンテイフアア」	□	□
二四〇八	仝 譯	仝 「クラデヰユス•ボムバルナク」	□	□
二四〇九	仝 譯	仝 アマゾン四千里 ヂヤンガダ	□	□
二四一〇	仝	仝 ヱロヴヰス•ダーデントル	□	□
二四一一	仝	仝 綠光	□	□
二四一二	仝	仝 ツアールの飛脚ミハエル•ストロゴツフ 第一巻	□	□
二四一三(I-II)	仝	仝 アチアス•ザンドルフ 第二巻•第三巻	□	□
二四一四(I-II)	仝	仝 强情者ケラバン 第一巻•第二巻	□	□
二四一五	仝	仝 蒸氣家屋 第二巻	□	□

二四一六	ハイヒエン譯	ヴエルン著	海の英雄 第二卷	□	□
二四一七	仝	仝	法外の遺言 第二卷	□	□
二四一八	仝	仝	ハツテラス船長の冒險 第二卷	□	□
二四一九		缺番			
二四二〇		缺番			
二四二一	仝	仝	アマゾンの筏 第二卷	□	□
二四二二(I-II)	仝	仝	休暇二年 第一卷•第二卷	□	□
二四二三(I-II)	仝	仝	少年フヰンリング一名兒供商會百貨店 第一卷•第二卷	□	□
二四二四	仝	仝	グランド船長の兒 第一[:] 亞米利加	□	□
二四二五	仝	仝	仝 第二[:] 濠洲	□	□
二四二六	仝	仝	無名の家族 第一卷•第二卷	□	□
二四二七(I-III)	仝	仝	海底二萬哩 第一卷•第六卷•不明	□	□

二四二八	仝	仝	秘密島 第一卷[:] 難破氣球	□	□
二四二九	仝	仝	仝 第二卷[:] 島の秘密	□	□
二四三〇[ab]	仝	仝	仝 (不明)	□	□
二四三一(I-II)	仝	仝	十五歳の船長 第一卷•第二卷	□	□
二四三二(I-II)	仝	仝	大陸發見 第一卷•第二卷	□	□
二四三三(I-II)	仝	仝	ヘクトル•セルヴアダアの冒險 第一卷•第二卷	□	□
二四三四	仝	モース著「フルの息子」		□	□
二四三五	フオン•ツアイーリツチユ譯	仝	仝	□	□
二四三六	パリツシユ	ベツスナーヴエル		一九〇七	(英文)
二四三七	ハツガアド	ソロモン王の富源		□	(〃)
二四三八	ハイネ	ダイヤモンドの製法		□	(〃)
二四三九	ヒアン	不正官吏(米國•支那探偵小說)		□	□

二四四〇	ビーヤナツキ	沖の小島 一名北海の難船者	□	□
二四四一	ビヨルンソン	日蔭が岡	一九〇八	□
二四四二	ヒツクサル	帝王の溪谷	一九〇九	(英文)
二四四三[ab]	フレンセン	ヨルン•ウール	一九一二	□
二四四四	ブリーガア	バルサアク著「金色の眼の少女」	□	□
二四四五	ブリーガア	バルツアク著「仙丹」	一九〇五	□
二四四六[ab]	ブロエム	國民の爭鬪	□	□
二四四七	仝	鐵の年	□	□
二四四八	仝	日の國	□	□
二四四九	フアルケ	三人仲よし	□	□
二四五〇	仝(I-II)	陸と海邊 第一卷[•]第二卷	□	□
二四五一	フヰイビヒ	火中の鐵	一九一三	□

二四五二	仝	アイフエルの兒	一九〇三	□
二四五三	□	フオンタース[~~ヲネ~~]小說集 第七卷	□	□
二四五四	フオンタース[~~ヲネ~~]ラヅルテラ		□	□
二四五五	フオス	サンセバスチアン	□	□
二四五六	フオツス	ロラ	□	□
二四五七	ブロウトン	花として來る	一九一〇	□
二四五八	ブリツス	弗[~~弗~~佛?]娘	□	□
二四五九	フラツトハス	異鄕	□	□
二四六〇	フリーデンベルグ譯	クウパア著「水魔」	□	□
二四六一	フアーノル	天麩羅紳士	一九一三	□
二四六二	フキシヤア	少女	一九一一	□
二四六三	~~オツベルン~~ ~~フロニコウスキ~~譯	モーパツサン抜萃短篇	一九〇八	□

二四六四	プルムボロウスキ	暗き時間其他	□	□
二四六五	~~フキツシヤア~~ ~~ザルシタイン~~	失れたる息子其他	□	□
二四六六	フオツク	漢堡海員	□	□
二四六七	フキルポツツ	旋風	一九〇八	(英文)
二四六八	仝	河	□	□
二四六九	フアウト	下宿人	□	(英文)
二四七〇	ヘルマン	クビンケ	一九一〇	□
二四七一	ヘルツフモード譯	ガルボルグ著悗[~~輓~~倦]みたる心	一九一一	□
二四七二	ヘルツオーグ	水蜻蛉	□	□
二四七三	ペルフアル	愛人	□	□
二四七四	ベシユカウ	世界と女と馬車馬と	□	□
二四七五	ベル	おゝクリステイナ!	□	(英文)

二四七六	ベル譯	エバアス著「ウワルダ」	一八八二	(英文)
二四七七	ベンソン	蔦かづら	□	(〃)
二四七八	ベツヒヤア譯	リチ著船乘	一八九九	□
二四七九	ジエームス ペイン	「他人の重荷[]]	一八九七	(英文)
二四八〇	ペムバアトン	自轉車を驅った人	□	(〃)
二四八一	ホフマン	惡魔の藥汁	一九〇八	□
二四八二	仝	フリツツ伯母ちゃん	一八九九	□
二四八三	ホエツカア	金と石	□	□
二四八四	仝	探偵小說 無鐵砲の道	□	□
二四八五	仝	ザンクト•モリツツの太陽	□	□
二四八六	仝	無冠の王者	一九一三	□
二四八七[ab]	ボパアト	ヘルムート•ハリンガ	一九一一	□

二四八八[ab]	ボエラウ	古ワイマール物語 夏文筐	□	□
二四八九	ホルベルヒ	リンドナウ	□	□
二四九〇	ホルレンダア	シヤーロツテ•アヂユツテイ	□	□
二四九一	ホルバウアー	アルフオン ドウデ著フロモトジユンとリスラアセン	□	□
二四九二	ホルツ	六〇〇年後	□	□
二四九三	ボクラウスキ	動遙[遙搖]時代より	□	□
二四九四	□	ポラツエク著マラツハ黨	□	□
二四九五	ポエツツル	維納生活「禿山」	□	□
二四九六	ホルツエンドルフ譯	ステヴエンソン著ホラポイ孃	□	□
二四九七	ボイスキンベルト	世界滅亡	□	□
二四九八	ポー	寂しき物語(短篇集)	□	□
二四九九	ホーナング	スチンガリイ	□	(英文)

二五〇〇	マイゼルハ゜ウ゜ス	フ゜アンニイ•ロート	□	□
二五〇一	マン譯	バウデイツツ著雪の足蹟	一八九九	□
二五〇二	カピテン•マリヤツト	ラツトリン•デア•レツフア	一八九〇	□
二五〇三	□	マリヤツト著ヤコフ•エールリツヒ	一八九〇	□
二五〇四	マリオツト	上品な婦人	□	□
二五〇五	□	マリツト著老孃の秘密	□	(英文)
二五〇六	マレイ	水天彷彿	□	(〃)
二五〇七	マレツト	金色帆船の難破	一九一〇	(〃)
二五〇八	マツカアシイ	戀の王女	□	(〃)
二五〇九	ヘレン•マサア	ライ麥	一九〇四	(〃)
二五一〇	ミハエリス	エルジイ•リシトナア	□	□
二五一一	ミユルレムバツハ	長所	□	□

二五一二	ミツシユ	俳優夫妻	□	□
二五一三	ミユルラア譯	アツブルトン著「皇帝の襟飾」	□	□
二五一四	ムシ	ストライキ	□	□
二五一五[ab]	ツア•メゲデ	フエリチイ	□	□
二五一六	メルルリマン	白髪の貴婦人	□	(英文)
二五一七	メースン	薔薇の宿	□	(〃)
二五一八	マーン	寒山 颪	一九〇六	□
二五一九	ヤコブス	船乘戯談	□	□
二五二〇	ヤンチエツク	樂しき夫妻	□	□
二五二一	□	辛き勝 第一編	□	□
二五二二	ユングスト	老孃の手記「所望と發見」	一八九〇	□
二五二三	ラウフ	マリイ•フエスツーネン	□	□

二五二四	ライブテノ譯	チランチエ著死者の眼	一八九九	□
二五二五	ランゲ譯	リイ著千里眼	□	□
二五二六	リヒタア	宮廷太鼓持	□	□
二五二七[ab]	ワール	市會樂手	一九〇四 一九〇五	□
二五二八		缺番		
二五二九[ab]	リリエンクローン	戰爭少[少小]說集	一八九九	□
二五三〇	仝	熱病船•坊チヤン兵士	一八九七	□
二五三一	リユーメリン譯	オービーン著老孃の夢	一八九三	□
二五三二	ルツセル著	黃金島	□	□
二五三三	レー	女自轉車乘	一八九七	□
二五三四	レワルド	伯父	□	□
二五三五	レワルト譯	ヂユーマア著「三人の短銃兵」	□	□

二五三六	フリツツ•ロイタア	予が反[叛奔?]流時代より	□	□
二五三七	仝	佛蘭人時代の思出	□	□
二五三八	ロゼツガア	ペタア•マイル	一八九九	□
二五三九	ロンドン	燃ゆる日光	□	(英文)
二五四〇	フリードリケ•ローマン	新物語集 第二卷	一八二八	□
二五四一	ハンス•ワルタア	ステツチンの唄ひ手	□	□
二五四二	ロイリイ	ラツジヤーの民	□	(英文)
二五四三	ロード夫人	ブレザアトン孃	□	(英文)
二五四四	仝	ロバアト•エルスメア	□	(〃)
二五四五	□	生れ故鄉にて	□	□
二五四六	□	舊ハンノーヴア物語「動搖時代」	□	□
二五四七	□	イウエツテ	□	□

二五四八	□	濱行く人[々]?	□	□
二五四九	□	戰友ヘツヒエル	□	□
二五五〇	□	吾等が舊友	□	□
二五五一	□	プエブラ 第二	□	□
二五五二	□	軍人小說「土」	□	□
二五五三	□	ミーツエ•ビーデンバツハ[「]思出の記[」]	一九〇六	□
二五五四	□	武俠漢	□	(英文)
二五五五	□	女護島	□	(〃)
二五五六	□	數日物語	□	(〃)
二五五七(I-III)	□	恰度 私の樣に 第一卷•第二卷•第三卷	□	(〃)
二五五八	キユルシユナア文庫	フオン•カツプエツセンタア夫人「召使物語」 アンナ•ピロト「ツルネミユンデ物語」 ブリユードゲン「評論者」 ツオエラア•ライオンハアト「惡舌」 フオン•デーテンロート「動亂時代」	□	□

二五五九	短篇小說集第四編 海洋小說	ネツテルベツク「難破船」ハウフ「幽靈船」 ホフマン「危險なる快船」イエンゼン「海邊にて」 ボエツク「大沽灣頭淺葱服の獨逸人」 ヴヰルダ「ハイチ島に於けるカープ船長の冒險」		一九〇七	□
二五六〇	エブナア, エツシエンバツハ, ロゼツガ其他	八傑作集		□	□
二五六一	□	近代傑作集 アンツエン グルーバア グロル ラア イエンゼン ロゼツガア等		□	□
二五六二	ブレンターノ ホフマン チヨツケ	獨逸諷刺小說集		一九〇八	□
二五六三	□	新進作家傑作短篇集		□	□
二五六四	□	一九世紀傑作集 第一卷		□	□
二五六五	ハイゼ ライストナア共編	新獨逸小說集 第二十四卷		一八八七	□
二五六六	ロゼツガア	ウヰ[ー]スバーデン國民文庫 沒落村		一九〇二	□
二五六七	ウエツセリイ其他	ウヰ[ー]スバーデン國民文庫 デイツケン著クリスマスの晩其他		一九〇二	□
二五六八	イエンゼン其他	仝	校長チモトチス其他	一九〇一	□

二五六九	ホフマン其他	ウヰ[ー]スバーデン國民文庫 後れて幸其他		□	□
二五七〇	エブナアエ エツシンバツハ	仝	クラムバンブリ 月明	一九〇一	□
二五七一	シトルム其他	仝	海の彼方より其他	一九〇一	□
二五七二	シユミツト ヘンナア其他	仝	此世の平和其他	一九〇四	□
二五七三	ジルバーシタイン其他	仝	ゲルハーブ其他	一九〇四	□
二五七四	ホエフアア其他	仝	新兵ロロフ其他	一九〇五	□
二五七五	ゲルシテツカア其他	仝	ケルメルスハウゼン其他	一九一〇	□
二五七六[ab]	フアリユス其他	仝	タウン家の末路其他	一九〇六	□
二五七七	コピツシユ其他	仝	カブリ島碧洞窟ノ發見其他	一九〇六	□
二五七八	ゴツトヘルフ其他	仝	クリステンが妻を得たる事其他	□	□
二五七九	□	仝	ロイタア「佛蘭[西]人時代の思出」 シルレル「詩集」ドライヤ「文と子」	□	□
二五八〇	□	仝	デイリンガア「釦」 ドロステ•ヒユルスホフ「ウエストアフリカノ山毛欅」 トルストイ「生の燈消息□□に」「□老人」 シユルンバツハ「ヨハネの祝福」「□薊」 ステルン「クリスマスの聖壇」	□	□

二五八一(I-II)	□	獨逸小說文庫 第十三年•第十七年第一卷		一八八九	□
二五八二	□	新小說 第十一月號		一九一〇	(英文)
	(三[=3]) 稗史				
二五八三	□	レトクリツク著セバストポール		□	□
二五八四	レトクリツク	サブオマの十字架 第二卷		□	□
二五八五	仝	政治歷史小說「ガエダ•デユツペル」第二編		□	□
二五八六(I-IV)	仝	ヴヰラフランカ 第二部[:] 十年 自第一卷 至第四卷		□	□
二五八七(I-III)	仝	仝	第三部 マゲンタとソルフエリノ 第一卷	□	□

			第三卷	□
			第四卷	□
二五八八(I[ab]-II[ab])仝		歷史小說「祕露國王の寶」第二編•第三編		□

い-324-

二五八九(I-V)	仝	世界統一を 自第一卷至第五卷		□
二五九〇(I-II)	ベルジエリアニ	サヴオヤの十字 第二卷•第三卷		□
二五九一	□	メレシユコウスキ著「レオナルド•ダ•ヴヰンチ」	一九一一	□
二五九二	ハプス	エルクマンシヤトリアン著「一八一三年の一徵募兵の話」		□
二五九三	ノイマン	ウヰリバルド•アレキシス•カバニス	一九一一	□
二五九四	グリンメルス•ハウゼン	三十年戰爭の冒險物語		□
二五九五	シヤーデ譯	エルクマン•シヤトリアン著フアルツブルクの包圍		□
二五九六	タイロル	アンチノウス	一八八〇	□
二五九七	エルクマンシヤトリアン	一農夫の物語 第三	一八八二	□
二五九八	シトルレ	エルバとワーテルロウ		□
二五九九	ヴエルネ	北方對南方 第一編		□
二六〇〇	フオン•ギルザ譯	キングスレイ著「ピパチア」		□

い-325-

二六〇一	ゲツツ譯	ヴヰラフランカ 第三部[:]マゲンタとソルフエリノ 第四卷		□
	(四[~~四~~4]) 物語			
二六〇二	アルウエヒ	庵室より(十六世紀の物語)		□
二六〇三	アイヒエンドルフ	大理石像 デユランデ城		□
二六〇四	ウヰラツツエン譯	シヤールリング著若き英雄	一八九六	□
二六〇五	エス•ビー•ウヰーガ編	階梯支那研究叢書 通俗物語	一九〇三	(支那文)
二六〇六	グラウブレヒト	鶉籃		□
二六〇七[ab]	クライスト	ミハエル•コールハウス	一九〇七	□
二六〇八	ゲルシテツカア	ミシシツピ物語		□
二六〇九	仝	米國南北物語		□
二六一〇	ジーバアト	愛の種々	一九〇七	□

い-326-

二六一一	シユミーデベルク	白頭の前には起立して長者を尊べ	一九〇一	□
二六一二	シトラウス	力の爭ひ	一九〇八	□
二六一三	シユワルツ	鷲の墓(ネグロ物語) 第一卷	一八九〇	□
二六一四	C.L.博士	モール著快樂主義者	一八九七	□
二六一五	スチルゲバウア	ゲツツ•クラフト		□
二六一六	ゾーンレイ	フリーデジンヒエンの生涯	一九〇四	□
二六一七	チンマアマン	回想		□
二六一八	デユスタアホツフ	祈らば甲斐あり	一九〇六	□
二六一九	トロイムンド	國民恩人の生活より		□
二六二〇	ナトウジウス	ランゲンシタインとボフリンゲン	一八九一	□

二六二一	ノイマン	ブランデンブルグ門の靴磨少年	一九〇一	□
二六二二		缺番		

二六二三	パンウヰツツ譯	セント•リンプソン著平原動物と其運命	一九一〇	□
二六二四	ハレム	お菓子のリイゼ•お友達	□	□
二六二五	ヒユーブナア	スチマンスキイ著亞[亜]西伯利亞物語	□	□
二六二六	フライ	コマンチエスの酋長 灰色の狼	□	□
二六二七	フエルゼネク	北極のポール迄	□	□
二六二八	フアルケンホルスト	亞米弗利加に於ける若き獨逸 第三[:] バガモヨの椰子樹の下	□	□
二六二九	仝	亞米弗利加の小獨逸 第四[:] ムロゴロの珈琲栽培者	□	□
二六三〇	ブーフ	名の爲めに	一八九七	□
二六三一	ブレンネカーム	村の記錄より	一八八九	□
二六三二		缺番		
二六三三	ヘルレン	自由	一八九七	□
二六三四	ホエツカア	轉ばぬ先の棱杖(上部シレジヤ物語)	一九〇〇	□

二六三五(I-II)	ホツペンザツク	カール•マルテン 第一編•第二編	一八八〇	□
二六三六	M.V.O.	平和攪亂者	一九一四	□
二六三七	ミユルラア	樂長	□	□
二六三八	仝	懸崖の邊(普佛戰爭物語)	一八九四	□
二六三九	ユストウス	干潮と滿潮	□	□
二六四〇	リンデン	生活の學校	一八九八	□
二六四一	リリエンクローン	六十一聯隊の軍旗	□	□
二六四二	ロゼツガア	永劫の光	一九〇八	□
二六四三	仝	夫 マルテイン	一九〇五	□
二六四四	仝	ゴツトリーブ•アルチビヤデス•ペングラート	□	□

(ニ) 傳說•偶[偶寓]話•お伽噺

二六四五	ジムロツク	ニーベルンゲンの歌	□	□
二六四六	ウオルフ	幽靈船	一八九二	□
二六四七[ab]	モーニケ譯	テグナア著「フリチヨーフ傳說」	□	□
二六四八	コエネ	イゼン湖物語	□	□
二六四九[ab]	ハウフ	リヒテンシタイン(傳說小說)	□	□
二六五〇	ルンド	ミユレンホツフス編「シユレウスウヰヒホルシダインの傳說」	□	□
二六五一	フオニホルン	ライン(ライン地方傳說物語[)]	一八八一	□
二六五二	□	ザイデル物語集 第三卷[:] 地方傳說	一九〇〇	□
二六五三	ワルドミユルラ	ドン•アドーヌ	一九〇一	□
二六五四	ハイヒエン譯	バザイル著「パンタメローネ」物語 一名ダーイヌ王妃物語	□	□
二六五五	□	千一夜物語	□	□

(ホ) 雜

二六五六	□	獨逸諧謔集	□	□
二六五七	ブリーゼン	自由市民書翰	□	□
二六五八		缺番		
二六五九	□	舞臺 第六年 第一卷	□	□
二六六〇(I-III)	□	ウエスタアマン月刊雜誌	□	□
		仝 第四十五卷 二月号	一九〇四	□
		仝 第二卷	一九〇六	□
二六六一(I-IV)	□	フエルハーゲンクラシング月刊雜誌第二卷	一八九五－九六	□
		仝 第一	一八九六－九七	□
		仝 第二	〃	□

二六六一(I-IV)	□	フエルハーゲンクラシング月刊雜誌第十八年第七號	一九〇四	□
二六六二	□	政治竝に文學雜誌「新ルンドシヤウ」第一卷	一九〇八	□
二六六三	滑稽新聞社	一九一〇年度滑稽新聞曆	□	□

(二) 美術

二六六四	ハート	支那藝術中 外國の影響	一八九六	□
二六六五(I-II)	バツシエル	支那美術 第一卷•第二卷	一九〇四 一九〇六	(英文)
二六六六[ab]	パレオローグ	支那美術	一八八七	(佛文)
二六六七	ジツテ	藝術的原則より見たる都市建設	一八八九	□
二六六八	ボーン	一一〇〇－一一〇六年代の李龍眼[眼眠]の繪畫	一九〇七	□
二六六九	パステルン	ローマン式[•]ゴシツク式裝飾畫圖集(二八葉)	□	□
二六七〇	ワスムート編	壁畫集 第一輯	□	□

二六七一(I-II)	ギユランド	支那の陶器 第一卷•第二卷	一九〇二	(英文)
二六七二	チムマアマン	支那の陶器 第一卷(記事)	一九一三	□
二六七三	ボツク	フローレンツ及ベネチヤ式額緣[緣緣](ゴシツク及レネツサン時代)	□	□
二六七四	原個者補導 プリンクマン	日本刀劍裝飾巨匠	一九〇二	□
二六七五	レヴヰイ	レツシング著「ラオコーン」	一八七九	(支佛文)
二六七六	エジワール シャニヴアン及譯記註	兩漢之石刻	一八九三	(佛文)
二六七七	□□□□□□	メツゲンドルフアア畫報	一九〇九	□
二六七八	□	美術彙報 第二年四月－九月	一八八七	□

(三) 音樂

二六七九	フロムメル	「日常生活に於ける藝術」「ヘンデルとバツハ」	一八九八	□
二六八〇	ブルノウ	露西亞音樂	□	□

二六八一	ストランツ	オペラ補導	□	□
二六八二[a-e]	シユワルツ	男聲合唱帖	□	□

二六八三		普魯西陸軍省 行軍曲	一九一二	□

O. 雜書

二六八四(I-III)		アンリイ•コルデヰエ編 支那帝國に於ける著書案內 第一卷第一編	一九〇四	(佛文)
		仝 仝 第二編	〃	(〃)
		第二卷第一編	一九〇五	(〃)
二六八五	□	膠州圖書館圖書目錄原稿	□	□
二六八六	□	膠州總督府工務部圖書目錄	一九〇五	□
二六八七	□	モエルレンドルフ圖書館圖書目錄	一九〇五	□

い-334-

二六八八	□	オツクスフオード大學出版部圖書目錄	一九一三	□
二六八九	□	工藝科學圖書出版目錄	□	□
二六九〇	□	フオルクマール スタークマン アルベルト•ヨッホ三書店 一九〇八- 〇九年度在庫圖書目錄	□	□
二六九一[ab]	□	一九一二年度ヒンリツクス書店半期目錄	□	□
二六九二	□	ポリタアフイ書店目錄	一九〇七	□
二六九三	□	オゼリユス書店法律及政治學圖書目錄	一九一三 - 一四	□
二六九四	□	カメラードシヤフト書店圖書目錄	□	□
二六九五	□	ライプチヒ市ストレラア書店現金販賣圖書目錄	一九〇九	□
二六九六	□	オーベンドルフ•ザイデル商會製圖用具カタログ	□	□
二六九七[ab]	□	一九一二年度漢堡コンラードベーレ書店目錄	□	□
二六九八	□	グセリユス書店提要類目錄 第九	□	□
二六九九	□	タリ?タアフイ書店目錄	一九〇四	□

い-335-

二七〇〇	□	伯林ウヰツヒマン目錄(製圖具店)	一九〇六 - 〇七	□
二七〇一	□	組合家族其他餘興案內(戲曲書目錄)	□	□
二七〇二(I-II)	フローベルグ	體操練習法 第一卷•第二卷	一九一一	□
二七〇三		缺番		
二七〇四	伯林體育組合	器械體操練習表	一九〇五	□
二七〇五	ゴエツリユール	獨逸體操館建築及設備案內	一九〇九	□
二七〇六[1-72]	伯林體育給組合	獨逸體操唱歌集	□	□
二七〇七	□	ヨツト倶樂部「キーラアウオツヘ」史(一八八二 - 一九〇七)	□	□
二七〇八(I[ab]-V)	□	一九〇五年度帝國ヨット倶樂部年鑑	□	I[ab]
		一九〇七年度 仝	□	II
		一九〇八年度 仝	□	III
		一九一〇年度 仝	□	IV

い-336-

		一九一二年度 仝	□	V
二七〇九	ウヰルダ	帝室ヨツト「メテオル」米國遠航記	一九〇二	□
二七一〇	□	一九一〇年度獨逸フツトボール年鑑	□	□
二七一一	□	一九一六年第四回オリンピツク競技會海軍準備書	□	□
二七一二	グルーベ	瑞西アルプ界より	一八七七	□

二七一三	エムマア	獨墺アルプス協會組織及管理	一八九三	□
二七一四(I-II)	□	獨墺アルプス協會會報	一九〇一 一九〇二	□
二七一五[a-d]	□	一九〇八－〇九年度青島登山協會年報	□	□
二七一六[abc]	獨逸將校組合	旅行案內	一九〇四	□
二七一七	□	マイヤア旅行案內「ライン地方」	□	□
二七一八	ライマアス	歐羅巴及南米旅行案內	□	(獨西文)
二七一九	□	北獨逸ロイド會社亞西[西細]亞濠洲旅行案內	一九〇四	(英文)

二七二〇	□	獨逸及墺太利鐵道時間表 一〇, 一一月號	一九〇九	□
二七二一	ロツコ	社交形式	一八九六一	□
二七二二	カール•オツト	家庭節用(書翰文範)	□	□
二七二三	□	家庭の友 六月－十二月	□	□
二七二四	キユーブラア	家庭料理法	□	□
二七二五	ブロードマイヤ	船內料理書	一九一三	□
二七二六	デーゲナア	獨逸紳士錄	一九一二	□
二七二七	□	帝國銀行振替勘定口座所有者名簿	一九〇八	□
二七二八(I-VI)	□	一九〇三年度獨逸殖民地商業人名錄	□	□
		一九〇四年度 仝	□	□
		一九〇七年度 仝	□	□
		一九〇八年度 仝	□	□

		一九〇九年度 仝	□	□
		一九一四年度 仝	□	□
二七二九(I-VI)	フヰツチア	獨逸ニユーギニア•マーシヤル島•サモア•膠州殖民地人名錄	一九〇三	I
		仝	一九〇六	II
		仝	一九〇八	III
		仝	一九〇九	IV
		仝	一九一〇	V[ab]
		仝	一九一二	VI
二七三〇(I-XI[abc])	オツトローゼ	膠州殖民地及山東省人名錄	一九〇一	I
		一九〇三－〇四年度 仝	□	II[ab]
		一九〇五年度 仝	□	III
		一九〇七年度 仝	□	IV
		一九〇八年度 仝	□	V[ab]

二七三〇(I-XI[abc])	オツトローゼ	膠州殖民地及山東省人名錄 一九〇九年度	VI	□
		一九〇九－一〇年度 仝	VII[ab]	□
		一九一〇－一一年度 仝	VIII	□
		一九一二－一三年度 仝	IX[a-d]	□
		一九一四年度 仝	X[ab]	□
		一九一四－一五年度 仝	XI[abc]	□
二七三一	□	獨逸讀本	□	□
二七三二	□	獨逸國語讀本	□	□

二七三三	マイヤア	中等獨逸語讀本	一九一三	□
二七三四	エヴアースワルツ	中學獨逸讀本	一九〇七	□
二七三五[a-x]	仝	中學獨逸讀本 第三卷	一九〇八	□
二七三六[ab]	仝	仝 第五卷	一九〇三	□

二七三七		缺番		
二七三八[1-42]	ガブリエル・ツブリア二共編	獨逸小學讀本 第二卷	一八九八	□
二七三九	□	ボエツトヒヤア通信教授(獨語•佛語•算術)	□	□
二七四〇	□	獨逸唱歌集	□	□
二七四一	□	獨逸新唱歌集	□	□
二七四二	トンガース	國民唱歌集	□	□
二七四三	□	民謡小集	□	□
二七四四[abc]	□	學生醉歌集	□	□
二七四五	ドレイガア	官吏就職案內	一九一三	□
二七四六	□	諸官廳に對する就職申込範例	一九一二	□
二七四七(I-II)	ステツツエレス編	一八七一年度國民曆 一九一二年度 仝	□	□
二七四八[ab]	コエラア編	一九一一年度獨逸カイザア•カレンダア	□	□

二七四九	□	一九〇七年度獨逸海員曆	□	□
二七五〇[a-e]	ボエデイカア	國外獨逸人用家族電信暗號	一九〇八 一九〇三	□
二七五一[ab]	□	キール海軍將校集會所酒場電報暗號	一九〇二	□
二七五二	□	獨逸振り	□	□
二七五三	ラートル	獨逸船乘	一九〇〇	□
二七五四	グリグル譯	フラムマクオン著予の空中旅行	□	□
二七五五	テンネツカア	愛馬家提要 第一卷	一八〇一	□
二七五六	グリツヅナア	各國勳章徽章譜	一八九三	□
二七五七	ヒルシユ編	猶太滑稽一口噺	□	□
二七五八	ビンデル	消防祭餘興「何時でも準備あり」	□	□
二七五九	□	一九〇四年度 青島交通新圖	□	□
二七六〇	□	自轉車滑稽雜誌 第十年	一八九七	□

二七六一	ゼンフ	萬國郵便切手カタローグ	一九一三	□
二七六二	□	山東鐵道會社交通規則附運賃規則	一九〇四	□
二七六三	□	秘中の秘 モージス魔法交感術	□	□

官有書籍(洋書)追加目錄

A. 一般

[(一)] 百科辭典

番號	著譯者名	書名	發行年代	註
追1	[1-](I-XXIV)□	マイヤア百科辭典 自第一卷至第廿四卷	(一九〇四 (一九一三	□

B. 政治, 法律, 經濟,

[(一)] 政治

番號	著譯者名	書名	發行年代	註
追二(I-II)	フライシユマン	獨逸政治法律辭典 第一卷•第二卷	一九一一 一九一三	□
追三(I-II)	ビツタア	普魯西行政辭典 第一卷•第二卷	一九一一	□
追四(I-VII)	コンラード其他	政治學辭典 第一卷(I)•第二卷(II)	一九〇九	□
		第四卷(III)•第五卷(IV)	一九一〇 一九一一	□

		第六卷(V)•第七卷(VI)•第八卷(VII)		
追五	ペンツラア	皇帝宰相手簡(ウヰルヘルム一世とビスマルク間)	一九〇〇	□
追六	ローレンツ	官歷[:?] 官房勤務	一九一〇	□
追七	〃	一九一三年拾一月四日訂正膠州總督府令集	□	□
追八	ロールバツハ	殖民地	□	□
追九	ラドラウア	保護領內獨立會計事務及地方行政	一九一〇	□
追一〇	グリユーンフエルド	支那[•]日本[•]朝鮮に於ける港灣殖民地と殖民事情	一九一三	□
追一一	支那チエンチョウ	支那帝國ノ改革	一九〇九	□
追一二	フオスカムプ	新舊支那	一九一四	□
追一三	モール	支那に於ける租借地	一九一三	□
追一四	關東都督府	關東都督府第七統計高	大正元年	(日本文)

[(二)] 法律

番號	著譯者名	書名	發行年代	註
追一五	ビルクマイヤア	法律百科全書	一九〇一	□
追一六	シオルンザツセン	グツテンターク法律集 第四九[:] 獨逸殖民地	一九一三	□
追一七	アルント	仝 第八二[:] 帝國官吏法	一九〇八	□
追一八	ヒンツエ	仝 第一〇五[:] 獨逸保護領財政制度	一九一二	□
追一九	□	フエヒナア法律文庫 第一卷[:] 法律百科辭典	一九〇九	□
追二〇		仝 第一卷ノ二[:] 法律百科辭典	一九一〇	□
追二一		仝 第二卷[:] 帝國司法々規	□	□
追二二		仝 第三卷[:] 民法及商法々典	□	□
追二三		仝 第四卷[:] 各種法典	□	□
追二四		仝 第五卷[:] 普魯西行政法	一九〇九	□

追二五	□	ス[ヲフ]エヒナア律文庫	第六卷ノ二[:] 帝國租稅法	□	□
追二六		仝	第六卷ノ二[:] 普魯西租稅法	一九〇九	□
追二七		仝	第七卷[:] 社會政策法 第一編	□	□
追二八		仝	第九卷ノ二 第九卷補遺編	一九一一	□
追二九		仝	第一二卷補遺編(鐵道交通條例其他)	一九〇九	□
追三〇		仝	補遺編第一-第三	□	□
追三一		仝	俸給法及帝國官吏陸海軍俸給條例	□	□
追三二	ヘフタア	現代に於ける歐洲の國際法		一八八八	□
追三三	ツオルン	國際法の特質		一九〇三	□
追三四	シユラム	倫敦海戰法會議々事竝に決議(一九〇八年十二月 - 一九〇九年二月)		一九一一	□
追三五	ジーグリン	殖民地司法		一九〇八	□
追三六	ガライス	獨逸殖民法		一九〇二	□

追三七(I-XI)	チムマアマン	獨逸殖民地立法集	第三編 一八九七 - 一八九八年	一八九九	I
			第四編 一八九八 - 一八九九年	一九〇〇	II
			第五編 一八九九 - 一九〇〇年	一九〇一	III
			第六編 一九〇一 - 一九〇二年	一九〇三	IV
			第七編 一九〇三年	一九〇〇	V
			第八編 一九〇四年	一九〇〇	VI
			第九編 一九〇五年	一九〇〇	VII
			第十編 一九〇六年	一九〇貳[貳二]	VIII
			第十二編 一九〇八年	一九〇九	IX
			第十一編	一九〇八	X
			第十三編 一九〇九年	一九一〇	XI
追三八	ドエル	獨逸殖民地刑事訴訟法		一九一三	□

追三九	ウオルフ	民法々典註釋	一九一三	□
追四〇	ビンクヒルシユベルグ	獨逸保護領內不動產法	一九一二	□
追四一	□	支那帝國礦山法	一九〇八	□
追四二	グロノウ	裁判官指針	一九一四	□
追四三	ボンフヰルス	國際法講義	一九〇四	□

[(]三[)] 經濟

番號	著譯者名	書名	發行年代	註
追四四	リーフマン	カルテルとトラスト	□	□

C. 陸軍

番號	著譯者名	書名	發行年代	註
追四五	ヘルツエルンスト	陸軍刑法	一九〇五	□
追四六	□	戰時衛生條例	一九〇七	□

D. 歷史

番號	著譯者名	書名	發行年代	註
追四七	フオーグト	一八六二 - 一八九〇年間世界歷史	一八九二	□

E. 地理

番號	著譯者名	書名	發行年代	註
追四八(I-II)	リヒトホーフエン	支那地圖 第一編[:] 北支那 第二編[:] 南支那	一八八五	□
追四九	スチルゲバウア	再役下士用地理學	一九一三	□
追五〇	フランケ	直隸省熱河地方誌	一九〇二	□
追五一	南部山東新教々會	儒教の遺物	一九〇六	□

F. 美術

番號	著譯者名	書名	發行年代	註
[追]五二	グラーサア	東西の美術	□	□

ろ- 1-

官有書籍(漢書)目錄

第一 經書子類(哲學 教育學)

假番號	書名	卷	册數	摘要
五	皇朝四書彙解	一 - 七五	一二	□
二二	論語本義官話	全	二七四	□
一九	四書古註群義彙解	四書改錯卷一 - 二二 孟子正義卷一六 - 三〇 大學古本記	五	中庸章段 中庸餘論 餘論跋札記上．中．下 孟子札記上．下
五八	孟子正義	一 - 一五	二	□
四五	孟子講義 學庸講義	一 - 一二 一 - 四	六 三	□
二六	二論講義	一 [-] 一〇	四	□
八〇	義論讀本	全一	一	□
三四	莊子	一 - 一〇	四	□
四一	淮南子	一 - 二〇	六	□

ろ- 2-

四四	朱子語類	一 - 一四	四八	□
七九	蒙學初步	七六課 - 一二〇課	一	□
七六	簡明修身教科書	一	二	□
八	訂正最新修身書	三, 八, 九, 一〇	七三	卷三．三册 卷八．一六册 卷九．二十七册 卷十．二十七册
七五	最新修身教科書	一	一一	□
七四	最新修身教科書教授法	四 - 六	四	□
七三	最新初等小學修身教科書教授法	三	二	□
一二	約翰傳福音書	一章 - 二十二章	一	□

二四	舊約全書	一章 - 二二章	一	□
	第二　央[央史]傳			
一三	御批歷代通鑑輯覽	六 - 二三 三九 - 一三〇	二二	卷一 - 五 卷二四 - 三八缺

ろ- 3-

四	國朝先正事略	一 - 六〇	八	□
三	續先正事略	一 - 八	二	□
四〇	十六國春秋	一 - 一〇〇	一二	□
六四	綱鑑易知錄 明鑑易知錄	一 - 九二 一 - 一五	一三 三	一三 - 一九缺卷
六五	典故列女傳	全一	一	□
七二	萬國央[央史]記	一 - 二〇	八	□
六	簡明中國歷央[央史]教科書	上下	六七	上 三十一册 下 三十六册
七一	共和國教科書 新歷央[央史]	甲種	一六	但シ一三 二 五册 一册　二 一 六册
	第三　文學(美術 音樂)			
五七	皇朝經世文[編]	一五 - 一九	七四	參謀部保管
五四	李太白文集	一四 - 二二	一	□

ろ- 4-

一	國文課本	□	六三	□
二	繪圖文學初階	二, 三, 五	一一	卷二. 九册　卷三. 一册 卷五. 一册
五五	西國樂法啓蒙	全一	一	□
	第四　辭典(言語學)			
一八	說文解字注	一 - 一五	七	□
五九	說文通撿[撿檢]	一 - 一四	一	□
二〇	新增說文韻府群玉	一 - 二〇	二〇	□
三九	說文句讀	一 - 四　三册 七 - 三〇　十三册	一五	但シ 五 - 六缺卷
三三	佩文韻府	卷六六ノ下	一	□
六〇	字母	全一	一	□
三一	官話類編	三卷	一七	□

ろ- 5-

	第五　政刑(經濟)			
四九	欽定大清會典	一 - 一〇〇	二四	□
三五	欽定續通典		四七	參謀部保管
四七	大清律例增統纂集成		二三	仝上
三二	德意志刑法	全一	二	□
二五	督補則例附纂	上下	一	□
二九	通商約章類纂		一九	參謀部保管
二三	約章述要	一	一	□
二八ノ二	濟南商埠租建章程		二	參謀部保管
二八ノ一	濟南商埠巡警章程		三	仝上
六一	通商各關華洋貿易總册 光緒三十三年		三〇	□
六二	通商各關華洋貿易總册 宣統元年		一〇	□

六三	通商各關華洋貿易總册 中華民國元年)[?]		二	□
九	國民商法商人通例	全一	一	□
二七	原富部	乙－戊[残戊]?	六	但シ 用?缺本
一六	大清搢紳全書		六	大清中樞備覽上下二册 搢紳全書元享利貞四册
五〇	山東同官表[表錄?]	全一	一	參謀部保管
三〇	萬國公報		一〇	一九二號二册 一八一號一册 一八五號五册 一七七號一册 一八三號一册

第六 武事

第七 天文•地文

三七	山東通志		三八	參謀部保管
四八	歷城縣志		一六	全

三六	泰安縣志		一四	參謀部保管
一七	益都縣志		六	全
一四	寧陽讀[讀縣]志(光緒十三年重增修)		一一	全
四二	即墨縣志		八	全
一五	莒州志		一二	全
四三	膠州志		七	全
四六	諸城縣志		一三	全
七〇	地理論	全一	一三	□
一一	簡明中國地理教科書	上下	一一八	上 六十七册 下 五十一册
六九	共和國教科書 新地理	甲種	一五	□
五六	中華民國二年才[丰歲]次癸丑曆書	全一	一	□

第八 傳[? 傳博?]物

一〇	最新格致教科書	全一	一一	□
七	最新理科教科書	一, 二	一七	卷一. 十四册 卷二. 三册

第九 數學

二一	筆算數學官話	上下	三	□
六八	蒙[蒙筆?]算初步	全一	一六	□
七七	最新筆算教科書	一－五 一二〇	但シ一. 二十册 二. 十八册 三. 十三册 四. 四十五册 五. 二十四册	
七八	最新初等小學筆算教科書	一－五	八	但シ 一, 一册 五, 七册

第十 醫卜

八一	籌辦山東紅十字會章程	全一	一	□

第拾一 農商工

六六	種果樹新法	全一	一	□

六七	天津習藝所現行章程	全一	一	□
五二	天津習藝所現行圖表目錄	全一	一	□
	第拾二　雜書			
五三	密電本	全一	一	□
五一	民報	七號 - 八號	二	□
三八	中西教會報	□	一三	參謀部保管

と- 1-

膠州圖書館藏書(洋書)追加目錄

舊番號: 原圖書目錄ニ準ズルモノ
新番號: 整理上附シタル番號ナリ

舊番號	新番號	著譯者	書名	卷　號　及　發行年
62	番外IA-1		Sammlung gemeinverständlicher wissenschaftlicher Vorträge III. Serie Heft 49-72. (Twesten: Machiavelli-Wittich: Ueber die Schnelligkeit unseres Empfindens und Wollens etc.)	
216	66		Illustrierte Zeitung	1912.
419	152		Preussische Jahrbücher	1911. Bd. III.
420	153		〃	〃　〃 IV.
421	154		〃	$1912_{[\cdot]}$ 〃 I.
422	155		〃	〃　〃 II.
488	172		Alldeutsche Blätter	$1912_{[\cdot]}$
832	288		Meggendorfer-Blätter	1912.

と- 2-

840	番外IB-9		Die Friedens-Halle. 10. Jahrg.	1896.
891	291		[Die] Jugend	1913. Bd. I.
1029	番外IB-8		Illustrierte Monatsheft[e]	
1242	404		[Die] Grenzboten III.	1913.
1418	441		Die Zukunft	1912 (II.)
1502	455		Das literarische Echo	$^{10}/1910$-$^{10}/1911$.
1535	468		Die Umschau	1911
1617	490		Der Ostasiatische Lloyd	1911. Bd. II.
1641	497		Deutsche-Asiatische Warte	1904.
1773	525		Der Tag	1911. Bd. II.
1774	526		〃	〃　〃 III.
1775	527		〃	1912　〃 I.

と- 3-

1776	528		〃	〃　〃 II.

1777	529	〃	〃	〃	III.
1926	600	Kiautschou-Post(山東彙報)	1911	Bd$_{[\cdot]}$	II.
1927	601	〃	1912	〃	I.
1928	602	〃	〃	〃	II.
1971	603	März	1911	〃	I.
1972	604	〃	〃	〃	II.
1973	605	〃	〃	〃	III.
1974	606	〃	〃	〃	IV.
1975	607	〃	1912	〃	I.
1976	608	〃	〃	〃	II.
1977	609	〃	〃	〃	III.

と- 4-

1978	610	März	1912	Bd. IV.
2080	567	The Illustrated London News	1911	Bd. II.
2215	593	L'Illustration	1911	〃 II.
2543	652	Hoensbroech: 14 Jahre Jesuit		
2552	661	Sell, K$_{[\cdot]}$: Aus der Geschichte des Christentums.		
2553	662	Hartmann, Martin: Fünf Vorträge über den Islam.		
2556	663	Besant, Annie: Welt-Religion$_{[\cdot]}$		
2581	667	Warneck: Missionsstunden	Bd. II.	
2622	676	Hennig, Richard: Gut und schlecht Wetter		
26797	742	Nietzsches Werke	II. Abt.	XIII.(V. Band der II. Abt.)
2798	743	〃	〃 〃	XIV.(VI$_{[\cdot]}$ 〃 〃 〃)
2799	744	〃	〃 〃	XV$_{[\cdot]}$ (VII$_{[\cdot]}$ 〃 〃 〃)

と- 5-

2808	750	Kesster, Ronald: Experimental-Philosophie 1914.
2809	751	Hegel: Vorlesungen über die Philosophie der Geschichte.
2869^{ab}	802^{ab}	Kehlbach: Kritik der reinen Vernunft von Immanuel Kant
2870	803	〃 : Kritik der praktischen Vernunft von Immanuel Kant
2871	804	〃 : Kritik der Urteilskraft von Immanuel Kant
2872	805	Fritsch: Grundlegung zur Metaphysik der Sitten von Immanuel Kant.
2873	806	Kehlbach: Zum ewigen Frieden (ein philosophischer Entwurf) von I. K.
2874^{ab}	807^{ab}	〃 : Die Religion innerhalb der Grenzen der blossen Vernunft von Immanuel Kant.
2911^{a-g}	817^{a-g}	Schlömilch: Fünfstellige logarithmische und trigonometrische Tafeln.
2979	843	Franke: Die deutsch-chinesische Hochschule in Tsingtau
2980	844	Neubauer, Friedrich: Kleine Staatslehre (für höhere Lehranstalt$_{[\cdot]}$)
2982	845	Ziegler: Ueber Universitäten und Universitätsstudium

と- 6-

3004	850	Brandi, Karl: Unsere Schrift (drei Abhandl. z. Einfürung in d. Geschichte d. Schrift u. d. Buchdruck[s])
3028	868	Richter, Elise: Wie wir sprechen?

3079	883	Wilhelm, Richard: 德英華文科學字典Deutsch-Englisch-Chinesisches Fachwörterbuch.
3080	884	D. C. Hochschule: Deutsch-Chinesisches Verzeichnis von Fachausdrücken aus d. Gebiete d. Physik u. verwandten Gebieten.
3103	897	Zeitschrift des Allgemeinen Deutschen Sprachvereins 1911.
3104	898	〃 〃 〃 〃 〃 1912.
3120	899	Kiang: Deutscher Sprachunterricht für Chinesen德文進階 第一卷
3203[ab]	番外IVB-1[ab]	Langenscheit: Notwörterbuch der französischen und deutschen Sprache II.
3349[ab]	~~番外IVB-~~934[ab]	Bürgerliches Gesetzbuch
3368	950	Brand: Reichsbeamtengesetz vom 31. März 1873.
3369	951	Kirchner: Automobilgesetz
3383	960	Laband, Paul: Das Staatsrecht des Deutschen Reichs II.

と- 7-

3384	961	〃 : 〃 III.
3389	962	Herzfelder: Haftpflichtversicherung
3418	966	Haarhaus: Das Recht des deutschen Kolonialbeamten.
3491	969	Stenographische Berichte der Reichstagsverhandlungen von 5. 1907 - 5. 1910
3492	970	Etat für das Schutzgebiet Kiautschou auf 1907-1911.
3504	973	Mayer: Disziplinar- und Beschwerderecht für Heer und Marine.
3539	983	Hoensbroech: Das Jesuitengesetz.
3541	984	Ergebnisse der zweiten Hager Friedenskonferenz.
3542	985	Bamberger: Für das Erbrecht des Reiches.
3543	986	Strauß: Die Miete (nach dem bürgerlichen Gesetzbuch)
3544	987	Ortmann: Handbuch für Mieter, Hauswirte und Grundbesitzer
3545	988	Pollitz: Strafe und Verbrechen.

と- 8-

3546	989	Most: Die deutsche Stadt und ihre Verwaltung I.
3547	990	〃 : 〃 II.(eine Einführung in die Kommunalpolitik der Gegenwart)
3548	991	〃 : 〃 III.
3549	992	Mendheim: Berühmte Kriminalfälle
3551	993	Romberg: Staatsrecht (Rechts- und Wissenschaften für Chinesen)
3552	994	〃 : Strafrecht (〃)
3561	995	Chinesische-Deutsche Gesetzsammlung: Verfassungen
3562	996	〃 〃 〃 : Vereins- und Versammlungsgesetz
3563	997	〃 〃 〃 : Transportgesetz
3564	998	〃 〃 〃 : Staatsangehörigkeitsgesetz.
3609	1005	Kriegstechnische Zeitschrift 1911
3610	1006	〃 〃 1912

と- 9-

3629	1013	Arme[~~é~~é]e et Marine (fr.) 1911
3630	1014	Der Militäranwärter 1912
3631	1015	〃 1913

3647	1021	„Ueberall"(für Armee und Marine)	1910-1911	
3648	1022	〃	1911-1912	
3649	1023	〃	1912-1913	
3669	1037	Deutsches Off[i]zierblatt	1911	Bd. I.
3670	1038	〃 〃	〃	〃 II.
3671	1039	〃 〃	1912	〃 I.
3672	1040	〃 〃	〃	〃 II.
3673	1041	〃 〃	1913	〃 I.
3674	1042	〃 〃	〃	〃 II.

と-10-

3701	1046	Alten: Handbuch für Heer und Flott[e]	I.
3702	1047	〃 : 〃	II.
3703	1048	〃 : 〃	III.
3704	1049	〃 : 〃	IV[.]
3757	1068	Schwarte: Technik des Kriegswesens	
3758	1069	Beseler: Die Allgemeine Wehrpflicht	
3778[b]	1082	Bernhardi: Deutschland und nächster Krieg	
3779	1083	〃 : Vom heutigen Kriege	I.
3780	1084	〃 : 〃	II.
3889[abc]	1157[abc]	Ahlemann: Mein Kommando zu den Manövern der 3. japanischen Division.	
3890[ab]	1158[a]	Haushofer: Eine japanische Winterübung	
〃[b]	〃[b]	Wille: Ueber die Bewaffnung der Feldartillerie	

と-11-

3893	1161	Bornemann: Kowno-Moskau-Kowno 1812, Individualismus als Grundprinzip der Burentak[t?]ik von Crenzinger	
3896	1162	Biermann: Die Fußartillerie	
3897	1163	Mummenhoff: Die moderne[n] Geschütze der Fußartillerie	I. Teil
3898	1164	〃 : 〃	II. 〃
3899	1165	Wrzodek: Die Entwicklung der Handfeuerwaffen	
3901	1167	Löffler: Strategie	
3927	1191	Freytag-Loringhoven: Die Führung in den neuesten Kriegen[:] Operatives und Taktisches	I.
3928	1192	〃 : 〃	〃 II.
3941	1193	Großen Generalstabe Kriegsgeschichtliche Abteilung I.:[172] Studien zur Kriegsgeschichte und Taktik V. Band: der 18. August 1870.	
3942	1194	〃	: 〃 Karten
3946	1195	Generalfeldmarschall Graf Alfred v. Schlieffen (Gesammer[ǂl]te Schriften)	I.
3947	1196	〃 〃 〃	II.

と-12-

3948	1197	Karten zu Band I. Gesammer[ǂl]te Schriften Graf Alfred v. Schlieffen

[172] "Kriegsgeschichtliche Abteilung des Großen Generalstabs: Abteilung I.:"?

3949	1198	〃 〃 〃 II 〃	〃 〃 〃 〃 〃
4066	1231	Marine Rundschau	1911 Bd. I.
4067[ab]	1232[ab]	〃 〃	1912 〃 I.
4068[ab]	1233[ab]	〃 〃	〃 〃 II.
4069[ab]	1234[ab]	〃 〃	1913 〃 I.
4089	1246	Hansa	1911
4090	1247	〃 (Deutsche nautische Zeitschrift)	1912
4091	1248	〃 〃	1913

4144 1279 Stenzel: Kriegführung zur See. Lehre von[~~e~~m]? Seekriege

4148 1283 〃: Seekriegsgeschichte in ihren wichtigsten Abschnitten mit Berücksichtigung der Seetaktik I. Teil

4149 1284 〃: 〃 II. Teil

と- 13-

4153	1287	Stosch: In Fjord und Mittelmeer (Fahrten eines Kl. Kreuzers in ihren wichtigsten Abschnitten)
4164	1298	Stenzel: Seekriegsgeschichte in ihren wichtigsten Abschnitten mit Berücksichtigung der Seetaktik III.
4165	1299	〃 : 〃 IV.
4166	1300	〃 : 〃 V.
4167	1301	Jane: Ketzereien über Seemacht
4168	1302	Troeltsch: Deutschlands Flotte im Entscheidungskampf (eine Einführung d. Laien i. d. Wesen d. modern. Seekrieges)
4212[abc]	1314[abc]	Lookout: Englands Weltherrschaft u. d. deutsche „Luxusflotte“
4219	1321	Gersdorff: Ist die deutsche Flotte ein Luxus oder eine Notwendigkeit?
4220	1322	〃 : Die Kriegsbereitschaft d. englischen Flotte im Jahre 1911.
4246[abc]	1342[abc]	Herausgegeben v. Deutschen Flottenverein: Deutschland sei wach! (Betrachtungen über Rüstungsfragen und Weltpolitik)
4247	1343	Kirchhoff: [Von]? Seehelden und Admiralen.
4250	1344	Leberecht: Auf, über, unter Wasser (Augenblicksbilder von der deutschen Flotte der Gegenwart) 1914.

と- 14-

4301	1345	Marineverordnungsblatt 1908
4302	1346	〃 1909
4303	1347	〃 1910
5327	1433	Alberti-Sittenfeld: Die Eroberung der Erde 1912
5427	1453	Rummel: Erster Klasse und Zwischendeck (eine Weltumsegelung durch Zufall 1911)
5601	1476	Nansen: Nebelheim (Entdeckung und Erforschung d. nöldlichen Länder u. Meere) I. 1911
5602	1477	〃 : 〃 II. 1911
7004	1553	Schmidt: Im Lande der Freiheit[,] Gleichheit und Brüderlichkeit
7402	番外VIIC-5	Vosberg-Rekow: Asiatisches Jahrbuch; herausgegeben in[~~e~~m] Auftrag der Deutsch-Asiatisch. Gesells. 1913
7681	1651	Maier-Hugendubel: 世情Bilder aus dem chinesischen Volks=und Missionsleben 1913
7747	番外VIIC-6	Holzhauer: Das Justizwesen in China
7748	1700	Rohrbach: Deutschland in China voran! 1912

7749[a]	1701[a]	Wertheimer: Deutsche Leistungen und deutsche Aufgaben in China
7750[a]	1702[a]?	Pape: Alluvial Chekiang (eng[-]) 1913
7757	1703	Rohrbach: Deutsch-Chinesische Studien 1909
7768	1704	Winter: Tsingtau. (eine)[~~}~~] Erinnerung an Ostasien) 1909
7771	1705	Secker, Fritz: Schen (Studien aus einer chinesischen Weltstaa[~~ad~~]?ts[~~s~~]?) 1913
7772	1706	Vortisch von Vloten: Chinesische Patienten [und/oder/über]? ihre Aerzte 1914
7913[ab]	1713[ab]	Die Schantung Eisenbahn und das von ihr erschlossenen[~~n~~] Gebiet 1912
7914[ab]	1714[ab]	Ohlmer: Tsingtau, sein Handel und sein Zoll-System 1913
7959	1720	Deutsche Niederlassungsgemeinde in Tientsin;[~~:~~] 1913 Protokoll über [die] jährliche Gemeindeversammlung der deutsch. Niederl.-Gemeinde in Tientsin am 26. 11. 1913 und Jahresbericht 1912.
8016	1731	Ursyn-Pruszynski: Kleiner Führer durch das annektierte k[~~k~~K]orea 1910.
8018	1732	Haegeholz: Korea und die Koreaner 1913

8080	1753	The Welcome Sos[~~s~~c]iety of Japan Ki hin Kai: A ga[~~ga~~Gu]ide-Book for Tourist[s] in Japan (engl[-]) 1910
8082	1754	Rathgen: Die Japaner in der Weltwirtschaft 1911
8083	1755	Published by Thos. Cook & Son: Information for travellers landing in Japan
8085	1756	Grünfeld: Die Japanische Auswanderung 1913
8222	1776	Goebel: Vom Ural bis Sachalin 1913
22299	番外IXA-8	Rathenau: Zur Kritik der Zeit 1912
22738	〃〃IXA-5	Schwarz: Die Finanzsysteme der Grossmächte I.
22739	〃〃IXA-6	〃 : 〃 II.
22830	〃〃IXA-7	Wallas: Politik und menschliche Natur
23035	2980	Deutsches Kolonialblatt 1911
23036	2981	〃 1912
233[~~3~~2]59	3068	Mitteilungen aus den Deutschen Schutzgebieten XVIII. Band 1905 I. Heft

23260	3069	〃	〃	〃	〃	II. 〃
23261	3070	〃	〃	〃	〃	III. 〃
23262	3071	〃	〃	〃	〃	IV. 〃
23263	3072	〃	XIX	〃	1906	I. Heft
23264	3073-I	〃	〃	〃	〃	II. 〃
23265	3074-I	〃	〃	〃	〃	III. 〃
23264	□	(dieselbe Nummer 2) 〃 — 3073-II	XX	〃	1907	
23265	□	(〃) 〃 3074-II	XXI	〃	1908	
23266	3075	〃	□	□	1905	IV. 〃
23344	番外IXB-1	Schneider: Jahrbuch über die deutschen Kolonien			1912	
23423	番外IXB-2	Zimmerme[~~e~~a]nn: Geschichte der deutschen Kolonialpolitik				
24063[ab]	3149[ab]	Annalen der Hydrographie und Maritime[n]? Meteorologie			1911	

24004 3275 Mitteilungen und Kosmischen Physik der Vereinigung von Freunden der Astronomie[~~und Kosmischen Physik der Vereinigung von Freunden der Astronomie~~der Vereinigung von Freunden der Astronomie und Kosmischen Physik] 1904

34063 番外XIIC-7 Kürschners Bücherschatz

34285 4181 Wenden: Die Tote (eine Artistengeschichte)

35565 番外XIIC-2-5 Bloem: Das Lockende Spiel

35568 〃〃XIIC-2-10 Böhme: Abseits vom Wege

39172 〃〃XIIC-2-14 Heyking: Tschun, eine Geschichte aus dem Vorfrühling Chinas

39194 〃〃XIIC-2-15 Hauptmann[:]? Atlantis

40679 4916 Laggenscheidt: Blondes Gift

41636 4988 Ompteda: Die Tochter des grossen ~~Grossen~~Georgi (Theaterroman) 1911

42873 5146 Retcliffe: Sebastopol (Historisch-Politischer Roman aus dem 19. Jahrhundert) II. Band

43528 [番外?XIIC-2-9 Steffen: Im Orlog 1

43613 [〃〃]?XIIC-2-20 Strauss, Emil: Der nackte Mann

と- 19-

47246 5566 Mülmann: Der Chinesisch-Japanische Krieg 1894-95

48154 5788 Grosse: Vetter Isidor 1901

49143 5791 Herzog: Wiskottens (Roman) 1906

84577 7226 The Studio (engl[.]) 1911

84579 7227 〃 〃 1912

86059 7411 Zentralblatt der Bauverwaltung 1904

87023 7502 Archiv für Post und Telegraphie 1911

87716 7539 Adressbuch 1911-1912

— ○ —

と- 20-

[原本白紙]

◙«補註»

«歐受大日記 1919[大正8].VI.»所綴"鹵獲書籍ニ關スル件"(5 點[マイクロフィルム齣號第 0287-第 0309 號;"MF.No. 0xxx"と簡稱])に據ると,青島鹵獲書籍に就ては,青島守備軍による寄贈配布(1920.)に先立つ 1915[大正 4]年に,司法省[東京]宛貸與を目的とする獨逸民事•刑事關係書籍35 點205 冊が,青島守備軍から陸軍省[東京]宛送附され,このうちの24點187 冊が陸軍省から司法省宛貸與送附されたものの如くである.

♦1."~~受領八年 陸軍省~~ ~~番號九年 受 領~~歐受第一三八三號 廳名 *官房* 件名 *鹵獲書籍ニ關スル件* 大臣 *委次官委* 高級副官 菅野* 主務副官 岸本* … … 審案筆記者 江藤* 主務局課 番號□ 受領 大正□年□月□日 提出 大正 *四* 年 *五* 月 *十三* 日 大臣官房 受領 大正 *四* 年五月十四日 結了 大正 *八* 年六月十一日¶ 副官ヨリ青島守備軍參謀長ヘ照會 歐發¶ 鹵獲ノ書籍中ニ獨~~乙~~逸ノ民事刑事ニ關スル法律書多數有之候由 ~~右ハ~~右…ニ…ハ司法省ニテ參考書トシテ入用ノ旨申越有之候ニ付 便次第 御送付煩度 此段依命申進候也¶ ~~陸軍省 送 受~~歐發第~~六~~八四〇號 五月十四日"(陸軍用箋;*楕圓形印;他に框外に如下4印有り"閲"["大臣"上頭部;無框],未結[仝左隣;隅圓長方形有框],某[五月十四日下;楕圓形仝],某[仝左隣;圓形仝];MF.No.0287-8)

♦2."淨法寺參謀長電報 副官¶ ~~乗ヲ~~五月十四日歐發八四〇號願畢~~キタル~~照會ノ法律書ノ件如何¶ 歐發一〇三一 六月廿一日"(陸軍用箋;他に"江藤"[框外脚部,圓形有框],"菅野"[框上喉部,楕圓形仝]の兩印有り;MF.No.0289)

♦3."*歐*第一三八三號其一 [六]月廿三日 第一四號¶ 電報譯六月 *廿二* 日午 前後 三 時 *四〇* 分發¶ *陸軍省副官* 宛 發信者 *淨法寺*¶ *歐發一〇三一ノ答, 法律書類若干アリ 不日發送ス*"(陸軍用箋;引用文中のカムマは原文では讀點;他に框外に墨書"岡"字[喉上部],及び如下 6 印有り"閲"["陸軍省副官"上頭部;無框],菅野[仝左隣;楕圓形有框],官房[仝左隣;仝],岸本[[六]月廿三日右;仝],男澤[仝左下;仝],林[仝右下;圓形有框];MF.No.0309)

♦4.“青副庶第一九號¶ 鹵獲圖書ニ關スル件回答¶ 大正四年七月五日青島守備軍參謀長淨法寺五郎 青島守備軍參謀長印 ¶ 陸軍省副官菅野尙一殿¶ 本年五月十四日付歐發第八四〇號ヲ以テ照會相成候獨逸ノ民事及刑事ニ關スル法律書別紙目錄ノ通及送付候ニ付 領收相成度 猶遺漏ノ分ハ追テ送付可致候也[陸軍用箋;“青島守備軍參謀長印”(朱文);他に框外頭部に墨書“岡”字(“鹵獲圖書……”上),菅野(仝左隣;楕圓形有框),官房(仝;仝),又,仝喉部に,歐第一三八三號其二,七月十二日,某(楕圓形有框),山口(圓形有框),高城(楕圓形有框)の諸印有り;附箋:“次官ヨリ司法次官へ㊀省申越……鹵獲圖書送付ノ件¶ ~~別紙目~~豫……入用ノ青島ニ於テ鹵獲シタル獨~~國~~逸法律~~ニ關スル圖書~~書別紙目錄ノ通及送付ノ條御用濟後御返却相成度候也”]”(陸軍用箋;MF.No.0303-4)

♦4.後附“ 書目

一,スタウディンゲル著,民法釋義 八册

二,ノイマン著,民法要義 三册

√三,キップ及ヴォルフ著,民法教科書 五册

四,アヒルレス著,民法註解 一册[“~~3352~~**Bürgerliches Gesetzbuch,**nebst Einführungsgesetz(herausgegeben von Achilles.u.Greiff)5.Auflage1906.”(BVdKB 1911.,S.20.,V.A.)?; 或は當該書か?]

五,ヴァアルムンド著,婚姻及婚姻法 一册[“~~3509~~**Wahrmund,**Ehe und Eherecht. A.N.u.G.”(BVdKB 1911.,S. 22.,V.B.)?; 仝上]

六,獨國大審院民事判決例(第二卷缺)(索引 七册共) 八十九册

√七,フリイドリヒ•スタイン著,民事訴訟法釋義 二册

八,ジドウ及ブッシュ著,民事訴訟法 一册

九,エム•ストラウス著,民事訴訟法 一册[“~~3513~~ – [**Strauss,**]Zivilprozessrecht. A.N.u.G.1910.”(BVdKB 1911.,S.22.,V.B.)?; 仝上]

十,フリッチェ及ヴェル子ル著,國庫訴訟代理 一册

√十一,フランク著,獨國刑法註釋 一册

十二,オルスハウゼン著,獨國刑法釋義 二册

十三,リスト著,獨國刑法論綱 一册

√十四,ステングライン著,獨逸刑法辭典 二册

十五,ポルリッツ著,犯罪者ノ心理 一册[“~~3530~~**Pollitz,**Die Psychologie des Verbrechers. A.N.u.G.”(BVdKB 1911.,S.22.,V.B.)?; 仝上]

十六,ヘルヴィッヒ著,犯罪及迷信 一册[“~~3531~~**Hellwig,**Verbrechen und Aberglaube. A.N.u.G.”(BVdKB 1911.,S.22.,V.B.)?; 仝上]

十七,ヴルフェン著,常習犯罪者及犯罪者ノ類型 一册[“~~3533~~**Wulffen,**Gauner und Verbrechertypen”(BVdKB 1911.,S.22.,V.B.)?; 仝上]

十八,著名ノ刑事 三册[“~~3526-28~~**Mendheim,**Berühmte Kriminalfälle 3Bde.(K.L.Sand,der Mörder Kotzebues – Drei Berliner Betrügerinnen – Marquise von Brinvilliers etc.)”(BVdKB 1911.,S.22.,V.B.)?; 仝上]

十九,アシャッフェンブルヒ著,犯罪及其ノ彈壓 一册[“~~3520~~**Aschaffenburg,**das Verbrechen und seine Bekämpfung. Kriminalpsychologie. 1903.”(BVdKB 1911.,S.22.,V.B.)?; 仝上]

二十,フランク,ロッセル及シュミット編纂,現代ノ「ピタヴァル」(刑事彙纂) 一册[“~~3508~~**Frank, Roscher, Schmidt,**Der Pitaval der Gegenwart. Almanach interessanter Strafrechtsfälle. Leipzig1904.”(BVdKB 1911.,S. 22.,V.B.)?; 仝上]

二十一,ズウトル著,コーニッツ殺人事件 一册[“~~3519~~**Sutor,**Die Konitzer Prozesse.”(BVdKB1911.,S.22.,V.B.)?

二十二,ゾルム著,刑法及刑事訴訟 一册 |; 仝上]

二十三,ダルケ著,同 上 一册

√二十四,クライン著,監獄ノ管理及刑ノ執行 一册

二十五,クウルト•ミュルレル著,カアル五世ノ重罪裁判法 一册[“~~3501~~**Hals-od. Peinliche Gerichtsordnung** Kaiser Karls V.”(BVdKB 1911.,S.21.,V.B.)?; 仝上]

二十六,ハンス•ロイス著,監獄所見 一册[“~~3521~~**Leuss,**Aus dem Zuchthause. Verbrecher und Strafrechtspflege.”(BVdKB 1911.,S.22.,V.B.)?; 仝上]

二十七,グロッシュ著,獨國罪人引渡法 一册

○√二十八,スタウブ著,商法釋義 二册

二十九,グルホット編纂,獨法解釋資料(索引 三册共) 六十三册

○√三十,シメオン著,獨國法律及訴訟 一册

三十一,ルウドルフ•イェーリング著,法學上ノ悲喜 一册[“~~3517~~do[**Jhering,**]Scherz und Ernst in der Jurisprudenz. 1904.”(BVdKB 1911.,S.22.,V.B.)?; 仝上]

三十二,コオレル著,現今ノ法律問題 一册[“~~3518~~**Kohler,**Moderne Rechtsprobleme. A.N.u.G.”(BVdKB 1911., S.22.,V.B.)?; 仝上]

三十三,ビイ子ングレエベル著,家庭法學　二册["~~3523-24~~**Bienengräber,**Die Jurisprudenz des täglichen Lebens (Familie und Haushalt) 2Bde. A.N.u.G."(BVdKB 1911.,S.22.,V.B.)?; 仝上]

√三十四,キッシュ著,犯罪者ノ心理　一册["~~3537~~**Kisch,**Unsere Gerichte und ihre Reform."(BVdKB 1911.,S.22., V.B.)???; 仝上]

合計 三十四部　二百四册"(陸軍用箋;墨書;"合計…… "の次行に"懲戒裁判所ノ判決"なる書込有り;框外頭部に於る"√"•"○√"を含め,孰れも陸軍省に於る書込か?;MF.No.0305-8)

♦5."受領八年番號九年*歐受第一三八三號*廳名*官房*件名*鹵獲圖書送付ノ件*大臣*岡*次官健一#高級副官菅野*主務副官長尾#香月*…… 審案筆記者某#…… 主務局課番號□受領大正□年□月□日提出大正*四*年七月三十一日 大臣官房受領大正□年七月三十一日結了大正□年□月□日¶ 次官ヨリ司法次官通牒 歐發¶ 青島ニ於テ鹵獲シタル獨逸法律書 貴省ニ於テ參考ノ爲入用ノ趣 豫テ御申越ニ依リ青島守備軍ヘ照會致置候處 今般別紙目錄ノ通到著候間 及送付候條 御査收相成度候也¶ 追テ該法律書ハ用濟返戻相成度候¶ 陸軍省送 歐發第一二二一號 八月四日"(陸軍用箋;*楕圓形有框印,#圓形有框印["健一"のみ白文];他に框外に如下諸印有り"閲"[大臣上頭部;無框],未結[仝左隣;隅圓長方形有框],樞?["追テ …… "下脚部;方形有框],江藤[仝左隣;圓形仝];MF.No.0290-1)

♦5.後附(甲) "目錄¶ …… 合計三十三部　二百二册"(陸軍用箋;"~~司法省□□□□~~"[冒頭框外喉部]の墨書有り;MF. No.0292-5;割愛]"

♦5.後附(乙) "目錄¶ …… 合計三十三部　二百二册"(陸軍用箋;"此分ハ送ラス"[冒頭框外喉部]の墨書有り;MF.No. 0296-9;割愛]"

♦5.後附(丙) "　　目錄

一,スタウディンゲル著民法釋義	八册
二,ノイマン著民法要義	三册
三,アヒルレス著民法註解	一册
四,ヴァアルムンド著婚姻及婚姻法	一册
五,獨國大審院民事判決例(第二卷缺)(索引七册共)	八十九册
六,ジドウ及ブッシュ著民事訴訟法	一册
七,エム•ストラウス著民事訴訟法	一册
八,フリッチェ及ヴェル子ル著國庫訴訟代理	一册
九,オルスハウゼン著獨國刑法釋義	二册
十,リスト著獨國刑法論綱	一册
十一,ヴルフェン著常習犯罪者及犯罪者ノ類型	一册
十二,著名ノ刑事	三册
十三,アシャッフェンブルヒ著犯罪及其ノ彈壓	一册
十四,フランク,ロッセル及シュミット編纂現代ノ「ピタヴァル」(刑事彙纂)	一册
十五,ズウトル著コーニッツ殺人事件	一册
十六,ゾルム著刑法及刑事訴訟	一册
十七,ダルケ著同　上	一册
十八,クウルト•ミュルレル著カアル五世ノ重罪裁判法	一册
十九,ハンス•ロイス著監獄所見	一册
二十,グロッシュ著獨國罪人引渡法	一册
二十一,グルホット編纂獨法解釋資料(索引三册共)	六十三册
二十二,ルウドルフ•イェーリング著法學上ノ悲喜	一册
二十三,ビイ子ングレエベル著家庭法學	二册
二十四,懲戒裁判所ノ判決	一册
合計二十四部	百八十七册"

(陸軍用箋;"官房抄　此分司法省ヘ送付"[冒頭框外喉部]の墨書有り;MF.No.0300-2)

このうちの"懲戒裁判所ノ判決"は,青島守備軍發陸軍省宛荷物の開梱時に於る書目未收錄•追加册,乃至は後送書の類と看て大過あるまい. 遺憾乍ら,前掲諸書類は孰れも送狀の類故,所送書籍が全てその目錄通りであったのか否かという點に就ては,確認し得ぬ(書込"√"•"○√"の具體的意味に就ても不詳). 又,司法省發陸軍省宛受領證も同綴されておらず,用濟み後の返却に就てもその記錄を缺く. 當件♦1.の大臣官房に於る受領から結了に到る期間が4年餘に及んでいるのは,或はこのことと關係しているのではあるまいか. 加えて,それが1919[大正8]年6月11日に結了とされているということは,これが必ずしも事態の進展に伴う結了を意味するものではなく,ヴェルサイユ條約の調印(VI.28.)を控えた時點での事務處理上の結了を示唆しているのかの如き印象さえ覺える. 事の經緯に就ては此く不確定要素を含むものの,少くとも鹵獲書籍總數としては,27,380册(『鹵書目訂表』1922.; 前掲4頁脚註9)に司法省貸與用35點205册を加えた27,585册を,當面は想定しておく可きであろう.